

8-1 no. 54-1
婦人関係一般資料 No. 54

図書 資料	番 号
No. 7a 9 ②	

第10回全国婦人会議

生活に新しい秩序をそだてるために

はしがき 1

全国婦人会議の組織 2

全国婦人会議次第 3

記念講演

東京教育大学学長 朝永振一郎 4

部 会

第一部会 9

第二部会 61

第三部会 105

第四部会 155

移動会議 211

総 会 219

労働省では、昭和三十七年四月十日から一週間「変化のはげしい社会の中で生活を再検討し 新しい生活秩序をそだてるために努力する」を目標として、第十四回婦人週間を全国的に展開しましたが、この週間の中央行事として、第十回全国婦人会議を四月十一日から四日間、東京において、日本放送協会と共催いたしました。

会議には、全国からの応募者二、一四〇名の中から、中央選考委員会の書類選考によつて選ばれた六十名の議員が参加しました。会議は四部会にわかれ、「生活に新しい秩序を育てるために」をテーマとして、リーダーの助言のもとに第一日第二日の二日間話し合いが行なわれました。第三日は都内において移動会議を実施しましたが、午前中は社会施設の見学、午後は在日外国公館を訪問し懇談しました。なお昨年にひきつづき特別オブザーバー制を設け、全国に組織をもつ婦人団体や労働組合婦人部等から推せんされた方々に加えて、青年の方々も各部会に参加していただき、話しあいの傍聴と、意見発表をお願いして会議を援助していただきました。また、第十回を記念して過去九回の会議員から別途感想文により選ばれた各回一名づつが特別会議員として参加しました。最終日の総会では、会議員および部会リーダーによる部会報告ならびに一般傍聴者との質疑応答が行なわれました。

ここに会議の速記を集録いたしますが、婦人問題に関心を持たれる方々のご参考になれば幸いと存じます。なお紙数の都合で割愛した部分があることをお断りいたします。

昭和三十七年十二月

労働省婦人少年局

全国婦人会議の組織

名称 全国婦人会議

生活に新しい秩序を育てるために

主催 労働省・日本放送協会

期日 昭和三十七年四月十一日～十四日

場所 東京（産経会館・虎の門共済会館・NHKホール）

会議員 六〇名（全国からの応募者中から中央選考委員会が決定）

会議の構成 総会、部会、移動会議により構成

部会

第一部会 都市生活の問題

第二部会 農村生活の問題

第三部会 消費問題

第四部会 職業問題

社会の変動にともなう生活の変化と、おこりつつある問題、

新しい秩序をそだてるために婦人はどうあるべきかについ

て討議。

移動会議

午前中 事業場・施設の見学

第一班 大規模工業の現場

第二班 大都市の住民生活の廃棄物処理場

第三班 事務処理の機械化の進んだ現場

第四班 保育施設

午後は六班に分かれ在日外国公館を訪問

中央選考委員

中央選考委員

東京教育大学学長

東京都立大学教授

東京学芸大学助教授

評論家

評論家

日本放送協会教育局長

日本放送協会放送業務局長

労働省婦人少年局長

労働大臣官房長

部会リーダー

第一部会

第二部会

第三部会

第四部会

特別会議員

第一回～第九回全国婦人会議の会議員

特別オブザーバー

全国組織の婦人・青年団体役員

全国組織労働組合役員

青年（個人・学生・勤労者）

事務局

朝永振一郎

磯村英一

松原治郎

山田亮三

渡辺華子

浅沼博

吉田良直

谷野せつ

松永正男

磯村英一

松原治郎

山田亮三

渡辺華子

九名

九名

二名

四名

労働省婦人少年局婦人課
日本放送協会教育局

全 国 婦 人 会 議 次 第

四月十一日(水)

開会式 一〇・三〇〜一一・三〇

合唱「世界の花」

閉会のことば

労働省婦人少年局長 谷 野 せ っ

あいさつ

労働 大臣 福 永 健 司

日本放送協会会長 阿 部 真 之 助

会議員・部会リーダーの紹介

全国婦人会議のあゆみ(特別会議員紹介)

記念講演

東京教育大学学長 朝 永 振 一 郎

(全国婦人会議選考委員会委員長)

外国からのメッセージ

部 会 一三・三〇〜一七・〇〇

四月十二日(木)

部 会 一〇・〇〇〜一七・〇〇

四月十三日(金)

移動会議(視察と懇談)——東京都内——

午前中

第一班 日立製作所亀戸工場(大規模工業の現場見学)

第二班 都立石神井清掃工場(人口集中の大都市の住民生活の廃棄物処理に関する見学)

第三班 厚生省保険局年金業務室(事務処理の機械化の進

んでいる現場の見学)

第四班 二葉保育園見学

午後

第一班 アルゼンチン大使館

第二班 カナダ大使館

第三班 ガーナ大使館

第四班 タイ大使館

第五班 英国大使館

第六班 ユーゴスラビア大使館

四月十四日(金)

総 会 一〇・三〇〜一二・三〇

合唱「世界の花」

あいさつ

日本放送協会教育局長

浅 沼 博

経過報告

労働省婦人少年局婦人課長

高 橋 展 子

部会報告 部会リーダー・会議員

感想発表 特別会議員・青年オブザーバー

全体の話しあい 部会リーダー・会議員・傍聴者

アトラクション——春のうた——

閉会のことば

労働省婦人少年局長

谷 野 せ っ

記念講演

「科学の進歩と人間」

東京教育大学教授

全国婦人会議選考委員会委員長

朝 永 振 一 郎

今年の婦人週間のテーマは、「変化の激しい今日の社会において、生活に新しい秩序をそだてる」ということでありますが、社会を非常に激しく変化させる大きな力の一つが、科学の激しい進歩、それから生まれてくる技術の大きな進歩にあるということは、皆さんもお感じになつておられることと思います。

そこで私は、専門が自然科学畑でございますので、科学とか技術とかいう観点から、どういう時代にわれわれは現在生活しているのであるかというようなことを概観してみたいと思います。

現在の社会の変化は、とくに日本においては非常に激しいのであります。それは激しく流れる川の水のような感じがいたします。あるところでは、滝のようになつて流れ、またあるところでは、川底から上に向かつて水を噴き上げている。あるところでは渦を巻いて流れると思うと、ある場所では全く水が淀んで動かない。全く複雑であります。

しかし、これを高いところから眺めてみますと、やはり水は全体として川上から川下に向かつて流れています。私は今日、そういう全体としての流れの方向を考えてみたいと思うのであります。

この激しい複雑な流れの中に、どういうふうにして秩序を見出し、たらいよいかということが、今度の皆様がたの討論の題目になつておりますが、その場合に、やはり全体として、いつたいどういうふうな社会が動いていくかという概括的な見方を、ある程度念頭に置いておくことは必ずしも無益ではないと思うのであります。

そこで、科学技術の進歩ということなのであります。これがいつたい、社会の中にどういう比重を占めているか、またそれは、どういう重さで昔から現代までだんだんに増大してきているかということ、まず取り上げてみたいと思います。

大昔、石器時代には、まだ科学はなかったわけですが、しかし、ある程度の技術はすでにその時分から存在しておりました。また、それに付随してある程度の科学の芽生えのようなものも見受けられるのであります。

しかし、そういう大昔のことはよくわかりませんので、科学が大体純粹な科学として成立してきた今から数百年前ごろ、すなわち例えばニュートンの時代から考えてみたいと思います。このニュートン時代から現代にいたる、科学が社会の中に占める位置、大きさと、いうものを調査した人があります。どういう方法で調査したかと申しますと、まず一つの目安は、科学者の数のふえ方であり、もう一つの目安はその科学者が発表する論文の数であります。こういふものについて、ニュートンの時代から現在に至るまで丹念に調べたところ、科学者の数も、科学論文の数も、大体十年間で二倍になるといふ結果が出ております。これは第二次世界戦争前の調査ですが、戦後はおそらくこれにも増して激しい増加であろうかと思うのであります。

十年間で二倍になると申しますと、たいしたことはないと思われるかもしれませんが、二十年で四倍、三十年で八倍、四十年で十六倍、五十年で三十二倍、百年経つと千倍以上という結果になります。百年と申しますと、現在明治初年から大体百年目ですから、明治の初めから現在までに、科学の量において千倍近くなっているのではありません。これは人口の増加に比べますと、はるかに大きな数であります。日本は非常に人口の増加率が多いと言われておりますが、明治の初めから現在までで増加のわりあいには約三倍程度であらうと思ひます。それに対して科学の進歩の占める大きさは千倍になつてゐるのであります。

特に第二次世界大戦を一つの境として、その後における科学技術の進歩はさらに激しいものであります。このように、量の上で科学が社会において占める比重が大きくなつてくるのみならず、質的にも科学あるいは技術の変化は著しいものであります。

そのいい例は原子力でありますが、原子力の利用法が発見されて、一ポンドのウラニウム——これは一握りにすぎませんが、——これの持つエネルギーは石炭一、五〇〇トンに相当するのであります。一、五〇〇トンと申しますと、大型トラック一〇トン積みで一五〇台を要します。それに見合うものが一握りのウラニウムであるということになるのであります。もう一つの例は、電子工学（エレクトロニクス）の分野でありまして、テレビ・ラジオ、それから最近だいは用いられてまいりました電子計算機というやうなものがこれに入りますが、この電子計算機は、人間が一生かかつてもできないやうな計算を、ものの一分か二分でやつてしまふという力を持つております。

この機械はただ計算するだけでなく、いろいろな判断さえもできるのであります。私は、電子計算機を使つて事務をすつかり電子工学の方式に置きかえた社会を見学したことがあります。こういふところでは、その会社の儲けはいくらであるか、その儲けに対して適当な配当はどのくらいであるかというやうな計算は、何の苦もなくできてしまひます。その上、株主に出す手紙までタイプライターがひとりてに動いて打つてくれるのです。また、昨年度、どういふ品物がどのくらい売れたか、どういふ品物があまり売れなかつたかという数字から、それでは来年はどの品物に力を入れたら一番儲かるであらうか、それにはどの元料をどれだけ仕入れたらよいであらうか、そういう問題にまで機械が答えてくれます。昔は重役さんが

會議を開いて、そういうことを決めていたのですが、今では機械が全部決めてくれるのです。現在、そこまでまだいつていないとしても、近い将来そういうことも可能であります。噂によりますと、アメリカの大統領がマツクアーサーを辞めさせたのは電子計算機に、辞めさせたほうがいいのかどうかというのを聞いてみたところ、機械が、辞めさせたほうがよいと答えたからだということです。これは多分作り話だろうと思いますが、そういう伝説もあるくらい科学の進歩は著しいものだという例として申上げたわけであります。こういうように、人間の頭脳の代りを機械がやるということは、非常な質的な変化でありまして、昔は、機械というものは、筋肉労働をらくにくれるものであつたのですが、今度は、頭脳労働をらくにするという、質的な変化が出てまいります。こういう事態になつてまいりますと、どういう現象が起こってくるかといふと、まず原子力の場合において、これを悪いほうに使うと大変なことになります。これは皆さん。身をもつて御承知のことと思いますが、電子工学の進歩にいたしましても、電子化した事務所に行つてみますと、人間のするような仕事は全部機械がやつてくれますので、タイブを打つ必要もなく、算盤をはじく必要もない。人間は機械に油をさしたり、一つの機械から他の機械にカードを入れかえるというような仕事をしているのであります。最も機械的な仕事を人間がやつて、人間が少しでも熟練というようなことを樂しめる仕事は機械がやつてくれるという矛盾が起こつております。これは一つの例にすぎませんが、こういう味気ない例が直接であれ間接であれ、いたるところに現われてきます。

そうなりますと、場合によつては、あるいは場所によつては、非常な混乱が起こります。そこで新しい考え方を、技術以外の点でい

ろいろ考えていかなければならないという時代に差し加つてゐるのであります。おそらくこの傾向は、これからますます激しくなるのではないかと思われまゝ。そこで、こういう事態になりますと、科学技術というものは果たして人間のためになるものであらうかという疑問が起こつてまいります。そういうものはないほうがむしろ人間が人間らしい生活ができるのではないか、人間が機械にこき使われて味気ない仕事ばかりさせられたり、あるいは、いつ原子爆弾が落ちてくるのかわからないというような非常に不安な事態をもたらしたものは、科学そのものではなからうか、という疑問が出てまいります。

しかし一歩ふり返つてみますと、石器時代、大昔の、まだ人間が穴の中に住んでいた時代から今までに、科学技術が人間社会にもたらしてくれたいろいろのよい点を無視することはできません。たとえば、人間の平均寿命は、大昔はおそらく二十歳ぐらいだつたでしょう。少し前までは、人生五十年と言われておりましたが、近頃では五十歳などはまだ若者だというようにさへなつてきました。こういうことはたしかに科学のもたらしたよい面であると思ひます。ですから、その変化が非常に急激であるために混乱が起こつたという場合に、それを打開する道が何かあるに違ひないと、われわれは考へたいのであります。場合によつてはいろいろの新しい試みを、またあるときには奮勇を振つてやつてみる必要もあるかもしれせん。しかし時には一歩退いて深く考へるという必要もあるでしょう。これに関連して昔ならつた私の好きなおとぎ話を一つ聞いていただきたいと思ひます。

昔々、それはまだ人間が非常に開けない時代のことでした。その時代の人間は、豚鬣を洗つて食ふとか、煮て食ふかということを知らなかつたので、

生まのままで食べていました。こういう時代が約千年続きました。ところがある日、豚小屋から火事がでて、豚が焼け死にました。人同たちは、もつたないことをしたと思いましたが、もう使いものにはならないと思つてその豚を捨ててしまつていたのです。そういう時代がさらに約千年続いたのです。ところがある日、火事が出たあとで、非常に勇気のある若者が、焼け死んだ豚の肉をちよつと食べてみたのです。ところが、これが非常においしくて、生肉よりよはるかに味がよいことを発見しました。それからこの若者は焼き豚の元祖として、大いに社会から推奨されたのであります。

そういうようにして、肉を焼いて食うという一つの文明が芽生えたのであります。その時代の人は肉を焼くのに一々豚小屋に火をつけて火事にして焼いたのです。そういう時代がまた約千年続きました。ところが、その千年目のある日、一人の頭のいい若者、あるいはこれは婦人ということにしておきましょう。この頭のいい婦人が、何も豚を焼くのに豚小屋に火をつける必要はないじやないか、肉を焼くには炭を与えればいいのである、という科学的な思考をいたしました。その結果、薪を積んで焼き豚を作るという方法を発見しました。そこまで行きますと、あとの進歩は非常に早いもので、その後いろいろな豚肉料理が急速に発達したのです。これは一つの譬え話ですが、人間が古い考え方にいかに捉われるか、それを打開するといふことはいかに困難であるか、といふことをこのお話が示しているのです。ある場合には、焼け死んだ豚を勇敢に食べるというやうな、何でもやつてみようという勇気が必要です。しかし、それだけではまだだめであつて、時には一歩退いて科学的に考えるといふことが必要である。このことを、このおとぎ話は意味している、私は考えたいのであります。

先ほどから皆さん方のお話を伺つておりますと、ある場合には非常に勇敢に行動され、またある場合には退いてよく考える。そういう行き方を今までも皆さんがおとりになつてゐるようでありますが、これは結局、科学や技術が非常に急激に進歩した結果もたらした、いろいろな問題を解決する上にも必要であり、かつ重要な態度ではないかと思つてあります。問題は複雑で答えはなかなか出ないかもしれませんが。しかし、焼豚ができるのにも三千年かかったのであります。皆さんの根気のある努力次第でどんな問題がはぐれてきて、皆さんの英知の力で近い将来新しい秩序が必ずそでであげられるものと私は信じます。

(終り)

第一部 会

(都市生活の問題)

会議員

宮城	小枝ひで子	(無職)
山形	阿部 美代	(無職)
埼玉	荒井 道子	(商業)
東京	木佐真多津子	(無職)
神奈川	岩田 清子	(建築士)
富山	藤田 文子	(無職)
静岡	石上ち枝	(洋装店経営)
愛知	南野 靖子	(無職)
三重	辻原 月子	(無職)
京都	田中 律子	(酒場経営)
大阪	難波美知子	(無職)
岡山	宮林 雅子	(無職)
山口	沢村 和世	(無職)
長崎	寺田 春子	(無職)
鹿児島	泊 みすえ	(教員)

リーダー	磯村 英一	(東京都立大学教授)
特別会議員	大江 みち	(東京・主婦・第四会議員)
	梅田 澄子	(愛知・鉄工場主婦・第九回会議員)
特別オブザーバー	石井あや子	(婦人民主クラブ)
	桑野 千代	(日本キリスト教婦人矯風会)
	松浦三知子	(日本婦人有権者同盟)
	飯山 賢治	(大学生)

第一日目 十一日 一三・三〇・一七・〇〇

磯村 生活が非常に変わってきている中で、新しい秩序というものをどんなふうに私たちが考えるかということをやまずお話しして、皮切りにいたしたいと思います。

先日私の研究室で、東京の比較的郊外にある団地の調査にまいりました。内容はラジオ・テレビ・新聞雑誌等のマスコミが、どんなふうに変化に入っているかということをお聞きするつもりで、その時「お宅でどういふ新聞をお取りですか」「お宅でどういふ週間誌をお取りですか」、こう質問しましたところが、「お宅とはなんですか?」ときかれました。そして、うちではこういう新聞を取っている、私は、こういう週刊誌を見ます、こういうお答えでした。

これは非常に大きな問題です。世帯とか、お宅というのが、われわれの生活の一つの単位です。それがいつの間にか「お宅」ではないので、うちでは、——私、は、——といわれます。つまり都会の生活では、家庭での、私というものが非常に大事なものになつてきました。

これは大きな一つの変化です。家庭の中に入られても依然として私であるということは、家庭生活の中でどういう秩序として考えていいものか、一つの課題として私は疑問をもちました。

もう一つの疑問は、私の近所に神社があります。戦争後、氏子という觀念はかわりましたが、最近また、一年に一回二回、お祭の前夜に、氏子のみなさんへというあいさつがございます。宗教信仰についての文部省統計では、一億一千万くらいになります。日本の人口はまだ一億にはならないと思うのですがね。その中で

神社の氏子というのが一番多く、四千万くらいあります。子どもも全部氏子として計算されているのです。戦争のうちに変わったといいますが、まだわれわれの信仰生活と、そういう地域社会の生活との中に、やつぱり一つの問題があります。

もう一つ仮に東京の人口は一千万といいますが、それ自体私はおかしいと思います。東京の人口、その大体二割から三割は住んでいるところから職場に移つてしまっています。職場に行けば必ず椅子がなければならぬわけですが、学校に行けばちゃんと学校の椅子があるわけです。学校が約百万で、ちゃんと別に椅子のあるところの職場が二百万前後あります。たとえば魚屋さんとか八百屋さんというのは、うちにちゃんと椅子を持っていますから離れていません。か、いまの三百万というのは椅子が別にあります。ですから東京の人口は一千三百万です。ところが、その中の一部分はまた産経ホールにきます。私はけさ家を出まして、ここに、大学のほうと行きまして四回動いています。そこに行くたびに椅子に腰掛けます。ですから都市の生活は、一人の人間が何回か動いているわけです。

ここにいろいろな問題が出てきます。家庭の中の間関係と近隣の人間関係と職場の人間関係と違います。いわんやこの会議のような広いものになりますとなお違います。まだここでは人間性というものが非常に尊重されておりますけれども、一歩外へ出ますと人間性が非常に薄くなります。そういうところに都会の特徴があつて、そこの秩序をどうするかということが問題だと思います。こういう問題をみなさま方と議論をしたならばと思います。特に都会での老人の問題を宮林さん書かれましたが、そのことについて東京のある高等学校で「あなたの両親が年とつた場合にど

ういうふうにしたらいいか」と質問したところが、百人の中三人は、養老院に行つてもらふとはつきり答えました。そういう現象が都会に出ています。一つの家庭で親子夫婦一諸にいて、というのが普通でしたが、家庭も変動して、アパートに入り、職場が別になると、いつの間にかそういう人間関係の単位が小さくなります。そういう問題から入りましょうか。

宮林 今までの親は子どもができませんとそれを一人前に育てて、老後寄りかかる。それを当り前と考えていたのですが、戦後非常に大きく変革して、財産分散主義になつて個人中心主義になつてきました。長男に寄りかかつていたら安心だという常識がこわれてしまつて、財産は全部の子どもに分散する。また子供たちも、今までの親を見るということ、親、子ども、孫が三代一諸に生活するというところに、抵抗を感じはじめ、夫婦単位の家庭を考えはじめた。親は老後の生活設計というものを最初から考えていなかったわけですが、全然今までの考え方が通らなくなりましたから、自分のいるところがなくなつてしまふ。

私は、これからの親は、子どもに寄りかからないようにするにはどういうふうな経済生活を最初から立てていくべきかということとを念頭に置く必要がある。だから今までの行き過ぎの子ども中心主義をやめて、自分たちの老後のことを念頭に入れながら子どもたちを一人前にしていかなければいけないと思います。

私の両親は、子どもを一人前にするのは自分たちの義務である、一人前になつたら自分の生活は自分で責任もつてやりなさい、その代わり老後は、子どもに寄りかかろうと思わない、自分でやつてゆくからお前たちは責任をもつてやりなさい、といひます。

寺田 私はたくさんの子どもの子を育て、それも引揚や何かでたいそう

苦勞しましたので、そういう考える余裕がちつともありませんでした。今やつと子どもがそれぞれの道を歩くようになり余暇が出てきました。これからの第二の人生、最後の人生というものを、遅くなりましたけれども、自分のできるだけだけの努力をもつてはじめたいと思つて現在やつております。

阿部 私は明治生れで夫唱夫隨の教育を受けて良妻賢母になるように人生の大半を過ごしてしまいましたが、今、新しい教育、新しい社会を考えるようになって、やつぱり夫婦単位の生活が望ましいという結論をはつきり持つてゐるのです。でもそういうふうには夫婦単位の生活で、最も新しい理想の生活をするためには、結局生活はどういうふうにならなければならぬかという問題、親の扶養の問題、後つぎはどうなるのか、財産はどうなるかに分割していくのが理想であるかというようなことについてだけでも、しつかりした秩序をもたなければ、夫婦単位の生活にはいけません。

私の場合は教職で、二十一年やつておまして主人は現在三十三歳年勤続で経済面には心配がありません。しかし子どもが小さいものですからこまつておりますが、それは自分でこれからの設計で充分まかなえる自信をもつております。

青野 経済的に恵まれていない人はやはり今までのように子どもに願うより仕方ない。食べさせてもらうという意地汚いものでなく、今まで母親が子どもにすべてを犠牲にして仕えてきたから、それだけの報酬を受けるのは当然だという考えがあります。ですから老人になる私たちは、何か趣味をもつことです。お婆あちゃんがピアノが好きとか、絵を描けるといふことがあれば、金銭的に生活のお金は出さなくても、趣味を通して子どもとつないでいかれるか、その点で存在の意味が出てくると思います。

藤田 私は、子どもが当然してくれるものだとは思つておりませんが、今まで育ててきましたまごころが通じていますから、期待しなくても何とかやつてくれるのじやないかという気持ちをもつています。

石上 私は姉と二人でして、経済的には洋服店をして何とかしていますので、母だけは一語にいきたいと思つております。

精神的には、母は母としての楽しみをもつておりますから、まわりでこわさないで育てようと思ひます。もしそれを経済的にもさせられない場合には今のお年寄はこまつてしまふと思ひます。磯村 ごきようだいで平等にお母さまを養つていらつしやるのですか。

石上 そうです。

難波 私は六十過ぎておりますので、切実な自分の問題として、ものすごく考へております。戦争で長男をなくしましたし、貨幣価値も変わつてきました。たとえば百万持つてゐる者も三百分の一になり、そういうことから、やはり自分個人の家庭生活というものと、政治、経済という国家的なものとを非常に考えるようになりました。そういう面から、大きく政治のことにも関心をもちます。それは一朝一夕にはいきませんから、それと同時に自分自身がしつかりしなければならぬということを考へています。

私は婦人会に關係してしまして、多少収入もありますし、相当自分で有意義な生活を送つていますが、友人の母親のように娘の嫁入先で無給の家政婦同然に小さくなつてゐる老人を見ますと、これじやいけないと思うのです。

一番いいなのは、老令年金を国の責任においてもうすこしも

らいたい。社会保障のシステムをとつてもらいたいと思います。

磯村 いま生活保障ということが出ましたが——お若い立場から。

沢村 そういう制度は理想的です。しかし各家庭において、老人問題がいまちよつと混乱を呈している、というのは、必要以上にみんながおびえているのではないかとことです。老人は、子どもから扶養されなくなつた、子どももまた親を扶養する義務がなくなつたと考えているのが混乱の原因だと思っています。若い時代をみんな子どものために捧げてきたのに、いそ急にほうり出されたのではたまらないという考えだろうと思います。そうして、ただ法律、法律とみんながいうと、かえつて法律がいけないというふうにみんなが受けとつて、家族制度の復活という声がそこからあがつてくるのだと思います。そういう弊害をなくすために、私は法律ということをそんなに前面に押し出さずに、親の愛情と各家庭の実情に即した、知恵のあるやり方で除々に改善してゆく方法がいいのじやないかと思っています。

私たち二十代の者は、もちろん将来は、ちゃんと老後の生活を立てていこうと思つていますが、それまでの間の老人のことはやはり愛情その他でカバーしていくよりはかは仕方がないのじやないかと思っています。

荒井 私も同じ意見です。

河部 私も、所感文に書いた結論はそうです。子どもが自然の親子の愛情の結びつきで同居することが一番理想的だと思つております。わが娘も親を大事に見てくれる親思いの子だという自信はもつております。そういうふうな子どもを育てていく英知のある母になりたいと思つています。

磯村 それでは学生の立場から、特別オブザーバーの飯山君いかが

ですか。

飯山（特別オブザーバー大学生） ぼくは十九才で未成年で移男です。ぼくは大学の理科の生物化学ですが、これを専攻して、結局は先生みたいに学者になることを希望しています。

そうすると、そこまで行く間の経済生活は自分ではほとんど立つて行かないわけです。父はちようど五十才で、あと五年で定年になる。だから、ある程度まではおやじにおんぶしていくことはできるが、それ以後はやつぱり自分で生活しなければならぬ。生活にしても、ある時期までは親たちを養つてゆくことはできないという立場です。そこでうちからは、できた就職してくれといわれるのですが、やつぱり自分の好きな道を行くのが一番妥当な線ではないか、その間は——今おやじは国鉄に勤めておりますが、その退職金と恩給を考慮しておやじの生活を立ててもらいたいと自分では希望しています。

小枝 ある高校生が、ぼくたちの親子の關係は、單なる細胞学的なつながりだということです。それを聞いた時、びつくりしました。いまの若い方は、そのような考え方が大部分と思うのです。それで、私も肉親的な愛情は一応捨ててその上に成り立つ精神的なつながりで、親子の愛情よりも友情のほうが新しい親子の支えになると思うのです。

私もやがて姑になる立場ですが、私は全然子どもをあてにしていません。ところが月給が安いので貯蓄までいかない、せいじつばいの生活です。子どもが一人前になったら、社会にほうり出して、あとは私の生活を設計しようと思つています。

岩田 私もさきほどの高校生のような考えをもつたこともあります。が、五年ほど祖母と住んで、祖母は経済的にも、家を持つていて

独立した生活ができるのですが、たいへん淋しい、誰かに寄つてもらいたい。今まで経済的に独立するということでお話が出ましたが。その祖母が一昨年亡くなりまして、それから今度私が淋しくなりました。「諸に住んでいる時は、よく喧嘩しましたが、亡くなつてみるととても淋しく、教えられたことはたいへん生活の知恵を含んでいるのです。私は、三世代同居というのが何か仕合せなことではないかとこのころ考えます。ただ昔のようではなく、夫婦単位の生活がみんなできてから、自分たちの生活を大切にすることを知つてからですが。その場合、経済的な独立や食物などについては割り切つて考えるということ——。

磯村 いま小枝さん、非常にはつきりして愛情は愛情と割り切つてしまえ、もつと合理的な新しい秩序でいいじゃないかといわれましたが、そういう点に焦点をしぼつて、どうでしょう。

宮林 イギリスのニニ・タウン建設のスローガンが「スリーブのさめない距離」というのだそうです。子どもが独立して結婚して勉強するの、あまり遠いとどつちも孤独感に襲われる、スリーブのさめない距離に別居しますと、どちらも連絡がよくとれて、お互いのめんどろも見られ、孤独感にもおそれないで両方が巧くいくと私も思います。これからの日本の社会もそんなつてこそ理想じゃないかと思ひます。

寺田 私は男の子ばかり五人おりました、上は二十六ですが、お互いに友達としてつき合つています。向こうもその考えで、ことに三男あたりになりますと、帰省してまた帰る時なんかは、ふざけたように玄關で「逆者に暮せ」とか「また会おうぜ」「あばよ」などといったりしています。私もいやな気持はしません。

木佐貫 私は、父母に割り切つて育てられました。貸したものは貸

したもの、やつたものはやつたものとはつきりせいでいつて、はつきり育ててくれました。現在も父母は私に依存せずに独立して生活しております。父母が独立していますので結構私も独立した家族生活ができますし、毎月その気持だけでもつていつて送金をしています。

父母が病氣をした場合が一番こまります。現在はお互いにとつちも頼らずに生きてお互い新しく生活ができていますけれども、長思ひになつた場合、どうしていいかということが問題です。その場合完全医療保護が実施されるかといひと思ひますが。

荒井 ただいまのお話では、はつきり親の生活、子どもの生活という確立ができていますのですが、私たち商店の場合は、はつきりできない悩みがあります。

私に大学二年生がおりまして、農学部を専攻しております。本人も卒業したならば専攻の道に行くべきではないかと思つていますが、うちの商売が本屋なので、もしおやじが死んだらどうしよう。現在やつている課程を放棄して商売をしなければならぬのじゃないかという悩みをしよつ中持ちながら学校を続けているわけです。この子どもの気持をちやうど考えているのです。

私自身も、もし主人が亡くなつた場合、この店を切り回しているかどうかといひますと、仕入などは、大体習得しているが、労働力の面で、経営を続けていけるかどうか考えてしまひます。子どもを商売に入れておいてもらおうかと思うが、すると子どもを自分のケースに引つ張り、込むことになるのではないか、親も子どもも同時にそういう悩みの谷間にいるわけです。

田中 私も長男が中学二年です。私が夜の商売をしているのは、実は子どもを大学にやるのが根本的な目的です。主人がサラリー

マンでそれだけに頼つていられないのでこういうことをしています。それが子どもによく理解してもらつて一人前になるまではこの商売を続けて、養育、教育費に入れたいと思つております。一人前になつて社会に出た時には、子どもの負担にならないように、今まで子どもに注ぎ込んでいたものを私たち夫婦の老後の建設のほうにもつていつて、老後の夫婦生活を健全にしていきたいと考えております。

磯村 いまのお話の中に、お子さんに理解してもらおうという言葉がありましたが、理解しておられるのでしょうか。

田中 私の場合は非常に恵まれております。主人も、姑もおりますが、姑は非常に頭のいい人で、いろいろ婦人活動をした人ですから、子どもによくいい聞かしているのです。

泊 みなさまのお考えをお聞きして、縦割りの人間関係が薄れてきたのじやないかと思ひます。横のほうが充実してきたので。

磯村 というのは、夫婦の關係に充実してきたから上のほうが薄くなつたではないか。

泊 という感じをもつております。

磯村 このへんでひとつ先輩のご意見を聞いてみたいと思ひますが、どういふふうにおとりになつていますか。

梅田(特別会議員) 子どもに頼らなくていいとおつしやる方は、大體經濟的に自信がなくなりなすうです。しかし、變動する社会の中で、絶對的な自信というものは無いと思ひます。やはり法的に安定して、いて、それから、一諸に住まなくても經濟的に安定はしているが、愛情の問題として一諸に住みたいから住むのだ、そういう条件があつたら仕合せになるのではないかと思ひます。

辻原 お話伺つて非常に羨ましいと思ひました。趣味をもたれると

か、老後の生活について話されましたが、私には情ないですが、自活する道がありません。主人が高校教員ですが、それに頼りきつてやつてきました。子どもは二人とも大学に行つていますが、その二人への仕送りにこれからまたしばらくの間、何年になるかわかりませんが、一生懸命働かなければなりませんし、私の老後の生活の裏付けになるものが全然ないのです。主人の恩給はもらえるようになればよろしいのですが、明日の日のことはわかりません。

いずれにしても、子どもたちが学校を出れば、子どもたちの生活の中でどうしてもめんどろ見てもらわなければならぬ状態になるのです。私ばかりでなく、私の友達を見ましても、私たちは職業をもつという教育を受けていないのです。そういう形態の家庭が多いのです。けれども、子どもたちには、お前たちの厄介にはならないから、と大きな口を叩いています。私の両親と弟たちとの家庭を眺めておりますと、問題があります。私たちは別居という意見を今までいつてきたのですが、どうはいつたけれども別居できる家の条件ということが、いろいろ考えられるわけです。經濟的な問題は心配なくても、商売して、おばあさんも店番してもらいたいという状況の中で、別居ということはなかなかできない。私も自分のことになりましたが、息子と暮らしたいなと思ひながら、子どもたちの仕合わせを思えばやつぱり別居してやるほうがほんとうだと思ひます。今自分でもこまつているのですが――。

難波「スーブのさめない距離」は、ほんとうに理想的ですが、廊下伝いとか離れとか、それが理想ですが、多くの日本の家庭を対象にしたら、おばあさんのために部屋を一つつくと、別居する

とかの経済力はありません。ですから健康にして文化的な生活を営むということを憲法に活用していただきたいのです。

それから老人は、目まぐるしい時代の動きをキャッチして、国際情勢等も知り、時代に適応し、現代に生きる人間になつてほしいですわ。そうすれば別居しようと一緒に居よう、いざこざありません。別居は結構ですが、老人ホームを、政府なり地方自治なり、自分と三者合同でも、簡単にいけるものがほしいということが私の提案です。

辻原 たしかに老人ホームとか養老院の問題は必要と思います。私たち自からが、そういう施設が完備した時に厄介になれるかどうかとなると心細いのですが、そういうふうな方向になるべく私たちも力を併せたいと思います。しかし、今現在、非常にこまっている老人たちがあるのです。そのために法律なども大事ですが、家族制度には執着がなくても、正しい姿の家庭生活を建設していくべきではないかと思ひます。その辺に、新しい考えの若い人と古い考えの古い道徳観をもっている層との間に立つて、私たち四十代の世代の者がどういうふうにするかということが、役割だと思ひます。その家庭の生活の正しい姿というのは、ひとところよくいわれました仲間づくりという言葉を当てはめれば、家庭の仲間づくりということが非常に大事だと思ひます。そういうところでもみんなが協同し合つて、共通の時間をもち合うとか助け合うとか、愛情で、正しい姿の家庭生活を建設していきなさいと思ひます。

藤田 老後は養老院へという高校生がいたといひますが、それはその学生の日常生活からつかみ取つた意見じやないかと思ひます。ですから私は、やはり子どもを育てる時に、家族の人間関係とか親子の愛情といつたものに対してもうすこし英知がほしいと思ひ

ますが。

磯村 たいへんいいことをいわれました。

ただ、こういうことがあります。アメリカに老人ホームや養老院、たくさんありますが、非常にあひてゐる。やはり、淋しいということですよ。それで社会保障というものがあひますと、近いところにアパートを借りてゐる方が多いので、老人ホームなんかすいてゐるそうですが、日本ではいましばらくは老人ホームはいっぱいと思ひます。

そこで次に、家庭における人間秩序という課題の中で、親子の問題に關連して夫婦の中での、主として家計を中心にして、最近では夫婦の経済が別のもあるという極端な秩序があるとも聞ひてゐますが、家計はどちらが現在主になつてゐますか。

沢村 結婚して二年半ほどになります。最初から、私がこうしてゐると思つたそのとおりのことを実行できました。家計の面だけについて申しますと、夫の給料と私の和敷の内職の両方が収入源で、全部ガラス張り、給料日には二人が家計簿を見ながら、予算とか、いくら貯金に回せるとか、かくし立てなくするので、なかなか自分のへそくりなどはできない状態です。

泊 私は主人がおりませんので一人でいろいろもつてゐますが、やはり子どもにそういう面をわからせなければいけないと思ひますので、子どもを主人と思つて、相談して計画的にやろうといふ考へてゐます。

小枝 結婚して十五年経ちますと、男性のほうも自由なお金があひるという気分、うちでは完全になつちやつたのです。私ももちろんほしくなりました。夫の月給でやつておりますが、このごろ夫のほうへ月給以外に、講師謝礼が入ります。そういうものは全

然受取らないことにしています。そういう余ゆうを与えることが、男性には非常に伸び伸びする気です。それから。学校からの月給はがつちりもらいます。余分に入るのは私の権限外です。私も、たまに何か書いたりしてお金があると嬉しくて、友達を招待したり、すこしぜいたくなものを買ったりすることもありますので、どうしても赤字になりがちです。私も経済的な力がほしいと考えているところです。

寺田 私は今から二十七、八年前に結婚しました。家計は二人で必ず責任もつてやることにしよう。家計簿も二人でつけようということをする時、主人と約束して結婚しました。今日までずっとそれで続いておりまし、最近はずこし余裕も出ましたので、主人の小づかいも出ます。私が上げるのでなくて、自分たちで話し合つて、子どもも大きいので家族会議で、たとえば大みそかの日に集まつた時に家計を立てます。その時に、子どもたちはいくら、主人がいくら、最近はおももらうことにしました。それぞれをきめて、家計を立て、一覽表にして、みんな承認ということになりますと次の年の家計ができるわけです。次の年には悪いところは直すようにしてずいぶん巧くいつております。

阿部 私は結婚して三十年になります。姑と一緒に暮した時代の十年間は姑が財布を握りました。友人には、五十才まで財布を持たせられない夫婦がおります。若い人でも、お姑さんがいると財布を持たせられず、どちらか人間らしい生活をしていないというので、そのことからいざこざが起きるようです。やはり家計のあり方は両方で協議して決めなければならぬと思います。

夫との関係は、夫の小づかいはのそいたものを私がもらいます。渡された範囲内でどのように使おうとも、許されております。

それから姉が七十二才になりますが、姉の恩給は老後の余生を樂しむために使ってもらいます。

荒井 うちが商売をしていまして、私の給料が一万五千元ほどあるそうですが一度ももらつたことはありません。三百人ばかりの商店の主婦のアンケートでは、家計は自分で勝手にやつている方が六〇%でした。私もその一人です。

田中 主人も私も収入がありまして、すこし私のはうが上回わるが、それを全部私から母に渡すと主人がコンプレックスを感じました。男の気持としてそういうことはたしかにありますので、収入の三分の一ずつ母と子どもの教育と、店の回転資金拡張、改造に分けています。

さきほど小枝さんのお話を聞きましたが、私のところは非常に大学の先生がお客さんに多いのです。大学の先生はお固くて、無駄な使い方はなさいません。先生方は、謝礼などが多いと思います。小枝さんの場合、非常に賢く、それを全部旦那さまに自由に使わせていらつしやる。自分の商売からいうのではないのですけれども、最も賢明なお考えだと思えます。

石上 私、夫がありませんが、よく百円亭主とか百五十円亭主とかいいまして、毎日百円だけ奥さんからもらう、月給はがつちり奥さんが握つてしまう。あまり旦那さまをしぼつてしまふのはいいないと思う。旦那さまを精神的に安らかにしてあげない。

阿部 私も年とつていますが、旦那さんにはゆつくり自由なお金をもたせたいほうです。そうすることがかえつて旦那さまを自由にさせないでわが家に帰すいい方法だと考えております。

寺田 私もそうですが、主人が自分の家の経済をはつきりと知つておりましたら、たとえ要求しなくても、自分の小づかいを少して

も少なくしようという考えはあると思います。余分なお金が入った場合に、それを家計に入れてくださいとはいいませんが、それでも出張旅費が余るとおみやげの代りに、今月は苦しかったです。お金のほうがいいだろうと渡してくれることも度々ありましたので、それは感謝します。自分の場合でも、自分の小づかいを少しでも少なくして子どもにでも分けたいと思いますし、あるいは主人のたばこ代がないと思つたら自分の小づかいを主人に使つたら融通し合います。映画に行つた時も、私が出すこともあり、主人や子どもが出してくれることもありです。

磯村 新しい秩序ができつつあるように思います。このへんで、先輩のご意見をうかがいましょう。

大江(特別会議員) 前のお話と関連しますが、考え方が甘いような気がします。

たいへん身近な問題を具体的に出していらつしやるのは結構ですが、もつと子どもの生活態度というものを考えてみたいと思います。最初の姑の問題にしましても、経済の問題と同居の問題と別個に考えていいと思いますが、法律の問題では、ご理解がうすいように思えます。今家族法の勉強をしておりますが、子どもには親を扶養する義務があると書いてありまして、むしろみなさんのほうが誤解していらつしやる。法律の勉強が大切だと思います。

それから小づかいの問題も、ご主人に理解があつて結構ですが、私も収入は現在主人のみです。老後の問題で主人と一諸に生活できない時にはどうするかという準備を自分でしなければならぬということと考えておりますが、その問題と、現在の姑や母たちをどうするかということになると、別個にして考えないと混乱を起こすのではないのでしょうか。

松浦(特別オブザーバー 日本婦人有権者同盟) 大江さんがいわ

れましたように、家族制度のことでは同じような感じを抱きました。やはり扶養の義務があるということは法律で規定されているのです。

私も主人は俸給取りで別に余分もありませんので子どもに——大学生ですが——それぞれアルバイトをさせ、私が余分な稼ぎをしなくても、話し合いて何とかやつていける状態です。

(休憩)

磯村 さきほどは主として家庭を中心に人間関係の変化

ということに重点を置きましたが、今度は家庭生活の物的条件の変化ということと、そこに新しい秩序がどういうふうに生まれていくかということについてお話を進めたいと思います。

まずアパート生活、団地生活をしておられる方々からのご発言をお願いしたいと思います。団地生活の中で、普通の町の生活とどう違うか。従来^{従来}の生活よりか新しい生活があるかどうかということについて。

藤田 理想的ではないと思います。何といいますが……壁が白いでしよう。とても緊張するのです。

それから共同生活ですから、他人に迷惑にならないようにと思つていつも気を使う。たとえば音のこと、ごみの処理とか、自分の家だけでしたら気を使わなくていいことでも必要以上に神経を使つてのんびりできません。でも鍵をかければ、もう外とは遮断されてしまいますからその点気楽なんです、あまり好ましくな
いと思いますね。

田 私はい日中家にいるわけではないので、私としてはたいへん快的です。外出の時も家を心配することがありません。泥棒とか火事になつてゐるのじやないかということが全然ありません。他人の目を意識するようになると気になるのではないでしようか。住宅の形式が違つたと住まい方も当然変わつてきます。考え方をやはり変えて新しい秩序が生まれてこなければなりません。たとえば、アパートは覗かれるということがありますね。覗かれたと意識するよりも、覗かないと思うよりしやうがないのじやないでしようか。それから、これが一戸一戸の家だということを考へ過ぎるのじやないでしようか。他人を意識する。見られてゐると思ふ

のは、やはり見ているというふうに分も考えるせいではないでしようか。

小枝 私はアパートではありませんが、よくアパート住まいの方の悩みを聞きます。それは極端な個人主義と、おしやべりが非常に盛んになる。そのどちらにも屈さないで、アパートでの新しい暮らし方を、考える必要があると思いますが。

荒井 弟が団地にいますが、自分の月給で暮らすというよりも、よそのバランスをとるために一生懸命になつています。あすこの家に電気冷蔵庫が入つたから家にも、掃除機を私も、とそれのみに追い回わされているような生活状態で、団地の悲哀を感じてゐるといつていました。個人個人がはつきりした生活を建直すように努力なさつてゐるのでしようか。そのことが必要と思ふのです。

難波 私はいこういう年令になりました、四年くらいアパート生活しておりますが、今までかなり豊かな生活をしてゐる親類にいた時よりも、ほんとうに救われております。アパートは気楽でいいと思つております。婦人会のことや編集の仕事をしておりますが、自由に入入りもできますし、夜おそくまで書いても平気です。おしやべりになるとのこととたしかです。けれども自分でつきり人を選び、この人とは親しくしようというふうに決めてつき合ふ。あとの人とは普通のあいさつはしますが立話やおつき合ひはしません。そして侵されないように、鍵かけて、本を積んだりいろいろしていますから、そういう点でアパートはいいと思ひます。

石上 私はささやかな家と地所を持っています。もし将来自分が一人になつた場合はそういうものを全部売り払つてアパートへ行きたいという一種の憧れをもつております。

今の状態ですと、親や兄弟に、自分が行動するにも一々気兼ねをしなければならぬ場合が出てくる、じつくりものを考えたいという時に、申しわけないけれども近隣がじやまになる場合がある。そういう点、アパートでしたら、ドア一つで、全く閉鎖した生活ができるということに憧れています。団地の友だちにききますと団地ボスがいるそうですが、結局それは住む人の心構えにもよると思います。一人のボス化した奥さんがいて全部の人たちを引きずり回してしまふ、階段のところに集まつてわいわい話したり、うわさしたりするということがあるといひます。自分の心構えによろと思ひます。

小枝 町内にアパートがあつても、アパートの人たちは町内会に入らない。なにかエリート意識をもつていて、誘ひに行つても受付けてくれないで非常にこまると聞いたが。

藤田 それは、近隣との煩わしいおつき合いをいやがるということがあるのじやないでしょうか。私のところでもしつくりしないですまきいつていません。

石上 しかし、町内会には、それ自身問題があると思ひます。

木佐貫 アパートといつても社宅というのがあります。そういう場合に上司との関係、家庭にかへつた場合は上司との関係はないはずですが、やはり引続いている。上司の奥さんである場合は、自分が上司であるという気持をもつてゐる。そういう場合の關係はむづかしいかと思ひます。

大江(若知会議員) 私の会館アパートは分譲なので、普通の団地のアパートとは違ふのではないかと思ひますが、結局お互の關係がないのです。ほとんどお子さんのお名前も知らないし、全然おつき合ひがないのです。これは一つの問題じやないかと私も考えておりますが、

個人主義というものがもとになりますから、そういう意味ではいまのところでは煩わしいものがなくて便利です。

沢村 アパート生活は極端なくらいの個人主義に徹底できるということと、それと全然反対の、よそが何か買われたのうちに買ふ、よそのまねをするということですね。それが同時に起こることということが問題だと思ひます。

そうすると私たちは個人生活は大切にしなければいけないけれども、一日として社会の恩恵を受けないで生活はできないわけですから、個人の確立ということと社会連帶感というものと両方なければとうていこれからの生活がやつてゆけないじやないかと思ひます。

田中 私なんか特殊な仕事ですから、家を出るのが夕刻でまたきれいにして出掛けますから、ご近所の奥さんからはじめは有閑夫人で遊んでいるように陰口いわれたらしいですが、毎日おつきあいもしているうちに解決されて、今ではつき合ひに煩わしいということはありません。

荒井 階層がはつきりと分れちやつてゐるという感じですが。商家と団地も含めた一般家庭とはなされていて、人種が違ふのではないかとにかくらいで、疎通がないのです。

商人になつて感じたのは、結局日本の社会の封建的なものの流れといふものが、開会式で朝永先生がおつしやつたように、底のよどみのようになつてゐるという感じですが。動いてない。うわすみだけが急激に流れて、ほんとうに町の商家はよどみのおそい底流、川底に近いようなものという感じを与えるし、人情その他すぐこの違いにずいぶんぶつかります。ですから生活態度そのものも違つてくる。

阿部 私の近くにいろいろな社宅があります。その奥さんたちの日

常生活、隣組の交際の面でお聞きしますと、どつちもよくいつておりません。つまり旦那さんの職場の關係のようです。社宅に住んでいようが団地に住んでいようが、共同の地域の市民であるという責任感、旦那さまも奥さまも共にもつて、社会のために、地域のために協力していかなければならないと私は思います。

たとえば大学の先生でも博士号をもっている方とそうでない方で、一段高いレベルに奥さんきでも上がっているということで、なかなか巧くいきません。

寺田 あくまで自主性をもつておつて、適正な判断力で、やはり一般の人に溶け込んでいくのが大切ではないかと思ひますが、

磯村 夫の職業でお付き合ひが違つてしまふ、そういうことがほかにもありましようか、荒井さんのほうは同じ町内で商家とほかの家庭が分立してしまふ、これも一つです。それがPTAの中でまた分裂するということが都市の中でよくあることです。逆にPTAの中でその夫が、たとえば社長だから、片つ方はヒラだから、というのがそこで影響しているかどうか、これは近代的とはいへませんし、まだ民主化されていない、都市化されていらないともいえるのですが、その点はどうでしょう。

難波 地域の婦人団体等では非常に優れた人がいても、その人が子ども屋のおかみさんである場合には決して長になれない。病院長とか区会議員の奥さんとかで一応よさそうな人でしたら、その人になる。ということは主人の職業や、家の格が必要条件なる。団体の経済面とも関連して都合がいいということもあります。

阿部 私は婦人学級をもち、その中でいろいろな階級の奥さんとおつき合ひ、よくいつています。ところが外部の方が口出しをして、そ

のために左右される場合があります。グループ以外の方があいう人とグループをつくつて、いつたい何になるのだというようなことをいふのです。あまり具体的にいいにくいのですが。

磯村 いかがでしょう。婦人民主クラブの石井さん。

石井(特別オブザーバー 婦人民主クラブ) 婦人の中にもいろいろ封建的なものがありますから、なかなかうまくはいかないと思ひますが、そのサークル、グループで学習していますうちに、理論的なものが身についていくのではないかと考えます。ことに公団住宅は個人個人の自由な問題もありますが、一つの中に大きくかこまれているのですから、そこでいろいろなものと学習を積み重ねられるように、グループをつくつていただきたい。そういうグループグループでどういふことをしているかといふこともうがいたい。それからまた公団や住宅で子どもさんについて、お留守になるご家庭もあるかと思ひますが、ご配當はどういうふうにしていられるか、伺いたいです。

磯村 自分の夫が課長だからどうか、教授だからどうかということ背景にした話合ひは、ほんものじやありません。もう一つ、都会の生活の一つの特徴は、希望すればどのような仲間づくりでもできるということ。そういう仲間づくりをすれば、そこに一つの生活の行きどころがあります。

傍聴の方何かご意見がありましたら。

傍聴者 団地の方が、町村地域とのつながりを持たず、別々の生活をしているというご意見がありました。ある団地では、下水とかごみの問題とか、共通の悩みがあり、子どもの教育の問題もあり、どうしても町政につながらなければならないということ。町会議員の改選の時に、団地の中から三人町に代表を送つたという

話があります。地域とのつながりをつけるヒントになると思います。

辻原 最近大火があつて痛感しましたが、全然近所のつながりが、できていようできてなかつた。ふだんはいいが、何かあつた時に、やつぱりつながりが大事だと思いました。消火器などをそれぞれの家の中に備へつけて、水道の場所はこのたと話し合つておけば大火にならなかつたと思いますし、裏通りと表通りの人たちがふたから何かの形でみんなが寄る時間をつくつて話し合つておれば、もつと助け合いができたのではないかと思います。

抽象的ないろいろな問題を取り上げての話し合いの会はたくさんありますが、案外足許のことには気がつかなくなつた。だから、近いところの話し合いが非常に大事だということに最近気がつきました。

飯山(特別オブザーバー 大学生) ぼくもアパート住まいですが、ぼく自身の立場からいへば、家族と一緒に住んでいるアパート生活は非常にいいです。アパートは非常に狭い。ぼくたちの年代は、他人の干渉を非常に嫌います。そのために、家に帰つていても早られていなければならないような気がする。そういうことが、いやです。

傍聴者 私のところはモデル団地でして悪い感じはもっておりません。もともと住宅をもつていましたが、生活改善の目的で、大きな家に女中三人というのをやめて入りましたから、たしかに壁は白い、私一人になるとぼかんとした気持になります。自分で勉強したり反省するには、こんないいことはありません。聞きたいラジオを静かにかけながら仕事をする、無上の天址です。人殺しがあつてもわからないくらい。鉄の扉を閉めたら普通の家より静かです。よほどの大きな声をしなければ通じない。

ただ一階と五階では感じが違ふかもしれません。一階は優先権で庭が与えられるので、階上より住み心地もいい。十四、五のグループ活動があつて、料理、テニス、写真、将棋、老人慰安の会もあります。子どもの勉強グループ、オルガン、ピアノ、踊りの会もあります。のどかな生活です。

ただ近隣との連絡については団地は町内会に入りません。管理の人は、感情が通うのでといつています。

磯村 N H E の最近の国民生活時間の調査で見ますと、日本国民全体、特に婦人の階層では余暇時間があまりふえていないという結論を出していることから考えますと、都市では婦人生活にかなり余暇の時間が出てきております。そこで都市の生活を中心に、婦人の立場から、余暇が多くなつてきているが、どんなふうに使っているか、うかがいましょう。生活時間の合理的な使い方というものがないければ……。

阿部 余暇の意味ですが、農家の方が電化生活によつて余暇ができたので、子どもしつけや教養の面の学習を始められるのが余暇になるのか、あるいは余暇ができたので都会の人がパートタイマーで働くことになれば、余暇ができたのがなくなつたというのか、という問題から、余暇の意味をお聞きしてから意見を出したいと思ひます。

磯村 農家で電氣洗濯が入つて子どものしつけを学習する、いい余暇の使い方です。

小松 私は所感文に余暇の問題を取り上げました。余暇の解釈は自分の自由意思で使える時間ということでしょう。生活をたらしなくしておりますと。いつまで経つても自由な自分の時間というものはありません。

得ないのが主婦だと思います。そこで頭を切りかえて何時間かの余暇をもつのが新しい考え方と思う。

それで余暇の生かし方に二つの課題があると思います。一つは自分を掘り下げることに使う。一つは余暇を社会のために働くことに使うべき方。その二つですが、理想としては、自分を深めながら社会のために力を出していくやり方が、これからの余暇生活について考えなければならぬことだと思います。

それから私の身邊に一つの悩みがあります。余暇に内職を始めた。自由意思でしたが、お金を得る喜びはあるが、社会に尽くすのが少しおろそかになつて、金銭的なものに左右されている面が大きくなりつつあるのではないかと思うのです。

磯村 生活合理化ということで、小枝さんの生活で、自由に使える時間が多くなっていますか。

小枝 私の場合が多くなっています。一つは子どもが成長して、自由な時間ができたということです。もう一つは、うちの場合は夫婦と子どもだけです。やはり生活の合理化ですね。そうすれば時間を生み出せます。

南野 余暇が自然にできる場合というように考えがちですが、私の友達には、電気製品がとつても余暇の生み出せない人が多い。だから余暇は自然に生まれたのではなくて、自分で生み出すものだろうと思います。

私、ある放送局のモニターや劇団の合葬会などの仕事をしていて原稿を毎日書かなければいけないのです。子どもを送り出したあと、頭のさえる時間が八時から九時です。今までの習慣ですと、まず洗濯してから自分の仕事をするのですが、いちばん大切な原稿の仕事をとにかくやつてしまふ。そしておひる前の十分か十

五分で電気掃除機で掃除する。今までのやり方を多少変えています。

阿部 私も、電化によつてたいへん余暇ができました。その余暇を婦人学級のお手伝いに利用しています。サークルを持つ場合も、今までほとんど午後でしたのを午前中に切りかえてみました。はじめは反対もありましたが、二年続けている間に、喜ばれるようになりました。余暇はやつぱり自分で生み出すものだと思います。

沢村 余暇は、自分が生み出すものだとすることは全く同感です。電化したので家事労働が軽減されて、さぞ余暇がたふさん出ただろうといわれますが、軽減された分だけ、ほかの家事をするという工合で、なかなか自分で何をしようという意欲がないとだめです。

ですから、今までは電気製品の普及が先でそのために労働が軽減されて、主婦の余暇ができたという状態でしたが、主婦の何かしたいという意欲が先に出てきて、そのために電化をしよう。そして余暇をつくつたという順序にならなければならぬと思うのですが。

荒井 私の場合全く反対の状態です。主婦会の方が三五〇人の商家の主婦からとつたアンケートがありますが、九〇%が、十二時間働く。商売に使う時間が十二時間から十三時間です。それに家事、育児が三時間から四時間ですから、眠る時間が六時間から七時間、その間自分の時間も何もありません。

磯村 すると今後もないということですか。

荒井 いまのところ見通しがなさそうです。

阿部 電化になつても、その余暇を子どもに使つたり、パートタイムで働いたり、内職したりします。台所や風呂場がタイル張り

なつても掃除に一層時間がかかつて、農家の主婦はなお苦痛になつたということです。しかし考え方によつては、時間はなくなつたかも知れませんが、衛生面においては非常に効果をもたらしたことになる。職業をもつたり店をもっている方も、それと同じようにある程度割り切つて、店を閉めたあとや開店前にちよつとの時間をもつとかすることによつて、有効に使えるものではないかと思ひます……。

小校 荒井さんのお話を聞きまして、身にします。私は小売商の密集しているところにサラリーマンとして生活しておりますし、私の育つたのは小売商店ですから、自分の時間が全然ないことがよくわかり、とてもお気の毒だと思ひます。子どもに關心をもつていても思うように運ばない、そういうおせりもわかります。私の地域では半分以上は商店の奥さんですが、忙しいのでなかなか集りに出られません。

それから消費について考えていますが荒井さんが、サラリーマンと商店の違いでしつくりいかなんといわれましたが、私は、地域の商店街がどうしたら繁栄するかということ念頭において、いい意味の忠告などもして、いつも話し合つて、消費者である私たち、小売商店の奥さんたちが密接な連絡をもつことに基盤をおいているのです。

それから一斉休日などの社会的な視野を、もう少し小売商店の奥さん方が広くもつてもらいたいと思ひます。

上 最近静岡地方では、いまの話に關連して二つの問題が出ています。一つは、商店の場合人手が不況で主婦が労働過重になつて自分の満足に育児ができないこと。もう一つは、余暇を生み出し

たいために電気器具を買うということになつてゐるが、その支払がたいへんで、電気冷蔵庫を買つたらとたんにおかずが悪くなつたという現象が起こつてきたということです。また、支払いのために内職をしなければならぬ。それで、豊かと思われの人が、全部が全部内職をしていて、余暇をそれにつかつてしまひます。富林 漫画で、電化されて、ひまになつて、奥さん方が集まつて朝から晩までおしやべりしている。夕方になつてご主人が帰つてくるのを見てゐると、ぼろぼろの服を着て、破れた靴をはいてゐる。全部月賦で、その払いのために家の中は火の車だ。余暇はできたが、奥さん方全部おしやべりに使つて、ご主人はその反動でというわけです。

阿部 私のグループにも町でも一、二を争う大きな商家の方が入つてゐます。若い方なので忙しくてなかなか出られませんが、グループをもつたおかげで、その時だけは家族中の協力で出してくれます。お医者さんの奥さんの場合も、患者がいますから学校の会合にも出られないという状態でしたが、そのグループだけにこそご主人が協力的です。奥さんだけが余暇をどうして見出そうかと一人で苦しめないで、ご主人や子どもにも相談なさることが必要だと思ひます。

藤田 余暇をむだ話に使つたりする奥様にどうしたらいいでしょう。南野 何か参加したいが、誰かが働きかけてくれないと無風状態に置かれてゐる奥さんも多いと思ひます。

私が放送局の仕事と、アンケートをとるという仕事をした時、この奥さん方ら、と思ふ方を戸別訪問して、ぜひやつてくださいとお願ひしました。みなさん何か仕事をしたいが、生命保険の勧誘員だといやだが、そういう仕事ならやつてみたいといつて、三十人ほどの方が

積極的に働いてくださった。市内の繁華街で大学と共同で調査して、一カ月の間に全部完成しました。その時もらつた謝礼をもととして、みんなで会合を開きましたが、みんながとても喜んで、今後をそういう仕事があつたら、ぜひ参加したいということでした。主婦はおしやべりだけを求めているのではないのです。

辻原 私はサークルでおしやべりの会を続けてきたのです。ところが最近不思議な現象が起きました。会員が一人二人とだんだんなくなつてきたのです。というのは、今まで暇のあつた奥さんたちが、全然余暇がなくなつてきた。それは生活が非常に苦しくなつてきて、サラリーマンの奥さんたちも、みんな余暇を生活の足しに使うようになったのです。貸衣装屋さんに勤める人もあり、産休補助教員にいる人もあり、息子さんの商売の手伝いする人もあり、余暇というものがなまやさしいものでなくなつてしまつたのです。生活のために余暇を充分意識していこうということですから、生活が苦しくなつてと簡単にいわれましたが、どういふふうに苦しくなつたのですか。

辻原 月給取り奥さんが多いので、子どもが大きくなり学資なども要りますし、それから物価高にもずいぶん苦しめられます。そのわりに給料は上がりませんし、どうしても生活費が苦しくなつてきたという現状だと思います。

仙村 人手が不足になつた商店街のために保育所をつくらなければならないという状態といふ問題、若干共通するものがあるように思います。この新しい変化する社会の状態をとらえる上において、非常に大事な問題ではないかと思ひます。

辻原 ひまのある婦人たちで、お寺の庭を開放して、託児所とか保育所をやつてみたらと話し合いました。ところが、実際問題とし

て費用も要ることだし、私たちがそれだけのことをやつてゆくだけの力もありませんし、私たちにはふさわしくない。結局足許に火のついてゐる問題から解決しなければならぬということになりました……。

難波 経済力をもつて共働きでそこからレジャーもつくるといふところが理想ではないかと思ひますので、いろいろの才能をもつてゐる方が、たとえば英語もできるしピアノも弾ける人が、結婚すればおむつを洗つて過ごすといふことは、あまりに情ないので、それを早くすませて、子どもは保育所に預ければ、子どもも次の時代をはずきり掴むわけで、新しい妻のあり方という意味で、そこからレジャーも楽しむといふことも考えていいと思ひます。電気製品を買つたためにおぼれるレジャーではなくて、あくまで人間性を確保しながら自分の才能を生かして、しかも妻の座も確保するというふうにならなければと思ひます。

小枝 さつき宮林さんが、余暇生産という言葉を使つてました。では、その生産の意味を金銭的なものにするか精神的なほうに受取つたらいいか考えているのです。

磯村 余暇生産という言葉が、いま小枝さんが理解されたように考へると、今度は生産という意味に、精神的な生産と物質的な生産があげられます。電化生活もやつぱり物質的な面においての人間の条件になります。それで精神的な条件という意味でも、余暇利用がこれから出てくるのではないか。それが必要ではないかと思ひますが、

荒井 商店の主婦の生活が忙しいために子どもは全然放任状態になつてゐる。そういう子どもには不満がどこかあつて、それが外に出ていく。そういう空白な子どもは内面的な補充をしてください

るためにも、今まで小学校の先生だとか幼稚園の先生だとか、自分でもお子さんを立派にお育てになつた方が、ご自分の技術として、そういう商店の子どもを一日の中の何時間は一人なり二人なり引き取つて、お世話をしてくださつたらいいのじやないかと思うのです。もちろん報酬を取られてそういうことをしていたくのは、価値のないことではないと思います。

石上 家庭のいくらか暇のある奥様が文集活動をしました。はじめは亭主の不満とか、子どもの教育の問題でしたが、世の中の変動が激しくなると、否応なしに社会的な問題に目を向けなければならなくなつて、内容が変わつてきました。最近、高校増設の問題とか、保育所づくりの問題とか、老後の国民年金の問題も、これでいいのか、最近減水で、ちよつと雨が降らないと地下水が出なくなるといふことが起こる、そういう問題を、現象として捉えるだけでなく、どこに原因があるかといふことまで、組織的に考えるように発展してきました。しかし結局保育所の問題でも、たとえば手の余つてゐる人が引き取るという簡単なわけにはいきなない。そこで、保育所づくり促進研究会といふものをもち、保育所の先生方と、そういう保育所づくりをやつてゐる専門家と母親と、いろいろな立場の人が集まつてゐます。ただ人手が余つてゐるからという簡単なことでなく、法律の裏付けがなくちやいけないところまできています。

辻原 保育大学出の生徒も、会社などの給料のいいところに就職なさる。

難波 大阪では、保育所ができるまでという暫定的私設保育所というものがあります。余暇があつて子どもの好きな方が、近所の子どもを集めて保育すると民生局から謝礼がもらえる。それに対し

て、そういう暫定的なことを地方自治でしていると中央はそれでいいと考へてしまつて予算を取つてもらえないから、そんなことはしないで、あくまで世論を起こして保育所づくりを中央にお願いするほうがいいという説と、それもするが、どつちもしなければならぬという説もあつて、一向に解決がつきません。また、保育所を、なな子どもを預つて子守をするところとちがいますが、そうでなくて小さい時の情操教育では大事なことでたふうに考えましたら、母親の体験のある方も結構ですが、一応専門家がいて、その補佐役としてゐるという状態にまでいかなければならないと思います。

保育大学を出ても、幼稚園や会社や給料のいいほうに吸収されるという状況を考えますと、保育所の給料が幼稚園と変らず、しかも労働時間が多いからでやはりはつきりした裏付けをしないことには保育所はスムーズに進んで行かないと思います。

これは中年過ぎた者のみの問題でなく、大事な第二の国民をつくる大きい問題で、また、婦人が才能をもちながら眠らしてゐるという大きな問題でもありますから、婦人の地位向上のために婦人が働くという大きなことで、当局にお願いしたいと思ひます。

石上 婦人会議で、助産婦会の代表が、今助産婦は斜陽の仕事で、人手が余つてゐて、しかも保育の面においてベテランだからぜひ協力したいといわれました。まだ具体的などころにいつていませうが、そういうことも考えられます。

辻原 三重県でも一昨年の母親大会、それ以来二年経つていろいろな問題が出てゐるのに、どういふものか盛り上がりがないのです。一部の人によつて運動はされてゐるが、いまこまつてゐる母親たちが、もつと寄り合つて協力すれば、政府に、そういうものを

要求する力になるのではないかと思うが、そういう母親がなかなか集まりに出てこれないという悩みがでてくるのです。

梅田 余暇は生み出すものだ、というお話をなすつた方があるが、やつぱりそうだと思います。一つの要求があつて、それに合わせて暇をつくるということで、目的意識がはつきりしていないとわからなくなると思つて聞いていました。

それで余暇の問題から保育所の問題が出てきたのですが、そのところでも、話の中で混乱があるように思います。

石上 いまの私の発言、言葉が足りなかつたのですが、余暇の問題から保育所に発展したのは、母親たちが文集を作つているうちに、どうしても自分たちが研究会をもたなければならぬということになつて、そのためには無理にも余暇を生み出して、そういう勉強をしなければならぬということをお願いしたかつてのです。

大江（特別会議員） 子どもを教育する場合に、今までの時代と違ふ面があります。そういう意味で、私どもが民主主義というものをもう少し身につけるために私がやつてゐるのは、中学三年の教科書をもとにして、集まつて勉強会を開いております。そういう時間のある方は何とかして自分のための勉強会をもつていただきたいと思うのです。何か生涯につながらないと、少しでも小づかいにならないと足が向かないようですが、もちろん、生活のためにも教育費を生み出すためもありましょうが、その目先のことだけでなく細々とでも長い時間をかけて、そういう余暇利用ということも考えていただければと思います。

磯村 問題というものは個人的に解決する場合と、一つのグループで解決する場合と、やはり社会の組織という大きなもので解決しなければならぬ場合とあります。それはばらばらのものではな

く、互いに共通している問題もあると思います。

冒頭の老人、親子の関係でも、親と子で解決できることと、あるいは国民年金、社会保障というもので解決すべき問題と、いろいろあると思います。商店街の非常にむずかしい生活の中での保育所の問題も、その地域社会で解決する問題と、国の制度として解決する問題とあると思います。そういう大きなメドを考えながら、また明日話し合ひしましょう。

（第一日 閉会）

第一部会（都市生活の問題）

第二日目 十二日 一〇、〇〇、一七、〇〇

磯村 昨日いろいろなさんとお話し合いをしました。そこでどんなことがあつたか私の見ましたことを一分ばかり話のつなぎに先ず、お話ししたいと思います。

われわれの生活は、基本的には個人の人格の完成ということが、なんといつてもすべての生活の秩序の中において一番大事なものです。個人の人格をつくるいちばん基本的な問題は親子夫婦の關係から出発します。それで非常に常識的ですが、その一番基本的な人格形成の場である親と子というその身分から出発して、夫婦のあり方がいつたいどんなふうに変つていくかということを話し合いました。特に、親に対する扶養の問題につきましては、都市の部会という立場でしようか、親の立場の方も子という立場の方も、そうくい違ひはないようでした。親のほうにもかなりの覚悟ができていくということですし、若い世代のほうでも、必ずしも親に対する従来の人間關係を全然阻害しているというようなことは見られなかつたと思うのです。かなり合理的に割り切つておられる方もありました。しかしもう年寄り全部老人ホームへ行つてしまえというお考えまでは出ない。最終的にはやはり人間關係の愛情の問題で解決すべきであるというご意見が出たのです。

ただここで考えなければならぬのは、愛情でもつて親子の關係を解決するといいますが、再び昔のような愛情に返るのじやないかという心配と、愛情を合理的な生活に合わせる場合にどうするかという場合に、個人的な責任と社会的な責任とはつきりお話し合いをすると一つの新しい見方、新しい秩序が出たのではないかと思われました。都市の部会は農村部会と違い、かなり進歩的といえますか、もつと摩擦があるのじやないかということですが、適当な機会にご意見をうかがいたいと思います。

次は家庭における余暇についてですが、私は非常に勉強させて
いただきました。

余暇については、都会では生活の合理化のためにかなり自由な
時間ができたのではないかと思います。しかし、母性の立場に
なりますと余暇が、必ずしもレジャーといわれるような、やかも
すれば自由とかぜいたくというものではないのだ、ほかに女性の
新しい秩序というか、役割が加えられたこともかなりあるのでは
ないか、それがプラスかマイナスかということについてはかなり
ご意見があつたと思います。これなどはもうすこし掘り下げてい
ただきたいと思います。

それでは本日は、主として家庭と近隣というものから外に出て、
働くという場を中心にして新しい問題はいつたいどういうことが
あるか、家庭の生活の合理化とか、あるいはレジャーが出てきた
ということとも関連取り上げてみましょう。まず職場での問題の
第一として、男女の格差という問題をあげました。

余暇の問題に関連して、パートタイムの問題がいろいろ出てき
ます。そこから、お話し合いを進めていきたいと思います。

まず仕事をもつておられる方から発言していただきますよう。

田中 私はバーの経営という特殊な職業をもつておりますから、一
般がお考えになるとバーという職場には、秩序とかそういうもの
がないのじやないかということをよくいわれるのです。それはた
いへんな間違いです。こういう職場でこそ一番秩序を重んじなけ
ればいけないのです。そのことで職場が長続きするとか、すぐこ
われるとかするのです。どういふふうにして秩序を立てているか
といひますと、私どもの従業員、いわゆるホステスですが、教養
もある程度もつてゐる。比較的良家の子女をお預りしております。

それから営業時間ですが、京都というところは観光都市ですので、
時間的に非常にルーズです。警察のほうで、十一時に終えるとい
う条例を出しておりますが、警察のほかに一つボスのなものも
あり、そういう人たちは観光都市である京都にお金を落すために、
営業時間を長くすることを暗黙のうちにすすめるのです。私の場
合は、十二時までにはきちつと店をしまうようにしております。

それからこれは了解していただけるかどうかですか、客の家庭と
直接おつきあいをする。だから奥さま方もこられますし、お嬢さ
んや坊ちゃんをつれて来られることもあります。奥さま方から、
うちの主人は何時に帰してくれ、というお話もあります。そうい
うようにご家庭と結びついて営業してゆくことから秩序を
立てていたしております。

磯村 みなさまにはかなり耳新しい問題だと思ひますが、田中さん
は経営という面から話されましたが、その前にこういう耳新しい
ことがあります。ああいう仕事を、みなさん方はどう見るか、と
いうことは、バーというものについておそろくみなさんがごらん
になつてゐるのと、いまの田中さんのお話とはかなり違ふと思ひ
ます。そこがすでに一つの問題になります。みなさま、どうお考
へになりますか。

石止 私独身ですが、男性と一緒にバーへいくことがあります。そ
ういふ場合に奥さまのそばにいない時の男性はどうかと興味しん
しんですが、通俗に、女房がよくほど亭主もてませず、というの
はほんとうなのです。奥さまも喜んで同伴できるような家庭であ
るとか、醸造元の宣伝もあるけれども、ホームバーなどをお持ち
になるのは非常にいいと思う。田中さんのような経営はめずらし
いので、家庭とバーがつながつてくるような人間関係ができるも

のなら、とてもすばらしいと思います。

阿部 私も所感文を見せていたでいて、ほんとうにすばらしいと思いました。私の主人はそういうところにあまり行っていないのですが、小さい子どももいるので、それまでにいつていないのですが、私も一度そういうところを見たいものだと思います。固苦しい職場で働いている男の方たちはそういうところで飲むと気分がやわらいで一日の労苦がねぎらわれる感じがするといふのですからそういう気分を家庭の主婦としてもちたいと思います。

岩田 私も賛成ですが、都会生活は住宅の面積が狭いのです。団地の中に共通の応接間というものが要だと思ひます。街の喫茶店と家庭ともつながっています。社会の場としてバーを認識してみたいと思ひますが。

寺田 私は男の子ばかり五人で四人とも二十才過ぎておりますので、よくバーの話が出ます。そうして、あすこのマダムはともインテリで話がわかるからいい、どこはつまらない、ということをよく話しているところを見ると、子どもたちの考えもやはりそういうふうに向いているのじやないかと思ひます。飲むばかりでなく、精神的に何か得るところを求めているような気がします。

小枝 田中さんのお話は理想だと思ひますが、男性の心理からいへば、あまり家庭に密着しない、そういう社交の場もあつていいと思ひます。妻としては、安心して出してやれるからいいよなものですが、田中さんが家庭と親しくするのはいいが、あまり家庭と親しすぎても、男の人のほんとうの安らぎというのが、案外見られないのではないか。

それは色恋でなくて、エア・ポケットみたいなところにあつてもいいじやないでしょうか。

石上 私は反対です。いま経済面から考えまして、私、ここでジンフィーズを飲んだが、水道の水みたいでした。あんなもので金をとる。

うちで自分でシェーカーふるが、バラエティーにとんだおいしいものができる。男性は家で飲んでも面白くないという気持もあるでしょうが、ホームバーをつくり、照明をピンクやブルーに変えたらびつくりして、うちの女房はこんなきれいかなと、ほんとうか、うそか、そういう話があります。

そういうことをして楽しむというのは純粹に都会的なことかもしれませんが、一つの生活技術であり、ご主人を外に出さないといふことで、いろいろな面でプラスになると思ひますが。

難波 男性、女性という生理的な面で男性は浮気とか餌かでないに、ある程度バタフライなのです。好むと好まざるとによらず、男性ホルモンの中にそういう一つの要素があるかと思ひます。それでやはり女性としては、一人の夫により清らかな家庭を作りたいといふことがあるが、職場と家庭との中間に、そういうものがあつてもいいと思ひるので、決して色恋ではない、そういうものが要だと私は考えています。

私の婦人会で、大阪の美人座を見学すると、重役らしいのが、イブニングドレスのすごいのにしたれかかるでしょう。それを見ると、たいへんだと思ふ。こんなところになくさんお金を使つて、社交費といつて、家に帰つて涼しい顔をしている。ですから、健全なるバーと、デラックス、マンモスの、男から巻き上げるキヤバレーとの境をいつたいうかということが問題でしょう。

現代の資本主義社会のそういうふうな享楽営業のボスも存在させることになつて、その裏には暴力団も使つて、ビール一本千円に売りつけているところもあるでしょう。そういうもののコントロールが巧みでできるかできないかの問題で、清らかなこういうものは大いに歓迎しますが、人間の本能に訴えてそこからしぼり上げる資本主義営業というものの対してメスを入れたいと思います。石上 難波さんのお話を伺いますと根本をつきつめてゆくと、いわゆる男性のセックスという売春文化に培われきた伝統があると思います。それを家庭婦人が上手に払拭していくのが新しい女性のつとめだと思いますが。

磯村 お若い方で、さきほどから深刻にお考えのようですが。

宮林 全部耳新しいことばかりです。バーというのは今まで一度も行ったことありません。行く機会ありませんし、私の両親もおそらくバーなどに行つたとしたら猛烈に攻撃するに違いない。バーというのは大体が不潔なところだというふうに教えられてきました。今まで映画などでバーというものを見てきくと全部不健康に取扱われているのじやないでしょうか。ですから今まで、私がもし結婚して自分の主人となる人には、バーなどにはあまり足を突込んでもらいたくないと思つておりました。ですから、田中さんのようなマダムがいraftしやるなら大に行つてもいいし、私も連れて行つてもらいたいと思います。

沢村 私は比較的若い年代ですのに甚だ「許せない」のですが、今までバーとかキャバレーとか料亭とか待合とか、全部一緒に考えていて、ただ享乐的な男だけが楽しむもの、そうして女性を一人の人格として認めていない、そこに働く女の人も、男の金目当だというので、不潔感ばかりもつていて、そういうものは

なるべく少なくなつたほうがいいと思ひ続けてきました。お酒を飲むためだけでなく、キャバレーとかバーの女の人に、女性全体に求めているもの、普通の家庭の奥さんにない面を求めているとしたら私は、そういうところの女性たちの面も普通の家庭の主婦ではあつても考えていきたいと思うようになってきました。

磯村 都市部会の議題としては、一つの収穫だろうと思います。

みなさんのかんりの数の方がそういう問題に対して理解をおもちになつています。またそういうことの実態を正しく知ること、ことが、社会をもうすこし安定させる問題にもなると思うので、これは都市の部会としてはたいへん今後参考になる問題だと思います。

宮林 私、あまり世間知りませんから間違つているかもしれませんが、けれども、大体が男の方が、あまりおかたい女性というのがお嫌いなのではないですか。ただワツと、ほんとうに馬鹿になる積りで行くのではないですか。だから田中さんのようなインテリの女性が、バーのマダムとしておさまつていらつしやる場合には、危なくてそんなバーには行けないと思うのではないのでしょうか。自分の安息のために行くのですから。

南野 そういうインテリマダムに家庭の夫がしぼられるといいますが、取られるとしたら、それはむしろ家庭の奥さんの敗北ではないですか。家庭の主婦は、貞淑な妻と同時に嬌媚的な面もつていると思うのです。それをかみ合わせるのが、賢明な考え方だと思います。

主人が会社におりますが、時々本社からこられると必ずキャバレーに案内する。そういうことを仕向ける会社や今までのやり方

に、もうすこし新しい秩序を得なければならぬと思います。

蕨波 商業政策の中に、すぐにキヤパレーとかナイトクラブをもつてくる。商売するのに、そういう男の本能に訴えて、そのかげにかくれて商売する、日本の伝統が、違った形で現われているのに非常に反感を感じます。

磯村 学生の飯山君のご意見を……。

飯山 (特別オプザーバー 大学生) 昨日からいろいろ話を聞いたのですが、今日の話を一番よく考えてはまるとつていたと思います。ご主人に対して非常に大きな問題であるというふうに考えるからじやないかと思いますが、ばくスポートやつていきますので、優勝した時に祝賀パーティとして一度バーへ行つたことがあります。その時非常に不経済だということだけ感じました。もう再び行くまいと思いました。現在の商業政策の一つとしてバーが使われているということが非常に強く指摘されているが、実際そうじやないか。たとえば現在の政治というものがどこで行われているか、よく話に聞くが、そういうことを中止しなければ、婦人の地位も高まらないし男性の地位も今のまましばんでしまいます。こういうところに目を向けたみなさんに敬意を表します。

磯村 なぞ男が外に出るかという問題についての反省は、やはり一つの問題だと思います。同時に、今飯山君もみなさんから発言されたように、そういう場に政治なり仕事をもち込んでいる日本のあり方はかなり問題だと思っています。また、マスコミがこういう問題について正しい判断をしていないということについては、やはり一つの問題だと思っています。そういうことが理解されれば、バールといった職業についての女性の考えも違う、男性の考え方も違ってくる。そこにフェアな秩序が出るのではないか。

たとえばボストンにもおりましたが、向こうの方は、外に出る時にはほとんど家族と一緒に一人で行くということがありません。日本の場合にはどうしても一人でということが多過ぎると思います。アメリカの家庭は、一週間の中二回は必ず外で食事をする。それは女性が家で一週間食事ばかりつくっている苦勞に対する男性の一つの感謝の意味もあつて、必ず子どもを連れて出る。こういうことになれば、バーに対する考えもかなり変わってくるし、一つの秩序も出ると思います。

それでは次に、近頃パートタイムで仕事をするについての秩序ということがかなり問題になっていますが。

木佐貫 パートタイムで働いたことがあります。時間給なものですから、どうしても長い時間働きたい。また同僚との競争心というところもありまして、お金に使われるというような働き方になりかねない。仕事も単純です。自分の勉強の時間というものは持てなくなる。仕事をもつたがために、自分は低下してしまふ。そういうことになつてしまふのです。トランジスターの工場の手仕事でしたが。

磯村 どういうつながりでそこにいらつしやいました。職業安定所じやないと思いますが。

木佐貫 募集で近所の方とご一緒に働きに行きました。一時間にくらという賃金で、朝十時から四時までということですが、そのあとは何時間でもやりたいだけやつてください、というのです。すると本採用の人は朝八時半から六時間ですから、途中から抜けて帰るといふのは気がひけてますし、残業があるとやつてしまふということになつて、それじや自分も最後までやろうということになります。

寺田 それは自主性の問題じやないかと思ひます。前もつて計画を

立てて、計画どおりに一週間どれだけ働く、あとは必ず自分のものにしようという心があつたらできると思います。

磯村 自主性の問題だというご意見ですが、本職と、パートタイムの割合はいくつ？

木佐貫 百二、三十人中パートタイムが五、六人です。

そういう場合に自主性をもつてといわれますが個人主義が徹底してないから、上の人がいやな顔をされると帰りたいが、お善理でもやらなきゃ、という妥協した形が出てきちゃうのですね。そういう点を割り切つて、やつてゆける。そういうものをこれから先、身につけていきたいと思ひますが。

磯村 パートタイムは、時間的に余裕ができればしたい仕事ですが、企業のはうでは、パートタイムになれば健康保険も要らない、失業保険もつけないでいい、なるべくそれを使つて、本採用の人を少なくするという考え方があつて、そういう形の問題についてお考えになつたことがありましようか。

それから、本採用とそうじやない方との間に身分的ないやなものがありましようか。

木佐貫 会社側としては一番使い易い。首を切られる時に、一番最初にやられるから、自分の保障がないということが一番欠点です。

辻原 私、幼稚園の三級教員に出たことがあります。教員の免状はないが三級だけの資格をとつているのです。ところが忙しい時があつて家庭があるのでできないのでやめてしまつた。次に化粧品セールスマンもやつてみました。近所では、時間があつても家を離れられない人たちが、人造真珠を通す仕事をしてみましたが、そのほうはものすごく賃金が安い。一方、化粧品のはうは資本が非常にあつて、安く商品を買ひ取つて売るので賃金が高い。

金としてのマージンがなかなかできない。結局、内職は不都合なことばかりでした。

磯村 仕事に社会的な責任とか、社会的な保障というものがなく、いかにも自由なような形の中で一番むずかしい仕事の状態の中にパートタイムの方が置かれていてではないでしょうか。

東京の山谷などでは、なぜ労働者が職業安定所に行かないで、いわゆる手配師という闇労働市場に行くかというところ、賃金はいいのです。ところが時間がものすごく長いし仕事が非常に激しい。けれども非常に金をとれるので、そこに行く。そして体をそこねてしまふ。なぜ企業者がそういう人を雇うかというと、健康保険とか失業保険などつけるとめんどろですし、組合なんかつくるのがめんどろだから、その日限りで人間関係が済んでしまふようなものを希望している。そういうものが男性の労働市場に非常に多い。女性のパートタイムが全部そうとはいへませんが、かなりまだ闇の秩序があるのじやないか。

それからもう一つ問題を進めて、内職問題とパートタイム問題をどういうふうにお考えでしようか。

藤田 私は、技術をもたないと不安な気がしたので十年ほど前簿記を習ひに半年ほど通いました。お勤めに出るのがいやなので、家で仕事ができ、なるべく体を使わないで、頭を使つて、お金がたくさんほしいと思つたので、簿記をやつたのですが、収入も月に一万円にもなりまじし、女の仕事としてはいいのじやないかと思ひました。

民間放送のモニターをやつていますが新しい仕事じやないかと思ひます。

磯村 モニターは内職とお考えになりますか。

南部 謝礼が少ないですから、趣味と思つてやらなければ。しかしその収入を源にして、主婦が自由になるのです。亭主のお金だけにオンブしないという気持が出るのです。

藤田 私はやはり内職と考えています。

石上 人口三十万くらいの小都市ですから、パートタイムという仕事はないのです。ホームヘルパーくらいしかありません。特産品はお茶と下駄で、零細経営の家内工業が圧倒的で、大企業はほとんどありません。下駄といつてもケミカルサンダルのパンドにリボンをつけたりする内職と、お茶の袋を貼る、簡単な手先でできる仕事ですが、主婦が朝夕晩まで、家庭のことをあとにして働いても、一日百円がせいぜいです。その原因はどこにあるかというと、零細企業では事業資金を借りるのに、中小金融企業公庫から九分六厘の高い利子で、お百度をふんで運転資金を借りている。銀行からもあまり借りられない。そういう人たちはだんだんに内職に出す下請単価をしぼつていかなければ企業が成立しない。ケミカルシューズなどは特に東南アジアに輸出するが競争が激しく、すこしもコストの低い業者に落ちてくる。だから下請を下げなければならぬ。三〇%から四〇%、税金に取られるのです。

澤村 内職の課題が出ておきますのは、いろいろな意味もあります。が、家計の補助という問題もあると思います。時間が出たから仕事を、何か身につけなければという問題もある。さて、それを受ける労働市場が、資本主義的な社会ですからそう甘くない。その中に入つて行つて、かなり家庭生活を犠牲にしている面があるのじゃないか、そういう点について、いきたいへんいとお話がありましたか……。

石上 もう一言付け加えますと、私の文集グループで、主婦が内職

することは家庭にプラスになるかマイナスになるかということが出ました。それほどにして働いても、目を離して子供が交通事故に遭つたりしてはとり返しがつかないし、ご主人が多少なりともベースアップしてうちに帰つて来ても、わたし、ここまでやらなければ夕飯にならない。ということもあつて、議論になりました。

阿部 生活のためにやる内職か、働くことの喜びを感じて自分から進んで余暇を利用するための内職であるかということに根本問題があつて、そこから自主的に解決しなければならぬと思います。私は二十一年半働いた経験から、最後に残つたものは、子どもを次々に三人もなくしてしまつたということで、金には代えられない人生の痛手でした。

ですから昨日から問題になつてゐる保育所がどんなに増設されても、自分の子どもをほんとうに知るものは母の愛情であると痛切に感じています。共稼ぎをしてどんなに金をためただろうと想像する第三者もありますが、経済面にはすこしもプラスにならない。職をひいて、ささやかな生活をしてはじめて貯蓄の喜びを今感じている。

内職であろうとパートであろうと、そのほか、どんな職業についても、子どもの養育は結局母に与られた天性だと思うので、養育する期間は家庭にあるのが最も望ましいと思います。やつぱり個人的な人柄と家庭の環境によると思います。

モニターを頼まれたことはいやでした。人が一生懸命やる仕事を批判することは決して受けるべきではないことになりました。そして趣味から結ばれて婦人学級の仕事を頼まれた時はスタジオ借りて勉強した喜びが忘れられないでやりましたが、手当もらつ

たので責任を感じました。しかし、もらつてみるとやはりみんな使つてしまふ。二十一年半共稼ぎで、決して経済的にはプラスでなく、主人にはいい奥さんではなかつたとしみじみ感じて、これから結婚生活第一歩に若返つて暮そうと思つています。

沢村　ただ手先の器用さだけの内職は非常に賃金が安い。みんなそういう内職を放棄すれば上るかもしれないと思つています。やはり何か技術を身につけなければ、そういう目に逢うのだと思ひまして、和裁は当世はやりませんが、稀少価値があつていいのではないかと思つて現在、まあまあといつところで、収入の面ではプラスになつております。

しかし、いつまでもそうする気はありません。将来は、その間に何か自分の能力を養つて社会に出たいと思つております。内職というのはあくまでいびつな形態だと思ひます。和裁にしても、ただ家にこもつてちくちく縫つているだけでは、一生かかつても工賃とは知れたものですから、洋服店があるように和裁店をはじめるとか、人に教えるようにするとか、何か企業化しなければだめです。

内職を持つ方も、内職にこもらないで、社会の大きな組織にしなければいけないのじやないでしょうか。

磯村　共稼ぎという事で何か……。

石上　阿部さんのお話ごもつともだと思ひますが、共稼ぎのことは、ひとつ新しい秩序みたいなものを女性自身が考えなければいけない問題を含んでいると思ひます。

阿部さんが今まで共稼ぎをしていらした社会の状態で、今後あるべき社会の状況は、違つていかなければいけない。具体的にいうと、子どもは母親が手許で保育するのが最良の姿だということ

が生まれたが、収入がある場合はいいが共稼ぎをしてやつと一家が食べられるという場合には、やはり保育所のようなものをつくつて、家事労働とかすべての教育を社会化する方向にもつてゆかなければ、女性自身も向上しませんし、子どもにも社会性を身につけるということ、保育所が絶対必要と思ひます。

小枝　内職のことですが、生活にこまらない主婦がわずかなお金でも働きに行くことが、ほんとうにこまつている人を圧迫しているのではないかという話が出ましたが……。

阿部　共稼ぎのために女のほうに圧力がかけたり、主人にも共稼ぎすることによつて社会的に圧力がかけたり、あるいは停年の問題も叫ばれてきたり、大学の卒業生に職がなかつたり、いろいろなことから考えると、やつぱり後輩にある時期には譲つて、停年の問題も充分考えなければならぬと思ひます。ほんとうに低所得者が職業分野を開いていくためにも女でなければできない職業があるのですから、そこで努力することはいいと思ひますが、男の分野まではびこつていくということは考えものです。

磯村　生活にこまらない人が内職を求めようとすることに問題があつて、現に内職している方が低所得者をさらに底辺に落しているのではないかというご発言ですが。

難波　大企業は労働基準法によつてものすごい衛生的な管理をやつて、

それはそれなりに見せるようにしておつて、それ以外に内職を出す。チューインガムのゴムなんか食べものですから、それを内職に持つ帰つたら、あるいは病人の枕許でやるかもしれない。それを問題にしたが、盛り上つてこないのです。それが無制限で、明日までに納めなさいということになると、亭主が帰ろうが帰るまいが、しなければならぬ。それをしなかつたらその次は内職斡施所からアウト

される。そういう現状です。

それから大分問題になりましたビニールの接着剤に毒性があるということ、それでも少々毒があつてもするという、それほど追いつめられている人もいるし、映画に行きたいとか、都市ではあながち追いつめられていることばかりでもない。

ネットの網を通す仕事は、一日しても三十円にしかないがしている。内職斡旋所を府が委託しているが、それがますます中小企業を零細化するようになつていくということ。しかも大企業も、一方で内職を出して利潤を増している。そういう二重生活の大企業に反感もち、そういうことにメスを入れたい。内職者が全部、私はこれだけの賃金でなければいけない、とボイコットすればいいが、大きいところに頭を下げてしまう。

辻原 内職をしている人たちは賃金が安い不満をどこにもつてゆきようもなく、一人一人がこまづいている。その状態をもち寄るという態度になればいいのですが。

もう一つ賃金が安いということは仕事をもつて回る人の中間搾取もあつて、そういう人たちのマージンが大きく、オートバイを買つたりして飛び歩いている人が中間で大きなお金を取つている。もうすこし資本があればと泣いている人がある。そういう人のために社会保障というか、何か金融のほうで助ける制度ができないかと思ふが。

石上 必要とするところに職業がこないで、それほどでない人に行くのけどうすれればいいかということですか、たとえば民主委員や婦人少年室というところは年少労働者と婦人を守るところですか、そういう人たちを活用してもらつて、ほんとうに必要なところに職業が行くように、そういう組織を運転するようにしたらと

と思ひます。

磯村 この問題についてはまだいろいろあると思ひますが、職業という問題は別の部会もありますので、次にそういう職業以外の、報酬を得ないPTAとか婦人会といった問題に移りたいと思ひます。つとめを持つていきますとPTAなどでは校費を納めるだけで終つて役員がでないのですが、会のはうでも、こまづいておられます。ほかにも、そういうことがありましよう。その理由はどこにあるかということをも、

寺田 役員になり手がないのは私も同じです。やはり、その一人に責任を負わしてしまふことにあるのではないかと思ひます。磯村 PTAとか団体活動——PTAは、子供が学校に行きますと、会員に自然になつてしまふ。そういう団体活動と、そうじやなくて、何かの目的で団体をつくつておられる。これは非常に違うので。ですからここに二つ並べたのですが、当然入つてしまふのと、いまの役員改選の問題でも、自分が進んで入つた場合と同

じだとすればおかしい問題になりますね。

石上 私は、地域婦人会と文集の団体と二つに入つています。地域婦人会は町内会の婦人はほとんどが婦人会員で、団体組織だけはあるが頭になり手がない。文集の会のはうは読書グループで、気持ある方ということ募集して、母親たちが集まつて、社会、家庭の問題を文集という形に変えて、六、七年くらい続いて、三十八号くらいまで出していきます。文章の上手下手でなく、文集の中の問題を取り上げて、月一回の例会の話題にしています。会長はなく、半年交替で連絡をしています。

辻原 やつぱり私たちは、目先の子どもだけという考え方から脱して考え直さなければいけないのではないかと思ひます。

そういう秩序ができてゆくことが、婦人の地位を高めるうえに大事だと思います。

辻原 私は、なるべくなら町内会の婦人たちが、全面的に婦人会に入るといふ行き方がいいと思いますが、婦人会婦人会という考え方でいつてしまふということには疑問をもちます。あの人たちは何するにも婦人会だからと、入つていない人は離れていつて、何か相談する時にそこに壁ができてしまつてよくない。できれば町内会の婦人たちも全部婦人会に入るといふ形で、大きなそういう会をつくり、だんだん横の結びつきをつけていつたほうがいいと思います。

磯村 そうすると意識がほけてしまうのです。いまのお話に反対す

るわけじやありませんが、理屈からいくとそういう傾向になるのじやないかと東京の場合は若干問題になります。

小枝 私のほうにも、町内の婦人部ができました。私たちの町内の婦人部は、絶対地域婦人会じやないと銘打っています。地域婦人団体は動脈硬化症で、若い人が見向きもしません。私のほうには地域の婦人会というのはいやだから入らないで、町内の婦人部として絶対中立で、婦人が集まつて勉強しようという目的を掲げて予算を二万くらいもらつて、大学の先生等を一月に一度お招び

して、話を聞くという行き方をしています。それでも町内会の婦
人部は必要ないでしょうか。

阿部 戦後新しく町内会ができて五年間婦人部がありました。が、前年度の会長になつた方が新しい考え方をもちていて、婦人部は要らないとぬけてしまいました。しかし考えてみるとやつぱり私どもは地域社会に貢献する婦人でなければいけないから婦人部はあ

つてよいと思います。

沢村 地域婦人会はありますが、私は入らずに避けてきたような格好です。それはみんなお義理で入つて、目的意識というものがなく全然魅力がないのです。地方会談の時に婦人会の幹部が、婦人会は幹部が一カ月の中、何日も出る、とても忙しくてこまるとおつしやつた。自分の生活時間というものもたない、つまらない生き方だと思ふのです。犠牲的な精神とかエリート意識にもえてゐるかもしれませんが、その人個人としてはロスだと思ふのです。

その反対に、私はある婦人雑誌の愛読者の会の支部に入つていますが、そういうところでは人数は少ないかわりにそれぞれ自覚しています。たまたま機関誌の編集のためなどで、誰かにとてもかふさつてくることがあると、機関誌をつくること自体悪いことではないが、家庭やご主人に負担がかかるので、批判がくるのです。というのは、その人自体が損なのではなくて、会全体、ひいては婦人運動に対しての理解が薄れたり、まがつてとられたりする、だから、みんなが損な立場になるので、それじゃいけないので、ほかの人が代わるというように、一人一人責任の持ち方が、普通の婦人会とグループでは違ひます。

磯村 そこが問題だと思ひます。

それは特別オブザーバーの松浦さんいかがでしょう。

松浦（特別オブザーバー 日本婦人有権者同盟） 町内の婦人部にしても、婦人会にしても、その中に自主性があれば名前はどうあるよりも、内容が変わつてくるのではないかと感じます。

大江（特別会議員） 赤井したお話を伺つて感激しましたが、町内会の場合、自分がつくつたグループ、いろいろありますが、意識をもたない婦人をどうして引き出すか、グループでどんな事実し

た話をしてもついてこない婦人があるという現実が私どもの共通の悩みで、これはおろそかにしちゃいけない。いちばんいい方法は、PTAはそういう婦人に呼びかけるにいちばん呼びかけ易い足場だと考えております。

磯村 午前中はこれで閉会いたします。

再会 午後一時半

磯村 午前中の部会で、もうすこしこの問題だけはある程度ふれて

おいたらいちと感じましたので、お話し合いをしていただきたいと思いますが、それは婦人会とかPTAというもののどういうふうに参加するかということです。私は、PTAというものは、子どもが世話になるから当然みなが入るのだということだけではあつさり過ぎるのではないか。PTAのあり方で一番問題になるのは、学校では子どもが平等な生活をしているのですが、PTAになりますとすぐ、そのうちの身分というものが反映するということが都市の中でもあるのじゃないか。

そういう点で、田中さんのようなお仕事をしておられる場合、あるいは荒井さんなどがお仕事をしておられる場合には、そういうPTAにどういう役割をなさっているか、あるいはそれにもれている方があるのではないか、そういう点につきまして、お二人からお話をしたいだこうと思います。

荒井 商店の主婦の場合はPTAに出たいという気持はあるが、時間がないために行かれないお母さん方が大半です。さつきのアンケートですが、PTAに全然出ないのが八〇％、それから必ず行くというのと、たいてい行くのが二〇％です。ですから子どもの学校とのつながりを求めているながら、生活に追われて行かれない学校の状態もわかりませんし、家へ帰っても子どもの始末もできないということです。

田中 私の場合は午前中あいっておりますので、婦人会などには出席できませんが、参観だけは欠かさず行っております。PTAとかそういう集合的のものは姑が行っておりますので、非常に助かります。参観の時に子どもたちがどういふふうにして教育を受け

ているかということを知りて、それを家庭のしつけの中にとつていくわけです。

それから私が言いたいことは、ここに出席していらつしやる方にはわかりにくいと思いますが、ここにいらつしやるみなさんは安定した方たちですが、それ以下の層の母親がほんとうにたくさんある。特に夜のお勤めの方、未亡人で子どもを抱えて、お昼だけのお勤めで、あるいは内職だけで生計の立たない人がたくさんある。婦人会等の集りで、みなさんはこれによつて教養が高められたり、交りがあるでしょうが、その人たちは全然それできません。

私がこれからしてゆきたいのは、私が同じ職業の中で理解ある経営者の人たちを一人から二人、二人から三人と広めて、いわゆる夜の働く婦人の集りをしてゆきたい。そうして、大衆としての教養に結びついてゆくのです。そういう女の方たちからいろいろな問題を店に持ち込まれるのですが、職業に対しての偏見が、都会においてもたいへんあるようです。身近な問題で、この間も主人の会社の運転手が急にやめたいといつてこられ、自家用車の運転手に紹介してほしい、という。なぜかと聞きますと、子どもが学校から帰つてきて、近所の子どもに、お前のお父さんは運ちゃんじゃないかといわれて、その父親が非常に悩んだのです。

その時私は、職業というものには貴賤がないはずで、自分の与えられた職業を一生懸命やつてゆくことが一番尊いことじゃないかといつたのですが、みなさんの身近にもそういう婦人がないとは限らない。どうぞ小さいところからそういう方たちをよく理解してあげて、ほんとうに明るい生活をしてゆくために、協力してあげてほしい。

磯村 たいへん切実なお話をうかがいましたが、都会の中においても封建的な形が残っている。私も一つの経験がありますが、バスの中で、子どもが、一人は、「うちのお父さんは会社に行っているのよ」一人は「うちのお父さんはお役所」という。やつぱりそのお母さんが、うちのお父さんはお役所だ、会社だ、とやつている。職業の呼び方などはなんでもないというかもしれません、こういう呼び方をなくす努力が必要です。

そこで次の、大衆社会の一つの問題に入つてゆこうと思います。が、そういう点で、京都なんかどうでしょう。

田中 京都という土地は非常に封建的な人とすごく進歩的な人があつて、極端から極端です。そして、部落の方の就職問題ですね。私、調べてみたのですが、いわゆるバーとかキャバレーに、部落出身の十八から二十五、六という娘さんが多い。人がない人がないといふけれども普通の商店街とか商社は、部落出身、朝鮮人は属つておりません。その人たちの行く場所がない。すると、そういう派手な場所に勤める。暴力団とも結びついて、大規模なキャバレーとかサロンに流れています。だからこの問題は一挙に片付けることはむずかしいと思います。

磯村 いまのような課題を中心にして、第三の、婦人と市民生活の問題。

寺田 そういう方たちは行きたくても何かの障害でPTAなどに出席できない方だと思えます。ですけれども、初めから行きたくないという方も、私のところには相当あります。PTAなど全然行こうという気のない方にどんなにしたらいいでしょう。

石上 それはPTAのあり方自体にも問題があると思えます。たとえばPTAで万年会長さんにもありましよう。たとえばその地位

を利用して市会議員になつたり。ほんとうに子どもを守られてかなければならないという気持がないのです。それから先生自体にも、問題があり、先生方は、そういう方たちがPTAの会長をしていると、そこからの圧力がある。それに対して意思表示をはつきりなさらない。先生の立場は子供を守るために必要な問題があればPに知らせなければならぬのにそれができない。こんなPTAでは、奥様方の衣裳の見せ場だから時間つぶしだという方があるのです。

磯村 阿部さん、Tのほうで苦心なさつたと思いますが。

阿部 いかにしてお母さん方を多く集めるかという工夫も大事ですが、やつぱり集まるお母さん自体がもつとPTAに関心をもつて出て行かなければだめだと思います。寄せ集めるのでなしに、お母さんが盛り上つて出てきたところにはじめてPTAのよさがあるの、お母さんが出てこないの、自然に先生方だけの考えの下に計画が進められて、その辺で面白くなる。

難波 大阪独特の問題かもしれませんが、前にもPTAのことで問題になつた時に、PTAは財布ではない、というキャッチフレーズを使つたことがある。プールとか講堂とか、金集めのように思われている向きがある。そこで金放れがいい人、金を使つて何かの目標にしようという人が、PTAのボスの存在で牛耳つてくる。するとほんとうに純粋な意見をもつて、子どものためを思っている人の意見は押し込められて、経済的に優先している人がじやんじやんばりばりやるものですから、真に意見をもつた人は発言できにくくなつて、いるのが大阪の現状です。しかも校長先生もしくは教頭の先生方がそういう方を大事になさる。財布的な経済的な意味のPTAの会長、副会長という人を非常に大事になさると

いうところに、もたない者は寄りつきにくいという現象が現われます。たまに婦人団体などで、母親連絡会の人たちがはつきりしたことをいいますと、あれは赤だときめつける向きがありまして非常にむずかしいということを痛感しております。

小校 そういう会長さんを選ぶということは、PTAの一人一人が自覚してないということですが、いかにしていいPTAをつくるかという具体案として、クラスPTA、それがしつかり先生と手を握ること。それから私たちの存在が、先生関係でなくて、絶えず自分の地域に浸透しなければいけない。忙しいお母さん、関心をもたないお母さんでも、何とかPTAに連れて行こうという意欲をもつて地域に浸透する力、その二つが、解決の糸口になると思う。

阿部 自分が教職にいた時には、ほんとうに自分が一生懸命やつてお母さん方から満足してもらえらるうと思つてやつていたことも、いざ自分が家庭に入つて、主婦として母として、PTAの会員として見た時には、いいたいことがたくさん出てきた。そういう点から考えて、学校を責めず、役員を責めず、母自身が出て行つて盛り上らなければだめだと思います。

私の学校では辛いそうした熱心なお母さんがたくさんできて、婦人学級もできて、だんだんいい方面に動いているが、どういうふうになつてゆくかは、お母さん自体の気持にあると思います。

石上 難波さんの発言に対してですが、PTAは財布ではないという問題は、一番の痛になつていと思う。言葉をかえれば国とか自治体でやるべきものがこつちへきている。何はどこでやらせるべきか、お役所は有難いなどと思わないで、お役所は、こういうことはここで請負え、ということを見なさんがやらなければなら

ないと思う。最初は地元のクラス単位からやらなければならない。青葉会の若いお母さんは、悩みをもつてお母さんよ集まれということで、学年PTAまで発展したが、最初はそういうことをもつこと自体に主力があつて、最初そういう集まりをもとうとしたら受持の先生が校長から、どなられたということがある。二、三年経つて校長のほうから学年会をもちましたかと聞くくらいになつた。地道にやつてゆかなければならないと思います。

辻原 さつき寺田さんがおつしやつた、出て行かないという問題が根本問題だと思います。それには、盛り上らないということが出ましたし、それをどうするかということですが、そうすると結局PTAの組織が悪いとか運営が悪いということになつて、PTAが財布であつてはならないので、教育費が少ないという問題になつてきたが、私は盛り上がりをつくるためにはやはりお母さんが出て行かなければできないと思う。それには、子どもが二人も三人もいるお母さんは実際問題として出られないし、内職しているからその時間にもつたないから出られないということがあつて、そういうお母さんたちの暇をあけてもらうように考えて、託児所が必要になつてくると思うのですが。

磯村 終戦直後、上野の地下道におりました人が地下道から追われて、上野の寛永寺の中に墓部落を作つた。最終的には千人くらいの部落ができてしまつた。そこにはいわゆる不就学児童ができた。それで、そういう人たちをどうしても学校へやりたいと考えたのです。たまたまそういう仕事に直接の関係もありましたので、教育委員会に頼みまして、近所の学校の、校長のところへ行きまして、中学校に入らなければならぬ人が二十人ぐらい。小学校だけで六十人ぐらいいる。

P T Aがうるさいからごめんこうむる、葬部落がきたといったらP T Aがうるさい、というのです。住所がないといつても、終戦後やむを得ず住みついたのだから、と三つの学校に分けてもらった。ですから子どもたちは喜んで行つた。パタ屋なんかやつている人たちですが、ランドセルも買つて、子どもをやつた。三カ月くらい経ちますと半分行かなくなつた。P T Aの会がありまして、誰々さんのお母さんがこないというので、子どもはそこにひきめを感じた。うちのお母さんはこういうことをやつているから行けないんだということをいえませんでした。それからまた着物がなから行けない。そういうことが反映して、半数が、三カ月で元にかえつてしまつた。

こういうことはやつぱりP T A自体の問題でなし、間接にP T Aの親の自覚が子どもに反映して、学校いやになつちやつたということがあります。

こういうことも、財布を持つている役員でないと都会のグループは育たない。そういうことが、やつぱりみなさんの協力を得なければいけない問題とします。

田中さんは、おしゆうとさんがお助けになつておられるらしいので珍らしいケースですが………。

田中 家族ぐるみ協力してくるのでできると思います。

磯村 話が飛びましたが、そういうことで一番大事なことは、大衆社

会ということ、大衆というものはいつたい何かといいますと、

これは家庭においての人間関係ではない。職場でもない、婦人会でもない。それ以外の場所におけるところの人間関係、こういう

ふうにお考え願いたい。大衆社会の特徴はなんであるかというところ、第一に、身分がわからないということです。匿名の社会といいま

す。私どもがこうやつておりますと身分がわかつている。いわんや名前までついている。ここから外に出るとそれはわからない。大衆になります。これは都会でないと、はつきりわかりませんが、役割と離れてしまうということです。そうしてある程度たくさんの人がいるということになるわけですが、では、いつたいなぜ大衆社会というものの、都会というものの生活の特徴があるかというところ、一つの例をいしましょう。うちの妻が近所にさしみを買いに行つた。ところがその時に、ついでにサンマをすめられたといつて、ブーブーいつて帰つてきた。せつかくさしみを買いに行つたのにサンマをすめた、ひとをサンマクラスと思つていると、それからその魚屋にいきません。大学教授はサンマクラスだといふので………これが農村的現象です。

都会ではそうではありません。なぜデパートにいくかというところ、身分がわからないから行く。百円持てば百円のものを与える、というところに大衆社会がある。百円の入場券を持つた人は誰でも百円の映画館に入る。それじゃ歌舞伎となると、ちよつと歌舞伎座にそんな格好では、ということになりますと、これは大衆社会の現象じゃなくなるわけです。

ですから田中さんのところに身分にこだわらずに行かれば大衆的バーということになるが、どうもあすこに行く時はこんな格好じゃ行けないということになると工合悪くなる、そういうところに大衆と都会的な原因がある。

ところが大衆というものは家庭からも離れますし職場からも離れるので、人間関係が非常に自由になりますから、そのいわゆる人間形成というものが、自由という言葉の中に若干の低下をき

たします。

電車に乗つていても大衆です。それじや電車の中でどんな新聞を見ているかという、家庭でも職場でも見ないような新聞をみている。それは要するに大衆社会における人間関係の若干の低下ということになつて、なるほどここに大衆的というものの問題があることがおわかりになる。

そういう状態の中で一番大事なことは、いつたいその中で個人というものが自分という一つのパートなり定義というものをどういうふうにもつてゆくかということではじめて都市の社会の中における婦人の地位の新しい秩序というものがあるのではないか。家庭の中を非常にきれいになさるのになぜ外で、汽車の中でくづをまきちらすか、これは大衆社会の現象からきます。大衆社会においてのモラルがどうして低下をしているか、そこまでいかなければほんものじやないのですね。

小牧 痛感するのは、家庭の中はきれいにしている立派な主婦が、社会に出ると公徳心に欠けてる。日本人全体ですが、すこしでも公徳心を養うように努力したいと思うのです。公徳心といちがいにはいいますが、連鎖反応で誰か一人ゴミを捨てるとつい捨てたり、芝生の上を歩いたりしますが、公徳心は大切に考えたいと思います。

泊 市民性というのは、やはり街に出て自由な身になると、誰も自分を監督していないという気持があるのじやないかと思ひます。それで家庭でも、家庭で監督下に置かれている場合、従属化された形である場合には、市民性は育ちません。たとえば学校内でも、先生がそういう形で教育していますと、先生がいない場合にさわ

ぎます。しかしそうでなく自主性というか、いわゆる教育を考え

てやつている学級は先生がいなくても自主的に行動をしています。そういう集団生活でありまして、大衆生活でありまして、やはり個人がほんとうに自分を律してゆく考え方が一番大衆社会における市民性の基本になるのじやないかと思ひますが、

木佐貫 地方会議でこういう話が出ました。ある青年がバスに乗つた。村で乗る時に老人が乗つてきて、席を譲つた。次に東京に出てきて電車に乗つた時には知つた人が全然いないから席を譲らなかつた。そういうものをまだみんな備えている。

宮林 公衆道徳が身につけてないのは、今までの母親に責任がある。生活に一番大事な幼児期をほつぽらかして、かわいがるだけで、一人前になりかけのころから束縛している。今のお母さん方は、子どもたちを理解しようとおまりにもつとめて、どつちかというと放任している。性格形成に必要な幼児期の根本精神、責任感というものをちゃんと身につける、そういう教育の仕方を、これらの母親はしてゆかなければならない。

磯村 これから母親にならうとする方々から先輩の母親に対する提案がありました。いかがでしょうか。

藤田 私は子どもを育てる時には人に迷惑をかけないように、責任をもつて、というふう育ててきました。

田中 一月ほど前に子どもが交通事故に遭つた。自転車に乗つて電車を渡つたらしいのです。渡る場合には自転車から下りて、自転車を持つて渡らなければいけないが、それをしたためにバイクにぶつかった。相手も悪かつた。無免許でスピード違反、しかも貧困家庭の青年で、勤め先のバイクを無断で持ち出して乗つた。警察では青年ばかりを責めましたが、私は考えた。今は子どもに

自由がいわれているが、親としての権力がある程度もつて、秩序とか交通道徳をもつと教え込むべきである。子どものほうに私の顔を見るとすぐ、お母ちゃん、ごめんなさいね、とあやまりましたが、まだまだ私に反省するところがあると思います。

磯村 たいへんいい事例をおつしやつていただきまして、大衆社会の市民性の根源は家庭にあるというお話でしたが、

寺田 子どもの躾は、小学校からではもう遅いというのですが、いまのお話でもよくわかりました。しかし家庭だけではやつぱり不十分ではないかと思ひます。都会では大分進んでおりますが、地方になりますと、保育所とか幼稚園にやる家庭はあまりたくさんありません。というのは、一つは費用の関係もありますので国で保育所などの設置をふやして、ほとんどの子どもたちがそういうところに入り、社会的な訓練を身につける。このころよく幼児の交通禍がみられますが、子どもたちもそういう交通道徳などの訓練をしつかり身につけておつたら、いくらか悲惨なことも防げるのではないかと思つてゐるのです。

磯村 第一部会では保育所の話が流行いたしました、重要なことでございます。

そのあたりから、市民的な訓練をしなければいかんということだろうと思ひます。

沢村 私は人の多いところに出れば出るほど、何かとても自由になつたような気がします。東京に出てまいりますと、知らない方が多く、これだけたくさん人がいるのに、自分に命令する人とか干渉する人がいない。ほんとうに自由に、なんでも好きなことができると思ふ。その反面、汽車の中で隣りにすわつた人でも、電車で吊皮持つた人でも何かあつた時には一諸に手をつないで立ち

上がるという気持と阿方ある。そうしたら親しみというものがわいてくる。

磯村 たいへん興味のある話で、大衆の社会に入ると、多数の人の中における孤独を感じられないのですね。すると地元では、どうですか。

沢村 命令じやないが、人の目を意識します。あんなところを誰と歩いていたとか、そういうことをいわれる。

磯村 それが都市生活の特徴でしょう。しかしその中で親しみを感じられるというのですからいいですね。

難波 大阪の地下鉄はたいへんこみですが、時間までに行かなければならないし、相当な過労ですから人に譲るより、まず自分が腰掛けなかつたら能率に関係する。帰りは疲れているから、おばあさんが立つていても、まず自分が腰掛けなければならぬというのが一つの社会の機構の現象と思ひます。それで低賃金の問題とか労働問題に関連があると思ふ。それから公園などで紙屑を散らかす。三笠山は紙屑山といわれるほどですが、地方の人が、自分のところでないからという解放感でそういうことになるのでしょう。ほんとうに日本を愛するというような気持を、そういうところに行つた時にも持つておれば、その紙屑をビニールの袋に入れてどこかの停留所の紙屑籠に捨てる。そういう公德心を持つようになりたいと思ひます。自分が腰掛けなければ明日がまたたいという、大きな社会の低賃金、単に公德心といひますけれども、大きな産業の面にも関連性があるということを付け加えたいと思ひます。

阿部 私はとかく古いものですから、やつぱり自分の子どもにも悪いものは決して見せまい、そういう話は聞かすまい、話すまいと育

てきたから、婦人雑誌をとっているが、性教育のことが書いてあるとそこをカットして出す。これじゃかえって見たくなるのだな、と思うが、子どもに聞かせたくない先生方の問題が書かれていると、かくしておく。ラジオでも、聞かせたくないと思うとねじってしまふ。そういうことをずいぶん続けたが、これではだめだと思つた。グループ学習をもつてからやめたのです。

私のほうは小さな都市ですが、映画の立看板でも見せたくないものがたくさんあるので、子どもがどれだけ受け取るかということ、見せまい、話すまい式はやめました。

磯村 たいへんいいお話です。こういう苦心から出てああいふふうにならないと、ほんものにならないと思います。

小枝 宮林さんのように小さいうちから公德心を養つて育つた子どもは大丈夫ですが、現在のおとなはまだ欠けている。

電車に乗つたら、隣りの男の人がボンとチリ紙を捨てた。見たら不良みたいにおつかない。こういう時にどうしたらいいか。注意したらいいか、拾つたらいいかと思つたが、こわくなつて結局下りてしまつた。そういうことに遭遇した場合、どういう態度をとつたらいいか。

磯村 それが市民性のモラルの問題です。そこで気がついただけでも尊いと思います。やがてはそれで電車がきれいになると思いますが――。

荒井 私は商人です。ほんとうはいわないほうが営業上よろしいのですが、一番目につくのは特売場のすさまじさです。その中にはローズが毎日のように出てくる。かき回していることに一つの喜び、解放感を感じる。商人のほうはちらかつて、おとされて泥だらけになつても、一つのサービスと心得ているが、男より女の

ほうがあとの片付けをしない。これを口に出すと、あんな本屋に行かない、といわれる。

磯村 ドイツで地下鉄に乗つた。五つぐらいと三つぐらいの子どもを連れとお母さんが乗つた。三つぐらいの男の子が、キヤラメルを食べて下に落としたら五つの男の子がお母さんをつついてするとお母さんは小さいのに向つて、お前は字が読めないかもしれないが、あそこの電車の中にはベルリンの街をきれいにしようとして書いてある。お前もベルリンの小さい市民だから拾いなさい、といっている。すると小さい子どもは、兄貴がいつけたといふことをわかつているらしいので、実にしぶしぶらしいけれども、取つて入れました。このへんからスタートしていると思う。家庭における躾と同時に街頭におけるおとなのあり方とか躾はいまおつしやるように大事でしょう。

そういう点で、いま荒井さんは、若干女性のほうが、少なくとも特売場においてはモラルが低下しているのじやないかということですが、自分の子どものことについては非常に熱心に発言しますが、全体のことには及ぶと見向きもしない。

南野 女の人が非常に体裁屋であるということも思う。バスの中で、男の子が喧嘩している。弟のほうがあるすごく大きな声で泣いている。母親が、泣いているのがお客に迷惑でありみつともないからというこで泣くのをやめなさいということだけしかいわない。どうして喧嘩がこうなつたかと、弟に納得の言葉をいえばいいが、ただ、泣くのをやめなさいとしつこくいつている。

磯村 日本の母親にしろまた家庭生活にしても、家庭ではよかれあしかれ一つのプリンシプルがあると思うが、それが外に行つてくずれてしまふ。小学校や何かの時にはちゃんと日本人は音楽に合

わせて歩きます。ところがメーデーなんかおとなは、それに足を合わせないで平気で歩いて行く。こういうのはいつたいどうなんでしょうか。そこら辺りが、小学校などの段階においては比較的訓練に従うが、おとなになつてしまつと全然前の訓練を忘れてしまふという傾向があります。もつと極端では、若い方はよくアベックで歩く。外国人だつたら女性に歩くのを合わせると思うが、日本の男性は女性に合わせないで平気で歩く。これなんかもへんだと思いますね。

阿部 たしかにいまの問題は、現在の先生方に大いに責任があると思います。

一人の女教師がいる。常日頃は非常におこりぼく、子どもは、うちの先生とでもおこる、というのです。言葉もすごく悪い。参観日に学校に行つてみると、その先生はすごく言葉も立派でやさしい。子どもが帰つて「毎日参観日だ」といいな、先生がやさしくて」という。

沢村 さきほど紙屑を捨てる場所がないとおつしやつた。それは園として環境衛生の設備を整える必要があるのじやないでしよ。か。それと個人の公衆道徳意識と両方推し進めてゆくように。

辻原 いまのメーデーのお話は、音楽を例に挙げられて、一つの制度という秩序というものを汲み取ろうとしない大衆心理をいわれたのだと思うのです。そういう意味で音楽、音感も大事ですけども、一応みんなが歩いている歩調を考えないということに、秩序を考へるという意味でしょう。

もう一つ紙屑箱のことですが、うちの近所に若い、とても頭のいい母親がいる。子どもに非常にやかましく紙を拾うことを教えている。しかしお母さんは全然拾わない。それでお母さんがやか

ましく、いつている時は拾うが、いない時は拾わない。母親がこわいからいうことをきくという子どもは多いが、母親がいなくても拾う子どもをしつけないといけないと思う。いつてもわかない年令には母親が拾うところを見せて教育する。母親が見ていてもいなくてもやつぱり紙屑は拾うものだ、ということから身につけてゆく、大きくなるにしたがつて、責任の裏付があるような自由でなければいけないということが自然に身につけてゆくのではないかと思う。

南野 日本人は大体表裏がある。性格に二重性があると思う。

たとえばPTAなどの会合で、非常に有意義な会合であつても、司会者は最後になると「非常に有意義な会合であつた」ということを必ずいう。会が終わつてからはほんとうのことがいえるのでなくて、自分の思っていることが、言葉と行為が一致したように、会の方向をもつてゆくようにしたいと思います。

石上 子どもの躾というのは、三才で人間形成をやるということといわれましたが、それを私もいたかつた。しかし親の權威でやるとおつしやつたが、親の權威というのがまたちよつと問題だと思ふ。子どもが三才じや納得させることはできないが、親自体にやはり社会性がなければ、ただ権力的に押しつけるというのは、荒井 明治以前のは全部切り捨てなければ新しいものになれないという感じがあつて、それから入つて西洋からのものも消化不良で、古いものは捨て、だからPTAにどれだけはつきり線をもたしていいか、親自身がフワフワしている。こういうことはきちつと教えないければならないという線が、おとなに通つていない。泊 家庭教育と学校教育のズレということがあつた。それが大衆に投げ出された時の市民性にもつたがりがあるということはわかる。

道徳という問題は考えるということを主体として実行にまでおりてゆくが、学校という場にはなかなかそういう実行の場はせまい。ですからそういう場を、お母さん方が認識されて、やはり家庭でそれと歩調を合わせてやつていただきたい。

それと、いまいわれたように古い秩序はいけないということをいいます。こし反省してみるべきではないか。これだけは教えておかなければという前提的なものと心理的なものをよく研究してやつてゆかなければいけないのではないかと、ということを非常に考えるのです。たとえば、自主性ということだけを考えておきますと、椅子の出し入れもできない、ドアのあけ方もできない女の子でありましたら、足でバツバツとやつてしまふ。基本的な躰というのは、お互にやつてゆかなければならない問題じゃないかということを感じております。

守田 子どもを充分に教育できない、力の足りない人もあると思うので、保育園などで道徳を教えていただくのが必要と思います。

藤田 また紙屑の話ですが、ある母親が一年生の女の子になかなかしつかりした躰をして自分の散らしたものを必ず片付けさせる。それでその子どもは、自分のしたことについては責任をもっているが、友達と落とした紙屑は拾わない。私が拾つてもほかの人が拾わなければかくさいいう。大衆の中の一人としてどうあるべきかということをお子どもに教えているつもりだが、ほかの人がついてこないで悩んでいらした。

磯村 非常に具体的な、保育所説から環境整備説が出ていますし、教養の問題も出ています。特に田中さんのようなお仕事をされていると、大衆の教養ということになると問題ありましようね。

田中 大衆といいますとたいへん意味が広いようですが、私の場合、下層階級の婦人の教養ですね。特に私、関心をもっているのは、働いている婦人の大半が教養が低いと、その場所はどうにたい麗的な場所になつてしまふ。

磯村 そこが問題ですね。その点では、特別オブザーバーの矯風会の桑野先生どのようににござんになつておられますか。

桑野 (無別オブザーバー日本キリスト教婦人矯風会) ほんとうは母親が氣をつけて躰をしますと、子どもはやがておとなになつていい家庭が構成できます。いい家庭の集まりにおいて、きれいな社会ができてゆきますから、みなさん足許から氣をつけてゆくのが一番だと考えるのです。

私も家庭一つで、自分だけで生活できない。必ず社会の一員ですからわれわれが犠牲になるということをいつも念頭に置いて、子どもの教育もそこから始めてゆきたい。

それから田中さんの問題ですが、そうしたバーの経営の中でのいろいろな問題を考えていらつしやるのは美しいお考えです。そのバーというものを今なくせといつてもなくなるものでもありませんので、それをよりよく、あなたさまが理想をもつてご商売の人の中に立つて美しくやり上げてゆくというお考えをもつていただくことはいいと思います。また私はふだんから固苦しい運動ばかりしておりますので、父親だけをお客にしないで、お母さん、子どもも一諸に、というご意見結構ですが、一諸に楽しむのは、そういうところに行かないでも、家で家族単位で楽しいことをしてもいい、映画を連んでもいいと思います。社会を美しく、家族の平和を考えるならば、それぞれに頭を働かせて、地域地域を美しく、住みよく、社会の公衆道徳を高めてゆきたいものです。紙屑ばかりでなく、時間を正しく、また乗りものに乗る時、他人に

迷惑をかけるような酒の飲み方をするな、公衆の前でいやな息を吐いたり、汚いものを散らさないようにしてください。これも一つの大衆道徳ではないかと考えますので、ちよつと申し上げました。

大江（特別会議員） さきほど小枝さんから話が出ましたが、人々が紙屑を落としたらどうするか、また交通道徳の問題で、東京で毎日子どもが死んでいるのは、その場にいたおとながどうして手をつないであげられないかということが大きな問題とします。人のお世話をやくだうことが大切と思う。私だつて、相手が不良じみた人ならやつぱりこわいから言葉をかけなかつたと思うが、お拾いなさいとよその人にもいうだけの熱意がないといけない。

もう一つ、私のそばで子どもがちよろちよろして、私が、危ないから向こうで遊びなさいというのと、「危なくないよ」という。私のほうは親切のつもりでいつても、その子が受入れるものを持つていないと逆にとつて、バツと足を出してしまふということが実際にあるのですが――。

難波 交通のことで非常に疑問をもつ。大阪の警視庁にも行つたりしたが、右側を歩きなさいと書いてあるところを左側を歩いている。そのとおり右側を歩けば人に突き当たる。そういうことを投書して、いつそ左にしたらどうかと警視庁にいつたことがある。そうしたらやつぱり先進国のルールがそうなっているから、とおつしやる。そのPRをもうすこししてもらわなければ、ただ書いてあるというだけでは――、

辻原 大江さんのお話の、子どもが道で遊んでいる問題はどこにもある。子どもがきかない場合にどうするかという時に、遊び場をつくることの運動して、つくつてもらいました。でも、多少喧

嘩になつても、そこにいたら必ずけがをするということがわかつていたら公園の安全な地帯に連れて行くということが私どもの努力だと思います。

それから先日子どもを連れて歩いていたら、交差点で赤信号でしたが全然車がこないの、はやく今の間に渡ろうという子どもが、お母さんだめだという。車がこなくても渡れないのだ、ということを知っていて、そうだ、これがいまの秩序でないかと感じたが、やつぱりそういう規律というものはどうしても守りぬかなければいけないというのが、交通道徳ばかりでなく、全道徳に通じるところ。

石井（特別サバーバー婦人代表） 私ども婦人団体は、子どもの仕合せと婦人の仕合せをあげて十六年間やつてまいりました。その中で母としての権利と労働者としての権利と市民としての権利がほんとうに守られなければ、婦人の仕合せも子どもの仕合せもないということをお訴えてきたのです。その中で市民としての権利というものとはなかなかわかりませんし、また義務がよくわからないのです。何とかして今年には市民の義務と権利の問題を学習しようとしておりましたところで、今日のようなお話が出てきて、さきほどドイツの例で、三つになる子どもにも小さい市民だからと教育しておられるというお話でした。ところが私たちは、あなたは市民だから、という教育はあまり受けてこなかつたように思います。そこにいろいろな問題も出ているのではないかとみなさんのお話を伺つていて考えました。そういう教育を、おそまきながら身につけてゆかなければならぬし、子どもたちにも権利と義務をよく身につけさせなければいけないということを考えたのです。

全体のお話を伺つておりまして、子どもに対するみなさま方の

お考え、ことに操縦法などはものすごく感じて聞いていたのですが、この制約した会合でこれだけ面白い話をされるなら、宿舎はどんなであろうかと、ご一諸に泊つてお話しすることができなかったのを残念に思います。その中で田中さんのお話の、下層社会の婦人をするようか、内職の問題、パートタイムの問題も出ておりますが、これは愛情だけでは解決のつかない大きな問題です。それは、国民の底辺のところをどうやってゆくかというはんとくに新しい秩序を政治の中に立てていただきたいし、経済の機構の中でも底辺の問題をどうするか考えていただきたい。そういうことを考えていただくにはどうしたらいいかという問題もここで討議をしていただきたいと思います。

磯村 最初にもちよつと申し上げましたような、石井さんのたたいまのご意見につきましては、最終の段階でいろいろかがいたいと思います。

休憩に入りますが、最初に市民性ということを出しましたが、憲法によるわれわれの生活の問題もありますが、非常に身近な問題で一つだけ。これはしめくくりの意味などはありませんが、私が印象的なのは、よく都市に公会堂というのがあります。公会堂というのは貸小屋ではない。ところが現在われわれの税金を使いながら、貸小屋化している。その貸小屋が一番モラルが悪い。ロンドンの市の公会堂に参りましたら、守衛が私に帽子をかぶることはできないといわれまして、なるほどこういうことはできてもいいのじやないか。どんなきつい規制をしましても、いかなる階層といえども、いかなる考え方といえども、禁煙とか時間を守るとか、あるいは帽子をぬぐうということは絶対的に守られていいのではないか。それはどんな労働団体の会合であろうと、婦人団体

の会合であろうと、平等にされていいと思う。そういう場合に、ことによつて市民性を獲得するイロハのイの字があると思ひます。

(休憩)

磯村 さきほどお話の中にありましたが、たとえば大衆の社会でいろいろな場をもつ——レクリエーションをかねますが、そういう生活をするよりも家庭の中で、というようなご計画があるでしょう。現在の都市の社会ですとテレビもありますし、新聞も週聞誌も目につきます。農村と都市のちがいは、都市はそういう問題が家庭外にあるのです。つまりいわゆる大衆の場において、われわれは映画を見、テレビに接し、マスコミに接する。しかもそれが非常に大きな量となつていくところの問題があると思ひます。

農村の場合では、ラジオとかテレビの影響を受けてもそこですんでしまひます。東京においてはそれが現実の場にすぐつながる大きな都会において、現実の社会においてそれがほんとうかどうかをテストすることができる社会があるところに問題があるが、これを大衆社会の中における一つのマスコミの問題。こういうふうにひとつ考えてみたい。

たとえば学校で、左側を行きなさいということ言われても、難波さんのお話じやないが、大衆の社会に出て右側を行つていゝる人がある。いつたいこれをどこでどうするかということが、一つの交通だけを取り上げてみても混乱をきたしているのではない。こういうマスコミの混乱の中で、われわれの生活の秩序あるいは問題は——主体性といつてもいいと思ひますが、どういふ方法でどういふふうに見えようかということもあると思ひます。

自由に討論をはじめていただきたいと思いますが、そういう意味で交通の問題から改めて入って結構です。

もう一度申し上げますと、テレビはいかにも真実を伝えるようでありますが、テレビはやっぱり実像じゃない。虚像を伝えている。われわれは野球をテレビで見ている、やっぱり現場に行きたい。それがフイクションの映画やドラマになりますと、画面であつても真実に近くなる。するとそれを行動に移すことが都会では容易である。そこに都市生活の問題があると思う。私はここで主体性という言葉を使いましたが、その主体性が得られるかというところでございますが。

阿部 私の町は小さくてしかも私の周辺は公園がたくさんある静かなところですが、人が右を歩いて車は左を行くから、右を歩いても自転車がかかるのでおつかなくて、どうしようかと迷うことがあります。何十年ぶりで東京に出てきて、手をつないでいただいて、何度か道を横断したが、やはり信号だけで子どもが動けるようになるということとはできないと思います。また教室で文字として学習しても足りないと思う。やっぱり現場で度重なる訓練を受けることが大事だと思います。

磯村 それはやっぱりマスコミの影響によつて、現実の場でテストしようということと同じになると思いますが、そういうことでどうぞ遠慮なく発言してください。

岩田 マスコミと主体性ということですが、婦人会議になりましたらとたんに私のところにマスコミの方がいらつしやるのです。職業が珍らしいということです。私自身としては、婦人の職業として自然だと思ふので、おことわりしたが、名前だけで飛びついてくる。そのマスコミの扱い方はこちらが主体性をもつていてもそ

れに携わる方の認識というか、良識というものが大切じゃないかと思う。

全国婦人会議という内容をあげる前に、そこにもものめずらしさをあげる。あるいは私がいろいろなことを話して、それに誰かがとびつくような表題を出すとか、そういう扱い方にしてゆかれるわけですが、そうしますとそれを流された一般の人は、私なり田中さんをごそんじない人は、とびつくような記事で書かれたものでしか判断できないわけです。

磯村 よくわかりますね。ですから子どもの問題は、そういうマスコミがわれわれの生活をほんとうじやない逆な秩序に置いているのじやないか、そこをもうすこし突いていただくと、いまのような問題がなおほつきりわかんと思います。

石上 マスコミの問題に関して、全く違つた二つの具体例をあげたい。

一つは、たいへん物価高になつたが、多くの場合、公共的な料金が上がってくるということが最初に問題になる。公共料金のトップは三年前の新聞代の値上です。三百三十円が三百九十円に上がった。こういう運賃とか新聞代が上がれば、あとのものが引続いて上がってくる。こういう目に見えているところから値下運動をやつた、ところが一応資料を、団体を通じて流しましたが、それがたまたま新聞販売店の手に入り、もちろん販売店と新聞社は別個の企業とわかつていますが、販売店の人が五、六人うちに押し寄せまして脅迫をされまして、以後こういう運動をしないと、主婦たちが新聞代の値下運動をやつているということが新聞に報道されたかという、一言半句も報道されない。NHKは、相見互

いだから流さないという。

一方、困ったことは、配達人いじめになる。お金を払わない運動をやると、配達の人が立替払をするということになつて、その日ぐらしの生活権を脅やかすということになつた。そういうことをやっていると、全国的に流れてくればある程度成功したかもしれないが、報道しないから葬り去られた。

反対に、マスコミを利用して成功した例がある。最近いわゆる工業の近代化ということがすごく叫ばれて——これは公害の問題ですが。お茶の工場近代化設備資金は工業振興のために全然利子なしに借りられるので、大きなオートメの機械を入れる。工場が不完全なので騒音がたいへんで、夜機械が休んでいる時にもガタガタ音がする錯覚を起こす。

また、清涼飲料水をつくる会社で、地下七〇メートル以上掘らなければいけないが、いかげんのところで地下水を吸い上げるので、そのわき水で生活している人が生活上困るという公害が出てきた。その場合に、事業主側と交渉するが、たいていの場合大きい企業は少ないので、それに対する防音壁をつくるとか、水が出るように補償金を出させるというとは不可能です。では一般の住民はどうしたかというと、迷惑を蒙っている人が結束して署名をとつて市の苦情係に陳情したが、それだけでは弱い。こんどは新聞社とかNHKにお願いして、ローカル放送でうんと流した。すると工場側は、新聞に書かれちゃつたから仕方がないという形で補償金を出した。だからマスコミというのはこちらの利用の仕方というか、自分のほうで主体性をもつて臨めばある時には助けをもらえろという経験をもちました。

磯村 いまの問題は、その意味においてマスコミに対する主体性と

いう言葉が一応出たのですが、同時にもう一つあります。

そういう大衆社会の中においての、いまのはマスコミと、主体性という問題、まず家庭の中にもあると思う。子どもにどういうテレビを見せるとか、さきほど阿部さんが苦勞なやつて、マスコミを理解なすつて、主体性をもつたから安心して子どもにテレビやラジオを開放したと理解してよろしうございますか。

阿部 城下町で、ほんとうに封建的な消極的な町で、その代表が私だと、ある方がいわれたくらい、庄内の最も代表的生活の低いほうです。主人は、どんなものでも、子どもが見ることによつて聞くことによつて全結果を解釈できるような子どもにしていかなければいけない。私はその一言によつてしてみたのです。

磯村 けれども前には阿部さんは悪い週刊誌破いちやう、ラジオのスイッチを切つてしまふなど一生懸命やられたが、ご主人のそういうやり方によつてスパツと開放されて、あとどうしたのでしょうか。

阿部 まだ高校二年と中学二年の女の子ですし、むずかしいことはしませんが、家族会議などで、リクリエーションをしながら語り合つてゐるので……。

磯村 テレビを見てもラジオを聞いてもその話題が家庭の中で話題になる。絶対的な判断はできないと思うが、なるほどこれはこうだということがわかればそのままのラジオ、テレビのイメージは、そのお嬢さんにそのままには伝わらないという、その話合いができるということによつて判断の基準ができるわけですね。

阿部 たとえばこういうことがあつた。今度は柏戸が出てきたから(柏戸がうちの近所なので)、テレビ買つてあげようか、といったら、子どもが何のためらいもなく、テレビいらぬいよ、という

どうしてとよくと、見る暇がないから、という。事実大きな子ども、運動選手させられたり、学校の役をもっているから、七時くらいにならないと帰らない。下の子も同様なので、夕食して勉強しようと思うとほんとうにかわいそうなほど時間がないのです。ああそうかそうか、いいました。主人は、そのうちに安くなるから買つてやるよといいましたが、テレビいらなからピアノ買つてくれという。ピアノとテレビとケタ違いだな、と主人はいいましたが考えて協議して、ピアノを買つてあげた。子どもはいま楽しんでいます。

今年の一月には成人式の日テレビを見た。どれを見たかという、もしも二十代にかえつたら、というのです。女の人は二十代にかえつたらいま流行の結婚しようと思う。男の人は四十過ぎのまじめなサラリーマンでした。高校時代に野球選手だったので、野球選手になつたら金がたくさん入る。しかしそれがどつちも二十代にかえつたら、という理想を抱いているが、現実のほんとうの気持ちから離れない二十代を想像するからどつちも失敗した。そういうことで私の古さもわかつたので……

磯村 お話の中で大事なことは、テレビをごろんになつておうちで話していらつしやることですね。

小枝 マスコミの暴力は、家庭の中に免疫があれば防止できると思う。免疫をいかにしてつくるかというと、話合いが必要だと思う。学校防送を子どもは学校で、親は教育放送をうちで聞くのに専念した。ところが学校のほうでテレビの設備が貧弱なので、夏休には子どもと一諸に教育テレビのほうを見て話し合い、そのあとに三つの歌でも、のどじまんでも一諸に見て、批判し合います。だからマスコミをあまり怖れないで、話し合うのがいいと思います。

辻原 いまの阿部さんのように、テレビを中心になつて話し合うのはとてもいいことですが、民間テレビでは、しあわせはここに、といつて、電気洗濯機かなんか宣伝して、冷蔵庫買わないことにはしあわせでないということ、うちの消費生活を念頭に置かないで買つてしまふ。あとで家庭経済が狂つてきて困るという現象秩序ができないためにそういうことが多いと思う。

滋賀県に鮫ヶ井というところがあつて、その水は非常に冷たくて、冷蔵庫なんか使う必要がないところなのに、戸ごとにみな電気冷蔵庫を買つてしまつた。よく考えてみたら、水を使えば全然冷蔵庫が要らなかつた。消費生活に関連しますが、そういうPR功勢に負けてはいけないという心構えをつくらなければと思う磯村 そういう家庭の中のマスコミの影響という問題が一つ出ておきます。それから大衆社会におけるマスコミの影響、どちらでも……

難波 民間テレビである証券会社が、マネー、マネーというのです。ああお金がほしいなと、あんなの聞くと、いやになりますね。もうこままで拝金主義になつたのか、という気がして情ない氣もします。広告の自由でしようからある程度どうすることもできないかもしれません。

磯村 いまの難波さんのお話は、かなりマスコミのオーバーなあり方についての問題でしようね。もうすこしみなさんへの身辺の、そういう面での問題を、

荒井 これも広告宣伝に関係するのですが、たとえば洗濯でも、これを使つたらバイキンがとれて、野菜でもこんなにきれいになる、という。一方それを使うと身体に影響があるのだという。どつちをとつていいか、二つの論が出てくるが、ああいう場合の正

しい判断もマスコミがちゃんと教えてくれるべきじゃないかと思う。

磯村 そこに公共放送などの大きな役割が出てきますが、そういう問題について主体性をどう考えるかということですが。

難波 私は新聞は社会の公器であると思う。だから新聞記者とか編集の人にはある程度の尊敬をもっている。にもかかわらず、新聞は株式会社です。だから利潤追求ということで、物価の値上と同じ時にペースを上げなければならないということがありましようが、やはり新聞は社会の公器で、新聞を読むことによつてある程度知識を向上させ国際情勢も知る、その意味での非常に重要性があると思う。公器なら公器として、もうすこし社会での規準があつてもいいと思います。利潤追求しているから大きな広告をする。それについて相当な名士が、お上手な宣伝をしている。新聞が株式会社でなければ仕方がないでしょうが、ソヴィエトの「イスヴェスチヤ」とか「赤い星」のような機関紙になつてくれといわないが、何かそこにもつと知性の高い何らかのものがほしい、たとえば文部省かどこか知りませんが、そういうところでなにか——、磯村 たとえばといわれましたからいいのですが、すぐ文部省という、かなり特殊な形になります。

難波 やつぱりそれは世論を起さなければならぬが、世論を起すというほど気長なことではない。私の人生は終わつてしましますから。

阿部 自分の家ではテレビはまだ買えないと思つたが、学校に行くとき友だちと話にならないから買つてくれと泣きつかれて買つた、という話はたくさん聞いていますが、子どもに泣きつかれて洗濯機を買つたとかステレオ買つたという話は聞いていません。

ステレオや電気洗濯機がほしくなるのは見得もあると思う。生活状態から必要に迫られて当然求める電気冷蔵庫はそれでいいと思うが、それでなしに、あれば便利だとか、あそここの家でも買つたからというから悪いですね。私は兄弟が六人もあつて貧しい中に育つたが、その時は今のようにおいしいケーキを食べたいと思わなかつた。人から与えられるおやつを満足して食べた。だから、あれもこれもという親の見得が、子供に災いしているのではないかと思われるのです。

荒井 この間ある会議で、一人の大学生が新聞というものは現実を放送してないのじゃないかということをいいましたら、じやあ具體的にいつてくださーいという質問でした。その学生がデモンストレーションをやりましたら、デモの光景がその日の新聞に伝えられた。ところが、実状と違う。自分の見たものをなぜ新聞に取り上げてくれないかといつたら、あなたの見た真実はどういうものかと逆につかれましたが、青年のいつたこともわかるし、それに対する回答も、見解の相違ということはおわかりますが、私も中年は青年期に戦争戦争ということで、真実を訴えられない。現在もこの真にかくされているものがあるのじゃないかという懐疑的なものが残っています。その裏にあるものを知りたいなという気持ちがあり、現在の新聞からその足りなさを感じます。

石上 荒井さんと全く同感です。特に安保斗争についていろいろなものを読んだり聞いたりしますと、ずいぶんそのかげにいろいろ

なことが流れています。どこまでが真実かということをごく簡単に。ですから一つの新聞には絶対頼らない。二つ三つの新聞を見ると、取り上げ方が違う。マスコミに対する不信感には絶対にあります。

沢村 マスコミに対する不信感には私にもありますが、利用する面は大いに利用しようと思ひラジオの外国語講座などは大いに利用しています。

新聞、週刊誌、雑誌等から広くニュースを知ることができるといふことは、いい面ですが、いろいろな捉え方をしているの、何が真実かわからなくなる。それで腹立たしくなりますが、自分がマスコミの外に出て、マスコミの流れというものと、その真にある社会の流れ、こういうふうについているのだな、ということをする自分なりに勉強するような態度にしています。

磯村 外に出るといふことはどういふことでしょうか。言葉はやさしいが……。

沢村 無関心とはちがつて、この新聞はこういう取り上げ方をしているのだな、これはこういう行き方だな、というふうに、客観的に見るということです。その中から一つのものを掴み取ろうと思つています。

磯村 それは沢村さんお一人の判断ですか、あるいはどなたかと一緒に？

それじゃ、そういうマスコミの女性としての解決の方法を、夫との話し合いで、また婦人学級に出るとか。

沢村 今の段階では、ただ家庭にあつて夫と二人でそういう態度をとつていただけです。

梅田 (特別会議員) いま沢村さんがおつしやつたのは批判的に、という態度と思

います。批判精神を追究する心をいつまでも失わなければ、と思つていますが。

小枝 頭から不信してはいませんが三面記事は別として、国際問題などはイデオロギーの違いで、新聞を見ます角度が、掘り下げ方が違つてきますし、だから二つを見比べると、どれがほんとうかわからなくなる。その時は私たちのグループにもつていつて、大いに話し合います。

それからNHKの婦人学級は一つの問題提起の場だと思ひます。その問題を受取つて、どのように展開してゆくか、掘り下げていくかということが、婦人学級の学習のグループだと思ひます。イデオロギーの違つた見方と、今の日本に通用するような見方を、必ず二つ並べて判断します。

磯村 イデオロギーが違うといひますと、たとえばどういう新聞ですか。

小枝 社会主義的思想の新聞と普通の新聞です。

磯村 普通の婦人学級と、NHKのやる婦人学級の違いがあると思ひます。NHKがやる場合にはマスコミを流している。多かれ少なかれ、それにつながつた学習をやる。ところが普通の婦人学級といふのは必ずしも直接そういうものにつながらない。特に一つの都市の婦人学級の、あるものの中には違つたものがあると思う。その違いをどう理解されますか。

小枝 先生のおつしやる婦人学級というのは、たとえば市とか何から補助金をもらつている婦人学級でしょうか。

磯村 片つ方はマスコミのソースを自分がおつしている。それが普通の婦人学級、そうじゃない場合では必ずしもマスコミの影響ばかりでなくやる婦人学級もあると思ひます。これは非常に違うと思う。

ここが問題だと思う。これは一つの都市的な問題ですが、どうやらならないですか。

辻原 N.H.K.的な婦人学級のようなつもりは全然ない。地区の婦人とのつながりのためにこういうのを利用しているので、大衆的なものです。さつき、婦人会と地区の婦人との結びつきのためにこの婦人学級に入るといいましたが、婦人会の中にN.H.K.のをもち込んでやっている。

そういう意味でもう一つの、先生のおつしやる地域の婦人学級というのは、私たちが自主的にやっているもので、一つの目標をもっている。たとえば婦人公論なら婦人公論を中心に、衛生の問題なら衛生の会という何かの目標がある。婦人たちが共に手をつないで、すこしでも前進しようと思えば、地区的に結び合う集いに入っていけばもつともつと高まるでしょうから。

そのためにはN.H.K.はいろいろの講師を持っているのでお話を伺つて、豊かなものを心にもつという集いをやっているのですが……。

小枝 N.H.K.婦人学級の数が非常に多く、一月に一度教養講座をもっている。勉強をしようという意欲のある婦人たちを相手に地域に浸透するには最もいいと思う。

磯村 いまこの問題を出したのは、最初に出した、マスコミによる影響を現実の生活とどう結びつけるかということです。その意味においては、N.H.K.は自分で放送を流している。それについてのグループをつくつて具体的な話し合いをするというのは、たいへん効果のあるものと思う。そういうものと、それ以外の自主的にやっているものの場合には、極端なことをいうと、もちろんそこにリーダーがあるかもしれませんが、おしやべりになつてしま

うおそれがある。また官庁がやるとなにか決められたものでやつしませう。

いろいろなものがあるが、マスコミ等の影響ということになると、N.H.K.の婦人学級だけがいいということではないがそういう形が、N.H.K.ばかりに頼らないで、いわゆる主体性をもつための婦人のあり方として、考えられるものがあるのじやないかと考えてこの課題を出したのです。そういう意味にとつていただきたいのです。あり方としては面白い形で、社会的にも効果があると思う。自分の流したもののへの一応の反省の資料にもなり、一つのデイスカッションの機会をもつという意味において、興味がある。

岩田 マスコミへの批判精神をもつということは大人にはできるが、子どもたちに対してはどうするか大人には理解できるが子どもには理解できない、批判もできないものを悪も善もいつしよくたにして……。

阿部 婦人学級を広めましようとか、集まつて見ましようという呼びかけでなしに、いわゆる自主的な婦人学級が自然に生まれてることが大切ですね。そして自分だけで、婦人学級にいてよかつたというふうにしないで、集まりに行つたらこういうことがあつた話しをするので家族も喜んで出すようになった。子どもたちも、主人も、お母さんどんなこと？ときくようになつて。

磯村 現在のような都市生活は住居と職場と学校と大衆というふうにはばらばらになりますから、況んやその上にマスコミがもう一つばらばらにすると全然ばらばらになります。それをつないでいく能力が、阿部さんや岩田さんのおつしやつたことになる。

親がテレビへの主体性をもつて、これがいけないということが、なかなか現実の問題としていえないが、そこはやはり努力をして

いかなければいけないと思う。

岩田 受け取る側でもそうですが、もう一歩進んで、こういうものを出すといけないということまで婦人がタッチできないか。

磯村 できないことはないと思う。そういう批判はこういう集会とか、それこそ団体の力ですべきではないか。婦人学級でも、あるいはどの婦人会でも取り上げられてもよろしい。そういう意味ではいろいろな団体の力でいくべきではないかと思う。

藤田 子どもたちがどんなふうに関心するかというと、学校から

「混血児」という映画を見に行つた。サンダースホームのことが出て、完全に商業映画だつた。帰つてきて、日本に基地がたくさんあるから混血児ができて社会が混乱する、早くアメリカが帰つてくれたらいい、と四年生ですが、子どもなりに批判してきまして。アドバイズのために話し合つたのですが……。

磯村 それではこのへんで傍聴者の方からご意見が出ておりますので、申し上げます。

第一は、この会議の後始末、あるいは会議員のその後についてききたい、あるいはこれからの抱負について、ということ。会議員の、その後の動向はここにおられ大江さんや梅田さんの、その後のご活動からうかがえると思います。これからの抱負についてとはたとえば、盛り上がった話を政治の中に、あるいは社会の秩序のいろいろな中に注入したことがあるかということですが、ご質問の方はどうぞ大江さんと梅田さんからお聞き取りください。それから他のご質問ではPTA、婦人会に出たかららないというのは都市のみでなく、地方でもすこく集りが悪くなつているので、その原因をもうすこし追及すべきであるということですがいかがでしょう。

荒木 私は商店の場合ですが、商店の主婦では時間がないということとが一番の大きな原因です。

もう一つは、われわれが出なくても、もう決められたことではないかという観念的なものがある。結局PTA役員が毎年新しく選出されるが、馴れた者に、という方向に向かつていて、出る人はきまつているという現象でし、その人たちが行くともうでき上がったものを流すから、いまだにいつても仕方ないという諦めがあると思います。PTAの運営への大きな批判ですが。

磯村 それからマスコミの問題についての質問があります。子どもにマスコミをいかに理解させ指導していくかということは、ある程度出ておりますが、もうすこしお話をどうでしょう。

難波 テレビで、ある時間はどのダイヤル回しても西部劇が出る。ブームといいますが百貨店などでも相当高価なビストルを売っている。あまり好ましいことではないと思いますが、

荒井 これは問題だと思う。私のいいたいことも女性的な立場からのことで、ビストルとか刀を持つて遊ぶというのは、女にはわかない、男の本質的なものがある。ガンブームの前は刀じやないですか？現在の大人が少年期、幼年期にはおそろく木の刀を持つてチャンバラごつこをやつていいるのじやないか。それがガンに對つたので、流れているものは同じだと思ふ。男のそういう斗争的精神、ブームでなくて、それ以前の何かがあるのではないか。

石上 ガンの問題ですが、斗争本能は認めますが、木太刀でチャンバラやつていいるのと、いまの非常に高価な、たとえばデパートにはガンコーナーができて、そこでは百円二百円のものより千円、二千円のもので売れる。生命に危険を及ぼすものならある程度政治的に規制しなければならないが。

磯村 政治的に規制したならば、ということですが、たしかに意見としてはそのとおりですが、それをすぐ政治にもつてゆく前の段階は全然ないものでしょうか。

たとえば、私がボストンにおりました時に、ある本屋で悪い本を売っている。婦人会が、この本屋では不良文化財を売っているというビラをぶら下げて行ったり来たりするので、その本屋は弱っている。そういうことのいい悪いは別問題として、すぐ政治へいくと、政治が左か右に分れて取っ付きにくいことがあるので、もちろん政治にもつてゆくのは大事ですが、その前に何かありませんか。

石上 いわゆるピンク、ムード、ショートの、あくどい看板が出ていて、そのことに対しては、地域婦人会だけでなく、市内の婦人会の人が集まつて、本社にかけ合いに行き、ヌード、ショーを見て実態調査をやつて、やめてもらいましたが、ガンの問題はちつとやそつとでゆかないので困っています。

阿部 テレビがはやらない前はPTAで、漫画本の取扱いで問題が出ました。今はテレビの問題で悩んでいます。テレビの見せ方——テレビ憲法というものを各自がつくるべきで、あれもやめてくれ、これもやめてくれ、ではやつぱりいけないのじやないかと私は考えるのです。

難波 そういうふうになれば結構ですが、子どもが勝手にダイヤルを回すと、やつぱりチャンバラがガンに変わった男性本能を認めます、それだけで片付けたらたいへん。簡単には片付けられないなものがある。とさつきおつしやいましたが、私もそう思う。

磯村 実、時間を守ることが再三出ましたので、あと三十分をこういうふうに運びたいと思います。

みなさん方いままで、今度書かれた所感文に捉われないで自由な討議をなさいましたが、最後に昨日、今日議論しましたことに関連して、お書きになつた所感文について何か加えたいことのある方は、ご発言をいただきたいと思う。そのあとで特別オブザーバーの四人の方にご感想をうかがい、最後に私が感想を申し上げるということにしたいと思います。

寺田 私の力で考えても解決できなかった問題ですので、解決できないまでもみなさま方に何かの暗示でもいただけたらと思います。それは、私どもの年代になりますと、老後の保証ということが切実な問題になつております。精神的な面ももちろん必要ですが、それ以上の保証が最も必要と思います。保証がある方は何の心配もないと思うが、ほとんどの方は、保証がまだ充分ないのじやないか。そのために先の問題の心配が多いのではないかと思います。たいていの人は、養老院などに行つてしまふはかないのじやないですか。それではあまり淋しい。養老院に入る一歩手前の生活でもできればと思います。

沢村 夫婦の形態について、私の家計はガラス張りです、と昨日お話ししましたが、その時夫の小づかいを自由にさせるとか、しほるなどか、夫の小づかいだけについて四人の方の意見が出ました。それについて私の気持をお話したいと思っています。私のいうガラス張りというのは、家計簿の状態を夫も理解して、充分に知つてもらいたいということです。家計簿を二人が管理しているということ、小づかいをそれぞれ自由に使うことは違います。そこまでガリガリやるという意味ではありませんのでつけ加えます。

田中 職業がバーの経営なので、それをいかにもつていくべきかということを書きましたが、みなさんに夫婦の関係とか経済問題と

か、いろいろないいお話を聞かせていただき嬉風会の方からのご意見もお聞きして考えさせられました。

バーなどがないということは理想郷です。でも今の社会機構においては無理なことですから私一人でも、バーで資本をつくつて、レストランに切りかえてゆくことが必要ではないかと感じました。難波 私も老後のことでちよつと交つたことを書いたのですが、日本の社会保障はあの程度です。一番低いクラスの生活者のための養老院はいくつかある。また十万円保証金を積むという養老院もあるが、中間層のものが無い。それを強いて養老院とはいいたくない。

大阪では老人クラブがあちこちにあるが、もうすこし改造して一泊でも二泊でも一週間でも泊まれるようにして嫁、姑の息抜きをする場がほしいということ提案する。といつても、一泊七百円も取られるのは困るから、国と地方と本人と三者で二百円ずつ出してやれば、むずかしいことではないと思います。婦人区会議員に話したらできるだろうということです。そういうことを他の地方も考えたらと思います。

木佐貫 私は集団就職者の問題を取り上げて書きました。みなさんはグループを各地で持つていらつしやいますが、それを広げて、たとえば東京と鹿児島グループと連絡がとれるような行き方をしていたきたい。子どもは、実情を知らずに遠方から上京してくる。その場合、他人が手をつないでたら、実情を調べてほしいとか役に立つと思う。自分のグループだけでかたまつてしまわなくて、他の地方とも連絡するようにひろげるといふあり方にもつてきたいと思う。

南野 私は、あくまで余暇の利用という形で始めたが、やつているうちに職業としたいという意識が出てきた。職業とするなら結婚

しない、男のお友達でもつという気持ちで職業化してもいいがやはり自分が結婚という道に飛び込んだ以上は子どもを育てるという責任上から、職業化しないで、余暇善用という線に止めなければならぬと感じました。

荒井 商店の主婦はあまりにも労働過重になつています。そのしわ寄せが子どもに及んで育児、教育がマイナスになつていく。ことに家庭教育がマイナスになつていく。そういうこととかみ合わせて、地域の婦人会員、中年婦人、一応PTAで活躍なさつた方などお子さんの卒業後エネルギーがある方、また保健婦さんとか幼児問題に経験のある奥さん方が、個人でもいいが、商店の子どもの一人二人でもお引取りくださつて、半職業的にやつていただきたいのです。保育所ができるできないという問題以前の問題として取り上げていただきたいと思います。

磯村 それではさきほどの申し合わせにしまして、特別オブザーバーの方からご発言いただきます。

飯山(特別オブザーバー 太学生) 特感を感じたことは、婦人の発言力が、私的にしろ公的にしろ強まつてきたことが感じられた。

まあある一面では、ちよつと統計とつてみたが発言者がきまつた人にかたまつてしまつていく。午後の話合ひの中で一人が何回発言したか調べてみたところ、最高は十回ですが、最低は一回きりです。そういう、いろいろな問題をもちながら話されたかつたということ。

それから、たとえばマスコミの問題が非常に大きく取り上げられたが、どう考えても社会的に大きな部分を占めているのに、これを率直に受け取つていない。批判的に受け取つていられるとい

うことを感じた。批判的に受け取つてばかりいては、これからの進歩はない。

それから男女学生のこと、賃金差とか労働条件の違いとか、そういう問題まで含めて考えたほうがよかつたのではないか。特に都会における労働者、そこに男子と女子の差は生活自体にも現われてくるが、その点討論されなかつたのを残念に思う。

磯村 私は一回の発言の方も十回の発言の方も質的に同じように考えております。ここから拝見して、一回の方も、何回かうなづいておられますから、自由に発言いただいたいと思います。

石井（特別オブザーバー 婦人民主クラブ） 私は今回で三回出たわけです。今年の問題が一番抽象的でむずかしいと思い、私自身もどういうことが証言ができるかと思つて出てきたが、核心を捉えて話し合いをなさつたことに敬意を表します。

ご発言もたいへんお上手ですが、昨日伺つておりますと、かゆいところに手が届かないように心配だつたのです。このまま進むとどうなるかと思ひましたら、今日は核心にふれていらつしやいました。しかしやつぱり、どうしても自分たちの力でできないものがある。その点が、お話し合いの中でちよつと足りないように思うのですが、みなさま方のお考えはそこを避けていらつしやるのでなくて、そこに充分お考えをもちながら、お話を進めていらつしやると思ひましたので、私も感心しながら聞いていた。

私は、働く婦人の地域集会の世話、また近畿で開かれる母親大会の世話をいたしますが、そこで話されることはまた違ひまして、全部政治にぶつける強い発言も出る。しかしここにおいての方と、悩みは同じように思われます。ですからそこをどうしていつたらいいか、みんなが手をつないでこの問題を解決して、悩みを切り

ぬけていかなければいけないと考えております。

それから、こちらのお集まりにも、底辺の方が出ていらつしやらない。そういう方がお集りいただける機会を、お役所でも考えていただいて、こんど違つた形で底辺の方のお集まりでももつていただけるようになったらどんなによからうと思ひます。

磯村 適当な機会にそういうことがもてましたらまことに結構と思ひます。また今日のお話し合いがそう発展できるということであればたいへん結構と思ひます。

松浦（特別オブザーバー 日本婦人有権者同盟） 初めて参加させていただきました。一昨年から有権者同盟から一人ずつ参加させていただいておりましたが、私は口べたなのでこんなところに出しても何も申し上げることもできないからと申したのですが。ほんとうに皆さま方よく勉強なさつていらつしやるのに敬服したのでございます。感じましたことは、今石井先生もおつしやいましたように皆さん方がお一人お一人の自覚のもとに解決できることと、又手をつないで社会に目を向けなければ解決できないこと、そして社会を通じ、事を通じ政治に結ばなければならぬ、こういう三つがあると感じたのですが、自分の会の宣伝になります、やはりわれわれの一票の行使をどんなに有効に使うかということを勉強している会でございます。すぐ参議員の選挙も始まりますが、保育園の問題など政見の中にもなされていると思ひますので、よく政見を見きわめてほんとうに良い一票を行使なさいますようお願いいたします。

桑野（特別オブザーバー 日本キリスト教婦人矯風会） さすがに選ばれた方々のお集まりで立派な意見やいろいろな感想をお述べになつて、感心させられました。せつかくこういふ催しをなさるのであるから、皆さんのご意

見がほんとうに実行に移されなければ残念です。ただ個人が発言して大変進んだのだというだけで終わってしまうのでは何の意義もないことです。一人で解決できることは一人で、又協力の力で行わなければならないことはただいまは世論の政治でございいますから組んで、政治で取り扱われるようになさつたらどうかと思います。

前回は、青少年の問題、マスコミの問題で悪いのをマスコミでおさえることができないかというお話が出ておりましたが、これは自分一人でもできると思う。私は始終、これは子どもに悪いなと思うと放送局に電話をかけて、こういう場面でこういういやなことがあつたから気をつけていただきたいといひますと、何時頃、どういふところかと聞いてくれます。こちらから指摘なされば放送局でも考えられると思います。いいことと思えば、自分一人でも社会を清めていくことが、婦人に大切な仕事としますので、勇気を出していただけたらと思います。

磯村 私がおまとめする時間がなくなりましたが、ほかの部会との関連がありましたので、いささか、都市という枠をつけすぎたようですがこれはこういう仕組みだったのでお許しいただきたい。

しかしさきほどもどなたかから発言ありましたし、ただいま特別オブザーバーの方からお話がありました、ここでこういう問題を話し合いました、これをお互の生活の中で反省していくために一番大事なことは、こういう問題が決してひと事ではないといふこと。所感文も書かれ、いろいろ議論もしましたが、その結果がいつたいうふうになつたかといふことを、夜にでもご反省いただきたい。作文書いた時と今と、すこしでも変つたという発見がありましたら結構です。

その発見の方向は社会変動の中にいる人として発見していただ

きたい。こういう機会も恵まれない人の生活の中にこういう話し合いが通ずるのか通じないのかといふことをもう一回反省していただきたい。社会は、決してわれわれだけが電気洗濯機と一諸に動いているというわけにいかない、末だに手で洗っている人たちとともにこの変動の中でどういふふうに一諸に行くかといふことを考えていただきたいのです。

最後に——われわれの生活を考えますと、誰しもが仕合せを感じている。仕合せを見失つてはいけないと思う。けれどもそれは自分だけの仕合せでなく、手をつなぐ仕合せです。手をつなぐためには、具体的には、家庭が手をつなぐ、あるいは団体が手をつなぐ。しかし日本の国が手をつなぐうえにおきましてはわれわれの代表者を選ぶ場合に、どういふふうに手をつないでいくかという判断も非常に大事だと思います。そういう意味でわれわれの仕合せを規定しておりますほんとうのことをいへば憲法です。われわれの生活の保証をしている憲法で、今日話したことがどうなるかといふことをほんとうは議論したかつたが、残念ながらできませんので、総会の時なり、あるいはどなたかが御発言の時にて考えてゆかなければならないと思います。

それではちやうど時間ですからこれで閉会といたします。

(閉会)

第二部会

(農村生活の問題)

會議員

北海道 布田 敦子

(助産婦
生活改良普及員)

宮城 岩瀬ともえ

(無職)

福島 多田美美子

(無職)

茨城 岩瀬テル

(無職)

栃木 田崎裕子

(無職)

千葉 田村文子

(農業)

新潟 石川 トシ

(農業)

富山 広瀬京子

(無職)

石川 森田昌子

(無職)

山梨 里吉寿満子

(農業)

岐阜 木沢 要

(無職)

奈良 森 智恵子

(無職)

広島 坂本 雪子

(農業)

香川 淀谷 光枝

(無職)

鹿児島 柳田 洋子

(公務員)

リーダー 松原 治郎

(東京学芸大学助教授)

特別会議 佐藤 寿晃

(大分・農業・第二回會議員)

員 関 みさ子

(長野・農業・第五回會議員)

特別オブ 芋生カズエ

(和歌山・農業・第七回會議員)

ザーバー 加勢 良江

(全国漁協婦人部連絡協議会)

新沼 静

(全国農協婦人組織協議会)

山崎ミサオ

(日本青年団協議会)

富永 登

(農業)

第一日目 四月十一日 一三・三〇一七・〇〇

松原 農村の問題、特に農村婦人の問題は、今いちばん、日本の婦人問題の中で大きな問題じゃないかと考えられます。それだけに問題も非常に深いし、また範囲も非常に広いと思います。そこでみなさんの話し合いにある程度のまとまりを持たせるためには、話し合いの順序をきめておいた方がいいのじゃないかと思ひ、大きく三つに分けてみました。まず、農村生活の変貌についてあげられます。特に農家経済の変化が非常に大きく動いていて、その中でいちばんしわ寄せを受けているのが婦人たちではないかという事です。そう言つた点を考えまして、先ず農家の生活の変化というものを出し合つて、次いでその生活の変化の中で、婦人がどういふ地位におかれているのか、あるいはどういふ問題を婦人がかかえているのかというように話を話し合つてみたいと思ひます。二番目の問題として、そういう大きな変化に見合つた新しい家庭生活を確立するためにはどうしたらいいかということを考えてみたいと思ひます。家庭生活の中の問題、ここがいちばん中心になるかと思ひますが、その中にたとえば、労働上の婦人の地位の問題、それから家事労働過重からくる教養や育児などへのしわよせの問題、また嫁と姑の問題、あるいは若い人たちが農業を継いでくれるか、農家に嫁がこないというのはなぜなのだろうか、あるいは老後の生活を果たして今の若い人たちがみてくれるのだろうか、そういうものを含む世代の問題、特に若い人たちの問題などを含めた、新しい変化に應じた家庭生活について考えてみたいと思ひます。三番目の点は、そういう変貌にもかかわらず、他方に因習や世間体の問題が相変わらず問題になつていますが、それは婦人たちが自身の中にも、それを作り上げている何かがあるのではないか、世間体の壁というのは、むしろ婦人たちが自身が作つて

いる面もあるのではないかということを前向きな姿勢で考えてみたいと思います。以上三つの点の最後にまとめとして、テーマに出されている生活の新しい秩序というものは何なのかということと話したいと思います。私は新しい秩序というのは、形式的な形の上での秩序ではない、たとえば話し合いの場の中で、納得の上で作り上げていく秩序でなければならぬと思います。それには前の三つの問題の中から出てきたトピックとしての問題があると思います。婦人が中心になつて現在新しい農業をどう考えているか、農家に嫁がこなくなつたという問題、あるいは嫁と姑間の問題、それから新しい婦人組織を作つていくためにどうするかこの四つの話題を中心にしなから新しい秩序、もつと実質的な内容的な秩序を考えてみたいと思います。では先ず、みなさんの農家生活の最近の変化というところの実情を要約してお話したいと思ひます。

布田 私どものところでは、今さんかんに農業基本法の問題が出ていますが経済がよくないということにむずかしいことだと思ひます。それで婦人も、そういうことについて勉強しなければならぬといつてはおりますが、忙しいので時間がなのです。ですからどうにか時間を生み出したいということにいつしようにけんめいになつております。それから最近若い人たちが都会へ出たがつて、そのために、母親の仕事がふえています、そういう悩みだとか、電化のうえからも、都市と農山村の生活の差が大きくなつてゐるが婦人がどういうふう処理していつたらいいか、共同化のこともわかつてゐても踏み込む意欲がないとか、ずい分悩みがあるのです。

岩淵（ともえ） 私たちのグループは、嫁の立場、姑の立場の者たちですが、相談しまして、私たちの手で機械化をやりたいと思ひ

機械を購入してやるようにしました。現金収入は主人たちが外へ働きに出てやるというように変わつてきました。一戸平均七反歩で約反当り二石五斗以上はむつかしく、いろいろやつても二石八斗か二石五斗が事実です。

多田 私は、結婚してはじめて農村に入りましたが、いろんな婦人問題の縮図を見ているような気がしました。何とかして私たちの手で嫁の座というものを少くしでも高めたいと思ひましたが、一人の力ではどんなことをしてもできないと思ひ地区の方々と婦人会の方々の協力で若妻会を結成して、その若妻会を通して学んできております。五年前までは一町五反以上の農家にはほとんど兼業がありませんでしたが、現在では二町以上でも兼業の農家になつております。それは結局その農家の人たちが設備投資の面に薄いせいと思ひます。共同化して個人の家庭の負担を少なくしたならばと思ひますが、自己中心的な考え、視野が狭いのです。共同化に踏み切れない状態で、そのしわよせが私たちにきているような現状でほとんど男が都会に出ているので、今まで責任を持つたことがなかつた営農の経営方面にまで責任がかかるということに変わつてきています。それで若妻会を通して農業構造や経営の方面の勉強をするといふところまできたのですが、私たち農家の嫁の立場ではどうしても姑さんたちの理解がなくてはやつていけませんので、若妻会と婦人会が背中合わせにならないように、いろんな方法で努力をしております。そんな現状です。

岩淵（テル） 私も都会から農村に入つたもので、いろいろなレジスタンスもありましたし悩みも出て、一時は自分を失ひかけ

ました。これではいけないという気持ちから、自分のいわゆる農村の嫁という立場を、“嫁”ではなくて妻や母の立場にしたいと思ひ、いろいろと勉強して現在ではどうやらこうやら自分の立場も確立できたように、自分では思っておりますが、いろいろな問題や分裂がありました。現在では七人家族ですが、私と主人と二人だけで、四ヘクタールほど作つていますから部落では大農のほうです。そこで、これだけの経営をするために、農業面でも自分の勉強のためにもこの会議でいろいろなお話を聞いてプラスにしたいと思ひます。

田崎 私、主人の職業の都合で観光地でありまた農村地帯でもあるいまの土地に赴任して四年ばかりになります。地域の様子を見ておりますと、農村地帯と観光地帯という事でいろいろ悩みがあります。特に塩原の東南に単作農家で四カ月くらいは雪にうずもれて収入が少なく生活のバランスがとれないところがあるのを知りました。機械化にも資金の面で悩んでいることもわかりました。婦人会員であるその主婦たちと、どうしたらいいか話し合つているところです。

田村 私は農地解放後の百姓で、いわゆる主婦農家として歩み出したのです。少しわかつてきましたらいろいろな疑問が出てきました。まずこまつたのは私自身が地主であり、また地主という階級的な意識の強い年よりをかかえていること、主人は勤めをもつてゐる、農民で、主婦で、母親、という使い分けができなくなつてしまふ、そして、仕事をしているうちに自然に機械化になり次に共同化ということが出てきました。地主といつても私たちの収入は五反百姓ですから、ほんとうにお恥かしいほどで、そういうことをほかの人たちに見ていただきたくて話し合いをしたいと思つ

ても、なかなか通りません。それを通そうとして強いていますと、いなかの女はそういうことをいわないものだといわれ、会合なんかで困ることがあります。共同作業はいいのですが、出荷しますと、値段の点でとても疑問を持つのです。良いところは、主婦農家では自由な時間がわりにとれるのです。話し合うこういう会合にも出られるということは、よほど理解のある方でなければ、主婦農家以外は分大へんだと思ひます。そういう点で私は大へんしあわせだと思つております。

森田 最近周囲をみますと、若い人たちが月給取りに出ていて村に若い人たちが残つていないのです。学校を出てうちの農業を手伝つてくれるかどうか不安です。みなさん方がどのようにして若い人を引きとめていられるか、そういうことを話し合つて研究したいと思ひます。私は二町歩作つていのですが、年寄りもだんだん年をとり、ここ二、三年は全然農作業は手伝えないので主人と二人でやつています。昨年まで農繁期だけ手伝ひにきていたお婆さんがお嫁さんをもらつて、今度はお嫁さんをかしてくださるといつたのですが、賃金は安くても年中仕事があるほうが安定するのでその方へ行くようになってしまい、だんだんこなくなつていきます。失業保険ももらえそうです。今年なんかはどうしたらいいか心配になります。せつかくここまで百姓をしてきたのに自分たち年をとつたらどうしたらいいかと心配になります。

広瀬 私の方は純農村で平均一ヘクタールくらい耕作しております。最近、自分が経営をするようになって考えてみましたら、主婦に労働の負担がかかつてきているのです。なぜかといひますと、耕作面積の方は変わらないのに支出の面がどんどん高く

なつてゐるのです。それを兼業で補つてゐる人もありますが、年をとつてからの兼業の仕事は出かぜぎにいくことなんです。前には一ヘクタールくらいやつてゐる人は行かなかつたのですが、今では二町くらい作つてゐる人でも出かけるようになったのです。

農業労働だけならいいですが、出かせぎの家では主婦も出るようになったのです。私は小さい子を抱えているもので出られないし、また経済の方は何とかやりくりをしてやつていけるのですが、主婦も働きに出ることが農家のならわしのようになつて、行かなかつたら村八分的な存在になるので出かせぎに出たわけです。冬でしたら仕事の終るのは五時ですから、暗くなると子どもが家の前で変な顔をして、泣きそうな顔をして立つてゐるのです。それで、おかしいな、これでいいのかと疑問になつたのでそれを所感文に書いたのです。

森田 私は農村に生まれ農村に育つて農村に嫁いなのですが、長い間教員をしておりました。そういう立場で農村にふれていて感じることとは、今、農家のお嫁さんたちがいちばん悩んでいることは仕事でもなければ経済問題でもなく、人間関係のことで、それを書きました。いま、年輩の婦人たちは、婦人会の地域の会合にはお嫁さんに席を譲る傾向にあります。そういう人たちが実際に、うちの中で相当権力を持っています。こういう人たちがこぼんとくに農村を民主化する大事な立場だと考えましたので、どうかして会合に引き出そうと私は努力しました。そしてゐる話や意見を聞く機会を得たのです。その人たちが、何とかして農家に嫁のきてがあるように、嫁が割り込んで仕事が出さるようになりたいという意欲を非常に持つてゐるのでびっくりしました。そういうことはどうしたらよいかと思ひ悩んでいました。それで出

席したわけです。

里吉 私たちの部落は高度成長して、米麦から全部果樹に切り替えたのです。経済も豊かになり、機械も導入しました。しかし若い人たちは出て行つてしまひます。人間関係の問題というのは開けておりますからないうですが、つまりは現金所得を得るために出てしまひます。こういう中で、篤農家ほど弧立してエゴイストになつてうちの中にとじ込めるといふ傾向があります。私はいつも、共同化して、安定した農業をしようかと考えておりますが、そういうエゴイズムで、組織ができないのです。何とかこれを共同化の方向へもつていつたら、少なくとも若い人たちは希望を持つたろうし、文化施設も完備されたら若い人たちに夢を持たせる事もできるだろうと思つております。

木沢 岐阜駅から高山線で一時間、それからまた日本ラインのある山の奥へ、バスで一時間ほど入つたところです。段々畑で、そんな遅れた村がほんとうに日本にあるのかと、皆さんがふしぎに思うくらい何もかも遅れているところです。今度東京へ出てきて、都市の生活水準と私たちの農村の現金収入のないところの隔たりがあまりにも大きいのでびっくりしました。村には、風習、因習、というものが昔から堅く年寄りから伝つていて、電灯も三年前に引けたというような部落です。現在も強く残つてゐるその風習、因習という問題を話し合ひたいと思つております。

森 私の方の地方は百戸あまりの純農村です。五五〇メートルの勾配地です。田んぼは一戸当り六反から七反、畑は三反から四反です。田んぼは早く植えるのですが、済んだら畑仕事、畑が済んだら山で炭焼きです。一年中休み暇がないのです。主人が

す。

勤めているもので両親と三人で農業をしています。平坦部の方からもらつてもらつたので、初めはこんなところで百姓できるのかしらと思いましたが、一生懸命にやつていました。このごろ両親は年をとつてできなくなつたので、私が全責任を負つて、肥料の配合とか、どんな野菜を作ろうかという農事設計を自分で全部しなければならぬのです。痛切に感じるのは、やつぱり兼業農家の主婦というのは勉強しなければ向上できないということだつたのです。野菜を作つてもこのごろは生産者価格と、それから町に出ている価格とにずつと開きがあるのですね。田んぼでは二石五斗から三石ちよつとしかできませんので、畑できゅうりやトマトなど促成野菜を作つて、野菜で現金収入を得ています。その現金収入が野菜のことですから、天災や何かにあつたりしてものすごく安いときは、それこそ貧困な状態になるのです。こういうときに野菜を加工しておくといふと私自身は思うのですが、加工ということになると、良い指導者、あるいは共同化ということが問題になると思うのです。

それから農業の機械化ですが、機械化されるということは良いことで能率が上がるとか、またそのために多角経営ができるとか、それからまた私の村では機械化にもなつて農道をつけたりして道が便利になるといふ点もありますが、機械化されたために余暇ができて、若い人たちが町に働きに出て行く。そのために主婦農家になつてしまつて、残された婦人や年寄りにしわよせがくる。

それから機械は大体高価なもので、その代金かせぎにいろいろ野菜を作らなければならぬで機械のために私たちが働かなければならぬということであると思うのです。こんなに一年中忙しいところに嫁のきてがないということもあるのではないかと思いま

坂本 私のところは引揚者がおもな開拓地で入所してはじめは主に野菜を作つて現金収入をはかつたのですが、都会近郷の農家に押されて、野菜ではとても採算がとれなくなりました。次にたばこの耕作をはじめて、現在も作っておりますが、やはりいろいろの生活の変化から支出が多くなりましたので、これでもまた追いつけなくなりました。これからどうしたらいいのだろうといふいろいろ寄り合つて話しあいを続けてきましたが、結局今から伸びるものでは酪農ではないかということになりました、一応酪農に全員が踏み切るように決心したのです。しかし、それには資金とか、それから労力の問題とか、いろいろ困難なこともありました。そこで私たち婦人としてもみんなをよくするために、どの道を選んだらいいかということとを相談するため一カ月に一べん、グループが集まるのです。共同に踏み切るとしても最初から全部共同ということはとても無理なので、まず、二、三年前からたばこの温床の苗作りを共同で始め、これはとても成績がよくて、みんな喜んでおるわけです。次に乳牛を飼つておりますが、牧草をまきつけるのに、広い面積を人間の手でおこしていたのでは間に合いませんから、機械の購入を考えています。現在三台小型耕耘機が入つていて、大体三戸から五戸程度の共同にして畑はおこし牧草をまいたらどうかと一生けんめいその方面を研究しております。将来は共同放牧場とか共同酪農場をやりたいので、みんなで研究しなければならぬような状態になつております。むずかしいのは人間関係です。婦人同士が話し合ひまして了解を得て、自分の利益だけにこだわらうな人は共同には入つてもらえないということを婦

人たちに徹底させなければいけないと今みんなで話し合っております。

淀谷 現在農業はしておりませんが、昨年まで九年間農業をしていて、また将来、農業を継がなければならぬかも知れませんので、どういふ経営の方法をしたならば良い生活ができるかとつねに考えております。私は、農業であつてもやはり企業のようなものではないかと思うので、将来は簿記も必要なのではないか、それにはどうしたらいいか。新しい農村生活を営みたいと思つています。

柳田 私が普及員として担当している地区村は大体一町平均の畑作農家で、甘藷と菜種という単作農業から果実畜産の農村に変わりつてあります。それと農家に農繁期がなくなつて、とにかく年中忙しいといふことはほかのところと同じです。生活改善の仕事をしていて気がつくことは、機械化とか、構造改善とかまわりの人が願う表面的変化成長に、内面の、精神成長がついてきていないのじやないかといふことです。具体的にいうと、家計簿をつけるのはとても嫌いな人が多く、人の前でものをいうことをおつくりがるくせに、うわさ話とか因習とみられるものとか、には熱心になつてゐるといふことです。今いちばん大事なことは、一つはその精神成長を消費とか技術とか経営改善の変化に追いつけるように勉強したり考へてもらいたいといふことと、もう一つは、共同化の素地としての人間関係をつくることと、また、家計簿なんかがつけられないような婦人たちが共同化はやれないといふことです。そういう実質的な素地を作つておかないと、構造改善とか農村の成長とかはできないのじやないかと思ひます。

松原 皆さまのお話の中からたくさん問題が出たと思ひます。いま全国どここの農村でも起こつてゐる事柄ですが、一応近代化ある

いはもつと現実的に機械化、あるいは家庭電化というような形で、形式の上にしる近代化の方向に進んでゐることはたしかだと思ふのです。ただ、都会の場合ならそのことが、余暇が多くなるということにつながるのですが、余暇というのが都会でいう、いわゆるレジャーでなくて、お話の中に出たように、農業経営の機械化から生み出された余りの時間を他の現金収入を得るために振り向けてゐるといふこと、これは余暇というものゑを誤解してゐると思ふのです。そこが大きな問題でしょう。一方で機械化して近代化していくが電化されても悩みがあるといふこと、そして近代化、機械化のためにますます婦人の労働が激しくなる、忙しくなるといふことでした。一方で近代化が進んだけれども他方で若い人は村からいなくなり、あるいはご主人もいなくなり、また主婦そのものまで出かせぎに出なければならなくなつた。もはや主婦農家の段階を越えて、主婦まで出るということになる、そこまできてゐると思ひます。近代化といふことと主婦労働の過重といふことを結びつけてゐるのは皆さんがいわれましたが、農家の、現金収入をふやすといふ意欲が高まつてゐることだと思ひます。そのまゝめのように、しかし現金収入を求めようとする欲求、それに伴ひ内面的なものが台頭すべきだと、そのことが婦人たちの中に忘れられてゐるんじゃないかといふことも出ました。現金収入を求めて、よりよい生活をしていくといふことは、人間に与えられた権利であると思ふのですが、しかしそれよりもつと大事なことが一方では失なわれているのではないか、そのところをもう少し突つ込んで考へることが大事ではないかといふ気がします。

要するに、近代化といふこと、機械化といふものの問題、一

方で主婦の労働が過重になつたという問題、この二つを交錯させて、それではどうしたらいいかということを作るべく中心に話し合つてみたいと思います。一つの方向としては共同という話が出て、それから一つはもつと内面的な成長をしなければいけないということも出ていたと思います。

里吉 私の地域ではテレビは一軒なしにあつて、それを買うために主婦が日雇いに出るといううちもあります。そういうふうに電化のために働きに出る、そして周囲の電化の状況にまどわされるというふうな傾向も出ています。

多田 テレビがあつても私たち嫁の立場のものは、テレビを見る時間がないのです。そして私のような零細農家ほど主婦の、嫁の重荷はひどくて、機械化されて男の人たちは機械の入るところをやつてくれるのですが、私たちは、機械の入らないようなところをくわでやらなければならぬ。機械化されてもさつぱり楽にならず、働らきがよけいひどいという状態です。そして今までは農閑期というものがありました。ほとんどの男たちが出かせぎに行つておりますから、農閑期にある冬の間の山仕事も男の人たちが今までは一緒にやつたのが、女ばかりでやるようになって、ますます私たちの時間がなくなつていきます。若妻会が結成されて三年になり、月一回集まつておりますが、その会に出ていく時間はほんとうに貴重です。冬の農閑期くらいは今までみんなが出てこられたのですが、だんだん忙しくなつてきて、自分がその一日出でしまつたら、あしたからまた忙しさに追われるという状態です。

田村 テレビを入れると大へん楽しいことはわかりますが働いて疲れているうえにたとえばつくろいものはラジオを聞いていてもで

きますが、テレビは夜の仕事ができなくなるのです。テレビを見て目が疲れたということをよく聞きます。うちではそれを検討して入れないです。

木沢 私の部落は一〇二戸ほどでテレビが十八台ほど入っておりますが、土曜日だけ「子ども仲良し会」にテレビのあるうちが提供してくれるのです。子どもがテレビを見る会に入り、大へん仲が良くなつてありがたいと考えています。

石川 私のところでは百戸中四〇軒ぐらいあるようです。それを見ますと、おもに日雇いに出ている家、兼業農家ですね、そういうところで先に入れていきます。私のところはようやく昨秋でした。百姓は忙しいときのテレビは見られませんが、昼飯休みに料理なんかがありますが、それを私は見て休むのですよ、そうでなかつたら、ご飯を立てばすぐ外へ出ていく支度をしなければならぬのですが、テレビもよく考えて見ますと、休み時間ができていいのじやないかと思うのです。

松原 だいぶ近代化の話が出たんですが、それ自体はけつして悪いことじやないし望むべきことなのですが、ところがその近代化のために主婦が日雇いになつている部分があつたり、せつかくテレビを購入したり機械を導入したりしたのに、主婦がその恩恵にあずかれないのはなぜかということを、もう少し突つ込んでみたいと思います。

布田 近代化するために、農家の主婦が日雇いに出かけるというのでしたら何にもならないと思います。

都会でしたら主人一人の働きで家族全部を養つておりますが、農村ではみんな働いても苦しい苦しいという現状ですから、労働の価値をもう少し認めることが大切でないかと思うのです。

そういうような労働賃金を協定するようなことはできないものかと思つておりますが。

松原 そうしますと、近代化するために現金が必要になつてくる、その現金収入を求めて出かせぎ、兼業にするわけですから、農業収入は農業労働に見合う収入では、けつしてないという現実があるわけですね。

広瀬 今、近代化によつてかえつて主婦に労働のしわよせがきているといわれたのは、私も切実に思つてゐるのです。私の方は水田単作地帯です。収入は、一町歩作つて一反歩三石とれたとして、飯米や何か二〇俵引いて百俵とれる農家では、八十俵です。一俵四千円として三十二万でしょう。都合の月給三万円とつてゐる主人が一人で十二カ月働いて三十六万円でしょう。農村では家族全部で働いてやつと三十二万円です。そのうえ今では耕耘機一台二十万、三十何万ですから一年の収入が全部すつ飛んでしまひます。近代化、機械化の波に、何か乗らないといけないような気がして、自分のうちの収入状態とそれを見合、合せないで私のうちもという工合に買つてしまふ。でも実際は経営が苦しくて仕方がないから男の人は出かせぎにいく。主婦も朝と晩はいつしようにけんめい田んぼの方をやつて間は出かせぎに飛んでいくのです。ですから、子どもなんかほんとうにかわいそうです。農業なら農業だけで収入のあがる方法を考へていきたいと思つてゐるのです。

柳田 テレビなり耕耘機なり買うときに、買つてもお母さんは見えないだらうとか、時間がないとか、そういうようなことを家族でよく話し合つて、その上でどうしても買つたほうがいいのか、そのためにお金はこれだけいるから苦しいけれどもこれだけみんな働こうとときめて買うのだつたら、あまりしわよせにならないと思ひます。

松原 しわよせがきてゐる原因は、外にも問題があると思ひます。日本経済のそういうしわよせが農業の方に大きくかつて

いると思ひますが、今出たことは、近代化といひましても、収入とつり合はぬ近代化が一方でありはしないかということ、もう一つは労働の評価がなされてゐないこと、労働と収入がつり合つてゐないという問題もあると思ひます。そして、大げさないい方をすれば、計画経済のようなものを私たちの生活の周囲で建て直して、そういうための勉強をもう一度し直してみようと思ひます。

森田 たしかに農家には、人のまねをすればいいといわれた情性があるが、今でも残つていて計画ということが非常に足りないと思ひます。もちろん主婦が家計簿をつけれないとか、計画が足りないとかいうこともありませんが、そのもつと根本にさかのぼつて、一家を支えてゐる男の人に大体そういうことがないのです。私たちのところは非常に豊かな農村で、一町あまりでもみんな兼業農家で、大体二町あまりの田畑を持っています。その主人さえ自分のうちの収入や労働力を計算したり、それをまた一家の支出にあてて、どういうふうに計画してやつていくかということがあるようです。もちろん記録がないから直されないと、いつもただ出し惜しみして、そしてつまらないところに、そのときそのときで行き当りばつたりで出しているのですから――

松原 経営の、労働の中心が主婦に移つてゐる。しかし兼業をやることで経営全体の計画を立てるのは主人であつて、主婦が持つてゐないというような問題はありませんか。

多田 若妻会の会員三十七名のうち、家庭経済の収支がはつきりわかる人は七人でした。この七人のうち自分でさいふを持つ、

いなかでいう身上を持つてゐるのは二人だけで、あとの五人はわからないわけです。収入がわかっても支出がわからなくなつたり、支出はわかっても収入がわからなくなつたりということもあります。私たちの方は水田とあと養蚕ですが、養蚕の場合は特に女が主体となつてやつてゐるのに収支は全然わかつてゐないのです。ですから家計簿をつけることをやらなくてはと思います。

岩淵（ともし） ただ出かせぎに出るだけが現金収入と考えるのは非常に危険ではないかと思ひます。私は兼業農家ではないのでそう考えるのかもしれませんが、農村の生産力というのは弾力性があるのです。ですから現在、自分がおかれた位置から、もつと収入をふやすにはどうしたらいいかということを、経営状態とか家族の構成とかをよく考へて農家経営をたてるべきじゃないかと思うのです。

岩淵（テル） 私の友だちが酪農経営に七、八年前に切りかへて今でもりつぱにやつております。でも、その方の努力は認めないで、羨望とかせしりとか、あげ足をとるのです。そういうところに農村が先に進めないところがあるのじゃないかと思ひます。

田村 私は兼業農家で、大きな機械は買えないし、買つてもむだですが、専業農家の方は大きな機械を買つて仕事をするのですがその支払いが大へんなのです。そして、私たちのように兼業農家はその機械で、うなつたりしてもらいますが、そうするとそこへも負担のしわがよるのです。三十万の機械を買つたのだから一回どのくらいもらわなくちや損をするというわけで、それが私たちの大きな支出になります。今いちばん困つてゐるのは人を雇う時の賃金と大きなお百姓さんの機械化の借金の片棒をかつぐということです。それから、さつきテレビのことしか出ませんでしたが、うちでは電気冷蔵庫を買つて大へん便利していますが、娯楽

方面のテレビばかり買つて疲れた、困るということだけでは、電化について、十分な活動ではないと思ひます。

松原 先ほど計画というお話も出ましたように、経営そのものの計画を主婦が作らなければならないという段階まできてゐると思うのです。それは個人ではなかなかできない問題になるので、組織の力で勉強していくということが必要になつてくると思うのです。ここで農業経営というものを、主としてどういうふうに変更するかということについてもうすこし話し合つてみましょう。

坂本 私たちのところは乳牛が平均して三頭から四頭で現在乳をしぼれるのは二頭です。あとは育成乳牛ということになります。そうしますと、二頭の乳くらいでは飼料の代金を払い、それからいろいろ資材費などを引きますと、手に入るのが少いです。それでどうしても五、六頭入れて、乳をしぼるのが始終四頭くらいおるようにならないと成り立つていけないのですがそこまでいくのは、資金の面でとてもむずかしいのです。その資金の借り入れをどうするかという問題が出てくるのですが、幸い開拓地の振興法というのが三年前からあつて融資を受けてゐるので、それでぼつぼつ今乳牛をふやしてゐるわけです。

里吉 私のところは果実ですが、たぐさんどつと市場に出ますと、うんとたたかれて安くなるのですが、その前の日の市場がよかつたからと翌日うんと出荷するのです。それが個々にやるものですからまたうんとたたかれてしまふ。するとまた別の市場へと転々します。そこで共同で相談して、きようはどれくらいどこの市場に出荷したらよいかと計画を立てたらよいと思うのですが、男の方は欲がありますからうまくいきません。女が協

力して計画をたてて出荷するようにしたいと思うのですが、まだそこるところまでいかないのです。

多田 私のところでは零細農業ですが、農家の嫁はテレビのおかげでかえつてひどいのです。家族がテレビで夜ふかしするので早く寝たくても寝られません。また私の部落で耕耘機を買った家庭をみると農業の収入や、借り入れ金だけで買っている人はほとんどないのです。自分の山の木を売つてその費用にあてるとかしていますが、開拓農家は共同ということでもなければ耕うん機などの機械は買えないのです。ところが、やはり自己中心で隣より自分がよければいいという気持があるためにどうしても共同化もむずかしいのです。どんな方法で改善をしたらいいのか——。

木沢 零細耕地で、生活は一ぱい一ぱいですが昔のしきたりの通りをするので交際費がものすごくかかります。それで支出が子どもに与える副食物などはほんとうに切りつめた生活をしているのです。それで今年なんかぜがはやりましたら、子どもの体力がなくて、じきにかぜを引いたりします。交際費をもつと縮めて毎日の生活をもつとみださないと子どもが農村ではだめになつてしまふと思うのですが——。

松原 今の問題はあとでもう一度改めて論じたいと思います。いままでのお話は要するに農業の大きな変化の中でみなさん方が身をもつて体験しておられることで、その中で出てきたのは変化を見つめる方向だと思ひます。その一つのめどとしては、経営の内容を婦人自身が見つめることだということまで話しがきました。

経営の内容を見つめるには、個々の家の中だけでは済まなくなくては、最近の農業基本法にある選択や拡大というよりなものに見合つた農業をしていくために、市場との関連まで主婦自身も

考えなければ農業は前進していかないということです。そういうつたことに関連して、組織化していく、共同化していくことにつながつて行くことになると思います。そして、共同化するからには一人一人が、すでに存在する個別の農家の経営内容をちゃんと企業の合理的に計算できる態度を持つて臨まなければほんとうの共同にはならないと思うのです。その前提としての話し合いをしてきたわけです。それじやそれを深めるための組織作りだとか、農業経営面の組織作りとか、共同化ということに焦点を合わせながら、前に話したことをもう一度振りかえつてみたいと思います。お話しの内容については、地域によつてかなり違いがあつて、山村と都市近郷の農家、あるいは果樹、畜産の方向に強く踏み出しているところとそうでないところとも違いがあります。また兼業農家、特に主婦農家の立場と専業農家の立場が違います。しかし兼業農家、あるいは主婦農家でも、ただ単に現金収入を外へ一方的に求めればいいのだということではなくて、残つた農業をもう一べん見つめ直すことです。その線で兼業農家と話題は共通になると思うのです。そして、問題は、自分の農家経営を見つめることが、農家経営そのものを勉強することにつながり、そこから出てくることについて、もつと労働に見合つた収支を得たいということでした。それから近代化、機械化を進めると、当然それに伴つて過重投資ということも出てきて、小さな農家は機械化を進めてもそれに見合つた収入は得られないという問題につながつてきます。あるいは選択的農業の実施たとえば酪農、畜産を押し進めるといふようなことになる、市場との関係もからんでくる。そういうつたことを、個別ばらばらにやるのではなくて一緒になつて組織を作つ

たり共同化を押し進めなければいけないのじやないかということにくると思います。

(休憩)

森 奈良県のある地区では、平均四反から五反の農業です。機械も一台買つてみんなが共同して使い田んぼには全然手をつけないでお茶を作っています。お茶というものは大体基準の価格があるので一応安定して暮らしていますが、大へんうらやましいことです。私たちは、野菜で大体の収入を得ようと思つても、野菜の基準価格がないのです。一生懸命に働いたとしても一日の労働費は、お米で九八〇円、麦で一七〇、きゅうりが高く売れたときは八〇〇円、トマトで七〇〇円、大豆で一〇〇円くらいということになっています。で、野菜で収入を得たいと思つたときに、きゅうりを共同化してそれ一すじでいくほうが仕事も、経営方法もずつと楽なんです。しかし、いろいろ作らないと収入が不安定なのです。野菜の基準価格というか、一定の収入を得られるようにしてもらつたら、いろいろのことに手がかなくて済むのじやないかと思うのです。

田村 生産物の価格のことですが、いつでも疑問に思うのは、仲買人にとっても安く買いたたかれてしまうのですが、それが商店に出るとすごく高いのです。その間がどうなつてゐるのかには判らないのです。生産者が買いたたかれるということがないようにならないものでしょうか。

松原 共同化の現実的な問題、あるいは農業基本法に應じた農業問題が、そのまま出たと思うのです。といいますのは、一つは共同化、あるいはこれからの合理的な経営を進めて行くためには、かなり地域的な、たとえばきゅうりならきゅうり、トマトならトマ

トと一本にまとめることが必要になるわけですね。そして組織を通じて市場を獲得するということが要求される。ところが、それにもかかわらず、そうしていったんではたたかれてしまう。

日本農業の多角経営と農業基本法にうたわれている選択的拡大というのと、どう関連するだろうということが問題になると思うのです。自分らの農業の生活を見つめると、そういつた矛盾に当然ぶつかつてくるということが非常に重要なことです。要するに合理的な農業をするために価格計算をしなければならぬ、つまり生産物を売つた価格を労働で割つてみると、その答えが大きくならなければならない。労働の方を減らせれば答えが大きくなるが、そのためには経営の合理化をはかつて、有効な労力の使い方をしなければならぬということになるわけです。そのためには家族の労働はちゃんと評価しなければならぬことです。もう一方、価格を高めるために、いいものを作るもうかるものは何かを探すこと、もう一つは、それが高く売れるということが必要だと思つたのです。同じものでも、今よりはもつと高く売れるように努力することが必要だと思つたのです。このはじめの努力は反収を大きくするため、第二の努力は組織を作るといふことと、共通機構を農村自身が獲得して行くという方向があると思うのです。仲買人の問題でも、組織を作つて経営機構の、ある部分までは、農村自身が確保することだと思つたのです。現在の農業の中心になつてゐる人々が、そこまで考えなければならぬことになるわけです。出荷のための組織、あるいは生産のための組織を、どう押し進めて行けば現代の社会、経済の中で農家がよりよい収入を得られるようになるかというところを、もう一度話し合つてみたいように考えるのです。

岩淵(テル) 農業基本法では選択的拡大とかいつて、自分の経営に照らし合わせて、いろいろと自分の進むべき方向を見つけるようなことをいつておりますが、部落全体の経営のあり方を考えなければ、共同出荷とか共同化というものは考えられないと思うのです。現在麦の価格が低くて、作つても損するくらいですが、といつて麦を作らないで何を作るかといえ、わからないのです。一つの部落の中には大農もいる、兼業農家もある、中農もある、そういう人たちが一緒になつて部落の経営診断をしなければならぬといふところに悩みがあるのです。たとえば私の地区では蔬菜がとり入れられないのです。うちの経営では、それをしていったんではやつていかれないという状態なんです。

松原 いい問題が出てきました新しい農業に見合つた農業を押し進めるといふことになると、部落を単位にまとめて仕事をしていけば済むといふことになつてきたと思うのです。しかし農家によつては経営の違いがある。米麦中心で安定している人もあるし、ある人は米麦で足りないので改造問題が出てくる、そうすると部落団結では済まないと思うのです。そういった方向の違いというものを見つめないと新しい組織はできないと思うのです。

里吉 私のところはぶどうや桃を作つていますが、無袋の栽培に踏み切つたのです。市場では袋をかけた方を高く買うのですが、無袋にすると一万円も支出が助かるので、話し合ひましてどこの家も無袋にしようということになりました。

柳田 我が家の経営診断をして、経営の方向を見つける、畑作、和牛、養蚕など我が町我が村の営農類型は、各町村の末端まで流れていて、ほとんどのところで今構造改善事業に踏み切つていっているのです。しかし男の人は熱心ですが、一般に女の人は、むず

かしいことはいやだということです。自分のところがどういう営農類型に入つているかといふことをもう一回確かめると、方向が見つかるとのじやないかと思うのですが。

田村 農林省が柿がいいと奨励して四十本以上作りましたが、果樹専門の人がきて、柿はもうポリエチレンに入れて、とんでもない時期に出さなければ経営が成り立たない、四十本もあつても何にもならない、ぶどうならこの山ならだいたいじようぶだがといふのです。主婦農家でそんなことはできるはずはないのです。持ちぐされになる。そこで経営が一つくずれてしまふのです。

里吉 共同するにはやつぱり、いいリーダーがほんとうに必要です。

布田 私たちのところでは、冬になると主人たちは出かせぎに出かけるので、男の人たち自体経営診断のための勉強をする機会がないのです。農閑期になると特定の人しか集まらず技術的なことだけに終わつてしまひます。まして主婦たちがそこまできくのは、まだまだ遠いのが現実だと思います。しかし、主人ができないなら農協婦人部とか主婦たち自身で目覚めてやることも大切でないかと思ひます。また、家計簿の問題ですが、農業経営と家計費を分けている人は少ないのじやないかと思うのです。どうしても農業経営費が大きくなつて、家計生活が押しつぶされてくるのです。これからは家計の面から考えて経営診断をしなればならないという考えに移つて行くべきだと思います。

岩淵(テル) 私たちのところでは兼業に踏み切るのには地所がありすぎる、専業で食へて行くには経営状態がちよつと半端なんです。ですから何とか現在一町七反くらいを高度に利用して

いくよりほかはないのです。これは男の人が非常に熱心に考えています。経営簿は、毎月主人がつけ、主婦は家計簿をつけないことには両立していきませんから、結局主人とともに家計簿と経営簿を照らし合わせて、中途半端な百姓としてそこにかじりついていかなければならないのです。こんな中間にある者たちがいちばんかわいそうな立場です。

坂本 私不勉強で、共同と協業の違いを教えてください。

松原 私の理確する限りでは同じことを言っていると思うのです。政府与党が「共同化」という言葉はほかのニュアンスを与えるのではないかと、いうことをいつているので、同じだと思います。

森 私のところは五年ほど前までは、たばこを全部の家が作つて共同出荷していました。たばこは反当の収入がきまつておりますから、そのじぶんよかつたのですが、病虫害などあつて毎年作るわけにいかなくなつたのです。それで養鶏とか乳牛を飼うとか、考えるのですが、農業経営というものは、年々変化して行くものじやないかと思うので、その時代に合つた指導者が非常に必要ではないかと思うのです。

松原 お話は、経営内容等をどう考えるかという方向に入つてきたと思うのですが、この婦人会議のテーマに合わせて考えてみたいと思うの、経営内容の診断を通じて、自分自身の個々の農家の経営内容と、あるいは経営の方向の違いによつて組織というものを作らなければならないじやないか、しかし、経営内容が違つてゐるのに、部落が同じだからというので一つにまとめることが、果してそのまま正しいかどうかということですが、それから一つは組織を作るときに兼業組織、あるいは共同化ということについて、リーダーの問題がからまつてくる。個人の家の経営の問題ではなくて、

組織の問題に話を進めていたのだと思います。

坂本 先ほど出しましたが、共同で出荷する、ということですが、出荷だけの共同で、うか、栽培も共同ですか。また管理なんかも全部共同でやるのですか。

田村 両方ともです。管理は消毒の場合ですが、たいてい個人で大きいときだけは共同でやつています。そら豆なんかは二、三軒ずつ持ち合つています。

坂本 収入は全部分配されるわけですか。作付け面積は自由ですか。

田村 分配は収量によります。作付けは自由です。

里吉 リーダーになる人が、統計上の結果や利益を研究してくださつて、積極的に強く村の人たちに呼びかけてくれれば共同化のきつかけになるのじやないかと思うのです。

松原 いまお話のリーダーというのは、具体的にどういう人ですか。

里吉 私たちの場合はある一人の人が無袋栽培のことを各方面から研究し、その結果を発表なさつたのです。ことに袋をつけるのは婦人の仕事ですから、婦人の力も軽くなることを説明していただきました。そして除々に村の、うちも目覚めてふみきつたのです。そういうリーダーを作るといふことは、ほんとに大切だと思います。

田村 誰か一人が市場を視察して、価格の問題とか、来年は何をやつたらあたりそうだとかを市場の人とよく話し合つて、農業技術員と相談してやつてくれます。そういう人をリーダーにしています。

森 私の部落だけで共同組合があるのです。その共同組合と組合

員の人が大体リーダーをしております。

多田 私の方も農協や各方面からきて指導してくださいます。

広瀬 私の地方ではその村の経営方針を技術員の専門の人が立てるのです。ところが、最初畜産専門の人がまわつてきて養豚がよいというのでそれをやる農家がふえたのです。しかしその人が転任して、あとの養豚をどうしたらいいか新任の人にきくと、専門でないという。そうしてサフランの栽培はどうかという。指導員が変るたびに、新しいものは教えてくれるのですが、二年くらいで転勤してしまつてとても困るのです。他力本願で自主性のないのが悪いのでしょうか。

松原 他力本願じやだめだということですね。農林省政策が変わりますと、今度は養蚕に熱を入れるが桑がだめだから、ビール麦にしよう。それもだめということですね。しかしもうその段階じやだめだということですね。選択的拡大などについても、農業基本法が政府が逆に下からの動きにむしろ動かされて出ていると思うのです。過去の受身じやなくて、あるところでは、農家がそれをどんどん自分で獲得し始めている、それにつれて出てきたという気がしているのですが――。

そこでリーダーの問題を考えると、そのリーダーの指導を受ける人たちが、被指導者がよくなければリーダーも良いリーダーシップはとれないわけです。いいリーダーを生み出すために、よいリーダーの指導を受けるだけの勉強なり組織なりを主婦なり、各農家の人が作つていかなければならないということがあります。それと、もうかるときには個々に勝手に出すが、市場でたたかれたら組織を利用して出すということでは、組織の強化はいつまでたつてもできません。そういつたことで組織作りのむずかしさと

いうことを考えてみたいと思います。

坂本 たばこの栽培のことで、全面的な共同栽培という話もあつたのですが、先ず苗床の共同化から入りました。その際は苗床ですから、最初はみんななにをいっても出ていたのです。そのうち、差し支えがあつて出られない人が出てきてほかの人から文句が出てくるというわけです。これではいけないからと、そのことについていろいろ話し合い、これから続けて行くつもりならば、何をいっても共同の仕事を優先して、個々の家のことは後にしても出るということにきめたのです。今では大体、問題がなくなつております。

田村 共同出荷をたくさんやる人と私たちのようにほんの少し出す者にも問題があつて、少ししか出さないのに、出荷の労力提供は多量に出す人の分までやることになりました。また、共同作業に嫁が出ちやおかしいというので手伝いの人を頼んで出したります。うちのものが出ないならば茶菓子を買えといわれます。多量出荷の人に小さなものが使われる、現在はなくなりましたが、とかくそういうふうに使われることはいけないと思います。

森田 私ふしぎに思つたのですが、私たちのところでは共同作業について、年度はじめに何分賃というものを部落内で契約するのです。女はいくら、男はいくら田おこしはいくら、耕耘機の係りは一反歩幾ら、と合議で、そのときの物価とかみ合わせてきめ出られない時は、その賃金を払えばいいのです。

田村 今はそういうことになりつつありますが、私たちで改めてもらつたのですが、うちの者が出ないと、代わりの男の人を出しておいても、茶菓子を買えといわれ、反発すると、うらまれてしまうのです。

森田 私たち中学生なら六分、高等学校以上大学は一人前、女は八分とちゃんときまつてゐるのです。

広瀬 田植えだけは共同の形でやるのですが、器用な人と下手な人がいるでしょう。そういうことが問題になるのです。

だから共同すると損をするという考えがあるのです。

多田 昨年水が足りなくて田植えがなかなかできなかったことがありました。残つた分は時間割りで、このうちの田植えには何時間何分と、最初のうちは非常に能率が上がるのですが、あとの田になると疲れて能率が下がつてしまふ。それでこんりんざい共同ということはしない方がいいという話になつてしまつたのです。小さなことでも自分の利になることは協力するが、少しでも損になつたら協力しないという気持のある以上、構造改善なんてどうしてできるかと思つてしまひます。

布田 共同経営、共同作業に関連した話ですが、八軒の農家が共同経営で成績をあげてゐるのですが、経理がとてつきりしてゐるのです。その若い人が、やはり共同経営してゐる他の村へお嫁さんをもらいに行つたわけです。そこでは親せき二軒が共同経営してゐますが、経営内容はいいのだが、その親の考え方が自分たちのやり方と差がありすぎるので、残念だつたがその娘さんをもらわれないできたという話があります。その若い人のところの共同経営では、老人に老令年金をあげてゐる、主婦にはその労働に見合うだけの賃金をはつきり計算してゐる、という状態ですが、向こうの方は親せき同士で、食生活の面などうやむやな点がある。共同経営の場合は、何から何まですつかり計算をつけて会社経営のようにしなければ、わずらわしいことが必ず起こつてだめになるといつてゐました。

松原 たいへんいいところにお話がいつたと思うのですが、全面的な共同作業にしる部分的な共同にしる、出荷だとか補助に限つた共同にしる、完全に経営を一緒にするということにしる、これからの農業に対応していくために、企業として考えるためには、投下した資金に見合つただけの収入がなければ企業にならないわけです。そういうことをはつきり計算できるような農業でなくてはいいけないと思ふのです。それをうやむやにして共同作業の方を優先にして押し殺したときには不満が蓄積されるだけです。なぜ共同作業の方が重要か、合理的に計算されて出てこなければいけないと思ふのです。また経営の大きな農家が最近労働力不足なものだから、共同作業で安くやつちやつて、経営の小さな農家は引つぱり込まれるという話も出ましたが、全面的にしる、農家の主人が、もつと合理的な経営をはつきりさせて、それを踏み台にして共同の中に入つていかなければ、人間関係の不満はぶつかると思ふのです。そのときに、ただ単に人柄の問題などにしてしまつてはいけない、ある程度の合理的計算はできると思ふのです。そういうことを考えるのがこれから経営をある程度まかされていく主婦の役目じやないかと思ひます。ここで、特別オブザーバーの方のご意見をどうぞ。

新沼 (特別オブザーバー・全国農協婦人組織協議会) 新しい経営を育てるというのを、農業の問題にとつて考えずと、内習の問題と生活の問題と、育児とか教育の問題はそれと切り離せないと思ひます。そこで派生出るものは農業の近代化ということですが、自分の組織の問題から考えて、やはり共同化というところまでいろいろな障害があつてなかなか行けないのです。共同活動とは、共同学習でもいいと思ひます。共同化では一つの前提として、どういふことを考えてい

かなければならないかということを、学習の段階で勉強し合うと、やはり農業というものは婦人だけでは進まないのじやないか、農協青年部など他の組織との提携のことも必要です。またとかく婦人のリーダーは基本法の内容とか構造改善の政策とか受け売りをやるうとしてその方向に走りがちなんです。そこで私たちは営農設計、個人生活設計、それから農協婦人部、つまり組織的な共同設計などを話し合っています。そういう新しい秩序が新しい農業近代化に対応できる人間作りになるのじやないかと思っています。生活の面をみても、今の農家は都市のまねをする傾向があるんじゃないかと組織として反省されるのです。生活水準を高めることは、都市のまねをすることではない。農村自体の消費生活のあり方、それと今後の農業の新しい手としての子どもの育児や教育も真剣に考えなければならぬと思うのです。そういう点から、兼業の問題で、婦人までが働きに出かけるということ等ももう一度立ちかえつて、経済的にどうなのか、家庭生活にとつてはどうなのかと考えるじやないかと、どなたかおつしやつていた通りです。農業生産にはかなり弾力性があります。最近の農業は主婦に依存する度合いが大へん高いのです。やはり家事労働の軽波ということを真剣に考えなければいけないのじやないか、その点から託児所とか保育所とか、共同の炊事だとか洗濯場とかについて婦人の声を、もつと強く出さなければいけませんし、学習もしてほしいと思います。

松原　ご指摘のように、こういう生活の問題、家事労働の問題、あるいは育児の問題ということにらみ合わせてやらなければ「営農」にならない。新しい農業経営も出てこないと思うのです。考えられるのは婦人の労働上の地位が高まっているにもかかわら

ず経営であるとか、家計であるとか、あるいは家庭の中で婦人の発言がほんとうに生かされている営農という問題の中で婦人が生かされているのかどうか、もう一つは主婦農家について労働上の婦人の地位が重要になつてきたということに関連して労働の過重が生活面にどう反映しているか、一つは育児があるとかになつていないか、そういう問題があります。婦人会など話し合いの勉強の機会を持つとうと思つても時間を捻出するのはむずかしい、経営面にまでその時間のやりくりで引つかかつているような問題、そういうことがあつたかと思つたのです。また、家庭の中の人間関係、嫁と姑の問題、世代の問題というように、ことがらを考えていきたいと思いますが、家庭の中で婦人の労働上の地位が果してどうなつていっているでしょうか。

田村　金銭の出し入れはやつても、それを計画するとか、収入をどう使うかということになると、嫁の立場のところは素通りしてしまふ状態だつたのです。二十年間そうやつてきました。私の主張を通せば家庭争議が起きてしまふからです。それで私を認めてもらうまではとがまんしてやりました。そして子どもの助力も得て、農業経営と一しよに人格を認めてもらつたわけです。主人の方はまあいいやということでしたが、老人の方は何となくいけませんで、そこのとこころの調子をうまくとりながらやつてきました。

多田　農村の場合嫁の地位がいちばん低いのです。私たちは三年前にお姑さんたちによつて若妻会というものを結成してもらいました。それからというものにはほんとうに少しずつですが、私たち嫁の地位というものも認められて、今でもそのための努力はありますが、一年に一回温泉旅行したり、年に一回文集の

ようなものを出すようになったのです。そのような組織ができたことで、一人でいくらがんばつてみてもだめだが、精神的つながりによつて、嫁の地位にある私たちの力で幸福というものを勝ちとることができるようだという確信と体験を得たわけです。やつぱり組織の力は大切だと思います。

岩淵（テル） 私たちが嫁になつたころは嫁の人権などというものは問題外でした。ところが子どもたち二人が学校に入學したとき、自分は教育者の立場になければならないということを考えました。そして家庭における自分の地位、立場を確立しておかなければ、子どもたちに対してよりつばな母親にはなれないのじやないかと思ひました。それで、まず考えられることは、自分が「嫁」でなくて人間としてうちの中で認めてもらえなければ、自分の立場は、ないのだということを考えておりました。そのときに第五回婦人會議の明るい人間関係をつくるためにというテーマに応募して地方會議に出ることになりましたら姑が注目してくれました。姑は、はじめて婦人會議というものがどういうものだろうかと思味を持ちラジオの実況放送などを聞いて、なるほど今の若い人たちはこんなことを考えているんだとわかつてつてくれたのです。私はほんとうは、姑にそういうことを打ちあけるべきだつたのですね、思い切つて打ちあける勇氣が出たんです。それから私の立場はよくなつて行つたのですが、それに勇氣を得て、積極的に嫁の立場、妻の立場、主婦の立場、母の立場と積み重ねて行つたのです。ようやく現在何とか自分の立場を確立できたわけですが、かつての私たちのにがい経験を若い人たちにはさせたくないという氣持を持っています。

坂本 いいお姑さんがいらつしやるのですね。私たちは開拓地で引

揚げ者が多いものですから、年寄りのいる家庭はなくて、その苦勞はありませんが、そのかわり自分に全責任があります。畑に草でも生やしたり、作物がよくなかつたりすると、あそここの奥さんはなまけ者だということになります。そこで、自分が働いただけ畑はきれいになりますし、作物もよくできるので、それから、とにかく一生けんめいに、主人よりも自分が中心くらいにやつておきます。

森田 主人が勤めておりますので、最初は私に渡された分だけに ついて家計簿を克明につけて、毎月主人に報告してしました。そのうち、家が老朽で三、四年のうち補修が必要で、一体主人がくれるもの以外にどれだけあるのか知れたかつたのです。そのうち主人も少しずつ収入をはつきりしてくれる事になりました。主人は、いい父ちゃんやると自慢していますが、まかされただけは忠実にやつていたので主人もそうしてくれたんだらうと私、内心自慢しているのです。

広瀬 終戦後十年間くらいは、婦人が農業の經營をやつていたというのはほとんどなかつたです。でも今では兼業農家が多くなつてきましたから、大い婦人が經營の主体になつていて、家での發言権は大きいのです。しかし一般的に、發言権が強まつただけで、自分の家の収支計算もやらないで、ただ働けばうちのためにいいんじゃないかという人が多く、そこに疑問を持つのです。

松原 実際に農業労働に従事していながら、家庭全体の家計をあるいは取り引きのことがらに關しては、依然として嫁の地位が低いということが一つあるのですね。もう一つは夫と妻の間あるいは世帯主と主婦との間の問題が大きく出てきました。人

間関係として、二つの問題にきれるわけですが、実際には家の中での主婦の労働上の比重も高まつているということも確かだと思えます。ところが労働上の比重が高まつているにもかかわらず、家全体の経営というようなことについては発言権を持つていないと、いや持つていないどころじゃなくて知ろうとしない現実すらあるというわけですね。夫婦で家計簿をつけ合うというようなことを通じて、だんだんと発言し得るようになってきたという、そこに現われたように、やはりただ一方的に嫁の発言権がないとか、妻の発言権がないというばかりでなくて、妻自身、嫁自身が経営の内容を知ろうとする努力、もつと合理的に考える努力、そういうものを通じて獲得されることじやないかと思うのです。

多田 そのためにはどうしても一人ではだめです。組織を作るということです。それからまた組織というものが嫁と姑と、そういう別々の立場にあるものでなく、やつぱり協力されるような形でもつていかなければならないことを体験しました。若妻会の人たちはお嫁さんの小づかいの問題、家庭の収入支出がわからない間、農家に嫁がこない問題、それから教育の問題、夫婦の問題と五つを話し合つたのですが、自分たちだけでなく姑の立場にある人との話し合いも持ちました。農青連の方たちとも組織を通して協力してもらうことが大切だと思ふのです。

岩淵(テル) 組織を通してやる半面、その組織にたよりすぎではいけないということもありますね。

多田 最初のうちは嫁の若妻会でもお姑さんの悪口をいうから、うちのものをさらけ出す、ばかを言う集まりだといわれまして私たち自身そういう不和を起こしたりすると若妻全部が評価されることをしきみ感じました。いまは連帯責任ということをいつ

も考えてやつていけるのです。より正しい方向に努力しなければ誤まつている方向に幾ら努力したつて無意味だと思ひます。

富永(特別オブザーバー 農業) 僕たちの親たちは、農業をどういうふうに考えているかと思つて出席したわけですが、驚いたことに想像以上にみなさんがたは今の農業という問題を考えていることを再認識させられ恥かしいような思いをしているわけです。

(第一日 閉会)

第二部 会（農村生活の問題）

第二目 四月十二日 一〇・〇〇～一七・〇〇

松原　きのうの最後に、新しい農業経営に関して新しい家庭生活を作つていく方向として二つの方向が出ました。一つは家庭生活の内側に向かつて新しいあり方を考えていくという方向、いま一つは外に向かつて、みんなで組織を作ること。たとえば若い妻の地位を向上させるのに若妻会のような組織、あるいは生産のための出荷の組織などが出てきました。きようはまず、家庭生活の内側を見直してみようということをもう一度論議してみたいと思います。その場合、三つくらいの内容があるのじゃないかと思うのです。一つは婦人の労働上の比重が上がつたが経営全体あるいは家計全体の中で婦人特に若い人たちがはたして地位を持つてゐるだろうかという問題があると思うのです。それから二つ目は、そういう婦人たちの労働が非常に重くなつてゐることにもなつて婦人の他の役わり、たとえば家事労働の問題、次の世代を育てるための育児の問題、あるいは婦人みずからの精神生活、内面生活を高めるための婦人の教養、そういう問題がそのしわ寄せをくつておろそかにされてゐるのではないかと、という不安の中に婦人がおかれてゐるのじゃないかということ、三つ目はそういう中で新しい家庭生活を築いていくための人間関係を経済生活の変化に見合つて新しく考えていくためにはどういうことを学びどのようなことがらをしたらよいのかというようなことを話し合う必要があるのじゃないかと思うのです。

森　家庭の中で発言権を得るためには経営面でも自信を持つて、婦人自身の自主性、計画性などもしつかりしなければならぬと思います。また年寄りのいうことが必ずしも悪いことばかりじゃないのですから、話し合いを基礎に家族から信頼されてはじめて発言権

が生きているのだと思います。

岩淵（テル）たとえば主人にいい妻だと思われてからでなければ発言は生きないと思います。姑に対して、そのふところにまず飛び込んで、いい嫁だと思われるようになったらしめたものだと思うのですよ。

多田 農家の婦人の発言権は家計と経済とに結びついているのじゃないかと思うのです。主人だけが経済を握っている場合だと、ほとんど妻や嫁には発言権が失なわれてくるのじゃないか、やはり家計簿をつけて家族全員のものとしてやつていくところに話し合いいも生まれ、発言権というものも生まれてくるのじゃないかと思うのです。

岩淵（テル）お嫁さんが家計簿をつける場合にはずいぶん障害があるのですよ。姑は嫁に家計簿をつけてもらうことをいやがりますね。どんなふうにしていらつしやいますか。

多田 ある農家のやり方ではきよりの支出をそれぞれの人が記入することにして、家計簿をみんなのつける場所に置くんだそうです。非常に成功しているそうです。

森田 家計簿をつけるということの少し前へ戻つて、農家の女の人たちが家計簿をつけるところまでいく前に、自分のまかされた仕事に最大限に自分の知力を生かして記録なり家計簿の基礎になるようなことをやつて、それが認められて初めて家計をまかされるところまでいくのだと思います。最初からそれを、まかされるのを期待するのは間違いいじやないかと思います。

布田 嫁自身に自信がないのじやないでしょうか。自信を得るためには組織の力にもよつて、物事をよく学んで誠実に十分に自分の能力を発揮することを互いに勉強し合うことがこれからなお大切で

でないかと思います。

広瀬 家計簿をつけるまでの段階が問題だといわれましたが、私はこう思うのです。嫁にきた最初のころは、もし家計簿をつけないといわれても、その家庭というものを全然のみ込んでないのですからわかないのです。だからどうしても嫁にきてから五、六年は家計簿をつけることはちよつとむづかしいと思うのです。だからそれまでに、家計簿をつけるだけの基礎をこしらえてからまかしてもらつたらきつとりつばにいくと思います。

田村 姑たちも嫁を自分たちのいい嫁にするためには、愛情をもつて教える努力しなくちやうまくいかないでしよう。

柳田 家庭の中で労働上の比重は大きくなつても、本質的に発言権がなかなか得られないということだつたのですが、何か、農村では家庭の中で意思の疎通がなく、お互いの気持がうまく言葉で表現できないのじやないかと思うのです。ですからもつと言葉を大切にしなければならぬと思います。主人がくわを持つて出たら、どこへこいといわれなくても、あそこの畑へ行くんだらうと、黙つてついていけば大てい間違いない。主人が馬車を引いて出たらおくれないうつについていきさえすればいい、特別言葉を使わなくても生活がでたんじやないかと思うのです。そういう状態では良い人間関係はこれからはできていかなしいし、新しい生活のすじ道もできないと思うのです。婦人は井戸端会議ではとてもよく話すのですが、もつと家庭内でお互いに言葉を大切に生かして「ありがとう」とか「ごめんさい」とかという言葉が自然に出るようになつたら、あまりむづかしい問題じやないというふうな気がいたします。

多田 養育が終つたときに、一生懸命をやつたのですから、これだけの収入があつたとか、そういうことを嫁がいくら若くても知らせて、経済の状態を把握させるということが嫁自身にとつても生きがいを見い出すことになるのです。自分のまかされたことを一生懸命やつても、その結果を知らされなかつたらやはり生きがいのある仕事にはなつてこないと思うのです。

石川 お嫁さんたちが、すぐ、自分たちの地位を守るために家計簿をつけるとか何とかということにいかないで、そういくようにするまでには家庭の中でどういふうな雰囲気を作つたらそういう話し合いができ、その話し合いができてくれば家計簿もつけられると思うのです。

田村 嫁の人格を認めてやるというのは姑として一番大切な問題でしょう。また社会を見る目、いま世間で若い人はどんな生活をしているのだろうかということを姑さんも見なくては、若い人への理解がつかないと思うのです。

松原 今まで農村の中で人格ないし人権が認められなかつたことはただ単に封建的だつたからということだけじゃなくて、一人一人の家族員の労働が評価されていなかつたということだと思ひます。生産と消費、経営と家計の分離といひますか、そういうことを前提にしながら、はつきりとした計算をやつていくこと、それが必要じゃないかと思うのです。家計から分離された経営というものを合理的に計算しようとするれば、当然、労働あたりの収入がどれだけあるかということも計算して、労働あたりの高い経営をやるのがこれからの農業だと思ひます。ただ世帯主の指図にくつついていけばきよう行く野良がわかる、というような状態から脱却することだと思ひます。そういう中で、たとえはお嫁

さんでも経営の一部分がまかされて農業をやらなければならぬ。自分にまかされたものがどれだけの計算でどれだけの所得を上げて、一日の労働あたりどれだけの収入になるのかという計算を始めることは、お嫁さんの地位を安定させ、ひいてはうちの経営や家族の中のことも論議できるのじゃないかと私は考えるのです。

森田 家計簿をまかされるという話がたくさん出ましたが、「家計」は共同でやるべきだと思ひます。主体になる人がお嫁さんであつたり姑であつたりしても、ときには子どもにそろばんを手伝つてもらつたり、先月と照らし合わせたり来月の計画を立てたり、こういうことは全員でやるべきだと思います。

岩淵(テル) 姑や年寄りとは衝突をしないように、また自分を失わずにやつていくのには、一つの生活のテクニクがあると思ひます。

布田 老後に対する不安感が最近大きくなつてきたんじゃないかと思ひます。それもお金を持つていなければ老後が不安だといふことが——。それで相続権の問題などが最近やかましくなつてきたのもそういうことに原因があり、家計にも関してくるのじゃないかと思ひます。

松原 嫁と姑と衝突しないテクニクといふか自分たちの地位が無視されない形で、よい人間関係を作つていくためのテクニクといふようなことについて、どうぞ——。

淀谷 地方会議のときに、若い人たちは時代の波に乗りやすいけれども、年寄りはなかなかついていけない、そのために老人学級などを設けて老人教育をして、若い人たちに近づいてもらうことが話に出ました。

森田 私のところでは老人学級が非常にうまくいつてゐるのです。

中年以上の人たちが向上するには、そういう組織、団体の力で若い人たちの考えに近づけるということが大切ですね。

森 年寄り側からいいますと、いまの若い人はあまりにも発展しすぎて、どうにもならないという考えもあるのです。でも、上べだけの話し合いや計算をしても、ほんものの明るい家庭はできませんね。

石川 年寄りは、牛の飼料をこまかく切つて与えないといけないといつて、私が講習で習つたようにすると、いけなかつたのですが、そのうちしゆとさんが講習を聞きに出て、荒く切つてもいいのだ、そのほろがかえつて牛のためにもいいと聞いてそれで解決はつきました。年寄りの出て聞く機会をあげることも大切です。そういうことから人間関係も変わりますね。

柳田 ほんとうの明るい人間関係というのは、どちらかがまんじたりしんぼうしたりするのでなくて、どちらも生かすということだと思います。そういうテクニクを自分の実情に応じて学ぶことです。

里吉 やつぱり、婦人の生活の知恵というものを持つて、そして新しい社会に測したテクニクというか、生活技術を身につけることが大切じゃないかと思ひます。

松原 確かにある程度老人も変わつてきたと思うのです。これはテレビラジオの普及ということも一つにはありましようし、それから実質的には農業が、今までのような伝統的な、経験に頼る農業じゃ済まなくなつてきてゐるので、新しい知識を持つた人でなければ農業の担当はできないようになったこと、そして仕事の采配まで若い人がしなければならぬところまできてゐるのです。

しかし反面考え方の異なる年寄りをどうして話し合いの場の中に入れていけばいいか、ある程度がまんといふことも出ましたが、それではやはり解決がつかないのじゃないか、どちらもがまんしないで済む方法というのを考える、ということになるわけです。その辺をもう少し。

多田 老人の集まりを組織づけることはいいですね。レクリエーションを中心に楽しい集まりの場としたならば、初めは入らない人もだんだんうらやましいと思ふようになつて、いつか一回くらい出ようと思ふでしう。そして、ある程度心が開けていくと思ふのですが――。

松原 もう少しつけ加えますと、どちらかががまんするのでない新しい家庭のあり方を私はこう考えるのです。それは、もつと家庭の中の仕事をはつきり考へてみたらどうか、計算してみたらどうか、どういふ仕事とどういふ仕事があつてということを。そして、みんなで分担を考える。のけものにならないで、おばちゃんやおじいちゃんはいふことをやつてもらひましよう、というふうな形です。仕事はいずれにせよ最後には家庭というものの中でまともつていかなければならないわけですから、そこから家庭の話し合いも生まれてくるのじゃないかと考えるのです。

森田 そうですね。ここは私の分野、これはおばあさんの分野とはつきりすれば、主権はその人にあるからお互いに意見はいつてもいいですね。そこにそれぞれの立場があるのですから。

松原 特別会議員の方、何かご意見を。

芋生（特別会議員） 私は、いろいろな問題のほんとうにある問題として、やつぱりこうして農業をやつていけるのだからかといふことを

考えます。長男にでも生まれたからにはどうしてもやつていかなければならないが、そのときにどうしてやつていけるかと思うのです。私のところは水田六反歩です。長男を教師にしようと思つたのですが、農業があるので教師にならなかつたのです。そのとき教師になつた方にはいま三万円ほどの給料をとつています。私のところでは食べるだけです。商売するとか土方にいくことはできないのです。だから子どもはガリ版を勉強して免状とり、月に一万円ほど取つていますが、年寄りの小づかいをみられないのが現状です。そうしたら私たちは末は養老院にいくということもいえないし問題になつております。また私に娘もおりますが、農家の娘の教育というものは、普通高校にやつてそれからどうしたらいいかということも問題です。娘は洋裁だとか生花だとか、お嬢さんのようなことをやつて、またちよつとの給料で長男のところへは入れず、口紅つけてハイヒールはいて出ていきますが、それでいいんだらうかと考えてしまっています。

松原 芋生さんが出された事柄の中でも、若い世代の問題として、子どもに農業をつがせるのが、はたしていいかどうか。ここでもつと語り論じ合つておかなければならぬことだと思つたのです。そういつたものを含めて家庭内の問題をもつと進めていつていただきましょう。それからもう一つ重要なことで、世代の問題にからんで、農家に嫁がこなくなつたということもあります。家庭の中のあり方、あるいは現状の問題をもう少し話し合つていきましよう。

田村 娘たちが農家を嫌うというのは、その子どもたちが大きくなるまでにその母親の苦勞している姿だけ見ているからだと思うのです。苦しいには違いないが、農家にも楽しみと希望のあること

を母親自身が示していかなければだめだと思っています。

田嶋 或る会合で、若い方たちとそのことを話し合いましたところが、その人たちはやはり、魅力のある農家にするならばきてがあのじやないかといいました。魅力のある農家とはどういうのだろうと聞きましたところ、夫婦中心にした生活がしたいというわけですね。たとえば、自分たちの部屋をもちたいとか、できれば月給制みたいなことにしてもらいたいか、自分たちで計画を立ててそれに基づいてやつていきたいとか、そういうことができたなら、どんな娘がくるのじやないか、そうすれば農業を継ぐものも張り合いができて離村するものも少なくなるのじやないかというのです。

岩淵(テル) 仕事の面でも生活の面でもお互いの領域を侵さないために部屋が必要だと思ひます。私は東京で育つて農村に入りましたが、最初与えられたのがいわゆるお納戸でした。新婚生活というのは、とても甘いものだと思つておりましたから、お納戸へ入れられてないし話もできないし、夫婦の話し合いができないこんなところからほんとうにいい夫婦生活が生まれてくるだらうかという気持ちで、何としても部屋がほしいと思ひ、十五年かかつて部屋を作ることができたのです。お嬢さんをもらうには、先ず本人がしつかりしていること、そして前もつて部屋の一つくらいは用意しておくことだと思ひのです。

坂本 私の方は開拓地ですが、嫁をもらいたい人がだいたいあるので、二、三年来探してもまだもらつてない人もあります。ただ一人とてもいい嫁さんをもらつたので、開拓地のつらいことはよく知つておるでしょうが、よくこられましたね、と聞きましたら、その方は「何もなかつたところへ、いまから新しく自分が生み出

していく楽しみと家族の人がいい方だからです」といわれるのです。姑さんもおられますが、やはり既存農家と違い、封建性が少ないです。

木沢 町の女子青年七人に聞いたんですが、都市にお嫁に行きたいのは五人、農村には一人、圧倒的に都市にあこがれているのです。農業をやつては文化がない、いままてお母さんの努力を見ていると労働が激しくていやだ、都市は便利だから行きたいというのです。農家でもいいという娘さんは、食べるには困らないし、汗を流して働くということはほんとうに尊いから行きたい、土が好きだから、素朴で楽しいからということでした。それから、新婚生活が楽しく過ごせる間取りを作ってもらえば農村へいつてもいいという人もありました。そこで農村青年を代表して見えました特別オブザーバーの富永さんはご自分の相手として、どんな女性を求めておられますか。

松原 失礼ですが、富永さんはご結婚なさっていますか。

富永 (特別オブザーバー 農業) 実はその前に私のほうからもはたして今後農業をやつていけるかどうかということをまず考えます。そして、みなさんが娘を嫁にやる場合専業農家にやつた方がいいか、兼業農家にやつた方がいいかどうか考えてられるか、それから今後、農業をできる範囲で減らしていつて、サラリーマンになつていきたいかどうか、ということが聞ければ幸いです。自分としてはできる範囲内で何とか農業をやつていこうと思つています。しかし、親たちの問題、政策の問題もむずかしいので悩んでいるわけなんです。

自分から農業をやるといふかたい意思のある人ならいいと思ふのです。

田 私は結婚して農業に入つたのですが、ほんとうにこのま

までは農家に嫁にくる人はいないと思つたのです。仕事がつらいというよりも先に、生きがいのない仕事だということが第一なんです。何しろ一生けんめい働いても働いても家庭の経済は全然知らせられない、自分の子どもを自分の手で育てる時間もない、小づかいも、いつまでたつても実家に世話になつていような状態だつたり、古い因襲や世間体やなんかの問題も強い、そういう点で、百姓の嫁になると、自分の母親のようになつてしまふのだということて来たくなくなるんだと思います。

布田 農業というものは伸ばしていけば幾らでも伸びていく仕事だと思ひます。また伸ばしていかなければならない仕事ですね。どんどんよくなつてきておると思うのですが、マスコミによつて農家に嫁がこないということが必要以上に大きくいいすぎてるのじやないかと思ひます。もつと農村のよい面を若い方たちにかつてもらう運動をやらなければいけませんね。

広瀬 農家へはいかないといつてゐる娘さんに、農家からの結婚の話があつて私が話を持つていきました。私は、その娘さんにどういふところがいやなのか、ほんとうに心からいやなのかききたら、因襲とか、ただ働けばいいということがいやなのであつて、百姓というものはいやなのだ、いままてにも話しがあつたが、百姓するためにもうようなことばかりいわれるので断つたというのです。そこで、相手と会つてみることをすすめ、相手方の家族全部とその娘さんとが話し合いました。相手の青年はあなたが百姓がいやでないのなら、私もそんなに知らないのだから一緒に勉強していこうといい、その親たちは、因襲を押しつけないで、赤ん坊をもらつたつもりでやるといわれたのです。そうしてきまりました。ほんとうに来てほしかつたら、その人に洗ひざらい話

し話し合つたらきつと動いてくると思うのです。

● 一対一の問題も大事なことですが、さうきマスコミのことが出ました。鹿児島では、春になると就職する人が、一つの中学校で二百何人も村を出ていつて農村に残る人は三人くらいしかない実情です。新聞やラジオに就職した人たちの様子が派手にとりあげられたり、職場訪問に先生方が行つたり、それに職場では厚生施設が完備しているので、農村に残る人より恵まれてゐるわけです。学校の先生でさえ、農村に残つてゐる子に声をかけてくださる例は少ないのです。社会から見放されてゐるやうな気がすると思ふ農村の少年はいつていました。もう少しみんな農村に残る人たちを大切にし、お金と時間と空間を与えるやうにしてあげたら、昔の人が考えられなかつたほどのすばらしい農業をやつていく人がどんどんふえていくのではないかと思います。いろんな面から農村の若い人を大切にしていあげてほしいと思ふのです。そうしたら嫁飢饉という問題もおのずから解決ができるんじゃないかと思ふます。

森田 私には婦人会で農村婦人の悩みを、二十五才から四十才までの人に聞いてみたんですが、二十五才の人たちで不満を持つてゐる人三十人のうち数字的に多いのは、小づかいが少ない一・二、遊びに出ることがない一・一、休みが少ない一・〇ということでした。小づかいが少ないというのは報酬がないこと、遊びに出ることがないというのは解放されることがないことだと思います。そして二十五才から四十才一・七二人のうち仕事が激しいというのは一人もなかつた。つまり労働過重は悩みでないが、小づかいのことや、休養、レクリエーションなどについてまだ封建的なものがあつて、若い人たちが敬遠する原因になつてゐるのです。だから私たち中

年以上が生きて身ぎれに明るく楽しむことも必要ですが、お嫁さんをもらおうとするうちで民主的になつて、若い人たちが入つてきても自分の場を持てるやうな家庭を築いていつたらいくらでも若い人たちがくるのじゃないかと思ふのです。なぜ松原 なぜ農家がきつむるかということ、若いお嫁さんが農家にこないのはなぜかということの原因がいろいろと追及されてきたわけで、魅力のある農村、農家にすることが大事だということだとおもひますけれども、一つは農業そのものが今の社会の中で割りに合う生産じゃないということ、農業そのものをもつと魅力のある農業にしなければならぬということがあると思ふのです。それには仕事の分担なり労働の価値の評価がちゃんとされるやうな仕事の仕組みが作られることが大切だと思ふのです。それからもう一つ、魅力ある家庭生活をするためには、夫婦の生活というものを大事にしてほしいということだつたと思ひます。そのためには、主人がしつかりしてゐなければいけないのだという発言がありました。新しい家庭を作ろうという意欲を持つて若いお嫁さんは入つてくるわけで、新しい家庭を自分たちが作り上げていくには、物理的な場も精神的な場も作り上げていかなければならない、そういった内側の問題と、さらに問題を発展させて、たとえばマスコミなりもつと広い社会なりが、農村、農家は魅力がないというふうなことを作り上げてゐるということに問題があるということも出ました。それからもう一つは実質的に、農村を日本の社会全体の中で、ある意味では見放してゐるところがあるのじゃないかと思ひます。都会へ就職する子の行く末は社会が見つめてゐるけれども、農村に残る子どもたちの行く末は見つめてゐないじゃないか、そういった

たこと全体を通して自分たちの力で、あるいは社会全体の力で農家を魅力あるものにしていかなければならない、というようなことだつたと思うのです。では今度はどういふうな人間関係を結んでいつたらいのかということ、たとえば小づかいが少ないとか遊びに出られないとかという問題もそういう面から、農家に嫁がこない問題も含め、嫁、あるいは主婦がはたして十分な精神生活を送れるんだらうかという問題があると思うのです。労働の過重から育児がおろそかになつて、自分の次の世代を十分に育てたいと思つても、自分の向上をはかりたいと思つてもなかなかそういう場面が作り出せないという問題があると思うのです。そういったことをもうちよつと突つ込んで考えていただきたいと思うのです。

森田 農家の嫁は職業婦人といえると思います。だから八時間労働とはいませんが、今日しなければならぬ仕事をしたあとの時間は自由にさせなければいけないでしょう。そこで初めて自分の修養も教養もとれると思うのです。自分の仕事や家事が済んだら自分の部屋に入つて本を読もうと何をしようとかまわぬふんいさを家庭に持つことが必要だと思っています。

坂本 自由な時間を嫁さんに与えたいという話でしたが、私たちの場合はとてもそれだけの余裕がいません。結局経済的な問題が影響してくるわけですが、とにかくぎりぎりまで働かないと生活していけないのです。家の経済力を増すということが第一だと思っています。

田村 せめて子どもを育て、世話することは認めてもらいたいものです。育児は嫁の仕事だからと認識してもらいたいのです。

柳田 たとえば、男の人がたばこを飲んでゐる間に野菜洗いや洗た

くをしておかなければいけないという考えが男の中にあつたし、女自身も、すわつてゐる間にお乳を飲ませておこりという考え方が残つていたんじゃないかと思うのです。いまの農業では家事もりつばな一つの仕事として家族にわかつてもらひ、自分もその努力をしていかなければならないと思うのです。

多田 同感です。農家の主婦は共かせぎと同じですから、国や地域社会が共かせぎと認め、保育所などの設備を充実して、安心して野良で仕事ができるようにしてほしいと思うのです。子どものめんどろが見られないせいか、季節保育所に集まつてくる農家の子どもたちにはやけどと、けがやひびが多いのに驚きます。季節保育所では保育の人員費も一箇所あたり六百円で、それを、保育の人数でわけるので、農家の手間が非常に高い時に保育の人員費がそんなに安くて、奉仕の精神がなかつたらできないのです。そういう奉仕の精神がなければできないような社会の仕組みだけでは、解決ができません。

広瀬 子どもにかまけていたら農作業がおくれるし、農作業の方を一生けんめいやれば、どうしても子どもがおろそかになる、季節保育所はおしつこを教えるようにならないと預からない。それ以前の子どもを預かつてくれるところがないことにはどうにもならないのです。あまり野良へ出ない人などに子どもを見てもらうということになつたのですが場所がないのです。場所から作つていかなければならないのです。

田崎 季節保育所はどういう場所を利用しているのですか。

多田 最初は私のうちを解放していたんですが、被害は甚大なんです。割れる、戸のさんはとれる、土手はくずす、畑には入るで、だんだん子どもも多くなつたので、部落の区長さんやみな

さん方に苦勞いただいて、公民館をお借りしたんです。ところが公民館とは名ばかりで、雨漏りはする、床は落ちていてしょう。預ける方も預かつている私たちも心配でしょうがないのです。床に板を張れば、その板につまずいてあぶない、屋根も直してもらえないのです。雨の日は休みにしていますが、何しろ農村にいい施設がない限りは、なかなか私たち婦人が労働の重荷から解放されなと思うのです。

広瀬 公民館とかお寺での季節保育所も、施設が不備では、やはりだめですね。小単位のところて独立した保育所を作つてほしいと思うのです。

森田 私の方は私立の常設のがあつて職員も市の職員と同じことによつていて移動などもあります。

広瀬 それは乳児じゃないでしょう。それ以前の子どもたちについていつているのです。

多田 福島では、そういう母親たちの願いから、乳幼児を預かる保育所も二カ所できています。都会にばかりそういうものができていくような気がするのですが、私たちのアンビールが足りないのじゃないでしょうか。

松原 育児の問題から託児所の問題に発展しましたが、確かにいまいわれたとおりで、こういつたことをもつと強く政治なり社会なりにアンビールしていかなければと思うのです。特にご指摘のように地方自治団体でやつている保育所施設はかなり整備されてきたと思うのですが、もつと必要なのは乳児の問題だと思ふのです。そこで、政治全体に頼むというその頼み方も、もつと身近な政治の中から私は解決していかなければいけないのじゃないかと思うのです。婦人会議で語られることも一つの刺激になると思

うのですが、市町村の中、部落の中からそういう声を大きくしていつて身近なところから解決していかなければならないのじゃないでしょうか。でこの問題はもちろん結論は出ませんが、そういうところまで要求するところまでいつたと思ふのです。職業問題の部会では中心的に語られている問題としますので、農村部会の声をお伝えしましょう。さて、家事労働の中で、どのようにして婦人たちが余暇を作り出しているかという問題にもう一度立ち返りたいと思います。

里吉 私たちは機械化によつて余暇が出たので、テレビを見たり集会に出たりしてレクリエーション方面に多く使つています。

松原 どうしたら余暇を作り出せるかという問題について。

布田 余暇ができたなら、どんなにか生活が楽しくなるかということとはわかつています。計画性のない生活が余暇を生み出せないものになるのじゃないかと思ひます。その計画性を見出すためにいろいろ方法がありますが、共同経営で農業をしていると余暇が生み出せるのではないのでしょうか。

田村 ひまというものは自分で作らなければいけないといわれますが、そのために洗濯機を買つたり、炊飯器を買つたりして家事労働を詰めて余暇を出すというのがありますが、それはめぐまれた方の話で、余暇を生み出せない人は農村にはうんとあるのです。それをお互いの人情で手伝つてあげるといふ気持ちにならなかつたら余暇は出ないですよ、いま私たちのところでは手伝うという恩着せがましいことではなくて、あなたのところへ草取りに行くから早くやつちやいなさいというふうについて、電化設備のできない人を助けてあげています。

森田 組織を持つと、どうしても集会に行きたい。だから前の日

は少し時間が長くなつても片づける。家族全体がそれに協力してくれる。そういうことはやはり組織のありがたじやないかと思ひます。

柳田 農家の婦人の生活はとにかく大へんだということはよくわかるのですが、台所の仕事をするのもむだがあつちこつちにあるんじゃないかと思うのです。ですから何時間というたくさんさんの余暇を見つけることは無理でも、こま切れの時間を余暇として大事に使う技術を勉強して、少しでも仕事の設計を立てられるようになりたひものだと思ひます。

木沢 毎日畑へ入つてゐるのになかなか余暇がありませんが、町の木屋さんから一日十五円で婦人雑誌を三日借ります。

返すまでに全部読みたいと思つてねぼうしそうな時は、主人の母に朝を頼んでおそくまでよんでいます。母が理解があつて実の母よりよくなつてゐます。ものを書く時も、そうやつて母が助けてくれます。

松原 農家に嫁がこなくなつた問題からさらに發展して、それじや入つてきた人たちが精神生活の面で楽しい生活ができるかといふことから余暇の問題に入つたわけですが、その余暇の問題に入つたわけですが、その余暇を作り出すためには、一つには農家自体の経済力を増さなければならぬし、もう一つは、農村の過重労働を軽減するための社会的な設備がなければ困るじやないかといふこと、この二つの点が外からの問題として存在するわけですが、それから内側の問題としては、やはり生活の設計をすることによつて余暇を見出し出すといふことが考えられるのじやないか、ただその生活の設計をする場合に、個人だけでやつていたんでは足りないと思ひます。つまり家庭生活の消費生活の面の設計をす

るためには、それと結びついた生産面経営面での設計が伴わなければできない。個人の生産生活と消費生活に結びついた全体の設計をしなければならぬ。その全体の設計をするためには、家全体の人がその設計に応じた仕事をそれぞれやつてくれなければ困るということになるわけですが、それで前に話し合ひました家庭の中の人間関係の問題が再びそこへ出てくると思ひます。夫と妻がもつと計画性のある生活を積み上げていく。それからおしゆうとさんと嫁も、こういつたことを話し合ひなければいけないのじやないかと考えるわけです。新しい変化に應じた新しい家庭生活といふことをまとめる形で、毎日の生活の場、あるいは考え方が家族員同士の間でお互ひに違つてゐる。兼業によつてうちにいない人、あるいは世代によつても違つてゐる。お互ひに違つた立場を考え合つて新しい人間関係を作るためにどうしたらいいかといふことも、新しい秩序を作るという方向でもう一度午後まゝとめてみたいと思ひます。

(休憩)

松原 世代によつてあるいは嫁としゆうとめの地位の違いによつて、家族の人々の間の考え方やそれからその生活の仕方が、同じ考へて同じような労働の仕方では農家生活が営まれていた時代とは違つて、変化してきていると思ひます。その変化の中でどのようにしてお互いの立場を認め合いながら新しい人間関係を確立したらよいのか、この問題をまよめの方で、しかも新しい秩序を確立するためにはどうしたらよいかという方向でもう少し話し合いを進めたいと思ひます。

坂本 先ほどもお話しが出たと思いますが、老後の問題について私たちのグループで話し合つたことがあるのです。そのとき近くお嫁さんをもらわれる人が、一切財布を嫁さんにまかすといわれましたが、ある人がそれはいけない、もし全部まかしてしまつたら、今度は、自分が小づかいがほしいときに嫁さんにいにくいといふのです。せめて自分の名義にして一反でも二反でも畑なり田なりをとつておくのが一番利口じやないかという話しが出ましたが、どう考えたらいいでしょう。

田村 うちの方では隠居面というのがあります。その田でとれた米は全部おじいさんおばあさんの小づかいです。

坂本 法律的に土地の所有権を持つているのですか。

田村 そんなことはしません。家族の中ですから、話し合いだけです。

森田 土地の一つのいい習慣ですね。

もう一つ、私たちが前進するのを阻害する因襲の問題を、もう少し話し合つてそこから前の方に積み上げていきたいと思ひますが、

本村 私の方の農村地帯は現金収入がないのに、周囲に気がねを

流谷 母親が娘のためにしてやりたいという気持はわかるのですが、若い人たちは家の財産をみて、このくらい支度をしてもらつてもいいんだという、そんな考えがこのごろ出てきているようなんです。

森田 郡内の女子青年団の人たちと話したんですが、費用を結婚はしたくない、トラクタに一台も二台も持つていかなければならないようなところへは行きたくない、そういうことを婦人会の立場の人がもう少し改革するようにしてもらえないものかという声もあつたのです。

淀谷 私の方ではそうじゃないのです、若い人たちが世間体を気にして経費は幾らかかつても、親やあとをとつた人たちがまかなつていくので、それではやはり自分は世間並みを考えてある程度は持つていかなかつたら、しんぽうできないということになっていますよ。

松原 因襲だから改めなければならないということだけじゃなくてもつと知的にといいますか、合理的に考えた形で主張される場合にもそれに並んで出てくるわけですね。たとえば嫁入りの道具の問題、因襲だから派手にしない方がいいという考え方、もう一つは女の子でも財産分与を受ける権利があるのだから、そのかわりとして嫁入り道具を持つていくということがあるわけですね。ただ一方的に因襲で派手にするのはやめようじゃないか、手なべさげてもうこうじゃないかというようにすることで解決する問題じゃないかと思ひます。そういう点で今の二つのことは今後に大きな問題をはらんでいると思ひます。ただ、嫁入り道具が多い方がいいか少ない方がいいかという問題でなくて、これらの家庭生活を考えて話し合ふなければならないことと思ひます。

柳田 私の地方でも衣装見せというのがあります。これだけのもの

ますし結婚の方もよくなつたのです。

石川 私たちの方は「ここに公会」という、お嫁さんをとる前の人の会があるのです。大体平均十人くらいですが、大きな暮をこしらえてかけるようになったのです。婦人会の貸し衣装は二十年も前からやつております。

木沢 結婚の方はよくわかりましたが、孫の出産祝ということはどういふふうに改善されていますか。

広瀬 それは、いまだに古いのです。いままで二番目の子どもまでは実家で生むことになつていたんです。陣痛が起きたらリヤカーでもハイヤーにでも乗つて、それつと実家へ飛ばすのですよ、それじや大へんだというので五、六年前に、母子センターができたんです。一切の費用は六千円、ハイヤー代は半額、そこへかけつけるのです。費用は実家とつき先とで半々に持つようになつたのです。しかし、ある人がおかしい話じやないか。実家に何の関係がある。自分の家の孫だから自分が出すといひ出したのです。ところがおばあさんは、自分のところだけ出すことはないじやないかといつたそうです。そうしたらお前もやがては孫に見てもらうだろう、やつぱり自分の家のことは自分でやらなければならぬと断固としていつたそうです。そして、その人は母子センターのお金を自分の方で全部出したのです。それがいい例になつて、みんなとつき先で出さなければならぬようにになりました。実家では、タンス一本と子どものふだんの上着みたいなのを二、三枚だけ作つていけばいいわけです。

やつぱり初めての子供の場合は里にいくのですよ。若い人もいけないかもしれせんけれども年寄りもいけないのです。

ある人が八カ月で早産したら、実家の人があなたのところで生ましてすまなかつたと、とつき先にあやまりにきたんです。

そうしたらとつき先の人は、ほんとうにこんなところで生んでといい、実家の親は娘に、お前こんなところで生んでしようがないといつたそうです。そこで若い人たちが、どこの子を生んだというのか、この子はどこの子だろうといつたので姑さんは小さくなつてしまい、それからあまりいわなくなつたそうです。若い人たちはそういうときに立ち上らなければならぬと思います。

布田 農村にも産院などのそういう施設があるのですか。

広瀬 私のところでは町にセンターがあるのです。そこでは一切そろつていて産婦のねまきだけ持つていけばいいのです。一週間奥立ちまで産院の方でみてそれで六千五百円なんです。初産の人はなれてもないので、実家へ三十日くらいは休みにきます。いまでは二番目の子供まで実家にきましたが、大いにとつき先で生むようになりました。

田村 そのセンターの経営は市でしているのですか。

広瀬 町です。

田村 その町の経営でいろいろな品物もそろえておくわけでしよう。広瀬 そうです。

田村 そういふところには助産婦さんが配属されているのですか。

広瀬 看護婦さんがいます。

田村 助産婦さんや医者さんはいないのですか。

広瀬 母子センターには医者は専属にいないのです。広い町村に一つです。近くの助産婦さんに健康診断のことをやつてもらい、いよいよ母子センターに行くという時に、いつもかかりつけの助産婦さんにやつてもらいたい人はその人を連れていけるわけ

です。

田村 そりすると赤ちゃんを産む場所として設けてあるのですね
広瀬 ええ、ただそれだけです。でも必要に応じてお医者さんも
きますよ。

岩淵(ともし) 冠婚葬祭ですが、私の周囲では昔は派手にやりましたが、
今は全然そういうことはありません。孫が生まれると大体病院
に入つて実家でみるということはほとんどありません。

松原 皆さんのお話しを聞いてみると、因襲じやなくて心の中に
残つてゐる問題だと思ひます。隣近所に来たお嫁さんの荷物
がみたいとか、子どもは実家で産まなくちやいけないじやない
かという気がねだとか、嫁に行つた先へのお嫁さん自身の中に
ある気がねだとか、そういうつたことが心の問題として残つて
ゐるのじやないかというふうに感じるのです。さきほどお出しに
なつたようにいろいろな事からの中で、ある程度解決がついて
きている、解決がついてきているというところははや因襲じや
なくてやるうと思へばできるのだというところまでできていると
思います。そういうつたことが、ここで語られなければならない
ことだと思ひます。

森田 因襲の中にも良いこともあり、存続していく必要のある
ものもあると思ひますが、私たちが問題にしたいのは、それ
によつて自分が基本的な生活をおびやかしてまでも結婚費用
に、あるいは孫ができたためにかける。私たちの方では孫が
できると子嫁取りといつて結婚式の次くらいの費用をかける
のです。婚家の生活をおびやかすくらいの費用をかけている、
そういうことが問題でしょう。

森田 郡内の女子青年団の人たちと話したんですが、費用をかけた
結婚はしたくない、トラックに一台も二台も持つていかなければ
ならないようなところへは行きたくない、そういうことを婦人会
の立場の人がもう少し改革するようにしてもらえないものかとい
う声もあつたのです。

淀谷 私の方ではそうじやないのです、若い人たちが世間体を気に
して経費は幾らかかつても、親やあとをとつた人たちがまかなつ
ていくので、それではやはり自分は世間並みを考へてある程度は
持つていかなかつたら、しんぼりでできないといふことをいいます
よ。

松原 因襲だから改めなければならないといふことだけじやなくて
もつと知的にといひますか、合理的に考へた形で主張される場合
もそれに並んで出てくるわけですね。たとえば嫁入りの道具の問
題、因襲だから派手にしない方がいいという考へ方、もう一つは
女の子でも財産分与を受ける権利があるのだから、そのかわりと
して嫁入り道具を持つていくといふことがあるわけですね。ただ一
方がいいという考へ方、もう一つは、女の子でも財産分与を受け
る権利があるのだから、そのかわりとして嫁入り道具を持つてい
くといふことがあるわけですね。ただ一方的に因襲で派手にするの
はやめようじやないか、手なべさげてもいこうじやないかといふ
ようなことで解決する問題じやないかと思ひます。そういう点で
今の二つのことは今後に大きな問題をはらんでゐると思ひます。
ただ、嫁入り道具が多い方がいいか少ない方がいいかといふ問題で
なくて、これからの家庭生活を考へて論じ合わなければならぬ
ことじやないかと思ひます。

柳田 私の地方でも衣装見せといふのがあります。これだけのもの

を持たせまうということで見せまうし、またもらつたりちもその日にするわけです。私の母は、あなたは公務員だから荷物はめ先へ送つてしまつたことにして衣装見せはやらないというですが、私はやるというたのです。今までダンスの中にある、仙や錦紗、ふとはハッタンでいつた衣装見せではなくて、お世話になりましたというつもりで、ちゃんと計算された荷物、農家に行くのなら、錦紗の着物でなくて改良作業着とかワラふとんとかをちゃんといんなに見てもらつていきたいと思ひます。結婚に対する考え方が、みんなあやふやなんじゃないかと思ひのです。私は若い女の人たちに、もしあなたたちお嫁さんに行くときには、主人になる人によらず、あなたのお母さんといふ人かしないつもりだが、もしけんかをした場合に私をかばつてくれませんかと思ひながら、向かつて聞いてみて、すぐに「うん」といふた行きなさい、返事があやふやだつたらあきらめなさい。それくらいちゃんとした返事のできる男の人なら、またそういう人を育てたお母さんだつたら着物のことでとやかくいつたりいふこともなく、体と心をもらうのだということがわかるだらう。これは理想論だと思ひますが、若いからそういうことがきなくては、因襲を前向きに使うというのですか、マイナスプラスに切りかえていく努力をしなけれならぬと思ひます。できた衣装にしても感謝の気持ちで見てもらつてよかつたね、苦労したけれどもお嫁さんになる年頃になつたねと喜んでらつてですね。あとで錦紗が入つていたかどうかということなく、そうした習慣が成り立つていくことなら私はいいことと思ひのです。

松原　私が申したかつたことをかなりくわしくお話したわけですが、まだ残つてゐるのは結婚というのは家と家との結婚じゃないかという考え方ですね。もう若い人同士で、ある程度結婚の際の話し合いができるようなふんいきまでできていると思ひます。だから嫁入り道具の問題でも自分の実家の経済状態、経営状態に応じて若い本人同士がきめてやらなければいけないことで、その上で若い人がお姑さんやお母さんと話し合うということにならなければ、因襲をかえていくことにならないのじゃないか、因襲をかえることについては若い人自身心がまえがまだ足りないところがあるのじゃないかと思ひます。

この辺で特別会議員の方のご意見を。

佐藤（特別会議員）　私は、九年前にも出席したのですが、その時も大体同じような問題を討議しました。けれどもきのうからきよりにかけての話し合いをきいていて、内部的な問題は変わつていませんが、特に新しく感じたことは生産と家計の問題、経営と婦人の労働のこと、営農の中で企業として計画され、それがうまくいくように運営されなければならぬ企業的な農業になつたこと、そういうことは、最近新しく出てきた農家の主婦の問題だということ。農家の嫁は、主婦は、共かせぎであり、一人の職業婦人であるという立場から乳児の問題、託児の問題が取り上げられたということ。外部的な問題としては組織の力で解決するような点、農業基本法ができて選択的拡大を押し進める中で、生産物価格の安定をはかるために、経営の面まで婦人自身がり組まなければ確保できないのじゃないかというようなことなど、私が参加した会議とは、大へん問題がかわつて来ており、みなさんが新しい農業に積極的にとりこんでいられるご様子で、私も農家の主婦の立場から、うれしく、たの

しく思いました。

関（特別会議員） 世間体についてですが、私たちが今までどうしも家と家と通してその人を見るとか職業を通じてその人を見るとか、そういうような考え方だったのですが、個人一人一人をよく見るといふ考え方をしようとの機会に学びました。

松原 変化に応じた新しい農家生活をより進めていくために、組織をどのように進めたいのか、あるいは今ある組織はどういうふうな工会に持つていつたらいのか、もう一べん振返つていただきます。

多田 若妻会というのを自主的にやるようになって三年になります。いつも私たちと婦人会と背中合わせにならないように交流も持つようにしたり、また私たちが婦人会の力で旅行できるようになったり、年に一回ずつ文集を発行するようになったりしています。私たちが会員個人の問題でなくて、自分の生活、個人の行動に連帯責任があるというような考え方、そして自分の生活がみんなに迷惑をかけないような方針でやつていくように成功してきつつあります。

岩淵（テル） 私の場合は悪い例ですが。主人たちは、十五年前農協に入つて農政連というもので営農技術を学んでどんどん先に行つてしまふのです。それでは夫婦の間の話し合いも何もなくなつてしまふわけです。何とか主人たちについていかなければならない、営農の面にしても家庭生活の面にしても、夫婦である以上話の上で合うようにしていかなければならないといつて、農研クラブに入つている人たちの奥さんが、主人についていけるようなクラブを持ちたいということをご主人にいつたわけです。自分たちが直接動いて作ると周囲や姑さんたちに相当

気がねをしなくちやなりませんから、主人を動かして、主人たちの中のリーダー格の人が一軒一軒会員のうちを回つてくださったつて組織づけてくれたのです。最初はとても張り込んで普及員の世話で毎月行を持つていたのですが、行事倒れになつてしまつたのです。普及所のお世話になり、しまいに農協関係に入ると農協のお世話になる。自分たちのグループの勉強しやなくてそういう場所に出ていかなければならない。そうするとそれだけの費用はない。これから先どうしてやつていつたらいのかということにぶつかつてしまつて、今のところグループの曲がり角というのでしようか。今のところ何も活動できなくなつてしまいました。結成した当時は自分たちの立場は、直接営農者の立場ではなかつたのです。ところが八年間のうちには直接自分が営農設計を年とつた両親に代わつて握らなければならぬ、自分で営農をやらなければならぬということになつたのです。子どもの教育のうえでも、母親学級のグループ活動をするひまがない、母親学級のグループがあるやなしになつてしまつてゐる。私は世の中が変貌していくんだからグループの形もそのままであつていいはずはないと思いますが、それなりに進んでいつてもいいと思つて解釈しているのです。

坂本 私たちは開拓という特殊の場合ですが、一般の既存農家に比べて確かによくいつてゐると思います。私たちも一般農家の人と同じように地域団体に入つております。私たち二十戸の地域の開拓地では、一カ月一べんずつグループの会を開いております。グループを運営していくうえに話題になるのはやはり年配者の問題です。どうしても四十代から五十代にかけては、出席率が悪かつたり話にのつてこられなかつたりするのです。そういう問題をどうするかが一つの

懸案になつてゐるのです。

森 組織が非常に盛んになつたといわれたのですが、それまでにいろいろな批判などがあつたと思ひます。それをどういうふうにして切り抜けてこられたかということをお聞かせください。

多田 最初一年間くらいは会に出ていつでも姑さんの悪口や陰口をいう会では何にもならないというような批判を受けたんです。私たちはそれを素直に受け取つて、いくら集まつて努力してもそれが正しい方向に努力しないことには、集まつたつてかえつてマイナスの結果だということを話し合ひました。婦人会の會長さんも力をかしてくださつて、いろんな方面から協力されるようないい会に進めていこうということを頭に入れて計画を立ててきました。

森 その計画はみんなで集まつて話し合つた上できめられたのですか。

多田 委員長、副委員長、会計二人、書記一人をおきました。委員長は一年ごとなんです、若い妻ですからことは赤ちゃんができなくても、来年はどうだかわからない体でしょう。だから二年三年もやれないのです。前の會長さんは次は顧問になつて計画に協力します。

布田 組織というとき大きなものを想像してしまふのですが、私たちに直接関係のあることでしたらみんな真剣になると思うのです。そのグループの活動で私たちが一番大切な問題はどうかということをお話し合つて、そういう問題がある人だけの集まりならばそんなに行きづまりはないのじやないかと思うのです。特別會議員の関さんがグループ活動・組織の活動で成功してゐるそうですが。

関 (特別會議員)

私たちのグループは同志グループなんです。私たちの土地へ水道が引けて水々の時間と労働力がういたのです。すぐくうれしかつたのです。せつかくこの時間がういたのだから、畑や田んぼへ飛んでいつてはもつたないから、ぜひこの機会にみんなで集まりを持ちたいということで、それがきっかけでグループが生まれたのです。こととして八年目です。最初は私もどういう人たちが集まつたらいいか、地域婦人会との関係もあり、その同志グループも地域婦人会の小さな地区を分けて、その中から出られる方は出てきてくださいと、そういうふうにしたわけです。最初は十八人が九人集まつたのです。それは、ほんとうに勉強したいという人とレクリエーション的に出てきた人、あの人が行くから行きたいといふのでついでにきた人、とにかく農村は集まつて話し合ひの場を持つだけがせい一ぱいで、だんだんやつてゐるうちに少しづつ人数がへつてきていまは八人なんです。最初はどんなことをしたらいいか、話し合ひの場を持ちたいという莫然としたことわかつてゐるが、料理の講習会をやつたり科目だけが一ぱいになったのです。そのうち一つのことをまとまつて勉強した方がいいのじやないか、いちばん手近な問題としてはどういふことがいふだろうか、自分たちの食べ物を調べしてみようといふようなことに、まとまつていきました。そして農家でありながら大豆が不足してゐる、それを食べるにはどうしたらいいだろうといふようにやつてきました。

坂本 八人の方近所なんですか。

関 歩いて五分以内の人なんです。

坂本 グループでない方もおられるのですか。

関 もし入りたい人は来てくださいということになつております。

岩淵（ともえ） 集まる場所はどこですか。

関 大体個人のうちを持ち回つてします。

岩淵（ともえ） 集会の時間は夜ですか、昼ですか。

関 そこに問題があるのです。今までは一応、水道が引けて時間が余つたから勉強しようということでも集まつたでしょう。で、昼間二時間くらい、それも一つの勉強だからということでも、次の年あたりまで昼間集まる訓練をしたわけですが、私の地区は、精密工業が盛んになつてきたので、農繁期以外にはみんな勤めに出るということになつたのです。それで今は夜やるようにしています。集りに出るより一銭でもかせぐ方がいいという事で、グループの行き方も今までは事情が変わつてきました。あしたの作業に差しつかえないような時間でやめなければならぬし、これからは一時間でも実のある話し合いのできるように、時間の使い方の勉強もしていきたいと思うのです。

木沢 そのグループの経費はどういうふうに捻出されておりますか。

関 毎月一人十円ずつで大体まかなえます。

木沢 規則とか定款とかというようなことはきめておられますか。

関 特にありません。話し合ひでやつてゐるのです。

森田 年配の方々が組織の呼びかけにも集まらないことが問題になつてゐるようには思うのです。婦人会でも五十才くらいで引退して出なくなりまゝ。そういうことがかゝつて家庭の民主化、ひいては農村の民主化にマイナスになつてゐるというのを感じてゐるんです。これではいけないと思ひまして、一昨年から婦人会の行事の中に、そういう年配の人たちが入らなければならぬような行事を仕組むことに工夫したんです。たとえば孫

の守りの仕方とか、料理をする場合も、家で炊事をやつてゐる人は出てくださいと呼びかけるようにしました。また、部落で話し合ひの会なんかを持つときに、今度は年いつた人だけ集まつてほしいというように呼びかけました。初めは、私たちを引っぱり出してというやうな不平もだいがりましたが、今は、みんなと話すことによつて若返つて大へん愉快だというわけで、出席率がよくなつたのです。それで次には若い人たちと一しよに集まるという気持ちも湧いてきて、若い人たちの声を聞き、いままでは若い人たちの意見や気持ちの受け取り方が間違つてゐたんだと気がつくこともあつたりするやうです。姑さんがどんどん出てくれば若い人たちも非常に出やすい空気になります。いまのところ成功してゐるのではないかと思ひます。特にことは「みのり学級」という年寄りの方々の会ができて、十二カ村の部落部落にグループを持つと、その村の因襲といひますか、習慣といひますか、そういうことを毎月話し合つてゐます。そうすると、どんどん改めていかなければならぬことがあるのに初めて気がついたのです。

娘の婚嫁へのつけ届け、季節季節におまんじゅうとかおもちを里方から持つていく習慣がありますが、小さい村でしたら村じゅうへ配られ、大きい部落では親戚にくばります。最近はお産屋に頼むので三千円とか五千円もかかります。それが相当にたいへんなうえもつた人の方でも、それじや特別にしなればならぬという事でめんどうくさくもあり喜ばれないのに、みんな習慣になつてゐるからやつてゐる、そういうことを一つの部落が廃止しました。それを聞いたもう一つの部落もやめることになつて、十二カ村のうち四つやめたんです。私たちの部落も、研究しなければならぬといひ出して、では葬式のときの習慣には非常に悪

いものもあると思われるから、今月はそれを取り上げて研究し取りやめようと、今のところ若い人たちのグループより以上に年配の人のグループが動き出して、成功しております。

松原 私に一つひつかかた言葉があるのですが、組織を作るときに家なのか個人なのかということをおつしやつたのですが。

園(特別会議員) 家でなくて個人なのです。

松原 いままで地域婦人会や地域グループに、何か家の資格で入るといふふうな感じがやはり残っているのです。本来婦人会という名前ならば婦人全部入らなければならないと思うのに、一軒で一人しか入れないというふうに考えられていて、だから嫁がくると姑さんが譲るという考えが出来ます。そういつたことがいまの時代の新しい生活のあり方に応じた組織なんだろうかという疑問が起こつてくるのです。それが、成功の例、失敗の例のお話があつたときにやつぱりひつかかつてくるのじやないかと思ひます。組織は個人の資格で、個人のものの考え方、あるいは個人の持つてゐる生活の欲求、個人の持つてゐる利害だとか、こういつたものを満たすために人々は組織の中に入つていくべきものだ、そうかといつて、組織はこういう固定されたものでこの組織はこういうことをやらなければいけないのだと定めるべきものであるはずがないわけです。組織というものが前提に立つておつて、みんな入らなければならぬ、最初のうちはいいが、そのうち集まりが悪くなつてくる。その手段として派手な行事をやる。行事をやれば集まることは集まるが、終つてしまえばまた行事を考えなければならぬ。行事を追つかけて人々を引つぱり込むことしか考えられなくなる。社会が変化してくれば人々の考え方がかわつてきます。組織というも

のも、そういう人々の立場やなんかに応じて考えられるべきもので、地域ぐるみの組織を作らなくちやならないかという考え方は、やはり基本的に改めなければいけないのじやないかと思ひます。

長野の場合も、地域単位が組織を作る基礎になつてゐるわけじやない。同じ勉強をしたい、あるいはレクリエーションをやりたいという考え方も起こつてゐると思うのです。そうでないと組織に永続性がなくなる。組織というものははじめから大きくすることはないというお話につながるわけですね。新しく時代が変化してゐる現在の社会情勢において、これからあるべき組織の姿というものを考えていかなければならないのじやないかと思うのです。ここで、すでに組織づくり、運営を手がけておいての特別オブザーバーの団体代表の方々に、お話をうかがひましょう。

加勢(特別オブザーバー 全国漁協婦人部連絡協議会) 私は昨日から農業一色のお話の中で、大へんに落ちてゐた勉強に意欲を目を見張つてゐるところです。私どもの組織活動は十年來ですが、それは違つた形でしてゐました。全国漁協婦人部は皆さん方の組織から見たらおそいわけですが、あとから生まれたいことは、いろいろな文化の恩典に浴することが多いという点もあつて大へんしあわせな育ち方をしております。私は、まだ全国はよう見ておりませんが、出身地の北海道は大へん広範囲ですが、私たちは周囲十五里の小さな島の中で暮しております。七、八年前まではにしんのいくさ場でした、三月になりますと、薄曇りの中でヤンサノーという声がかかり、そうすると何百万何千万というお金をにしんが背負つてくるのだと思つておりました。それで生活ふくれ上がり、計画経済などという觀念は全く暮らしておりました。ところが二十八年をピークに三十年にはどん底に落ちました。どん底に落ちましてからこうしてはいられないという気持

になつたわけです。それで今の漁協婦人部というものを作るということになりましたが、地域には婦人会も前からありましたのでこんな小さなところで婦人の集りを二つ作る必要はないといわれました。その中で私たちは前から婦人会をやつてこられた方々のことも考えながら、足ぶみをしておりました。ところが組織の力なしには経済立てなおしができなくなつたのです。個人個人がどう血を吐いて叫んでもどうにもならない貧乏になつたものですから、みんなの力を集めたら何とかなるんじゃないかということではめたのが漁協婦人部の始まりです。例外なく沿岸漁村というのは貧乏の代名詞のように思われていますが、そうではあるのですけれども、いまは非常に明るく立ち上がつておるのです。その組織作りは量よりは質ということで、お話しの中にも出ていましたが、一人が百歩前進するよりも百人が一歩前進する。千人が半歩前進するよう努力するという考え方です。そして握ぎり合つた手に血の通い合うような活動をしようということをやつております。ですから特別に目立つた伸び方はまだ外に見えませんが、抑留漁夫の送還問題とかと退治の問題とか、出かせぎの問題、それに関して育児、保育所の問題など、自分たちの主張をはつきり現わすという傾向が見られまして、主人たちがやつてくれるからいいさという考え方はだんだんなくなつてきました。そして何といつても一人の力は弱いけれどもお互いの結合は大きな力になつてくると、どんな困難もある程度解決が可能なんだと考えるようになりしました。老後の問題もいろいろ経済にからんでおりますので貯蓄も始めております。あしたも楽しく元気に暮らす家庭作りを組織のスローガンにしております。

松原 ここでは組織そのもののあり方みたいなことが語られたわけ

ですが、組織を作つて、それじや家庭生活をどう改善していくたらいいか、改善していくために組織をどう利用するかという問題それからもう一つ、やはりある程度政治的に解決しなければならぬ問題もあると思うのです。政治といつても大きな、国の政治だけの問題じやなくて、先ほどありました託児所の問題も町の政治、村の政治、県の政治として解決しなければならぬという問題もあるわけです。そういつたことに政治の力があるべきだといふふうに考えます、そういつたことを次に話し合つていきたいと思ひます。組織がなぜ行きづまるのか、あるいは組織をよくするためにどうすればいいかという問題がいろいろ出てきたわけです。人々の持つてゐる考え方や欲求、あるいは個人個人の持つてゐる利害みたいなものを、そういつたことに抵抗する、それを組織の力で解決するということを望んで集まりでできる組織がほんとうに永続性のある、あるいはほんとうに実のある組織になつていくのだといふところまできたと思ひます。このへんで会議のテーマである生活秩序とは何かといふことを話し合いたいと思ひます。秩序といふのは何かといひますと、上からかういふ秩序でやれといふふうにおりてくるものではないですね、かつてはそういう秩序もあつたでしょうが、新しい秩序を求められる原因は、皆さん自身のおかれてゐる立場あるいは社会が動いてゐるからだと思ひます。その動いてゐる中で、開会式の朝永先生のお話しにあつたように、全体の流れとしては一つの方向に動いてゐても、小さい渦は反対の方向にあつたり、よどんでいたり渦巻いてゐて、そこに摩擦が起こつてゐるところに問題があるので、全体の流れの中にどう適応して、新しい人間として生きていくかといふところに新しい秩序というものがあると私は考えるわけです。今問題点

もに自分たちも自分のしている農業も見捨てられたくないという
と語弊がありますが、農業を是が否でも続けてもらいたいという、
そういう考えは間違っているかもしれないけれども、それが親
の悲願なんです。自分の行動を、生活秩序と子供の理想に合った
ような生活に持つていきたいと思つて勉強しております。

田村 私は、二反歩が畑、そのうち一反歩が果樹と、果樹は見込み
があまりしつきましたから、洋野菜の方に切りかえてしまいたい
と思ひます。仕事のために自分を失なつて、そのために子どもの
信用を失なうというのは親としていやです。ですから自分を失な
わないように、洋野菜専門に切りかえて、米のほうは将来は自分
のうちに使うだけにしてしまいたいと思ひます。共同作業の方は
大きいところへくわれるという状態も、いまはあるので、小さい
同士で集まつて出荷があるかどうかともわかりませんが、あ
れば力の合つた人同士でお互いにやつていて、大きいところへ入
れていつてもらおうと考えております。

石川 私は専業農家で二ヘクタールでどうにか生活していけるので
す。けれども二人でやつていかなければなりませんので人の手を
わずらわさないような経営をやつていくことと、あとを継いでく
れる長男に百姓を楽しいものと、農村への魅力を作るのにはどう
いうふうにしたらいいものかと常々考え、人手不足の解消には機
械などを取り入れておりますが転機でたとえば二十万から三十
万くらいのお金がいります。それを生み出すために、裏作をしな
ければならない、しかし、裏作のために私たち女がよい労働過
重になつては収入がふえてもマイナスの面も出てくるので子ども
に農村は楽しいものだということのうえ付けをどういうふうにし
ていつたらいいかと考えております。

がずつと出てきたわけですが、今度はその問題をこれから
先どうしたらいいかということをつつ込んでいくわけです。第一
ここに出席なさつてゐる皆さん方がこれからどういうふうな経済
生活を営もうと考えていられるのかということ、そこからお聞
きしたいと思ひます。農業経営をどういうふうに進めていくか
経営の仕方、あるいは家庭の人間関係のあり方、あるいは共同化
あるいは組織の力で解決していくにはどうしたらいいかといふこ
とでどうぞ。

岩瀬(ともえ) 私のうちでは現金収入がないために酪農をやつて
おります。現在三頭ですが、今後酪農をやつていきたいと思ひます。
松原 酪農、農業を中心に専業農家ですね。

岩瀬(ともえ) そうです。

岩瀬(テル) 私は現在の農村の姿がどのようにかわろうとも、四
ヘクタールの大きな耕地を持つてゐる以上は何が何でもそれによ
つて生きていくという決心をしております。兄弟や親が周囲にお
りましたときは、たばこや蔬菜も取り入れていゝゆる多角経営を
やつておりましたが、これからは、いまの家庭の家族の構成に
じて、作付けなども研究していかなければならないと思ひます。
そこで現在では米麦一本でいきたいと思ひ、夫婦二人きりですか
ら機械化農業をしているのですが、機械化だけでは、畑の多い私
どもでは一番の問題になるのは除草なので、除草の面でのいろい
ろ農業の使い方や畑作物の研究もしなければならぬのです。子
どもは小学校なので、母親学級や授業参観に進んで出かけて、そ
のためには、時間を上手に使い、自分の立場もみじめにしないよ
うにしたいのです。忙しいからといつて、朝早くから夜おそくま
で働くというような姿を子どもに見せたくないと思ひます。子ど

広瀬 私はいわゆる五反百姓で私一人でやっています。五反歩では幾らもがいても絶対に生活が成りたないのです。いろいろ考えて五反歩を生かして養豚をやってみました。ひとりでは、とてもうまく経営できません。それで、同じ主婦農家が集まって共同に持つていけばいいと思いましたが、湿地で水田にしかできないのです。酪農やりたくてもできないのです。牧草もできませんから、まず最初に耕地整理と排水という問題を解決してもらつたらお互いの五反歩をフルに運転できます。そうやつて共同化でやつていきたいと考えています。

木沢 平坦部じやありませんので、耕耘機も使えないし、養蚕をやっているのです。でも養蚕をしても繭の価格が年々安定してないので生活が不安定ですから、主人とも相談して、町のタイルなどの下請け工場へも働きに出ることを考えています。

森 私も兼業主婦農家で田が八反と畑四反です。今までの農業のやり方を反省して、計画性を持つた作業をしていきたいと思うのです。機械化した意義を得るためにはやつぱり時間を大切に、きりつとした生活をして時間をもうけたいと思います。今までの生活を変える主体が私たち女であるとすれば、かわつていくところに秩序を立てることが、私たちの大きな責任だと思ふのです。

坂本 地理的条件から、兼業にいくのはとても無理です。いまからいくべき道は、全部が酪農に持つていつて、最後には専門的な共同経営ということにしなければ成り立つていけないと思います。最初気の合つた人同士で、だんだん共同に入つていきたいと思つております。

淀谷 私も兼業農家です。米なら米だけではやつていけないというお話をうかがつたのですが、私は、多角経営で収入が多くなつて

も、労働時間とか日数というものが多ければ、そろばんをはじくと赤字になつていくんじゃないかと思うのです。それである一つのものに重点を置いて労働時間を計算したならば、清算がとれいくのじやないかと思うのでそういう方へ近づいていっているのです。

石川 農村では朝から晩まで働くので時間の余裕はなかつた状態で、育児も教養も何もできなかったのです。それで私は時間ということとを生活の面に考えていかなければならないと思ひ、せめて六時間労働というところまではいかなくても、いままでより三十分は早くうちへ帰つて好きな仕事をして休むという方法に切りかえていきたいと努力しているのです。

松原 今後の経営のあり方の抱負を聞いたわけですが、心強く感じました。ただ皆さんのお話しの中には、質の違つた方向を考えておられる方がおるわけですね。専業農家としてやつていこうという方、兼業農家、特に主婦農家としてやつていこうという方と。しかし立場は違つても、農業というものをもつと採算のとれるものの、企業として農業を考えなければいけないということをいつておられたと思うのです。それをもう少し社会生活の、家庭生活の面にまで深めていえば、要するに、自分たちの子どもが喜んで生きてくれるような生活にしたい、そのためには自分たちの生活をみじめに子どもに映じさせないような農家にしたい。こういうつた考えと受け取れたわけですね。その方向として、一つは専業農家としてあるいは個別農家として大規模な、大げさな言葉を使えば私立農家としてそれを合理化していこうという考えと、もう一つは共同化、あるいは共同経営というもので合理的な企業としての農業に成り立たせようと、その二つがあつたと思うのです。いずれの方向をとるにしろ、農業を企業としてあるいは合理的な生産

をして管んでいこうとするお考えだと思うのです。この二つの方向に分けてもう一度家庭生活や家庭の中の人間関係にまで伸ばしてまとめの方向で話し合つていきたいと思うのです。先ず個別の農家として、自分たちをみじめにしない農業をするにはどうしたらいいのか、そのために農家生活をどう営んだらいいかというような方向で、きのうからの内容を考え合わせながら発言していただきます。

岩瀬(テル) 先ほど私は家族構成に見合つた作付けを考えるといいましたが、私のうちの場合は夫婦二人きりで働くという立場から、近所の人たちがやつている蔬菜作りの仲間入りをしながら、また自分のうちの経営の前進によつて自分のうちとしての一つの本筋を立てていくところに、ちよつと悩みがあるのです。しかし畑を企業として考えた場合にその畑を少しでも高度に利用しなければなりません。しかし高度に利用するためには労働力に制限があるので、私どもが考えているのは人手ということなんです。どうすれば手間をはぶいて労賃のコストを下げられるかというところが課題になつてゐるのです。それから家族の労働分担でも、私たち夫婦は畑、母は家内の仕事といつたようなはつきりしたことは、労働分担で一つの課題になると思います。

松原 今大へんいい意見が出たと思います。合理的な経営を進めていくということは、労働に見合つた収益を得ることだと思ひます。労働に見合つた収益を得るためには一方では労働力の節減をする、労働力の節減をしても同じ収益を得られる、それだけ生産が上がつたことになるわけですから、こういつた生産を考へることで、これは家庭の中だけで考へ切れないうことだと思ひます。そういうことを勉強し合うグループ作りや組織作

りの問題、それから勤めの問題というふうな形に發展するのじやないか、婦人自身のそういったグループ作りを積極的になつて、そのグループに男、女を問わず入つていくことが大きな方向でないかと思ひます。それからいま一つは家族の労働分担をはつきりさせるといふこと。これは単にだれか采配を振る人がいて仕事の割当をするといふことでなくてそれぞれの労働力、能力に応じて仕事をきちんと分ける。それを責任を持つてやり、そしてその労働の成果まではつきり計算できるようにする。そうすることを通じて一部では話し合いの場を作つていくと、こういう方向じやないかと思うのです。この点はきのうもかなり語り合つたと思うのですが、こういう労働分担をするといふことが、社会生活の問題、嫁としゅうとめの問題、家の中の話し合い、消費生活、社会生活の問題を解決していくよい方向だと思ひます。私個人としてはここが出発点じやないかと考へるのです。

松原 では、つぎに共同化の問題、主婦農家だけで共同化をするといふ問題を含めて討議してください。

広瀬 私のところは、湿田地帯ですから、米作一本やりです。耕地整理が進められるように計画ではなつていますが、それが進められたらイチゴなんかやつていきたいと思ひます。その場合主婦一人ではやれないので二、三人と共同してやつていけると思ひます。耕地整理をしなかつたら共同化はちよつとむずかしいでしよう。

松原 耕地整理は個人ではできないですね。これは県や市町村あるいは国家の計画、あるいは耕地整理組合の計画として進めなくてはならないわけですね。たとえば、婦人部の活動を見ると購売面での農協への協力くらいがせいぜいなんです、それではやつて

いけない段階まできている、生産面でもつと発言する段階まできていると思うのです。耕地整理を促進するには、そこに婦人の力が加わって計画を押し進めるといふ必要がありますね。広瀬 婦人の方で声が高くなつたことがあるのですけれども村のおやじさんたち、上に立つような人たちが自分の利益を考えて握りつぶす人がいるのです。握りつぶされても婦人の方で立ち上ればいいわけですが、まだ婦人の地位というものがそこまで上がっていないのです。握りつぶされてもまたきゆうつと盛り上げていけるように努力したいと思います。

坂本 まだ酪農については共同に入っておりませんが、行く行くは耕地一、五ヘクタールくらいではどうしてもやつていけないのが目に見えているから、今相談し合つていけるのです。しかしやつぱり中には共同というものに対して消極的な人があつて、そういう人たちをどういうふうにして共同していかうかということが大きな問題になつていけるのです。

田村 婦人の要求が上にいかないということで私たちもいろいろ苦しみましたが最後の答えとして、そういふ声を後援者協に持つていく人を婦人の中から立てなくちやということになつたのです。婦人会の上のほうの人は役場や農協の偉い人の奥さんが多いのでどうも都合が悪いのです。それで女の村会議員みたいなのを出そうじゃないかということで話し合つています。

御田 きいから生活の秩序と新しい農業のあり方ということが語られておりますが、朝永先生がおつしやつたように、農村はものすごい激流の中にあると思うのです。共同化するにも、きのうも話しに出たように、自分たちの要求が必要のところへ通つて、住みよい社会になるというためには、そういう激流の中で自分をしつかり立てていくことでしよう。今は共同化する段階にきてないとおつしやつた方がいましたが、農業の共同化、

生活の共同活動、いろんな共同化が今からずつと出てくると思うのです。そういう時代になりつばに對峙していける実力を持つ人間関係をつけるといふのが新しい農業のあり方や進み方の中で、女の人に大切なんじゃないかと思ひます。

多田 ほんとうにそうなんです、そのためにはやはり一人の声、一人の力ではできないから組織というものを作つて、若い人若い人婦人は婦人会で、老人は老人の組織を作り、そのうえで全体のつながりを持たせ、また農村だけでなく農村と都會の組織も何かの形で交流を持たせていかなければだめだと思ひます。

岩淵(テル) 農業をやつていていちばんくやしいと思うのは、作物を作つていながら、自分の作物に値段をきめられないということです。スイカにしろキュウリにしろたたかれるときにうんとたたかれるから、高いときにうんと取つてやれという根性があるのです。そのために不安定があるのです。

松原 その問題を解決するために組織化すること一つです。ね。一つは生産者自身がしつかりして政治に要求することです。婦人も大きく発言するためには生産コストというものはつきり握つていなければならぬと思ひます。

布田 その政治の問題ですけれども、政治の勉強をするのはよろしいけれども、政治運動とか政治活動ということは、組織の面では限界というものがきめられておるように思ひます。そういうような面について矛盾を感じていますが、もし農協婦人部で農業の問題についての勉強をしようと思つたら、どうしても政治活動のところまでいかなければならない。それでなければ中途半端なところでもどうすることもできない資金面に落ち入つてしまふのです。そのような面をどういうふうに理解したらいいかと思ひます。

松原 その点をうかがいましょうか。特別オブザーバーの方で、婦人組織の政治活動というような問題について一つ。

山崎特別オブザーバー 日本青年団協議会） お聞きしております。教え

られることが多かったのです。私たちの組織自身が太へん弱いのです。弱い理由は、ここに集まられた方はご自分の手と農業をやっているという強いものがあるのです。しかし、私たちの場合、娘やむすこであつて、手伝的に農業をやっている者をして小づかいでももらつて生活しているというのがほとんどです。そういう中で私たち母の歴史をもう一回この辺で勉強する必要があるのだということ、みんなレポートを出し合いました。いろいろ問題が出てきたのですが、きのうからずつと通して考えますのは、やはり家庭の平和をみんなが願つているのですね。そしてまた、いろいろの家庭内外で反発がありながら、やつぱり発展の段階にいくんじやないかというのを強く感じました。しかし婦人が一個の人間として生活していくのはまだまだ困難だと私は思います。組織の政治活動ということでは、私たちの団体は実際にはやつていないのです。学習の段階でして、組織として活動するとか運動するとかということはまだ持つておりません。勉強中です。

森田 政治の問題、託児所の問題、そういう問題は私は当然女として子どものために一応は順序を踏んだ訴えというものはすべきだと思ふのです。通る場合も通らない場合でも、それをするのはやはり義務だと思ふのです。そういう程度の政治運動は当然やるべきでしょう。

田村 衆議院でも参議院のときでもそう感じるのですが、選挙というものの肝心なことを知らないのです。私たちのように家事

と農事のみをやつていますと選挙の際にどんなことをすればひつかかるのか、やつてもいいのに、ひつかかると思つてやらなかつたり、こまかいことがわからないのです。選挙についての考え方はもちろん、具体的なことも、もつとはつきり勉強しなくちやいけないと思つています。

広瀬 あの候補者は橋も直してくれる、これもやつてくれるという。あの人に入れたら生活がよくなるかと考えて投票するのですが、当選してからその人のすることについてはだれも何もいわないのです。その人が落選した場合はああとどうも橋ができなくなつた、それくらいのことしか考えないのです。結婚してはじめての選挙の時に、姑に「あんた、男たちに、だれに入れるか聞いたかね」といわれてびつくりして、「あれつ、聞かなければいけないの」選挙は自分の好きじやないの。」といつたのです。そうしたら「聞いていかなければ、だれに入れるかわかるかね」というのです。私はまだこんなことがあつたかと思つて、ほんとにびつくりしたんです。そのときも自分の考えて投票しましたが、選挙のたびに何となしに、自分の考えて選挙することが気詰まりみたいなんです。どこの地方でも大体の村の空気で選挙をやっているんじゃないかと思つています。

松原 婦人と選挙というのは婦人週間ができたきっかけなのですが、過去に何回も語られてきているのにどうしてそれが解決つかないのかという問題がありますね。ただ単に、公明選挙でなければいけないとか、選挙は個人の意思の表明で人に頼つてはいけないとか、お題目を論じ合つてもしょうがないじやないかということ。選挙権を持つからには、その本人の個人が確立していなければならぬのじやないかと思うのです。婦人の意識の調査などをやつ

ていますが、たとえば昨年の六月に農業基本法が通つたすぐあと、東北のある地方でやつた調査では、男性の場合には、農業基本法が出たことを知つてゐる人が八十パーセントをこえていたんです。ところが婦人の方はほんの二十パーセントしかないのです。日米安全保障条約改定の行なわれたときの調査の場合にも同様なことがいえました。あの場合には男の人も低かつたのですが。こうしたことがまず問題だと思うのです。自分は何を要求するのかわからないで自分の意思を決定するということは出てくるわけがないと思うのです。そういつたところから物事を出発させなければいけないと私は考えるのです。

さて新しい秩序をそだてるといふことについて、最後に考えるに当たつて必要なことは秩序というものは何らかの単位があつてその単位のまとまりが秩序だと思うのですが、その単位はやはり個人だといふことを、もう一度確認しなければいけないと思ひます。姑さんお嫁さんとの間で、嫁さんのことが確立してゐるかどうかといふことから、家庭全員に同じく個人が確立してゐるかどうか、組織の中で、なぜ自分が組織に入つてゐるか、個の確立がなされてゐるか、そういうことをまず前提にして、そこから家庭の問題なり組織の問題なり、あるいは人間関係の問題なりを考えていかなければいけないのじやないかと思ひます。その個が確立してゐるかどうかという問題は、今まで、婦人であるがゆえに確立しなかつたといふことで済ましてきたわけですが、これから先はその婦人であるがゆえにといふことで済まされなくなつてきた。逆に婦人であるがゆえに考えなければならぬこと、婦人自身が家の経営の中でいちばん主要な地位になつてきてゐるといふこと、それからあるいは婦人自身が、農業でいへば市場の問題

農作物の価格の問題、あるいは共同化を進めるにはどうしたらいいかといふ問題などを考えないでは、もう毎日の生活ができなくなつてしまつてゐるわけですね。それから、婦人であり母親である人たちが真剣に自分たちのあり方を考えて反省しなければ、農家には嫁がこなくなるし、子どもたちが農業を継いでくれなくなつたといふところまできてゐるわけです。

情勢がそこそこ変化してゐると思ふのも、この情勢の変化にどうやつて婦人が個を確立しながら適応していくかといふことが新しい秩序をきてる根本だと思ひます。その個の確立の上に立つて家庭の確立、あるいは新しい農業経営の確立が考えられる。それから嫁としゆうとめの問題が考えられる。それから農業の共同化と組織が考えられる。あるいはさらに婦人会の組織が考えられてくるべきだといふふうに思ひます。その場合もう一つ必要なことは自分の個を確立するといふことは、同時に他人の個も確立することではなければならぬ。そうでなければ、どうしても新しい秩序は生まれることはなないと思ふのです。そのお互い同士、個を確立し合うためにはどうすることが必要かといふ次の問題になりますね。そのために、家庭の中でも、あるいは村の中でも組織の中でも出たことですが、いい古されたことですが、話し合いをされたことがもう一度考えられてこなければならぬと思ふのです。話し合いも、ただ単に自分の考えを一方的に人に押しつけるのではなくて、両方が個を持つてゐるといふことを前提に話し合わなければならぬ、これが新しい秩序なので、それは上から与えられるものでなく、形式的にきまつたものでもありません。自分らのおかれてゐる地域であるとか、あるいは家庭の中でとか、あるいは家庭の農業のあり方であるとかといふものに応じた内容のある秩序でなければならぬ。

らないというふうに私は思うわけです。

(閉会)

第三部会

(消費問題)

会議員

岩手 細川 成子 (農業)

秋田 若松 ナミ (地方公務員)

群馬 関根 好子 (農業)

東京 浦田 邦子 (無職)

福井 片岡 冬美 (農業)

愛知 伊藤 文子 (無職)

兵庫 八木 敏子 (無職)

和歌山 青地 安子 (無職)

島根 佐賀 一恵 (農業)

岡山 佐藤 婦子 (洋裁)

徳島 藤井 和代 (無職)

愛媛 大橋喜代子 (無職)

福岡 鈴木 栄子 (無職)

熊本 加藤 礼子 (無職)

宮崎 肥後 礼子 (無職)

リーダー 山田 亮三 (評論家)

特別会議員 赤沢みつゑ (香川・新聞社勤務・第一回会議員)

篠崎あや子 (富山・洋裁業・第六回会議員)

特別オブザーバー 小介川やす子 (全国地域婦人団体連絡協議会)

永井美重子 (日本生活協同組合連合会婦人部)

春日 鶴子 (主婦連合会)

二村 義子 (大学生)

全国協議会

第一日目 十一日

山田 今年の婦人過問の主題とは、生活に新しい秩序をそたてよう。その問題として、変化のげしい今日の社会においてと出ているわけです。そうしますと、ここでわれわれの消費生活を含めた生活の変化というものが、どう変わつてきたのか、そういう実態をまずはつきりつかまえておくということから出発したらどうかと思います。

皆さんの所感文を拝見していると、確かに消費生活の実態はいふん変わつてきているかも知れませんが、それが果たして生活全体の変革か。なるほど、農村では機械化が進む、都会も農村も同じですが電化が進む。そういう新しい消費の形態は出てきていても、そういう消費を包む生活全体はどうもあまり変わつていないんじゃないかという感じがするんです。たとえば冠婚葬祭の問題で、ある人は、子どもを嫁にやるときに、昔からの因習と戦つたということですが、そういう点では、消費の形態はいふん変わつていて、ところがそれを包む生活全体は、古い秩序が残つていふんじゃないかということが、特に農村の方からいろいろな形で提出されております。そうした点で、一体われわれの消費生活が変わつたのか、変わらないのか、変わつたもの、変わらないもの、そこら辺からはつきりさせることから問題を進めていきたいと思ひます。

問題を提起するという意味で、口火を切つてください。

片岡 農村では、どこの家庭でもほとんど亭主関白で、たとえば風呂をわかつて、必ず一家の主人が先に入る。主人の帰りが遅い

時は、眠くても待つ。燃料の面でも時間的にも不経済です。私は結婚前に、東京のある高貴の人の家に仕えていましたが、そんな家でさえも、子どもが先で、ご主人はあとで入られる。男の人の理解が必要でしょう。

山田 変わらない面を指摘されたわけですね。昔と比べて、こういう点が変わったという面、仕事の上でも、家庭生活の中でも気づかれています。

片岡 子どもが高校に入り、だんだん成人してくると、新しいことを見聞してきて、社会に触れる機会の少ない親と子との問題に意見の対立ができることがあります。わが子との間でさえそうですから、嫁を迎えるようになった場合、なおさらむずかしいんじゃないかと思うので、テレビなんか見て、時代の進歩について勉強していかなければならないと思っております。衣類でも流行におくれたような格好をしておりますと、子どもは肩を並べて歩くのをいやがる。それでは自分もさびしいので、どんな特個品でも流行のものも着るように考えています。

佐賀 月賦制によつて、家庭の電化、農業の機械化、自家用車を持つ人もふえ、流行の回転のテンポも早くなり、食生活でもインスタント的なものもずいぶん出てきて、生活の変化だと思います。

山田 そういう物質的な消費生活はなるほど向上している。しかしそういう生活全体を取り巻く環境は前近代的な、非合理的なものに、まだまだ包まれている、といった感想文がありました。

関根 農村経済のバランスが欠けています。電化、機械化が発達しても、経営のほうを憂えなければ出費ばかり多くなつて、先へいけばいくほど支出と収入のバランスが失なわれていくのです。そ

れから農村では非常に手不足で、生活が忙しくなっています。お茶を入れてゆつくりお話しをするというのが好きで、生活の間にも自主性がない。会合でも時間の觀念が薄くて、ちよつとした集りでも半日ぐらいかかつてしまう。いろいろバランスのとれてない進み方だと思ふのです。

山田 確かにいろんな電化製品が入つてきて、消費生活だけを見てみると、何か合理化され近代化されてきたような気がする。しかしまあおつしやつたような形で、家全体の問題などいつころに全体としての近代化に通じていないということですね。

藤井 私は都会から農村に帰つてきた者ですが、農村生活を見るときに、いろいろ因習にとらわれている面があるわけです。これをどうしたらいいかと思つていたんですが、娘の結婚に当面しまして、心の結びつきのある結婚でなさやいけないと第一番に考えました。第二にはこしらえ(支度)の点です。京都に次いでの着倒れ果という名があるくらいです。私も結婚して二十五年ですが、当時からこのしつけのかかつた着物をいまだに持つているんです。けれども、娘の意思と相手の方の理解によつて、洋服程度、着物類はごくすこしだけにしました。道具も、団地住まいなので四尺ダンスと三面鏡の二つだけです。自分の生活に適したものを選んで持つていくことが大事で、自主性がなければいけないと思ひます。

山田 この間トラックに嫁入り道具をいっぱい積んで赤いきれを掛けて見せながら行く、という風景を見まして、そういうものが残つていいるという感じがしたんです。さきほどから伺つておりますと、新しい消費の形というけれども、単にそういう新しい商品が

家庭に入ってきたというだけで、いまおつしやつた実質的な形で自分たちの生活を変えていくという感じが、なかなかないような気がしますね。

浦田 私は東京の郊外の二千戸ばかりの大きな団地ですが、そういう古い習慣はありません。で、ほとんど自分たちなりの新しいものを取り入れていて目を見はるばかりです。タイツなど相当年配の方もはいてられます。新しいものが入ってくるのがすごく早いです。それならば、銘々がほんとうに自分の生活に足を踏まえているかという、そうじゃなくて、非常にまわりを気にするという古さは残っていると思うんです。だから自分のうちのほんとうの必要によるのでなくて、ひとが買ったからうちもという古さは団地の中にもあると私は見ております。

山田 古いか新しいかは問題ですが、経済のほうでいいますと、デモンストレーション効果ですね。こういうふうな生活が変わってきている、それに対して何か因習というもので、自分たちが押さえられる。貯金ばかりして、使いたいのに使えないということをいわれてる方がありますが、

伊藤 私たちのところは観光地として急に開けました町です。それと産業が盛んで、働けば収入も得やすいので、皆さんへそくり程度から財産まで、貯金を持つていると思うんです。ところが生活様式を近代化して、生きることを楽しむためじゃなくて、家の財産を減らしたくないとか嫁入りのときにとこよりも上回る支度をして上げたいために毎日の生活を良くするためではないので、貯金すること自体が、私は問題だと思っんです。ところが近所のつき合い、かねあいもあつて、そこに苦しい点があります。

山田 所感文では大多数の方は消費ブームの波にあおられ

て、家計が出超になつてたいへんだと書かれたのですが、伊藤さんは反対で、そういうことは、ほかの地域でも問題があります。

若松 私は仕事が生計改良普及員ですが、まだ主婦に財布が渡されていない。生活に計画性をもつためには、生活費だけでも主婦に渡してほしいという願いを出して、生活改善グループの中では七割ぐらいいは持つようになりました。しかし、いざ自分で運営をやつていくとなると、農家の経済は容易でなく、むしろ渡されないほうが楽だとしり込みする人が多くなつてきました。それではないのだと家計簿を中心にしてやつてきましたが、まだまだ人まねの生活が、むしろ安楽だというふうな考えが多いのです。お嫁さんでも主婦でも、自分の意見を家の中で出すというふんいきがないのです。

加藤 私は、住宅街におります。婦人会が始まつたときに、三〇代で家を建てた若い方々の知恵を吸収したいと思つて、やりくりなとについての勉強会を催してきたわけです。ところが驚いたことにそういう方たちは、ほとんど財布は主人が握つているんです。そうして毎日の暮しのお金をもらつたほうが責任がないし、楽じゃないか。月末は足らなければ「お父さん、ちょうだい」といえばいいというんです。

佐藤 ある町長さんが、私は村の人に貯金をするな、するなといつて回つてゐる。村の人たちはちよつとでももうかると、みんな農協に持つていつてしまふ。そんなことをしないで、そのお金で農業の経営の規模を大きくするとか、栄養をもつとつて医者代を減らすとか、もつと利口にお金を使つてもらいたい、というんです。貯金の何パーセントか忘れましたが、それが医者代なのだ

そうです。貧農で、貯金が万事の味方だというように思っているらしいんです。

八木 私は去年の八月まで、主人から月幾らともらっていたんですが、その後婦人学級で勉強して、そういう謂負制度にも足りなくなつたので、私に全部まかしてもらいました。子どもたちにも、今度お父さんは会長で、お母さんが社長になつた。あなた方は重役さんだから、みんなうちの家計がうまくいくように努力してくださいといいましたら、子どもたちも積極的に協力してくれます。

決算の時は自分たちでそろばんを入れて、この項は赤字で、こっちが黒字になつているから、ここへ五百円回わしなさいとかやつてくれます。儉約しなさいというよりは効果がありまして、たとえば甘いものの好きな子が、甘いものを食べないで、これを副食に回わそうとか、そういうことをいうようになりました。

大橋 私は銅山の六百戸ほどの社宅におります。集団住宅のもつてい面と、悪い面と両方あるわけですが、因習とか古い習慣はほとんどありません。年寄りが少ないんです。だいたい二十代から三十代、四十代で、家族構成も、小家族が多いんです。ですから人間関係の問題は比較的少ないわけです。電化は、テレビは九〇%オール電化が地下水のように浸透しつつあります。

集団住宅のいい面では、組織活動がとても活発で連絡もやりやすく、自治会とか消費生活協同組合とか、PTA・子ども会、青少年指導委員会とか組織活動が活発です。

悪い面では、お互いに競争意識が強いんです。最近物価高のために、主婦で日雇いに出る人が多いです。生活に比較的余裕のある人でも、人が行くのなら、私もというわけです。主婦が仕事に出るのは賛成ですし、電化によつて主婦の労力が軽くなるのも

賛成ですが、生じた余暇が、家事とは比較にならないような重労働に向けられるという点が心配です。というのは子どもは成長すると親から離れていくものですが親が孤独というか、その空白を埋めるものを何かもつていないということが、親だけではなしに、子どもの負担も軽くするのではないかと思うので、その余暇を、自分の内容を高めるようなことに振り向けたいと思います。子どもの教育上も、人間形成に一番大事な幼児期、小・中学校の時期をはずしては、と思うんです。主婦は何といつても子ども教育の全責任者ですしね。

山田 いまのお話に含まれた問題は、消費生活の移り変わりが生産と所得に与える影響という点でもう一べんあとで出したいと思えます。

細川 私たちの地方は水田単作地帯で、割合に収入が多いんです。県下でも一、二という農協をもつていますが、それに伴つて機械化、電化ブームで生活が向上したように見えるんですが、一面家計のはうにずいぶん無理があるんじゃないかと思うんです。たとえば食生活がその割に向上しないとか、子どもの勉強道具が買われていないとかです。私たちも一生けんめい隣りのまねをして、機械を買つたり、家を新築したりしましたが、これで貯金もなく、全部使つてしまつたら災難が起こつたときどうしようと考えたんです。それで電気洗たく機や耕転機を買うことをやめて、幾らかの貯金ができたわけです。そうして次には、生産を考えなくてこの転換期を切り抜けていけないと思ひ惟たけ栽培をやることにしました。

農協に働きかけて、融資してもらい、指導を受けることになりました。ここにまた問題がありました。たとえば販売の面に共同

性がなければ、とてもさばいていけないとか、指導を受けるために一人二人では指導を受けにくいとかいうことです。共同でやればうまくいくんじゃないかということになって、五十人ばかりで発足したわけです。ブームにはかり乗って、消費はかり伸びてしまふということじゃなく、生産面に資金を回して、いくらかでも収入をふやし、この転換期を切り抜かれるという希望もできたのです。

蒲田 さきほど貯金をするという方と、しないという方と、二つ出ていましたが、私の友人にも、お金さえ持つていればいつでも欲しいときに買えるから、お金をためることが先決だという人と、どうせ大きなものを買えるほどたまらないんだから、それよりもパツパツと使つたほうが楽しいという人と、二通りあります。その二つを考えてみると、方向はちがいますが、どちらも、出回つている商品を買えないという欲求不満から来ているように思えます。欲求不満がどこから来ているか、そしてどういうふうに処理したらいいたるうか、というようなことを話し合つたらと思いますが。

山田 一通り発言していただいでからにしましょう。

青地 私は所得倍増の声につれて、物価のものがすごく上がつていて、点を、なんとか私たちの力で下げてみたいと思ふんです。(笑声) それについて、私たちの町にこういうことがありました。町営の浴場の値上げが一方的にきめられたのですが、日本の国が貧乏だからうちの町が貧乏だ、それで二円上げにやいかんというのです。

(笑声) しかし和歌山県は港を作るのに二十億の金を使い、また自衛隊を呼んでものすごくはでな招宴をしているじゃないかと詰め寄つたわけです。最後には、これはやはり地域の人に相談して

了解を得て上げるべきであつたと町会議員はじめ地区の人にあやまつて、値上げは取り消しになりました。国鉄運賃にしろ、郵便料金にしろ、そういう公共料金上がるにつれて、ほかの物価も上昇してくるわけですが、それに対して、みんな手をつないで値上げ反対運動を起こしたらそこに得られるものがあると思います。肥後 私の地方でも共かせぎの方が多うございます。ずいぶん合理化された生活をなさつていゝよう、その中に問題もあると思いますが、いい面としては時間の余裕ができて子ども世話がよくみれるようになったこと、悪い面としては、テレビを買つたから子どもの成績が落ちたといつてこぼす人もあります。やつぱりいい面も、悪い面もあるのですから、簡単に片付けないで考えるべきだと思います。

山田 これで一応皆さんのいわんとしているところはいつていたたので、今度は出てきた問題について皆さんが意見を出し、考えをかためるということにしたいと思います。今日、物価が上がると、教育費も上がつて、これだけ生活費が上がっているにもかかわらず貯金がふえるという方がありました。ことにエンゲル系数の上から、食生活の内容に疑問を持てますが、――

細川 私の地区では家計簿の締めくくりを見ても、食生活なんて、ほんのささやかな額になつていて、機械化とか電化とか交際費とかが非常に大きい。でも全国平均から見ると、食生活はずいぶん上がつています。私たちの地方は雪国ですから、野菜が不足なために、ごはんとお魚ばかり食べているんです。お魚を減らしても、野菜をふやしたらと思ふんです。

山田 いまエンゲル系数の話が出ましたが、エンゲル系数が下がると、生活水準が上がるといひますね。ところが逆に、非常に節

約してしまつて食生活を詰めてもエンゲル系数は下がりますね。ですから下がったことが必ずしもいいわけじゃない。エンゲル系数の見方に問題があると思います。

鈴森 私のグループの話なんです、私たちはまず第一に食費をとります。その次が教育費ですが、そういつていくと、貯蓄ができなくなります。電気製品の電気代もずいぶん取られますし、物価が上がつたために食生活が非常に高くなりまして、どうしても生活費だけで一ぱいで、私ども四十代の主婦は老後のことを考えて、貯蓄したいと思うんですがどこからも出ない。それが私どもの悩みです。

大橋 エンゲル系数というのは、家計費の中に占める食費の高ですが、最近それが上がつていきます。食費の内容が昔と違つて、質が上がつているのです。肉とかミルクとか、乳製品が私たちの生活にずいぶん入つてきて、昔はせいとく品と思われていた品物が、いまはたやすく手に入るので、それで食費が家計費の中で占める割合が多くなるのです。

山田 一般に、エンゲル系数が下がつたほうが生活水準が高いというふうにいわれますが、日本のような場合は、これまで貧しい食事をしていたから食費が少ない、エンゲル系数も低く出る。ところが人間らしい生活をするようになれば、食費が上がつてエンゲル系数が上がることになる。ですからエンゲル系数が上がつても、それだけ食生活が向上しているからだというご意見ですね。

浦田 私は食費を最低限に押えてその中で栄養加工などを研究して、栄養という面では一応大丈夫というふうにしていたんです。ところが、数字の上で栄養をとつていても、子どもが大きくなると満足しなくなるんです。新聞に、東京都と食費の平均が一人百

七十五円と出ていましたが、そうするとうちの場合、二万一千円になる。うちの生活費は四万円ちよつとですが、食費のほかに家賃七千円、団地に住んでいると衣料費も要りますし、窓のカーテンだつて、そうみつともないこともできないということになるんです。そうすると生活費の五〇％を食費にとられては生活ができませんのです。子どもも高等学校に入りますし、主人の月給の中でひねくつても仕方ないから、私がアルバイトするよりしようがない、女の人が働きに出ると問題も起きるでしょうが、現状はそうなのです。

関根 さきはと農村の副食物の話が出ましたが、私たちのところは純農村ですが、とても自己消費が盛んです。乳牛を飼つているので、どこうちでも牛乳を飲んでいきます。豚を売つた場合も半分ぐらいうちで食べていきますし、同じ農村でも、おかずを自分が生産するので、栄養をとりやすいのです。たとえば油を食べなくても毎日落花生とか大豆を使うというふうにもつていきます。

山田 いまのような生活の中で貯蓄がふえるというのは、ある程度食生活にシワが寄つていくんじゃないかという質問でしたが。

片岡 不時の災害もありますし、社会福祉のほうが完全でない現在、貯蓄もある程度しておかなきゃならない、そうやって必要なものからとつていくと、最後のシワ寄せは食費にいかざるを得ないんじゃないかと思うんです。

山田 それから発展して、食生活が向上して、食費がふえて、やつていけない、足りなくなる。そうすると、アルバイトをしようとか考える。そういう機会がない場合は食費にシワが寄るといふことになつてくる。貯金の問題で、いかがですか。

伊藤 私たちのところは、食生活がとても低いと思います。海岸ですから、お魚が安く手に入るときは食べますが、そうでないときはお店へ行つて買うことはいらないです。そういう点、農村の皆さんのほうが食生活を考へていような気がするんです。みんな貯金を持つて、豊かな町であつても、内容的に豊かな暮らしはしていない、そこに考えなきやならない点があると思うんです。何のために貯金するかという目的がない、といつちや悪いですが、ただガツガツとためちやうんです。一年間の食生活をみると、お節句とかお祭りとか冠婚葬祭などのふるまいに五万も十万もかける。そして毎日の食生活は、どつちかという貧しいんです。産業も発達し、観光地として景気も悪くない割合に、生活を大事にしない、そこが私たちの地域の大きな問題です。

山田 さきはど貯金はいふんするが、反面医者や支払いが多いといわれましたが、そういう点で食生活の近代化、生活の近代化をある程度、それなりに包んだ考え方をもちいかないと、とんだところで生活に大きなマイナスがくるということもありますね。佐藤 やはりおとなの教育が大切じやないかと思うんです。もう少し広く考へるといふことが必要でしょうね。

佐賀 貯金も消費として、一つの費目にしたらどうですか。

細川 貯金と生活を楽しむということですが、両立すると思います。隣りのうちのまねをするということではなく、そのうちに応じた、ほんとうに必要なものをかうというようにしたら貯金もできると思います。電気洗たく機にしても、百姓は土でよごれることが多いいので、電気洗たく機ではできない場合もあるんです。それは、まねしても利用度が少ないんです。ものの選び方を考へてやつたら、貯金もできると思います。

佐藤 消費ブームという大きな流れがありますから、その中で自分をよく考へて自主的に行動すれば、ある程度家庭内でのブームを食い止められると思うのです。一つの例として、テレビのことがよく問題になりますが、私はテレビを持つていません。ないといふことで子どもが劣等感を感じることもないし、友だちと対等に話もできる。栄養の話と同じで、高いテレビによらなくても安い知識源が得られるんじゃないかと思います。自分なりの生活をキチツとしていくことが大切ですね。

藤井 消費には消費計画が必要だと思います。私どものほうでは、農協単位に、みんなが一括購入をやります。一年計画ですから、綿など今年の必要量を考へて金額をはじき出し、何カ月払いといふことで計画を立ててやつていくのです。こうすれば貯金もできるんじゃないですか。

大橋 家計がピンチになつた場合、主婦は第一に食費をつめますね。その次には主婦自身のたべるものを詰める。主人や子どもは毎日卵をつけても、自分の口には入れない。またそうしないと低賃金で、なかなかやつていけないということもあるのですが、昔は、主婦が過労と粗食で自分を犠牲にすることが美徳と思われましたね。私たちの年代のものは、自分の身を楽しませるということに、罪悪感みたいなものをもっています。しかし、主人や子どもと同じように、自分の身も大切に考へていつた方がいいと思います。

最近いい傾向として、私たちの地方では男が四十二になると、厄よけといつて神様にお参りして、近所の人を大ぜい集めて宴会をするんです。十年ぐらい前まではそれが派手で見得だつたんです。いまはそんなことが全然なくなつて、その代わり主婦が旅行するのです。お金を子どもや周囲のためだけに使わずに自分の身

を大切にし、楽しむというふうに変わつてきました、そういういい面もあります。

山田 だいふ進んでいるということになりますね。

大橋 社宅で少し、壁になりやすい老人が少なく、主婦が家庭の実力者なので、いいものはほとんど取り入れることができるのです。

関根 私たちは、自分たちでできる身近かなものから考えていこうということ、でグループ活動として、一つづつやつていくのです。

子どもに食べさせるものは主人にも食べさせる、主人も食べるものは自分も食べて楽しむのはいいことだと思ひます。お嫁さんが妊娠したら魚をよけい食べさせるとか、育ち盛りの子どもにもよけい食べさせる。父親中心主義、おじいさん中心主義の封建性が、そういう食生活を通じてくつがえされていくんじゃないかと思ひます。お嫁さんによけい魚がいつたりしますと、主人も姑たちもいばつていられないということになる。おふろも、子どもも自分を主張し、お嫁さんも、出かきなきやならんということにしないで先に入るようにすれば、亭主関白が押えられていくんじゃないか、そこに何百年来の封建性がくつがえされていくんじゃないかと思ひます。

山田 きびしいですね、私も亭主関白のはうですから……。 (笑)

要するに、いろいろな点で日本人の消費生活が変わつてきたというところ、日本の産業の発展とか、そういうところで見えてきますと、個々の人は別ですが、戦前の所得に回復した時期は、昭和二十八年ごろになつています。平均ですよ。職業によつて違います。たとえば昔と現在とでは、大学の先生なんかは昔のほうがよかつた。その他いろいろ階層によつてデコボコがありますが、戦前の水準に回復した昭和二十八年ごろから、いろいろな新しい産業、

新しい技術がうんと入つてきた。つまり戦争と戦後のインフレーションの中で、産業の発展でも、私どもの生活の面でも、ずいぶん断層がありました。それがようやく埋まつてきたわけです。

二十八年ごろから急速に戦前に回復すると同時に、そうした新しいものが導入されてきました。合成繊維がほんとうに普及し始めたのは、それからあとですね。埼玉県に行田という足袋の産地があります。それが三十年ごろはガタガタ減つて半分ぐらいになつたそうです。三十年ごろから生活の面に変化が起つてきた、テレビ、トランジスター、電気洗たく機、電気冷蔵庫、そういう一連の電気器具が急速に延び始めたのは、このころです。こんなにたくさん作つて売れるかと思つていたのが、どんどん売れてしまつた、ということはそれだけ普及したわけです。ことにテレビは、世界で生産量からいえば二番目は確実です。それから普及率からいつても、アメリカに次いで、スウェーデン、イギリスよりも上ぐらいになつていくかもしれません。これがいいことか悪いことか、さきほどお話しも出たように、その一方に、ほかの生活が何かしくなつていくんじゃないか、そういう問題もあります。しかし、そういう産業の発展、新しいものの生産、ことに日本の場合には、戦争がなければ、ずっと前に普及していたものが、戦争があつたために断絶しているわけです。たとえていえば洗たく機とか、冷蔵庫、掃除機は、昭和二年ぐらいから作り、売り出されているんです。はじめアメリカと契約してやつていたんですが、昭和七、八年ごろから、いまの東芝あたりで作り始めて、いまの戦争がなければ、ずっと前に普及していた。それが戦争でなくなつた、戦後急に争つて合成繊維とか、トランジスターとかテレビというような、技術的にいいますと、エレクトロニクスとか高分子化学

というような新しい科学技術に基礎を置いたものですが、これが一緒にきたわけです。ですから、日本の場合、消費の変革というのはワーツとやつてきて、買わなきゃならんものがいっぱい出てきたような感じがするわけです。そういう点で消費のあり方が変わつてきている。そういうものを作り出すのは、大きなメーカーですから、ほとんど宣伝する、激しい競争で売り出してくる、消費生活自体が大きな波の中に巻き込まれていつていることは否定できない事実です。

さきほどから問題にしているのは、そういう消費生活の外部的な変化と従来の生活の秩序がくい違つていやすいだろうか。消費はなほだきびしく変わつていっている中で従来の生活の体制でくづれていないものがあるんじゃないかという感じがしていた。というお話もあり、また、主婦が生活の実権を握つているようなところでは、それなりに生活が近代化し、向上している面もあるわけです。もちろんあとで問題になりますように、こうした近代化、生活の向上の反面に、いろいろな矛盾や問題が出てきていることは否定できないと思いますが、そういう点でわれわれの生活が大きな変化にさらされている、その前提をここでハッキリして、こうした生活の変化がどういふ問題を生み出しているかを考えてみましょう。これには二つの問題があると思います。一つはことに都会生活についていわれることですが、家庭生活がある程度合理化され、近代化され、余暇がでてくる、その余暇をどういふふうに使つていくかという問題が出てきます。ところがそうして消費生活がふくらんでいくと、当然収入がより多く必要になつてくる。そうになると、農村の場合は主人が外に働きに出る、兼業農家という形になる。そうすると農家の場合、逆に主婦の勞

働がきつくなるという問題が起きてきます。またそれとやや違つた形で、主婦のパートタイムの内職という形で出てくるわけです。パートタイムのアルバイトがどうか、問題があるというお話も出ました。

休憩

山田 そうした消費生活の変化が、私たちの生活全体にどういう新しい問題を投げているかを先に取り上げて、もう一回問題を出していただきますようか。どういう仕事に皆さん出ていらつしやるか。

大橋 おもに日雇いの仕事です。はじめは、手袋の内職をやつたぐらいの軽い気持ちで、楽しんでしていましたが、私たちの地方にダムが作られたり、学校も新しく建つていくので、その仕事に出るのです。主婦が、いままで自分で収入を得る仕事につけなかったのが、幾らかの現金収入にとりつかれて、仕事のはうがおもしろくなるのです。その結果子どもがさびしい思いをさせられます。主婦は、つらい労働でも子どもに豊かな思いをさせたいという目的で、働きに出るのですが、いつの間にか手段と目的がすりかわつていく。それをずっと続けていつたら取り返しのことかないことになると思うんです。金もうけがおもしろくなつて家庭が放任されてくる。家庭が不安定なんで、子どもが落ちつかないのです。子どもをさびしくさせないために、ある程度時間を短くする方法とか、あまり疲れない仕事に切りかえるとかが必要でし、収入が少なくても、その仕事を通じて社会的に自分を成長させる仕事ならいいのですが、ただ働くためにだけ生まれてきたような生活になります。

山田 働きたいかなければ生活ができないというようなことはないわけですか。

大橋 それもあります。とにかく私たち地下産業労働者は賃金が低い。そのために主人は残業、奥さんは内職、それで過労で病気に

なつて出費がかさんでしまふ。貧乏、低賃金、過労、その悪循環を繰り返すわけです。高い収入を得るために子どもに高い教育をして、高い技術を身につけさせる。そのためには時間と金がかうんとかかるわけですが、そんなことを考える以前に晩のおかずを心配しなきゃいけないというようなギリギリの生活もあるので、悪循環をどこかで切らないといけないと思うんです。対策といつても、なかなかわからないのです。

それで、まず第一に消費者の台所を守る、経済的なものを守るという意味で、五年前から生協をつくつていゝんです。県下一の物価高だつたのが、生協のために物価がうんと下がつて、私たちの台所をうんと豊かにしてくれたわけです。それも一つの方法です。主婦が仕事に出るのも一つの方法ですが、自分の生活を楽しくするのが目的なので、手段と目的をすりかえないようにブレーキをかけないといけないと思うんです。

加藤 生協をつくる時に町の商店あたりの抵抗はありませんでしたか。

大橋 私たちの生協のできるのをおくれたのは、商店の圧力のせいでした。同じ会社の系統でも機械や化学系では十年前につくられています。鉾山で、いちばん低賃金な私どもが、生協がないためにいちばん高いものを買つていたわけです。私たちの鉾山がいちばん近代化がおくれていました。これは地下産業労働者に昔からの親分子分的な封建的なものが多く残つていゝせいでしよう。私たちの社宅は六百戸かたまつております。その周辺は純消費地帯ですから、商店街は私たちの部落へ消費攻勢を集中的にできる、いいエサになつていたわけです。生協ができたはじめは反生協分子が、私たち労働者の中にもいっぱいいて、とても圧力があつた

んです。ところがつくつて半年くらいで丸焼けになつて、がつかりしました。そして生協のありがたさ、消費者の組織活動の大切なことを身にしみて感じたわけです。すぐに労働金庫から借りて再建して、以来毎年組合員がふえ、小さい生協だったのが組合員千名、出資口数が一口千円ですが、千五百になりました。年間供給高は七千三百万円、再来年には一億円にもつていくのが目標です。組織が大きく強くなつてくると、反生協の人も影をひそめました。これも組織を通じてかたまつていたから強かつたので、そのために向こうの抵抗がなくなつたのです。いまでは、生協へ品物を納めるのは、たいへんな安定感があるので、生協へ納めている商店の人は信用度が深くなりました。

山田 ほんとういうとそれは第四部会の職業の問題ですね。それにしても、もう少し議論していただきましょう。

若松 私の市では、牛乳が一本十円で売られているという例があります。前にあつた会社が大企業と合併して、市民は安い牛乳が飲めるだろうと喜んだのですが、あべこべに二円値上げになりました。たまたま生協が、ある業者とていけいして消費者に十円で売ってくれます。値上げにブレーキをかけている運動が、そういうところに現われているんじゃないかと思ひます。

藤井 私とは農家ですが、電化ブームで生活が合理化され余暇ができる。その余暇について困つた問題が起きています。農村でも最近旅行などに力を入れています。着ていく着物のことで競争意識をかり立てられる場合があるのです。そのために内職するということもあります。レジャーがほんとうのレジャーでないような形になつていゝんです。

浦田 私は、自分たちのグループの機関誌のタイプをうけ負つて収

入を得ています。外へ出すより安くしてグループも助かるし、原稿整理も同時にできます。しかし、そのほかの仕事、会費集めとか葉書のあて名書きをする人にも、いくらかでも出さなくてはおかしいということもいえるので、考え中です。

いままでも奉仕であるべきだと思われていた婦人会やPTAの、そういう仕事にも、婦人の余暇、余力を、賃金化してもいいのではないかと考えるのです。

山田 さきほど、お金を取ることで興味がでてきたというお話しがありましたね。そういう点でこれだけ余暇が出てくれば、奉仕はある程度賃金化するというお話しもありましたが、無理のない形であつたらやられてもいいんじゃないかという感じもないではないですが、いかがですか。

大橋 主婦が職業を通じて、社会的に目を開いて、自分を成長させる、そういう職業の場合はけつこうです。たとえば私の社宅でも看護婦さん、保母さん、教員もいらつしやるんですが、共かせぎでも社宅内に保育園もありますから、問題ないわけです。そういう家庭は主婦専業の場合よりずつと計画的に、合理的になさつて、それで生活を楽しんでいらつして、とても明るい、いい面が出てくるのですが、私がいいたいのは、あそこの奥さんが仕事に行つたから、私もという集団住宅の経済面での競争心理ですね。そういう競争心理だけで仕事にいく、そういう場合をいうわけです。そんな場合にもう少し、家庭を楽しくするという目的のはうへ向けてほしいということです。

八木 私は収入に結びつかないレジャーですが、巡回文庫があつて一月に一回まわつてくるので、その責任者になつています。うちのグループは四十人から五十人ですが、主婦も知識がふえます。

巡回文庫は主婦のレジャーのために、たいへんいいものだと思います。本を読んだ感想でも書くようにしたら、作文の練習になるかしらと思っております。

山田 生活の形、消費の形が変わってきて余暇が生み出されてくるそれをどういうふうに利用するかという問題ですね。

浦田 さきほどの問題に、主婦が働き出して、それに夢中になつているというんですが、足りない面だけを補なうようなちやうどいい職業はないわけでしょう。

大橋 ないのですが私の区域は男の仕事が多いんです。女の仕事は、ことに中年の主婦の仕事はなんにもないんです。事務の技術をもつていても高校出の若い人の仕事ですから、主婦で中途から仕事につく人は日雇いくらいです。それで問題があるわけです。

片岡 国会で、農村の広々とした大きなうちへ嫁の行き手がないといつておられました、私個人の場合に、ほんとうによく当てはまっています。私のうちは畳の間が八畳四つ、四畳が二つ、離れが別に八畳、六畳、それから板の間の十六畳、それに二階が全部あつて、それに蔵です。そんなところを全部掃除していたら、まるで掃除するために生きているようなものですし、衛生面でも行き届かないんです。そういうところが電化されて掃除も洗たくも行き届くようになって、それも家庭円満の一つの方法じゃないかと考えております。

山田 農村では生活が変わつてくる中で、現金が必要になり、兼業農家が多くなり、農家の労働が主婦にかかると申しましたが、ちやうど片岡さんの書かれたものと、関根さんの書かれたものを読んでおりましたら、ちよつと反対のようなご意見でした。片岡さんの場合は比較的むしろそれを前進的な姿だと見てられる。

従来支払いの場合でも、年に二回しか払わなかつたものが、年間入つてくる形でやりよくなる。主婦が経営にタッチすることになり、目が開いてしつかりした人格になつていく。関根さんは逆に、非常に労働がかかつてきて、かえつてたいへんですという問題を出されてきたわけです。

片岡 それは農家の規模が私の場合には小さいんです。関根さんは大規模なように伺つておりますが、

山田 どの程度の差ですか。

関根 私のほうは平均耕作面積一・四ヘクタール、一町四反です。

片岡 私のところは四・五反です。

関根 そのほか、たいいていのうちに家畜がいますから、冬の間、男の人が働きに出たあと、牛の世話をしたり、それから男はたいがい役をもつていますから、そういうのも女の人がしたり、そのほかめいせんの機を持つてまして軒並みにやつています。少しの間でも惜しみなく働いているんです。

山田 いくら電化が進んでも、いつこうにレジャーはできないということになるわけです。

関根 かえつてそのために負担が多くなるんです。

山田 細川さんいかがですか、農家の形からいうと、どちらに近寄つていられますか。

細川 岩手は雪が深いので、出かせぎが昔から多いんです。私の村では五百人以上ほとんど出るんです。残つている男は部落の役員などをしてる人ばかりです。ですから冬の仕事というのは、ワラ仕事や家畜の世話ですが、全部女の手でやられています。そのために冬は忙しいのです。重労働でもないんですが、ひまのない生活です。

山田 そうしますと、都会と農村とかなり消費生活が変わつたといつて、その変わった影響の受け方が違ふという点が出てきたような気がするわけですが、そこらへんからご意見を出していただきましょう。

伊田 さきほど社会的な仕事を賃金化すべきじゃないかといいましたが、たとえば都会には婦人のパートタイムの仕事があるんです。PTAの仕事をするよりは、いくらでもお金になるほうをしたほうがいいにきまつている。だから婦人会やPTAなどの仕事も賃金化すべきじゃないかということをつたんです。

関根 同じ農村の状態にある同室の方々と話しましたが、私たちの場合、とても生活にむだがあつて、特にしきたりの面でむだが改められてないんです。私のところは長野県なんかと比べた場合、テレビの普及率は低いのですが、鯉のぼりとか、冠婚葬祭の面で、莫大なお金を使ふんです。収入と支出がアンバランスでゆがみがあるように、この会議へ出てきてわかりました。

山田 地域的なちがいのほかに何がありますか。

佐賀 ものの考え方が違ふんじゃないかと思うんです。私は生活文化ということに非常に重きを置いていまして、農家で機械を買つて五反、六反作つても、それではだめだ、それよりも貯金して利子で人手を雇うほうが経済的だ、という考えです。私のところでは、機械は買つていません。主人は勤めですが、母と父と私と三人で百姓をやつています。機械を買えないことはないんですが、主人が利息に興味もつてやつていますし、生活文化のほうに金を使います。子どもの教育費も同様です。それから家計簿をつけることが盛んで、農協を中心に共同購入をやつています。生活必需品の糸、ちり紙、せつけん、歯ブラシなどは、愛用袋という袋を

配つて必要なものだけ使つて、あとで支払つていくわけですよ。お金の使い方が割合合理的なんじゃないでしょうか。

関根 現金を持つていて、その利息で機械を借りて、自分の手を動かさないで、お金で仕事をしつらつしやるんですが、うちのほうは借金しても、どんな小さい農家でも七〇%以上はディーラーが入つています。やはりお金の使い方に対する考え方が違ふんですね。大きいお百姓で貯金の利息で人を使う。うちのほうは借金しても機械を使ふんですよ。それだけにお金の使い方のむだ、アンバランスがあるということが、こういうところへ出てきてハッキリわかります。

山田 考え方の相違はわかりますけれども、その考え方の相違の出てくる基礎はなんでしよう。

細川 それは主婦の勇氣と実行力じゃないかと思うんです。うちのほうは三輪車や耕耘機が二台もあるところもあつて持たないところはなんでしょう。けれども、うちでは耕耘機も電気洗たく機も買つていません。テレビは、みんな楽しんでむということ、買つていますが、近所の傾向に抵抗していくのは、ずいぶん勇氣がいりますね。ひげ目を感じることもありますしね。

山田 必ずしも細川さんの近所がみんなそうではなくて、細川さんが、そういうふうな合理的なお考えなのか、そのへんはどうですか。

細川 そうです。おうちのようには買わないところでは少ないですね。

若松 私のところと近いので農家の状態は同じじゃないかと思うんです。私のほうでは零細な農家でもテレビが相当入つています。しかし一面、遠いところから水おけを肩にかつて汲んでいると

いうような状態です。また油を多く食べよう、お料理の講習をやつても、フライパンさえない農家もあり、生活の内容は非常に粗末なんです。

山田 若松さんのお話を聞いていますと、一般的にそう合理的になつてゐるのではなくて、やはりその中で、主婦が優位にある家庭が割に合理化してゐるんじゃないかという感じがしたんです……。

佐藤 このあたりで主婦の努力というか、人間の努力ということを分析してみたいと思います。人間の労力も経済の一つでしようが、だいたい人間の努力というものは、現状維持の努力も必要でしようが、明日への向上の努力もなければならぬと思います。

むだな努力ということについて考えてみたことがあるんですが、たとえば貧乏との戦いの努力なんでものは、とてもむだな努力だと思ふんです。十年貧乏と戦つてみても、人間はちつとも向上しないことがありますからね。日本人は努力家だということをよくいいますが、めくらめつぼうな努力はなしに、明日へ一歩踏み出す努力をどうしてもしなきゃならないのではないかと思います。その点、努力について、むだがあるかどうかということも、もう一度考え直してみる必要があるんじゃないかと思ひます。

浦田 そうすると、借金をしてでも機械を買つて、そして労力を省くほうに賛成なわけですね。

佐藤 それはどうでしょう。

浦田 さきほどから、考え方の違いといわれていますが、土地によつても違うと思います。段々畑のところでは機械を買つても仕方ないのです。私は根本的な考え方として、ある程度計算が成り立てば、機械を買つたほうが利口じやないかと思ふんですけれども、

佐藤 それはそうですね。

山田 ただ細川さんの場合、機械がそれだけの効率を発揮しないという意見ですね。

細川 そうです。単作地帯ですから、一年にせいぜい十日使つたらあとは眠らせてゐるんです。ですからそういうものに二十万も三十万もかけて買うのは不経済なことだと思ひます。

青地 そういう場合は認めていいと思います。

関根 経営の内容も違ふんです。裏作もあり、養蚕も三回します。酪農の牧草も朝晩刈りに行かれます。

山田 これからの農業がどう変わっていくかということも、それにかかわる問題ですが、これは農村部会の問題で、ここではあまり触れないことにして、お話しが働く問題へ集中してしまいましたが、それよりも消費生活の変化の中で、レジャー、余暇の問題が最近大きくなつてゐると思ひます。戦後の生活の中でいろいろと対外的な活動もふえました。それだけ生活が合理化され家事労働が軽減したということが基礎にあるわけですが……。

青地 私は自分たちでグループをつくり始めたんです。子どもたちの中に学校へ行かなくて竹ススキの中にひそんでいたりするのが出てきて、だまつて見ていていいかというところから、グループ活動を始めました。月に一回、第二土曜の夜、集まりをもち日曜の婦人学級も取り入れて勉強してゐるんです。ただラジオを聞くだけでは何もしない、ラジオやテレビで知つたことを、自分たちの実践の中に小さいことでもうつしていくことにしています。レジャーも、自分たちのこうした集まりがたいへん楽しく、雨が降つたといつては寄り、とにかく町で会つても話し合いをやつてゐるんです。

山田 れたけ寄れるというのは、それだけ時間的な余裕があると
いうことになりますね。

青地 そうです。でも農業の人も、商人もサラリーマンもあるの
で、今後テープレコーダーを買って、皆に聞かしたい話は第二土
曜の晩に集まったときに聞き討論もしていくというふうにやりた
いと思います。

大橋 私の社宅では婦人は、自治会婦人部、労働組合の主婦会、生
協の家庭会と三つの組織にみんなが入っています。その世話役に
いままで問題なかったのですが、最近主婦が仕事に出るようにな
って、なり手がなくなつたのです。世話役というのは無報酬で
す。私たち四十代のものは、何の仕事でも賃金化することには、
たぶん抵抗を感じるんです。ところがこのごろ新しい方がふえ
まして、二十代、三十代の方は労働に対して報酬があるのは当然
だとハッキリ割り切っています。どちらが正しいのか。私は最近
は、労働には正当な賃金というほうが本当じやないかと考えて
始めていますが、若い人の考え方に近づくためには、まだ相当時
間がかかるのですが。

鈴森 保険の勧誘員、化粧品セールスなど、レジャーをお金にか
えている、またある人は昼間は内職をし、夜はダンスに行くとい
う、遊ぶための内職をしている、ある人はグループに入つて、講
師を招いて有益な話を聞き、討論をして視野を広める。私は、さ
まざまな姿で進んでいったほうがいいと思います。金銭には関心
がなく知識を求めたいというなら、そちらを伸ばせばいいし、お
金に関心の強い方は、そういう面を伸ばしていったらいいと思
います。

肥後 私もそう思います。他人からどうこういう問題でなく、自分

の考えて行動したらいいいと思います。社会奉仕をしたい人は一週
間のうち、一、二時間でも、たとえば保育所のつくりものにい
くということでもいいでしょう。日本は貧乏で、社会保障がずいぶ
んおくられているので、困つてゐる人のために力を出すのもいいでし
ょう。一方、お金がほしいから働くという人も、いまの段階では
しょうがないんじゃないかと思いますが、またその人も、もう少し
したつて、社会がよいほうに進んでいった時は奉仕に時間をつか
えるでしょうし。

加藤 社会的な婦人の役割を賃金化するというのはよくわかります
が、相当自主的な婦人たちのグループの場合は通るでしょうが、
私たちの婦人組織のような場合はおそらく通らないと思うんです。
意識が上から下まである組織の目的とする活動を、奉仕しあつて
一緒にしていくということにねらいがあるので、賃金化するとい
うことは、普通の地域婦会ではできないと思うんです。

鈴森 私のところの婦人会は会長二千円、副会長千円、事務局千二
百円と決めています。会員の中には理解の度の相違があつて、悪
評を買う場合もあるかもしれませんが、悪評を受けても踏み切つ
ていかなければ、問題は解決しないのです。

片岡 婦人会の役員になり手が無いということもほんとうの理由は、
全くの無報酬であるというところにあるんじゃないでしょうか。
八木 余裕のある人はPTAでも婦人会でも、喜んで熱心にお世話
する、そういうことで若い人に奉仕の精神も示さないとけない
と思います。

浦田 さつき出ましたが、助け合いと奉仕とは別にして、根本的な
行き方としては、仕事には賃金を払う方向で行きたい。手取り
早い話が、市議員とか国会議員は奉仕する役割なわけなのに月

給もらつて、お手盛り値上げもやつています。

肥後 どの地域でも全然無報酬ですが、私の地域では、少しずつ謝礼のようなものを出しているように聞いていますか。

(「無報酬」の声が多い)

加藤 私のほうは出ています。

肥後 少しはあるように聞いています。

浦田 私は、お礼などのウェットなものでなく、ハッキリ行くべきじやないか。奉仕の名のもとに、あまりにも強要し過ぎてはいないかと思うんです。

片岡 末端の無報酬で、仕方なしにやつているものは、婦人会活動だつて氣を入れてやれないのは当然じやないかと思ひます。

関根 団体の大きさによると思ひます。私たちの嫁たちのグループの世話役をさせていただいていますが、私の気持としては、皆が喜んでくれるというだけで、十分だと思ひています。

山田 たしかにグループ活動のあり方なり性格なり、またその方の感じ方によつて、ずいぶん違うわけですね。そういう点で、いろいろ意見も分かれるんじゃないかという感じもしました。

浦田 消費生活の変化によつて新しい問題として何が出ているかという話し合いの過程で、その消費生活をカバーするために、女の人が収入を得ようとする、外へ働きにいき出した。ところが働きにいつてみれば、仕事に夢中になつて家が投げ捨てになる。それならば民主団体の仕事を少しして、そしてそれが賃金になつて、その得た賃金で生活がうるおつていくならば、これにこしたことはいないじやないかというつもりで賃金のことを申したのです。

山田 たいへんよくまとめていただいて、ありがとうございました。(笑) 横道ではなくて、これだけ話が出るのは皆さんの関心の

深い問題だからです。たしかにその点は浦田さんのおつしやるのは合理的な考え方で、そういうものが通るまでに、現実にはいろいろ問題があつて、ジグザグな道を通りながら行くと思ひますが、それぞれの立場でご努力いただきましょう。それではここに春野さんが特別オブザーバーとしておいでになつていきますので、ご意見をうかがえらうとありがたいのですが。

春野 特別オブザーバー主婦連合会会長) 同じ主婦生活でも個々の差とか、地域によつて千差万別であるとかその上にいままでのままの暮しの体制であるところに、急に主婦のあこがれてゐる便利な器具が、どつと押しかけて、消費する氣持を誘発されています。そういううず巻きの中に私も立たされている。そして今度は、これから先に目を向けて、賢い消費を設定していくのに、どうすればよいかということが、大きな課題だつたと思ひます。それに対して、要は、もう少し消費者が守られるというか、そういう傾向が強く出されてもよいということをお思ひしました。いま一つはお互い同士、主婦なり母なり、妻なりが消費する王様ですから、王様としての自覚の上に、まず立つということ。そしてその上に、いろいろな工夫を、個人として、あるいは寄りやすいグループとして、あるいはお話にも出ましたように、積極的に生活協同組合も發展して、だいたい体制がととのいつつありますが、なにしろ洪水のほうがかいものですから、なかなか主婦の力が及びがたいところがあります。足元をさらわれる、あるいは隣り近所を見ながら旧態依然としている。みえのための消費も出てきてゐる。そういう弱さを、主婦たちは相当自覚しつつありますので、その上に立つて自分たちの体制をどうととのえるか、それとともになんか実践をや

ることが、いわば恵まれた消費生活をよりよく自分たちの生活に巧みに取り入れていくか。個々の生活、あるいは共同の生活環境、社会環境が、なるべく落伍者を出さないようにして守られていく、あるいは豊かになつていく、それから楽しみ方も賢い楽しみ方をしていく、そういう三つ四つの大きい柱があると思います。

政府も、全国の婦人層の世論が反映しまして、今年度は、総合的に物価を安定させなきゃいけないという体制とあわせて、各省がいままで生産とかあるいは工業の発展とか、そういう面にのみ力を入れていたのですが、今度のケネディさんの消費者保護の秘書じやありませんが、あれに似かよつて、日本の各大臣も官庁も、そういう体制をとろうとしています。そういう大きな動きも情報もつかんで、団体なり、個人なりが、できるだけ情報交換を密接にやつて大洪水の中を漂う消費者ではなくて、自主性にみちて、きょうよりはあずへと賢くなつていこうとする態度、そういう消費者になることが必要なのだということを痛感した次第です。

山田 明日の課題を全部いつていただいたことにもなりました、たいへんありがたかつたと思います。

次にやはり特別オブザーバーの小介川さん、どうぞ。

小介川(特別オブザーバー全国地域婦人団体連絡協議会) いつも感じますことは、たとえば、氷の問題でも、主婦連、地婦連、業者の間、民役所が集まつて座談会をするときに、主婦連さんは一月分のものを記録に残しあつて、きょうの氷は六百匁しかなくつた、九百匁だつたというふうな数字を出されるので、業者は、主婦連さんはいじ悪だ、昨日足りなかつたら、きょう持つてこいといつてくれたらというのです。それを聞いてみると、どうも業者は横暴だと思ふんです。

買物にそれほどの熱心さを見せている奥さんがいたら、あなた

方は非常に喜ばれるでしょう。そういう点を利用して、問題が提出されたら、どうして六百匁の氷、九百匁の氷が売られるかという問題を問題にしてください」といいましたら、業者は「氷を切るノコギリが悪く、横には切れるけれども、横には斜めになつて切りにくい、氷を切るノコギリを研究しています」というんです。もう一つは、問屋の冷蔵庫をもつと小さいものにする許面をしていくから、それができれば、一滴もとけない氷を配達できるというのです。そのように消費者の不平によつて改良策が出てくるんじゃないやありませんか、これが大切なことですといつたわけですね。そういう記録があることによつてバタバタと決められて、解決されています、また米屋の問題でも、毎月登録がえしたほうが消費者のためにいいんじゃないかというので、どうしてかと聞くと、悪い米屋をやめて良い米屋を選択することができるといいます。しかし悪い米屋もどこから米を入れるかといえば問屋です。問屋の登録がえが、小売業者はできていません。矛盾しているといいましたら、記録に残しておきましょうということとで、その翌年、年一回の小売業者が問屋を登録がえができるようになりました。そうしないと問屋が小売をいじめて、結局よい米が、消費者に入らないこととなります。そういうことを私どもはやつていっているわけです。電気の問題にしても、十アンペアと二十アンペアしかない。家庭で電気器具を一度に使うことはありませんので、十五アンペアがほしいと主婦が要求していることです。それを所管庁の代表が集まるところで要望した結果、十五アンペアがだされたわけなんです。十五アンペアになれば九十九円基本料金が安くなる。たとえば共同募金とか、その他二十円、三十円の募金を出ししる主婦が月に九十九円高く取られる二十アンペアを使つて平気である。

こんな点を一つ一つ、自分の家にマイナスにならないようにしていつたら、消費生活の面で、少しずつでもプラスになっていくというようなことを勉強しています。そのようなことを皆さんも勉強してください。

山田 次に特別会議員の方がお二人いらつしやいますが、第一回会議に出られた赤沢さんに。

赤沢（特別会議員） 私のほうの実態を申しますならば、皆さんが話されたようなことについてももちろんですが、この週間がねらつているところの新しい秩序の基本的な態度というものに全部抵触するのです。消費生活はアンバランスで自主性がなくて、非科学的で、もうどこからいいにしても、それ以前の段階です。消費者はどうあらねばならぬかということが、意識の表面に浮いてきていないという事実です。だから消費生活のあり方というところまでいかないで、物が高くなつて困るとかいうことだけで、高くなつたというところまではやつと感じています。ではどうしなければならぬのか、消費生活を高めていくようにどのように規制しなきゃならぬかということは、どうもピンときていないのです。

山田 第六回会議の篠崎さん、どうぞ。

篠崎（特別会議員） お話を伺つていて、自分なりの割り切り方が一番大事だなと思いました。私は電機機具もテレビも持ちませんがグループの人のところでテレビも見せてもらつたり、電気洗たく機も貸してもらつたりしています。子どもが大きくなつて、結婚するようになったらカラーテレビも買おうといつていますが、私のところも移りゆく農村で、だんだん生活水準が上がつてきて、簡易水道や、有線放送などは必要度の高い消費だと思つて、やり

くり算段してついでにしています。

それから、借金してでもなんでも買ったほうがいいのか、貯金をしたほうがいいのかということでは、借金してうちを建てました。十五坪ほどのうちですが、物価が上がるという見通しがあつて建てたわけではなく、私にお金を貸したほうが損をして、借りた私を得をしたようなことになりました。貯金の場合もお考えになつたほうがいいと思います。

山田 たいへんリアルなお話で、ありがたかつたと思います。次に、特別オブザーバーの方に。

永井（特別オブザーバー日本生活協同組合婦人部会全国協議会） レジャー

の問題が取り上げられまして、いいところに出たと思ひました。

生活協同組合の仕事をしておりますので、日本の政治のあり方を考えたいと思うんです。いままでの経済政策が、明治から富国強兵政策でやられ、封建時代から長い間それで訓練されて、消費者がみずから守るといふ生活態度を全然もつていなかったわけです。生活協同組合というのはイギリスのロッヂ・デールという、ロバート・オーウエンの弟子が、その思想をもつて始めたものですが、外国では盛んで、大きな組織をもつて、消費者の立場に立つた工場をもつているし、住宅でも何でも扱っているんです。日本では生協の組織を知らないで、資本家の売らんがためのウズの中に巻き込まれてしまひ、最近やつと気がついてアツブアツブしている状態です。もうちよつと消費者が賢くならなかつたら、いくら働いても生活は向上しないし、守られていけないのじやないか。生協は、いま日本に千いくつありますが、実際に動いているのは八百ぐらひ。その中に家庭婦人組織をつくつて、生活についての勉強をしているわけです。大きなパン工場、クリーニング工

場を持っています。よく生協は安く売るといわれますが、安いんじゃないで適正な価格ということを考えているわけです。スーパーマーケットなんかだと、もつと安く売っているところがありますが、調べてみると安く思わせるために、ラベルと袋は同じだが量が少いとか、質がわるいということがあります。生協の家庭会では、毎月集まつて家計簿をつけ、やりくりや商品がその表示とおりかどうかを研究しています。やがてはもつと大きくして自分たちの生活をみんなで守っていくようにしたいものです。

山田 次に、青年として傍聴に来ておられます二村さん。

二村（特別オザバー太学生） 私は全面的に親のスネをかじっているので、家計のやりくりというものはたいへんだなと思つて、きいていました。それで主婦予備軍として勉強しようと思つて参加させていたいたんですが、お話を伺つていて、地域差があるということがよくわかりました。その中でいろいろ努力していらつしやるけれども、私の聞いている範囲では井戸端会議の高級になつたようなといつちや語弊がありますが、これだけじやもの足りないんです。その中で、主婦が地域的にどうしていつたらいいかということまで、もつと意見を戦わせたほうがいいじやないかと思っています。

山田 いまいろいろご意見を伺つたことを、また明日からの話し合いに生かしていきたいと思っています。

戦後の消費形態の変遷の中で大きな生活の変革、それは私たちの生活にプラスになつたりマイナスになつたり、労働を軽減したり加重したり、さまざまな現われ方をしているということから皆さんに自由に話していただきました。そこで明日からの討論は、要するに賢い消費者になるということが第一に大きなテーマになるかと思ひます。それから第二にだれが消費生活を変えている

かという問題、要するに消費ブームの巧罪といわれるものは、どういう形でだれが巻き起こしているかという問題にあります。大きな流れの中で、われわれの消費態度、消費の心理がどういうふうに変つてきているのか、そして、そういう問題の中で、消費生活をよりよくするためには、どういう点にポイント置いて考えていかなければならないか、これが明日からの会議の一つの大きなポイントになることです。次には物価値上がりの問題がありますね。消費生活についてを考える場合に、借金して使つておいたほうが得だという現在の状態があるのですが、これはいつたいうことなのか。相当大きな問題でありますので、やや突っ込んでご意見も聞かし、私の意見も申し上げてみたいと思います。最後に、消費者はそういう受け身の立場にあるだけではなくて、積極的な行動をとる必要があることはいうまでもないわけですから、消費者自身が、こういう新しく変わりゆく世の中に、どういう行動をとつていけばいいか。また逆に、政治の面で、消費者行政がどうあるべきか、そこへも問題を広げていきたい。最後にまとめとして、消費生活の新しい型はどうあるべきかということ。卒直にいいますと、私も個人の好みが相当あるという感じがします。で、これが新しい消費生活の型だということは、私はないと思います。ないといつてしまうと語弊がありますが、現在の消費生活のあり方について、考え方の混乱もあるし、自主的なものの喪失もあることを特に注意していかなきゃなりません、ということ最後の総まとめにしてやつていきたいと考えております。

なおご意見がありましたら、この際出していただいて、私のほうでもそれなりに話を進める準備をしておきます。

片岡 農村でも都市でも共通の問題じやないかと思いますが、若い

方は、結婚すると別居する方が多いと思います。親との同居をきらう傾向がある。経済的にも一考していい問題だと思いますが。

山田 それも問題として取り上げたいと思います。純粋な消費生活とはいえませんが、大きな問題ですから、触れましょう。

(第一日閉会)

第三部 会（消費問題）

第二日 十二月 一〇、〇〇、一七、〇〇

山田 昨日は、戦後の消費生活の変化の激しさと、たとえば農村などの従来の生活上の因習、それがどうからみ合っているか、そういう問題が一つあつたわけですが、それは結局地域や家族の職業などでかなり違いがあるという話し合いになつてきたと思います。それから後半には、そうした消費生活の変化は、全般的な、たとえば労働やその他の条件で、どういう変化を与えているか、というような問題から社会的活動に対する報酬の問題にもなりました。この問題はかなり重要な問題だと思ひます。結論を出すところにまでいかなかつたと思いますが、今後考えられる上での問題点として記憶されていいでしよう。

さて、今日これからは現在の消費ブームの中の消費者のあり方、消費生活の内容をどう考えていくかという点にお話をしほつていざたいと思ひます。

はじめに最近の消費の問題の中で、いわれていることは、要するに消費ブームの波に消費者が流されていて消費生活の中にゆがみやアンバランスが出てきているということが一般にも指摘されており、また皆さんの所感文にも、そういう面が数多く出ているのですが、そのゆがみとかアンバランスとは、一体どういうことをいうのかともう一度確かめてほしいような気がします。そこから出発して、一体何がそれをゆがましているのかという点に問題を発展させていきたいと思います。現在の消費生活にゆがみがあるとすれば、それはいつたい何か、そういつた点で発言してください。

関根 消費ブームに流されるといいますが、それを助長するものに

マスコミがあると思います。それが人間の心理をよくつかんで、目新しいものを取り入れなきや今の時代から取り残されるような錯覚を起こさせるという感じがするんです。

山田 確かにそういうものを引き起こさせる原動力となつていますね。その前にどういふことがブームに流されている姿なのか、どういふのがゆがみなのか、こういう問題はどうか。

浦田 うちに高校生がいますが、休みには目先の勉強に追われていないで、文学書などもたくさん読んでほしいと思うんです。でもきようはスケートだ友だちとマーシヤンだと遊んでいる。そうでもない退屈だといっているんです。そういうことも一つの現象じゃないかと思います。

佐貫 交際費についてですが、合理的にやろうと思つても、どうしても因習に流されてアンバランスになる。またレクリエーションで金を使わなければ遊んだような気がしないというのが現在の気持ちじゃないかと思ひます。観光バスに乗つて出かけなければおつき合いができなくなっている。お金を使わない遊びもあつていいと思ひます。

加藤 私の町の大きなデパートの前を通りかかると一方だけ入り口をあけて、主婦たちが雨の中に列をつくっているんです。それに「本日はあなたにだけしか売りません」という紙を各戸に配つた、それにつられてみんな行つたわけです。買つてきたものを見ると、いつも特売場にあるものなんです。そういう巧妙な宣伝作戦にひつかかるのです。

大橋 計算高くなつたというか、せちがらくなつたというか、物質のほうを重く考へて、精神的なものを軽く見る風潮がありますね。山田 消費者の心理が変わつてきているという点ですね。

電機製品なども月賦販売なんか始めて、マスコミに乗せられて買う。月賦の終わるころには、製品が悪くなるという状態がありますね。

細川 農業が機械化された割に、うちの中の生活が向上しないといふことが見られますね。

山田 農家の問題では、経営のほうに相当投資してしまふ、そのために消費のほうに回らないといふことがあるわけですが、日本全体もそうかもしれないですね。ものすごい投資をやつて、消費の率が下がつてきていますね。電機製品の取り入れ方にもアンバランスがあるんじゃないかともいわれている。アンバランスとかバランスとかゆがみといふことを、どういふふうに考えるかといふことも非常に大切だと思ふんです。たとえば四畳半のうちにテレビがあるのをアンバランスじゃないかといひますが、それではりつばなうちができなきやテレビが見られないか、これがバランスかといつたような問題があるわけです。これからの国民の生活はだんだんそういうものがバランスをとつていくようになっていくまた生活が向上していくことが望ましいわけです。先にいけばだんだんそろつてくるが、一ぺんに出ちやうと、電機製品も、自動車もどんどんつくり出す、アメリカでモーターボートがはやり出すと、それもまた日本へ出てくるというふうなことです。実際のわれわれの生活はそこまで行つていないので、ますます自主性のある選択で消費を考へていかなきやならない、そこに悩みがある。ところが消費物資はたくさん出ているもので欲求不満が出てくる。そこでいろいろな形でゆがみなどがある。消費ブームに押し流される中で二つ問題が出たわけです。一つはわれわれの消費心理消費態度が、ずいぶん変わつてきているのではないかといふこと。

もう一つは、そういう心理に乗ってマスコミユニケーションを利用したような宣伝、せん動巧みなマーケティングがはやつて消費者の心をひきつけるということですね。消費ブームに押し流される原因ですね。そこで消費者の心理について、たとえば精神的なものが薄くなつて物質的になつてきたという話があつたわけですが、そうした一種の消費心理がどう変わつてきているか、それをどうごらんになつてゐるか、この点に問題を集中して議論していただきたいと思うんですが、

鈴森 修学旅行に行くときに、寝巻もバジヤマじゃなくてネグリジエを持ちたがるんです。だいたい子どもはあんなレースでかさつたジャラジャラしたのじゃなくていいと思うんですが、旅行となると無理して買ったがる。それから下着も日本は湿気が高いから、夏は木綿のサラツとした下着がほしいと思つても、ナイロントリコットのレースつきを業者は出しているの、買にくいのです。そういう外見上のきれいさというものにひかれ過ぎると思うんです。

山田 流行ということなんですが、一方においてマスコミの宣伝からも来ていることになる、この問題は二にして、一ですね。

八木 戦前は人間の労力が計算に入れられなくて、ガスぶろにすればいいけれども、お手伝いさんの用事がなくなるからマジぶろのままにするというようなことを聞きましたが、戦後は私たちの労力が非常に価値のあることがわかつてきてまして、この間も掃除機が故障して、高価なものだが、ボーマスまではほうきを使おうと思つていましたら、大学生の男の子が、お母さんの労力こそ大事だから、そんなのこそ新しく買わなければいいました。私は八百円のほうきのほうが安いつもりでしたが、子どものほうは、新し

い教育で、やはり一つ進歩しているなと思ひました。伊藤 私どものあたりは、勉強の塾がたいへん盛んですが幼稚園とか塾には、行きたくない子どももひつぱつていつて時間までおいてくるのです。精神的な消費面じゃないかと思ひます。

浦田 たとえば高校生が本を読まずにスケートなどで遊ぶといつても、そういうものがあるから遊びたくなるといいたくなるんですが、消費者のほうの心理も変わつてきたというのは、どういうことをいつていらつしやるのです。

山田 たとえば全般的な風潮が一つありますね。戦前に比べて勤儉貯蓄の精神から消費は美德だというふうに変つてきた。これも労力を使つてお金を使わない風潮から、労力を大切にするために使うものは使うというふうな考え方になつてきた。つまり生活の合理的な考え方、それが消費生活の上に反映していく、かなり戦前と違つた新しいものがあるのじゃないか、そういうことをいつたわけです。その点でのわれわれの消費態度が、一般的にいえば変わつてきている。しかしその中でも個人個人で差があります。それぞれの形で、いつたいわれわれの現在の段階での新しい消費生活の態度、その中で一つのプリンスブルがあるかないのか、そのへんを、だんだん結論として、なんでも出していただきたいと思ひます。

若松 友だちが化粧品、セールスマンをやつています。その話では、質が同じでも、ケースを変え外観を飾つて、高く値段をつけると、安いほうは買わないで、高いほうを買つていく人が多いといひます。商品に対する知識もないのです。売るほうでも良心的に内容を知らせてもらいたいものです。

山田 それは重要な問題なんです。たとえばいまメーカーがものを

売ろうとするときに、いろいろの作戦があるわけです。その中に、消費者の頭を混乱させるという作戦があるんです。混乱させておくと、価値基準がはつきりしないで高きや良いだろうということになるのです。そういうことに消費者は取り巻かれているわけですから、なかなかたいへんなことです。これはまたあとで、どうすればいいか、どういうことを要求するかという積極的な消費者の態度を出していきたいと思います。

浦田 せっかく世の中に便利ないいものができたなら、できるだけそういうものを使わなくては損だと思い、そこに自分の道を探していこうという気持です。

山田 それは問題のあるところで最近消費ブームに押し流されるなということから、そういうものを買わないほうがいいじゃないかというようなことになつてしまうと、これは逆なんじゃないかという気がするんです。いまのことについて意見を出してください。

藤井 生産技術が進んでくると、テレビとかカメラとか、同じ値段で、待つていて、ある程度の値段で買いますが、結局次々新製品を買うことになつて、マスコミに乗せられているといいながら、そのほうへいくんじやないでしょうか。

山田 次々に買わせるのがメーカーの作戦ですね。そのためにモデルチェンジというようなことがあるわけです。テレビは前より形がよくなつて、使いやすくなつた。これを道徳的陳腐化といつてますが、古くさくなつていやだという感じがしてくるのです。もつと手が混んでくると、三年ぐらいたつと悪くなるようにはじめから作つちやうとか、いろんなことがあるのです。

大橋 何が自分の家庭にはいちばん必要かということは主婦が知つているので、何をいちばん先に買うか、個性的な買い方をするよ

うにしています。

青地 売る商店の側ですが、どのように上手に宣伝をして、どのように売り上げを多くするかを考えるのです。買わんではいられないような気分になるように宣伝したり、当局の肩書をもらつて宣伝をしたり、温泉の招待を付けたります。しかし農家は惑わされずに、機械の良し悪しで買うようにしていただきたい。それから大事なことは、男がこれを買おうという場合に、女はその機械の知識もなく、「お父ちゃん、温泉へつれていくほうを買いますよう」ということがよくあるのです。

山田 宣伝するほうの立場からの御忠告ですね。

佐藤 戦争中から戦後にわたつて、消費生活を押えられるだけ押えられてきました。その反動とも考えられるのです。

山田 自主性、必要度、その通りですが家庭内の古い世代と若い世代による相違ということはありませんか。

大橋 ありますね。高校生の子どもの発言がうちでは重要なポイントになるんです。

子どもも高校になりましたら新しい考え方を出します。初めは抵抗を感じますが、だんだんそのほうへ、こつちが移つていくようになります。

山田 具体的にいうと、どういうことですか。

大橋 教育費が家計の中で占める率が大きいです。それで、私も仕事に出たいと思つて子どもにもいいましたら、お母さんの若さは三百円じゃ買えないといわれました。私は一日中動き回っているのが家族のためになるというような考え方をしていたのですが、働くために生きているようなのは美德じゃないと思ひ出したんです。私は文学的なことが好きなんです、子どもが、あと一年で

卒業だし、仕事に出ることを考えるより、自分の勉強のほうへ振り向けなさいというのです。

片岡 乾物が非常に上がっていますが、テレビとか炊飯器冷蔵庫などオートメーションでできるものは、その割に上がらないんじゃないでしょうか。そういうものは、人が買つても、ほんとに価値があるかどうか、半年なり一年なりあとに買ったほうが、賢くいやり方じゃないでしょうか。

山田 宣伝なんかはフワフワと乗らないで、じつくりかまえるというわけですね。

鈴森 さつきの習慣という問題ですが、いままでの日本の習慣の中で古来のお正月料理などは日本のいい習慣だから残していきたいということと若い人たちは、そんなものはいらないという、その間に立つて主婦はどつちを選ぼうかと、やはり迷うと思いますが、どの程度に古いものを残していくかということが大事なんじゃないかと思います。衣類にしても和服にもいいところがあるし、きれいだから残したいという面と、機能的な面から洋服がいいと両方あります。結婚の準備にしても同じでしょう。ほんとうに迷います。

山田 新しいものがどんどん出てきて安くなるから、あとで買ったほうが得じゃないかというお話がありました。自分が買った後に改良されたものが出てきたら、損したような気がしますが、考えてみると、その間私はちゃんと使っている。そんなに損をしたと思わなくてもいいんじゃないかと思えますね。

山田 先に使つたから、それだけはプラスだという考え方ですね。お話を整理してみますと消費心理とか、消費態度についても考え方が二つあるようです。一つは消費ブームに流されているのは、

むしろ若い人じゃないだろうかという点です。修学旅行のネグリジエですね。現在の宣伝攻勢は、若い人をねらつていて、なぜねらうかというと、若い人は権威は信じないが広告に信用するということと、消費ブームの原動力になつてゐる。かりに女性をとつてみても、戦前に比べて、女性がほとんど職場に進歩する。しかも結婚後までの勤めということになれば、入つてきたお金はある程度自由に使える。そういう若い世代の消費態度への批判が一部にある。その反面、若い人の考え方のほうが合理的じゃないか、自分たちのほうが古いんじゃないかという考え方と、両方出てきていますね。そのへんに、新しい消費秩序をつくつていくためのわれわれの考え方は、どうしなければならぬかという点があると思うので、まず問題をそこにしぼつて一応段落をつけたいと思います。その点でもう少し意見を出していただきたい。

佐藤 主婦の科学的な勉強が必要ですね。

藤井 若い人が消費ブームの原動力だというんですが、若い人はその場限りで計画的なものではないのですか。月賦など、私たちは借金しているような気がします。

山田 月賦を若い人は大胆に利用する、またそういう作戦があるのです。つまり将来の所得で買わせようということですから、アメリカなんか月賦がかなりふくれていく状態で、日本も今後月賦というものは、かなり伸びていくでしょう。そういう生活態度が近代的かどうか、問題があると思いますが……。

細川 若い人も共に、家族みんなで話し合つて、家計とバランスのとれるような計画で買つたらいいと思います。

若松 私は若いほうに入るのか、中年に入るのかわかりませんが、独身時代には月賦を盛んに利用しました。給料が少なからだつ

たのですが、結婚して、家庭の所得がふえてある程度見通して、計画を立てられます。しかし一万二、三千円の月給で、五、六千円の洋服を買おうとなれば、月賦しかありません。そういうことも考えなければ。

八木 電機製品を買えば電気代がかさばり、ミキサーを買えばくだもの代がかさばります。そういう面も考えて買うことでしようね。

山田 戦後、一般的な生活様式が非常に変わってきているわけですね。徳川の封建制度の時代には、殿様は殿様の生活のタイプ、さむらいはさむらいの生活のタイプというものがあり、町人は町人と、自分に応じた消費の形がありました。明治になつてかなりくずれて、それでも戦前はサラリーマンの生活と工員さんの生活、農家の生活、各々のタイプがあつたわけですね。所得に応じた生活、身分秩序、所得体系とか、消費の型が決まつていたように、身分相応ということがよく聞かされたものですね。ところが戦後は身分というものがあまりなくなつて、そういうことにかかわりなくものを買うようになってきました。逆にいうと、それがいまの大きな消費の革命を引き越しているわけです。貧乏人も金持も、みんながテレビを買うということになると、テレビのマーケットが広がってテレビ会社が大きくなる、そういう形が出てきています。身分秩序による消費市場が開放されてきているのは、大きな進歩だと思っています。しかし反面、そういう市場が大きくなれば、大きな

会社が出てくる。大きな会社が出てくればたくさん生産するから、よい売らなきゃならない、売り出すメーカーが大きくなればなるほど大きな宣伝攻勢が出てくる。昔は大きな会社といえば三井鉱山とか、東洋紡とか、日本製鉄とか、そういう原料とか、中型原料の生産者が多かったのですが、いまは東芝だとか、松下電器だとか、そういう会社

が出てきて、機械にしても、昔は糸を売りつ放しだつたのが、いまは最終製品を、これはどの何でございますという形で売っている。大資本が、皆さんの消費秩序に接近してくる。大資本はお金をたくさん持つていて大きな宣伝広告ができる。しかも技術革新で、テレビ、ラジオというような媒体ができてくるというように、経済の発展、皆さんの消費態度の変化が、大きな経済の変化を引き越して、それが今度さらに消費を変えようという一種のウズができています。そういう意味でマスコミに乗った宣伝、せん動に対して、どう対処していこうかということが、大きな問題になつていくわけです。

さきほどの新しい消費態度の問題、これはなかなか結論が出ていないし、皆さん方の考え方が、若干ずつズレがあると思うので、自主性とか科学性ということが、一つの抽象的な問題としては、それで通るわけですがその自主性というのが、現在の宣伝攻勢の中でどういう形で確立できていくのか。案外自主性だと思つていのが乗つけられているんじゃないかという問題が出てくるわけです。

そこで後半の問題に移つて、そうした大きなせん動、宣伝の流れの中での消費者の立場、あるいはそういう巧妙な宣伝攻勢の実態から押して、気をつけなければならないところへと問題を移して議論していただきたいと思っています。

浦田 私の団地で、コカコーラが各々半ダースずつ配られました。

ただ飲んでくれさえすればいいということだつたんですが、子どもたちは、それを飲んだら次から買いたくなるだろう。うちの食費のワタの中で、そういうものへたくさんさかされると栄養の面で困るんです。私はそのときすぐに飲ませないで、一応は隠し

した。そして庭の仕事などしたあとで、買つておいたから飲んでごらん、だけどハイキングに行つたとき、やたらに飲んじや困るよといいました。ああいうものの原料は、ほとんど水と見ているのです。宣伝もしていますが、米屋のブラッシーも米屋が半分利益をもらうと聞いています。そういうもののはうへどんどん氣持を奪われていたんでは困る、そういう意味で自主性ということをいつたんです。

佐貫 殿様の口にさえ入らなかつたものが、いまわれわれの口に入るといふ時代になつて、人生を楽しむということも必要ですが、やはり自分の生活をみつめて、家庭を育てていくためには、どうしても商品に対する知識を婦人が持たなければと思うのです。ラジオでも婦人雑誌でも、その氣さえあれば、勉強はできるのですから。自分一人でなく家内中が心がけて、正しい商品知識で虚榮やみえを捨てて生活を育てるようにしたいと思います。

山田 商品知識の勉強ということが攻勢に対する一つの手段という形で出てきたわけですね。

佐藤 消費組合とまではいかなくても、たとえばミキサーがほしいという人が二、三人でもあれば、グループをつくつて、代議士の政見演説を聞くように、各社の宣伝係の人を呼んで話をきけばいいと思うのです。アフターケアのこともありますしね。

肥後 私たちの年令では、もつたないという氣持があつた、かえつてむだなことしているんじゃないでしょうか。たとえばいつ着るかわからない着物を、タンスの底にいつもしまつておいたり、押入れが狭いのには、奥のほうに、使ひもしないものを積んで場所を取つている、大掃除のたびに難儀して時間をむだにしたり、転勤のときなど運賃をかけて持つていく。買うときに、うんと考え

てから、ほんとうにむだでない買物をしたいと思うのです。レジヤーの旅行でもお金はかけるが、考えて行かないからくたくたに疲れるだけのもので、これでいいかと思うのです。そういうむだがあるんじゃないかと思ひます。大切なお金での消費ですから、よく考える必要がありますね。

藤井 結局消費者の教育ということに力を入れてもらいたいのです。アメリカでは、そういう教育が伸びているようですが、日本にはまだ弱くて、国民生活白書が出ていても一般むきではない。機関紙のようなものをつくつてもらつて、消費の上の不満、問題を、それを通じて調査してもらひ、悪いものは公示するなら、買わなくなるし、会社も責任を持たなければならぬ。そういう仕組みが必要ですね。私のほうでは農協を通じて、そういう面のことをやつていきます。

山田 アメリカにはコンジュマー（消費者）。レポートという、商品テストをやる本が、百万部ぐらい出ています。日本にもだんだん始まつています。最近、消費者教育ということが、世界的にも、戦後大きくなつていて、日本でも、だんだん取り上げられ、消費者行政の問題が出て、消費に伴う諸機関ができてきています。苦情処理も扱つています。ところがそれだけ消費者自身が関心もつているかという疑問があるんですよ。皆さんのお話を聞いていると、日本の消費者、ばかに賢明で、えらい人ばかりいるんじゃないかという氣がするんですが（笑）、私はふだんはメーカーのほうとつき合つて、いかにして手練手管でやつていくかということをお互いに話し合つているし、聞いていると、消費者はあまり関心がないという感じだつたのですが。苦情を申し込む機関があつても、苦情がこないのが實際じゃないかという氣がしますが、そ

んなことはありませんか。

藤井 小さい村ですから、どれがいいかわからないので、その役わりを豊協でしています。

山田 皆さん方は目覚めた消費者であつても、大多数の目覚めない消費者がいて、ワーンと何でも飛びついていく、というのが事実じやないかという気がします。そうした点で、製造する側では消費者をなめているという感じもありませんね。やはり広い範囲で、賢明な消費者をつくっていくということが、大きな要点になるわけです。消費者は王様だとメーカーはみんないます。しかし王様というのは、何も知らないんですね。側近のいうことを聞いて、ボンと判を押すだけです。いまの日本の消費者はまさにそれで、側近のいうのを「ウンそうか」とパッと買う。そういう状態になつてゐるんじゃないか。

そこでそういう、いま出たような消費態度いますが、商品に對するしつかりした自覺のある態度を、もつと広げていかなきゃいけないんじゃないか。こういうことが消費者のものになつていれば、ずつとよくなるという感じがするわけです。アメリカなどでは、商品テストの結果は消費者も利用すると同時に生産者が利用する。アメリカではその点で二つの大きな権威のある機構があつて、テストしたものを、国民のだれもが参考にできるので。そういうことができれば、よくなつていくわけですね。

ここで佐藤さんが特にここで提案されたい問題があるわけで、途中になりましたが、どうぞ。

佐藤 私の消費生活というのは、最低必要なだけの消費なのでレジヤーなどは前提にしません。私はむだな労力はないかということを考えてみました。人間の向上や生活の発展に役に立たない

ような労力をむだな労力と私はいつていますが、洋服裁縫をしていますので衣の生活をとつてみますと、洗たくは電気洗たく機があつて労力はあまりいらぬ。問題は縫うということが旧態依然として残つてゐると思うのです。最近では既製品がいろいろできて、縫うことも少なくなつてはいますが、衣類の修繕というふうなことは仕立屋にも出せないで、主婦が忙しい中で針をとらなければならぬ。それも、なかなかこぼない。

そこで昔の女の仕事の糸を紡いだり、布を縫つたりすることがなくなつてゐることに気づきまして、それでは家庭の主婦の方から縫うという仕事を一つなくしたらどうかしらと思つて、そういうものの組織化、企業化ということを考えました。私の構想としては、一、二カ町村で、衣科センターというところと隣者さんともちがえますから、着物センターとでも名づけたものをつくつて、そこへ修繕したいもの、あるいはシーズン・オフになつたものをもつていくと、洗たくから何から一括してやつてくれて、生まれかわつて返つてくる。そういう仕組みにしたらどうかしらと考へてみたんです。それから都会とか工業地帯では、会社の福祉事業としてなさつたらどうかしらと思つたりします。経費の問題かたいへんですが、ボロつくろいの仕立代まで高いのでは、とてもスムーズに利用できませんから、あくまでも営業でなく、福祉事業の一端としてやるのがいいと思つています。また、農村では、男か女かわからないような野良着を着ていますが、もう少し農家の婦人も、美しくよそおつて野良に出て働いていただきたいと思ひます。子供のひざこぞうに、アップリケしてあつたり、そういうふうな風景が日本全体に広がつていつたら、楽しいなと思つて考え出したことです。

それからもう一つ、家庭の中から縫うということがなくなつたら、男の人との一つのハンディキャップが消えるわけです。ですから、若い人もいよいよ女性の向上のために勉強していただけるんじゃないかと思ひます。

年に一・二回必ず風水害などのある日本では、そういう助け合い運動にもセンターの一つの仕事として、衣料提供ができるような仕組みも考えられ、大きな面での消費に大いに役立つと思ひます。

山田 佐藤さんは、縫うということが社会化されて、女性が解放されるとおつしやつたわけですが、それに似た面が、いろいろありますね。最近では農村でも、水道もできてきました。そうなると思ひます。最近では労働が、社会化することによつて、改善されてきている。いままでの婦人の家庭生活、消費生活の中で、社会化することによつて、労働が軽減されたものがうんと出てきています。最近では加工食品がはやつていますね。フランス料理一式、全部ポリエチレンの袋に入つてゐる。何もなくてもいい、これは女性の天国だと思ふんです。労働を社会化することによつて、より生活の合理化ができてくる、そういう問題に触れた提案だつたと思ふわけです。佐藤さんの出された点について意見がございましたら……。

佐藤 縫うということをやめるのは、女は家庭を殺風景にするんじゃないかと、情操教育の点も考えてみたんですが、あまり支障がないんじゃないかと思ふんです。

浦田 税金を、もつと福祉施設などの方面に使つて、たとえば医療関係の福祉施設が完全になれば、個人が払う費用が助かる、そして生活が豊かになつてくれば、それで新しい衣料を買う、そういうふうに行くべきじゃないかと思ふんです。佐藤さんのお考えに

なつてゐることは良いのですが、こういう新しい品物がどんどん出て、移り変わつていく中で、その労働というものを、どの程度にかみ合わせればいいのか、疑問に思ふんです。

山田 その労働というのは……

浦田 仕立屋に出す以前の労働でしょう。提案なさつてゐるのは。仕立屋にも出せないような品物に対して、それほど考える価値があるもの、……製品に思ひます。

八木 結局地域的な問題で、東京とはちがうと思ふのです。佐藤さんは洋服業をしていらつして、皆さんのもつてくる切実な声で、こういう提案をしていらつしやるんですから、考えるべきだと思います。とてもいい提案じゃないかと思ふんです。

細川 私一年中、ほとんど裁縫をすることがありません。農村でも衣生活が非常に変わつてきたんです。昔は冬の間はお裁縫するようにきまつていましたが、丹前なども最近では、ほとんど毛布になりましたし、それから、はんでんもほとんど見られません。ズボンなんかも穴があれば一度はつぎを当てますが、それ以上になると肩屋にどんどん出ます。そういうふうに変つてきて、知らず知らずの間に縫わなくてもいいような形になつてきました。私たちもふだんほとんど着物を着ませんから持つていません。子どもたちも同じです。

加藤 私は浦田さんの意見に共鳴します。というのは、繊維からみても、更生してもそう保ちません。そういうものに、それだけの努力を使う価値はないと考えます。

大橋 浦田さんと同じ意見です。私のほうでも、子どもはツギの当たつたズボンなんかはきかせんし、アメリカあたりでは、いかに品物を早く捨てるかということが考えられている時代です。それ

に破けたものを補修しても、あとすこしのいのちしかないのです。そういうものに労力をかけても、むだだと思ひます。

伊藤 これは毛糸の場合ですが、編み直しを頼むと、いやがられます。手間がたいへんかかるが、それでも新しいものより高くするわけにもいけません。ですからなるべく新しいものを編んでいきたいのですけれど、頼むほうとすれば、古い毛糸も使えるだけ使いたい。そういうものを氣持よくやつてくれるところも、ほしいような氣がします。

藤井 佐藤さんのようなことを私も考えてみたことがあるんです。私も結婚して二十五年ですが、しつけのかかった着物をまだ持っています。そういう着物を処置するところがほしいと思うんです。

私どものほうは、ふとんなんかにしても、家庭でお洗たくして仕上げるよりも、そのまま持つていくと、ほどこいて、お洗たくして、張つて、綿を入れて持つてきてくれる、そういう楽なところができています。常着は自分でやつていますが、労力を使う以上、合理的にしてくださいと、いろいろとれるんじゃないでしょうか。施設も、考え方一つで、いろいろとれるんじゃないでしょうか。

施設のあり方をどうしたらいいかということを考えるべきじゃないかと思ひます。

山田 むずかしい問題も含まれています。そういう要求を、地域の中でもたれていけば、何らかの形で生かすように考えていつていいですね。

一応午前中のお話を集約してみますと、要するに消費生活の変化の中で、いろいろなことが考えられるが、一つは、国民の全体の消費態度が、戦前に比べて非常に変わつてきているのではないだろうか、その中には悪い面もあるし、非常に合理的であり科学的

な面もある。そうした点で、さきほどいわれた合理性と科学性という一つの基礎については、具体的に最後の、消費生活の新しい型というところで、もう一べん議論することにしたと思ひます。もう一つ、消費生活の変化を引き起こしているのは、日本の産業全体が大きく変わつて、その産業界——資本家からの大きな攻勢が皆さん方を大きく押し流そうとしている。そういう情勢の中で、消費者はどういうふうに振舞わなければならないか、そういうことが問題になつたと思ひます。そういう点では生活上の新しい様式がなければならぬ。それは、生活の合理的な設計の上で出てくるという指摘がありました。また同時に、商品知識を身につけるといふことが、生産者側の宣伝攻勢に対する一つの防衛であるというお話も出たわけです。

ただきようの午前中のお話の範囲では、もつぱら消費者が個人的に、あるいは若干のグループでやるという形でしか問題が發展していませんが、もう少し上のはうに發展させたい。最初はやはり消費者の物価の問題を取り上げてみたいと思ひます。これについてはアメリカで一九五九年に、キー・ホーバーという人が、消費者省というのを提案しております。提案の理由の最初のところをちよつと読んでみましょう。日本と似ているんです。「アメリカの消費者は、インフレとの戦いに破れつつある。買物をしないほど、金をつかわないほど上手な買い方である。アメリカの消費者は——もつと正確に言えば、消費婦人は、どんどん上がる物価に、とても対抗できない。——これを「日本」といい直しても、あまり変わらないような事態が出てきているわけです。そうしたところから、特に物価値上がりという点を主軸において、消費者省の提案が出てくるようう状況です。日本の場合も一昨年か昨年

年にかけての物価値上がりが非常に顕著でしたね。こういう時には、昨日も、早く借金して家を建てたり、物を買ったほうが得じゃないかといった意見も出てきました。生活の設計、消費のあり方について、今後どうすればいいかということが、非常に大きな問題になってくると思うのです。物価騰貴というようなのは、どういうふうに考えるべきか、消費者としては、それにどういう対抗手段をとつていけばよいか、これを中心にしながら、まずその問題をやりましょう。その続きで、いま申しましたように、消費者物価にどう抵抗していくか、消費者としての対外的な活動、大きな立場からの消費者行政、消費者政策が必要になつてくる。その問題をもう少し上の単位で論議していただく。最後に、さてわれわれとしては今後どういった消費生活の型、まあ型があるかないかわかりませんが、そういう型をつくり上げていく場合、これに注目していこうじゃないか、という結論にもつていこうじゃないか、そう思っております。

(休憩)

山田 それでは午後の部にはいりましょう。午後の部は物価の問題は皆さんの一番関心事だと思いますが、これをどう考えるか、それから、これからの見通し、一体どうなるのかということて話を進めたいと思います。

八木 物価が次々と変わり予算が立てられなくなります。せつかく立てた予算も狂ってしまうので困ります。

伊藤 物価が上がるといっても、物がなくて、不足して上がるのは仕方がないと思うのですが、中間に手数料とか運賃というものがあるんです。私のように奥に住んでいるとなおさらで、生活必需品であるがために、高いものを買わなければならないのです。

藤井 電機洗濯機など少しづつ下がっているようですが、日用必需品などは、ことに野菜などはたくさん出まわつたら一度下がる時期があるのに、下がる時期が全然ないんです。ということなのでしょいか。

佐賀 一体どこでもうけているのか、それが問題だと思うのです。

手数料とか仲買人のもうけでしょうが、自作者から町へ出す運賃が高い点もあつて、大きい問屋が買つて、小さい商店はよいものが買えない。そういう仕組みが原因だと思うのですが。

池田 貯蓄しても、十年先には、あゝのとき品物を買つておいたほうがよかつたんじゃないかという考えを起こさないように安定していられるかどうかと思ひます。

福川 私たちが売る場合は上がらないで、買う場合だけが上がるということでなくしてほしいのです。

肥後 牛乳のことで、生産者のほうでは五、三円で出しているのに、消費者価格は十五円ぐらいになつてゐる。製産者としては、せめてもう少し消費者が安く買えるならいいのにといいこともあります。

山田 中間手数料の問題ですね。

鈴森 電気製品を買う場合に、購売会では一割引か、二割引で買えます。そうすると小売店でももつと安くして売りますよと宣伝してくるんです。定価がついているのに、ある人は二割引で、ある人は一割引で買ひ、黙つて定価で買ひと損をしたようになるんです。そして、どつかでもつと安く買えるんじゃないかという気がしてきます。定価というものを検討してもらいたいと思います。

山田 ことに電気製品の場合はそういう傾向がありますね。

片岡 テレビで見ましたが、物価の値上がりは賃金の五・八%というのですが、そういう状態のときは先に物を買つたほうが得なような気がします。

山田 お話をうかがつていますと問題は二つありますね。一つは物価の動きということで、お話に出たように、ほとんど値上がりしていく、この問題をどうみるか、もう一つは物価を作つてゐる内部の経費の問題、効率の問題、この二つが出てきたと思うのですが、そこでまず値上がりのほうから問題を種かめていきたいと思うのですが、皆さんの生活の中で、どういふものが上がつてゐるとお考へてでしょうか。

関根 サービス料。

山田 これが一番上がつてますね。都会ではどうですか。

大橋 教育費があります。

山田 サービス料のほうはどうですか。

鈴森 水道料金が上がりました。

山田 公共料金が上がりましたね。

そうすると、テレビとか、ああいうものは上がつていないわけですね。めつたに買わないものが上がらなくて、しよつちめ

買つたり使つたりするものが上がつてゐるということ、これが一番大きな問題ですね。そこで、サービス料金が非常に上がった、これは確かですね。大工さんの手間賃なんか、去年の中ごろが七百円ぐらいだった。それが千五百円になつてゐる。床屋の料金、パーマも上がつてゐるんじゃないですか。この値上がりが激しいということ、これをどういうふうにお考えですか。問題をサービス料金に限つてみましょう。

大橋 人件費が高くなつたということでしょうか。

山田 人件費ですね。ほかにどなたか……。

藤井 人手不足、そのためのことでしょうか。

山田 この三年ぐらいの日本経済で、特に非常にはつきりしてきたことは一番には、いわば金融引締ということ、少し経済活動が伸び悩みですが、昭和三十四年からの三年間、非常に大きく経済が伸びてゐるわけです。これまでの日本は人手がたぐさんあつた。人口が過剰だ、狭い国土にたぐさんの人口がいるということが特徴でした。ところがこの三年間の間に経済成長で、日本はあまり貧しくなくなつてきてゐる。工業力の大きなものがどんどんできて蓄積してゐる。そこで勤め先が非常にふえてきたわけです。そして学校を出た人が足りなくなつてゐる。日本の経済ではこれまでに考えられなかつた人手不足という状況が出てきたわけで、必然的に人件費の値上がりとなつて現われてきてゐるわけです。ここで考えてみたいのは、従来のサービス料金が、はたして高かつたのか、安かつたのか、その点について、皆さんどう感じられますか。話に聞くと非常に安いというふうな……。

佐藤 洋服などのお針子というのは安いですね。使う人が、宣伝費

とか振替費とかに入れて、お針子さんにおたかるのは非常に少ない。山田 それにしても、たとえば洋服の縫い賃はきまつてくるわけです。そういうことが日本の場合なかつたですか。

佐藤 それが最近全体の景気がよくなりましたから、それでお針子さんも安い料金に甘んじなくなつたわけなんです。よそは保険もあるのに、ここはそれもない、退職金もない、そんなところで安い賃金で働いてゐるのはばからしいというふうになつてきました。で、お針子さんを雇うのに、まあ大企業並みとはいきませんが、そういうまねをしなければお針子さんが来てくれない状態になつたのです。それで人権費が高くなるんじゃないですか。

山田 おつしやつたような傾向が基本的な形になつてゐるんですね。サービス業は、比較的人手を使つてやる産業でしてね。それで、人件費の値上がりは一番基礎にあるわけです。もちろん値上がりの中には、景気がいい、物価が上がつたと、それに便乗して上がつたということもありますが、人間の値打ちが見なおされる結果、サービス料金の値上げということが出てくるわけです。これは一体いいことか、悪いことか問題になる点です。それについて考えていただきたいことがあります。日本の場合、二重構造ということとをよくいいます。大企業に働いてゐる人と、中小企業の人との較差があります。そういう較差も、賃金体系の水準を基礎にして料金がきまるということがなかつた。そうなつてくると当然人が集まらない。たとえばテーラーの職人というのは、ずいぶん年配がゐるわけで、職人の仲間では上位にあるのです。それが、所得が低いというふうな傾向では、そこへ人は来ないですよ。しよがないので、やつと最近一日八百円が千二百円になつてゐます。五割増です。大工さんは所得倍増になつてゐる。しかしそうなら

ないところ、たとえば床屋の所得が上がりたということがあります。これらの生活をいろいろ考えていつた場合に、床屋の生活水準を上げていくためには、料金を上げざるを得ない面もあります。そこら辺はどうお考えになりますか。

佐藤 床屋は、組合から公定賃金が上がってくるわけですね。しかし、いなかでは、組合からこういつてきたが、うちはこのくらいにしておくといい、安くしている場合もあるんです。組合で必要に上っているのか、どのような計算で上がってくるのか、よくわからないのです。

山田 おつしやる通り、便乗的な値上げはあります。ただ床屋の例をとると、生活水準が、床屋は一般の人よりうんと良いというならば、料金が高過ぎるといえますがね。ほつておけば一般の水準より下がってしまうという場合、生活水準を上げるためには、やつぱり料金を上げなければならぬということもあるんじゃないか。人手足を契機にして、今急に現われてきたというのがサービス料金の値上げの問題なのですが、いい悪いは別として、もう少し上がっていくと思うのです。ただ、急に上がった勢で上がり続けはしないでしょう。大工さんの日当でも、七百円から千五百円になった、来年は三千円になるのかというと、そうはならないですね。ああいうものは段階的にしばらく上がつてはいくでしょうが。

それから今までの日本の物価を眺めていますと、サービス関係の料金は安いですね。後進国に行くほどそうなのです。日本よりも進んでいる国は安くならない、アメリカの兵隊が日本に来ると生活が楽だという理由の一つもそれです。しかしそれに伴つて賃金水準も低く、生活水準が低い、しかしだんだん生活水準が上

がつていくためにサービス料金も上がってくる。そういうことになつていくわけですね。卒直にいつて物価は上がらないほうがいいと思いますが、日本の生活水準が上がり、生活全体が高度になり、消費水準が上がれば、やはりサービス料金は上がる方向にいきます。あまり便乗的な値上げは別として、必ずしも押えつけないといふことはいいことでなく、これまでの低賃金水準を公定化してしまふことになるんじゃないか。低い水準の人たちを上げていくことが、これからの日本経済の大きな課題じゃないかということです。日本の経済全体、その方向からみて、人間の価値が見なおされなければならぬところに来ていると思うのです。そこら辺にサービス業の問題があります。

それから教育費が上がつてきている。何が一番上がつていてしょう、教育費の場合は。

佐藤 授業料ですかね。

肥後 教科書

関根 昔からみると、本を与える率が高くなつてますね。教科書以外のものが。

山田 教育の指針が豊かになつて、教育費の全体がふえる。そこでまた問題が出てくるんです。今の学校の先生の給料が安い。そうすると漸次皆さん生活の費用が上がつてくると、学校の先生も賃金を上げなきゃならない。今の日本では私立の学校の収入は、大体授業料ですね。そうなりますと、やつぱりある程度授業料を上げなきゃならない。人間にかかわりのある面で上がつてきているということが非常に多い。外国の学校のように、相当大きな寄付があつて運営できて、授業料は少ないという状態だといふのです。日本のように授業料収入によることが圧倒的に多いと、サー

ビス料金の値くつと同じようなことが出てくるわけですね。だから学生をむやみにふやす、そうするとサービスの質がおちる、教育をサービスといつては悪いですけども、そういう傾向になつてくるんじゃないか。料金を押えるとサービスがおちる。これはここ三年の景気の中で、非常にはつきりしてきたことです。こういうふうにいってしまつと、やっぱり値上げは仕方がないんじゃないですか。

肥後 正直にいって、値上げは、現在の収入がそれほどに上がつていないので困るんです。私立の大学では先生の月給は授業料からといわれましたが、そういう方は、研究のために自分の身を削つて、次の世代のために働いているのですから、授業料を値上げしてもたくさん上げるのは当然ですが、国家とかどこから援助するのがほんとうじゃないかと思うのです。、経済がそれだけ伸びているのなら。

田田 援助ということになると、外国の例でみるように、大きな会社かもうけた金をボンと寄付するとか、ロックフェラー財団のうちに、そういうことがあればいいのですが、日本の場合そこまでいつていない。貧乏ではなくなつたが、まだそこまでいつていない。そこで財政資金、税金ということになつてくる。

大橋 今の国立大学は、やはり税金でまかなわれているんでしょうが、私立のほうへも税金を回せばいいでしょう。私立の大学へ行く子どもさんを持つている方は損をすると思うのです。

田田 やはりもう少し教育関係に財政的援助をもらつて、教育費の値上がりを押えるようにしてほしいということですね。

そのお考えは公共料金の場合にも出てくるわけですね。活用者がそれはやっぱり負担すべきものだ、税金は国家全般のものだから

ら全般に使え、大学にやつては、その大学に行く人はいいい、行く人だけしか使えないという考え方は、それなりで筋が通つていないでもないですか。

開根 サービス料金問題は、大工、パーマン、理髪店の値上げをする場合は、すぐお客さんから金を取ればいいわけですが、農村の人手不足で賃金上がる。倍になつて、三食つきで六百円、七百円といつても、すぐは収入が入りませんから、こまります。

山田 その場合は生産物の価額が上からないから困るということですね。いろいろ問題が出たんですが、一応考え方だけ整理してみよう。税金で全部をカバーするわけにいかないということになりますね。たしかに人手不足です。中小企業もそうです。しかし考えてみると、日本でこれほど人間が大切にされるようになった時代はなかつたといえますね。その意見では進歩じゃないかという感じもしないことはないんです。そこら辺から、賃金が上がつてくるとか、それを大量生産的に合理化できないと物価が上がつてくるとか、そういう傾向は日本だけじゃないですね。ほかの国でも、そういう形でじりじり上がつてきているというのが実情でしょう。

公共料金もずいぶん上がりましたね。おそらく批判があるところだと思いますし、またいろいろグループなどで勉強なさつたと思いますが、意見をどうぞ。国鉄、私鉄、郵便料金が上がりましたね。

藤井 これは、私たち主婦の力に少しは関係していると思うのです。やつぱり何か組織だつた動きで、みんな押えていくというほうに回つていっただろうかと思うのです。

山田 そうですね。今おつしやつたことは値上がりへの対策の問題

です。もう少しこの値上りの状態をやつたあと対策にいきましよう。

柳川 鉄道その他の公共料金がかかるということには理由はあると
思います。困るから上げるということでしょうが、だれがいいこ
とをしているか聞きたいと思います。

山田 値上げによつてですね。そのほかの御意見ありませんか。

森 私もおなじことを思いました。電気、交通、通信、これはど
うやつてきまつた値段であるのか、その辺のところをもう少し。
これは私たちが自由にできないのですから。

山田 おつしやるように公共料金はボンときめられてしまう。明日
から五円だというと、泣いても笑つても五円でやられる。公共料
金のきめ方、なぜ上がるか聞きたいというわけですね。

青地 国鉄運賃の値上げについて、一等が上がるのに二等だけ
上がるというのはおかしい。どういふところからきているのです
か。一等に乗る人はおえら方で、土がつてもいいと思うのですが、
貧乏人が乗る二等が土がつて、けつこうに暮らしている人が乗る
一等が土がらないというのは矛盾がありませんか。

山田 電気でも、家庭用が高くて大口工場用が安いといつたような
きめ方。それから、今の一等、二等というきめ方、これも確かに
問題があると思います。これも要するに日本経済が急速に発展し
過ぎたために、公共関係の事業が発展に追いつかなくなつてくる。

たとえば、郵便なら、ダイレクトメールがものすごく出てきてい
る。いい悪いは別として、社会が発展してくると、ああいうふう
にならざるを得ない。そして、郵便の量がうんと大きくなつてくる。
郵便事業そのものを近代化、合理化していかないと、郵便の需要

の旺盛さをこなせない。鉄道も同じことがいえそうです。地上は
猛烈なラッシュで、地下鉄をうんと作らないとどうにもならない。
そういうようなことで、従来の経済の発展と公共関係の仕事の発
展との差が出てきた。ここで非常に問題が出てくる。こういうも
のを拡充していくためには地下鉄を掘る、掘るのには金がいふと
いる、その金を調達するのは借りてくるが、金利を払わなければ
ならない、全体的に資金も土がつてくる。そこで経営が成り立た
ない、それでは料金を上げようということになる。ある面では、
日本の今の急速な経済成長を押えないと値上げは押えられない。
上げないと、将来さらにサービスが悪くなつて、郵便が三日もか
かるとか、電車になかなか乗れないとかが出てくるわけです。国
鉄運賃の場合も、一般には、政府の財政資金で援助して運賃を上
げるなという議論もあります。また国鉄へはみんな乗るかもしれ
ないが、地下鉄は都会の一部の人間が乗るだけだから国家資金で
やるのはおかしいなんていう議論も出る。経済の成長を押える
ということはむしろかしいと思います。財政資金による援助も、むず
かしいというよりも問題がある、ということになると、どうして
も値上げという形にくるわけです。

それから野菜、果物が高かつたですね。ミカンなんかずいぶん
高かつたですが、その場合、都会では非常に高いといい、農村で
は生産者価格は安いといわれます。

関根 ほんとうです。

山田 ミカンの場合、比較的生産者も高い値段で売っている傾向が
あります。ほんとうにそうですか。

青地 ミカンは実際土がつてます。去年のことからは倍に近い値段
になつていますね。私の地区ではミカンの値がよかつたというこ

上がつていくような感じがするわけです。

佐藤 第一次大戦後に上がったそうですね。

山田 大戦中に上がつて、大戦後にほとんどおちたんです。

佐藤 そのころと、今これから上がるのと比率はどういうふうになるでしょうか。

山田 上がるテンポですが、それは戦争中は特殊な形ですがね。明治三十六年から昭和十年でちょうど倍になっています。二%前後でしょう。ただ、戦前の場合には卸し売り物価でやつている。今問題になつてゐるのは消費者物価ですね。だから直接比較するのはむずかしいのですが、大体二%ないし三%、十年、十五年の平均はその程度で、物はほとんどでき、これからもまだほとんどできます。ですから、そんなめちやくちやな値上がりという事はないと思うのです。ただ、これまで低く過ぎたものが上がつていく。そういうことでしようね。

佐藤 物価の性質として、買えばやはり値上がりするんでしょうが、停滞するということはないんですか。

山田 ありますよ。それは物によつて違います。これから下がるものもありますよ。自動車とか、化学工業の原料のようなもの、ポリエレン、プラスチックは下がつてゐる。

佐藤 一番関心のある生活必需品は

山田 生活必需品並びに生活に関係のあるいろんな費用は、これから相当上がつてくるんじゃないですか。ちよつと電話をかければソバ持つて来てくれる、御用聞きもきました。これからはソバを持つて来てもらへば、五円から十円とるようになります。サービスが悪くなるし、サービスの値段だけ高くなる。そういうことが出てきましたから、消費生活に係したところは、かなり今まで

と違つて、都会の方には厳しく現われてくる可能性がありますね。そういうことで物価値上反対運動が、意氣阻喪の感じがあるんじゃないかと思うのです。そうした方向にあるからこそ、池田内閣の所得倍増にあふられてワアツとなつた。そうした方向にあるからこそ、むしろ反対運動をやらなければいけない。そして政府も慎重にやらなきゃいけないのに、これまでの考え方は、上がるものは上がるんだ、景気がよければいいんだというようなことで停つておいた。値上反対運動がどうのこうのではなく、物価というのは、どうもこういうふうに動くんじゃないかということを申し上げたわけです。

浦田 その物価の値上げは八百屋とか魚屋とか、どうも弱い人をはじめてゐるような傾向にあつたのですが、それならば、強い人ややつつける働きかけというのは、具体的にはどういうことなんですか。

山田 まあ世論といいますが、そういうものを起こしていくということが基本にはしませんか。鉄鋼会社の前に行つて、鉄を下げるということとはできないわけです。

しかし、今の日本の物価にはゆがみがあるんじゃないか。端的にいえば大会社に勤めてゐる人たちは比較的恵まれ、いい生活をしていく。一方は、生活が苦しくなつていくということになる。日本の物価体系はそういうゆがみを反映してゐるような気がしてゐるのです。ゆがみをなおすには、上がるものもあるが、一方に下がるものもあつて初めて可能です。そういうった考え方を政府は持つてゐるというけれども、実際には、正直にいつて政府、通産省と業界というのはシーソーで、通産省はむしろ生産者を代表するものですね。消費者を代表するようなものがそこにはない。その

消費者を代表するものが作れるか、作れないかという、そういう問題に発展していくんです。アメリカの場合もおんなじことをいつている。政府の機構の中にあるものは、全部生産者を代表している。消費者を代表するものはないから作るというようなことですが、そういうところに問題が発展していくんじゃないかと思ひます。

大橋 先ほど野菜の値段の問題で、たくさんでるから値段が安くなるといわれましたが、お魚をとる人、漁師も同じ悩みがあるわけですが、冷凍でかなり値段が安定されていると思うのです。魚はたくさんとれたときは、中央市場で冷凍しておくわけです。それでかなり安定できるわけですが、野菜もそんな方向にはいかれないんでしょうか。

関根 乾燥野菜がありますが、味がわるいでしょう。それは野菜の宿命ですよ。

蒲田 先ほど農家の計画作付といわれたのですが、個人の計画作付でなくて、日本中全体の計画作付を指導するとか、そういうことでなくてはどう思うのですか。

山田 理屈からいえばその通りですが、むずかしいのですね。豚の場合でももうかるとワアツと飼つてだめになるとシエンとだめになる。今おつしやつたことは必要ですが、一方に消費は自由にされている。これが配給制で、消費の量がきまつているということになると計画ができていいのですが、片つ方が自由で片つ方が計画ということでは。それだけの計画能力があるかどうか、政府の計画は変わつてばかりいますからね。

関根 補助金のことでも、政府のことなんか信用できないというのですよ。

山田 確かに経済の問題は非常に矛盾に満ちた金がありますからね。スパンと割り切つてこうだという結論はなかなか出ないのですね。関根 新聞にもよく出てますが、農村の悩みはアメリカでもソ連でも、どの国でも共通していますね。

山田 そうですね。では主婦連の方ですか。

春野 (零別オプザーバー 主婦連) 好景気といいますが、そんなに好景気になるほどサラリーマンは給料取つてはいないはずですよ。団地の建設とか道路公団とか、都市計画では一坪五十万円という買い上げとかあつて、膨大な金が入つてくることによつてアンバランスが出ていると感じます。普通では流れ出ない非常に大きな金が、民間や地主との売買によつておとらされている。そこで一般の人にも刺激されてしまふ。身分相応という暮らしがされていけないということだと思ふのです。こういう膨大な金が使われるということが、どんなに今の経済に暗く影響しているかということをお聞きしたいんです。

山田 これはどうも確かに今の日本の産業界の投資が膨大になつてきてます。それがらまた、そうした経済をどんどん伸ばそうという政策が、道路などの膨大な投資になつて現われてきているというところも、その通りです。これが経済にどういうふうな影響を与えているかといつて、どういふふうにお答えしていいのかわからない。確かに特殊なところへどんどん出る。今ぐらいいつ然として大金持ができるという時期はないですね。

赤沢 (特別会議員) 私もそういうことを痛感します。この会議にくるときになかなか特急券も寝台券も買えないんですよ。人に頼んだ都合で、仕方なく特急の一等に、それこそ身分不相応のことをやつたのです。私も汽車も一等は一ぱいなんです。十年前に来た

とで、ミカンを植える人がものすごく多かったです。しわし三年が五年たつたときに、はたしてミカンの値段がどうなるかというところに問題があります。

藤井 それは流通機構に問題があるんじゃないですか。

山田 それもあるんですが、その場合、都合からいいますと、こんなに上がっているのに、生産者は全然恩典に浴さないのかという疑問があるわけです。お米は統制があるのでべつですが。

関根 一昨年か、大暴落でした。野菜は天候に支配されるから、野菜作つても値段が安定していない。農家は作つての仕方をいくらでも変えられます。肥料代も出ないとすると、すぐにやめちゃうんです。

山田 その点で何か農家生産計画の問題になりますね。激しい暴落を感じない形で、計画的な作付けが実現できないものか、そういうことが野菜の物価安定の一つの方策ですね。

それから、先ほどから問題の中間経費ですね。一番問題なのは野菜も肉も市場のあり方が非常に古いことですね。実際調べてみても、どこへ流れて、だれがどうとるかよくわからないんです。先日中間経費の問題を調べましたが、二十九年の資料昭和三十六年十月の農林省が出したのに載っているんですが、それが非常に頼りない資料でよくわからない。流通機構が非常に特殊な形になっているものだから、何かうやむやになつてしまつてわからないというのが実際ではないかという気がするんです。あの市場の機構そのものを近代化していくことですね。中央卸売り市場の手数料は、表面的にはそんなに高くないという報告が出ています。私が読みました資料の範囲では、小売の段階で非常に波があるのです。小売にいわせればそんなことはないといいますが。

関根 野菜は天候によつたり、たくさんできるときもあります。取つておきかかないので、市場にたくさん出ますと二束三文にたかかれちゃう。買う方の八百屋も利潤というものをみておかなければ、うんと損することもあるんです。そこに野菜というものの性質、弱点があるんじゃないかと思うのです。

山田 ほんとうにその通りです。肉の場合ですと、豚でも、これ以上大きくなると肉がかたくなるとか、畜産の種類で価格が出ます。まあこの中間経費については、今の、非常におくれている、前近代的といつていいのか、そういう市場のあり方を近代的にしていくことが必要です。まあいろんな商品の特殊性が出てきて、いろんな問題が中間経費にあるわけです。これがどうやつて解決できるかという、そこら辺に何か問題があるということ、消費者の立場としても生産者の立場としても、お互いにこれから勉強しなければならぬんじゃないか、卒直にいつて、こういうことしか、この問題についていえないのです。その知識と準備がないのです。こう申し上げると、皆さん方は、結局物価は上がつていくのかというふうな気になられたんじゃないですかね。

肥後 心配でしょうがなくなりました。(笑声)

山田 物価は安定させたいということは申すまでもないんです。所得倍增計画にならない前でも、ずっと上がつてきているわけですね。何か定期的な形で上がつてきているわけで、見通しとしては、やはり物価は相当上がるということが、ここ当分の実際の姿になつてくるんじゃないかという感じがするんです。

しかしここで注意したいことは、もつと下がる物があるはずなのに、下がっていないということがあるのです。経済が大きくなつて、当然工業は大量生産になり、コストは下がってくる。それ

が価格の低下になつて現われていいわけです。ところが政府もそれが下がるような政策をやつていないということです。上がつてはいないが、本来下がるものが下がらない。お互い同士の話し合いで、一種の関連価格という形でやつている。そこに日本の物価の一つの問題があるのです。すぐ床屋に、パーマに文句をいうが、弱いところへ、物価値上げ反対の攻勢が集中されているような気がするんです。一体この物価の問題を、ほうつておいていいのかどうか。

匠員 下がるものを下げないというのは、結局需要が多いからじゃないですか。お金が出まわっているから、ものかほとんど上がつていくんですよ。私は、消極的ですが、お金が出まわらないようにする。たとえばもらった給料の一部分を貯金して、お金を出まわらせないようにするということが、インフレを防ぐ一つの方法にもなると思います。

加藤 それもそうだと思いますが、個人的の力ではどうにもならない面があると思います。政策的にある一部の人を擁護しているという形が出ています。政府が大資本家を擁護するような気持を持っているから、ある部分が上がらないんじゃないかと思ひます。

そういう点に目をつけて働きかけて、そういうものを探ぐりあてて運動することが適切なような気がしますのですが、

佐藤 いつまでも上がりつばなしじやないでしょうと思うのですが、どの程度まで上がったからおちつくということがあるんじゃないかと思ひます。

山田 日本はほかの国に比べておくられているんです。アメリカもそうです。西ドイツも非常に人手不足で、奥さんたちは同じようにふうふういつている。そうしますと、いっおさまるといえない面

があります。ただ問題は上がつていくテンポです。昨年は指数の上で五・六%上がつていますが、指数それ自身の作り方にも問題がありますね。こういう大まかな値上がりが続くかというところ、そうはならないんじゃないかという感じがする。金融引締ということで、経済の成長が少し押えられてきます。そうすると、今までのようなワアツとした好景気ムードが少し静まつてきましよう。消費も減つてくる。買うから上がり、上がり過ぎると買えなくなる。そこで一つの限界がある。私は年平均二%か三%と平均していくんじゃないかという感じがするんです。その程度でしたら二十年ぐらいで倍になる。銀行なら二十年で四倍になつてますから損はないでしょう。

こういう状態がいいとはいえないわけですし、物価は安定したほうがいいんです。しかし、いい悪いは別として、安定するんだといつてしまえない感じがします。それが上がつていくかともいえないです。明治から大正、昭和と国民の生活はずいぶん近代化されて、物価も何倍かになつていく。そういうふうになつてくるんじゃないかと思うのです。国民の生活を、長期にわたつて阻害してしまふようにはならないんじゃないか。むしろ一番心配なのは、特殊な経済状態、つまり戦争ですね。そういつたことが起こるといふと、飛躍し過ぎるといわれますがね。この一、二年大巾に過ぎました。上がつていく方向にあるからこそ影響を調べて、あまり影響がありそうなら政府がとめられるんですから、一年延ばそうと思へば延ばせたでしょう。それをみんな集中してやつてしまつた。そういう点、実に政府の物価政策が無策だつたということ、客観的に批判されますが、客観的な見通しになると、少しずつ

ところはそういうことはなかつたのですが、今日の新聞にも出ていたように、若い人が一躍スターになって何百万、何千万の金で動いたりする。一朝一夕のうちに大金持になつたというような動きが近ごろはあるわけです。そういう人たちのまねをする。かなり影響があるんじゃないかと痛感します。

春野(特別オプザバー 主婦連) サービス料金の値上げについては、人件費の問題があるということでしたが、値上がりした料金が、はたして、どれだけ働く人の賃金に加わつたかを考えてみたい。たとえばパーマは大体八百円です。厚生省のきめた基準が五百十九円二十八銭。都道府県でその上をきめるのですが、東京の場合八百円、パーマで働く人の賃金が上がつたからやむを得ないとあきらめてしまつている。また東京では牛乳が十六円から十七円に上がりました。ビタホモ牛乳が十九円に、協定価格という名目で上がつてます。その場合に、先ほど、協定値段についての規則が強くて、末端の商人が下げたいと思つても下げられないというお話がありました。が、実際に未亡人や資本力の小さい商売をしている人が困るわけです。それが法律的に守られているか。たとえば八百円を破つた場合には罰金を取られるのですから。そういう問題も、物価と関連して考えていただかないと、賃金が上がつたからやむを得ないといふだけでは済まないと思います。

山田 個々のケースにはいろいろの現象がありましようが、ここ三年の倍増ムードで上がつていのはおつしやる通りです。しかし従来の日本の産業は安い賃金の上に成り立つていた、それがどうしても要わらざるを得ない、基本的な方向はそういうところにあるんじゃないかと私は思っています。それが倍増ムードでワアツときたけれども、今後は少しずつ上がっていくのは仕方がないと

まあ私の見通しですが。

春野(特別オプザバー 主婦連) 主婦は、実際にふところから金を出すということを御了解願つて。

山田 家計費をまかなうために、たいへんなど努力がいるということですね。ちやうど三時になつてしまいましたが、今の経済は行き過ぎていゝ。貯蓄することによつて需要を減らしていかなければならぬ。つまり物価の値上がり、消費の行き過ぎ、われわれの消費のほかに、これは生産力になるが、土地や機械、工場を買つたりする需要もある。日本銀行から出される金があふれすぎていゝ。経済全体がワアツと行き過ぎて必要以上に景気をあおつていゝということがありますね。産業界にいわせれば、貿易自由化のために、外国に負けないように日本の経済を育てなければならぬ、そのためには投資をして、会社を作らなければならぬといゝという逃げ口上もあるわけです。経済の問題は、はなはだもつて割り切れない問題になる。一方ではマルクス主義の経済学者がおり、近代経済学者がおり、全くいゝことは別でしょう。実際いゝとむずかしいことですね。ここで少しお休みして、次いで、物価に対する態度も含めて、より広い範囲で、どういゝことをやつていくかといゝ、まとも的な新しい消費の形といゝことに話を移すことにいたします。

(休憩)

山田 それでは消費者は一体これからどういふことをすればいいかという問題、あるいはもつと上の、日本の政治なり何なりに、どういふことを要求したらいいかという問題に入つていきたいと思ひます。物価が変動する中で、消費者としての個人々々の立場でいろいろお話が出ましたが、それだけで、はたしていいのかどうかという問題が起こるわけです。まず御意見を出してください。

若松 先ほどのお話で、胸につかえるものがあるんです。日本経済は非常に急速に発展しているといわれましたが、私たち自身の生活を見ると、給料は安い、安い割合には物価が高くて貯蓄のほうにまわる金もないのです。農家の生活を見ても貧乏で非常に苦しんでいるわけですが、しかし表面では日本の経済が発展しているといふことはどういふことなのでしょう。

山田 大きい問題ですが、簡単に。発展が急速であるということ、すべての人の生活がよくなるということとは、必ずしも一致しない面が非常に多いのです。逆にいいますと、社会の変動が激しく発展が急速だということは、生活にとつては厳しいという面もずいぶんある。消費生活一つをとつてみても、新しいものができてどんどん変化してくると、逆に欲求不満になると同じように、経済の発展も、全部が足並みそろえて発展するんじゃないやなくて、変わりながら発展していくわけです。たとえば明治維新に、鉄道が敷かれる。そうするとかご屋とか人力車のようなものは失業する、そういうふうな一方には伸びるものもあるが、他方には没落するものもあるわけです。そういうふうな形で発展していくわけです。必ず取り残されるものがあります。石炭産業のようなものですね。あそこではそういう今のような人手が足りないときに首切りの問題がある。農業の問題にしても、次の農業の新しい姿が出てく

るまでにいろいろなことが起きる。発展というものは順繰りで、みんながワアツとよくなるのではなくて、職業が変わつたり、地域を移動したりそうした形で発展していく。発展即貯蓄で、生活がよくなるということでは決まてないわけです。もしそういうふうになると思つたらそれはうそということですよ。ですから、発展ということはいい過ぎたと思うのですが、確かに発展していることは間違いないわけです。しているからこそいふような変化が起こり、その中で矛盾も摩擦も起こる。明治維新は武士も失業する変革期でした。そういうふうな時代が進んでいるんじゃないかと思ひます。

それではどうでしょう、消費者として、先ほどから合理的な生活態度を確立しながら、しかも商品に対する研究を進めるとか、個々の消費者としての考え方、態度というものが出ましたが、これをもう少し大きくして、実際の運動、政治の問題という關係に上がつていつた場合に、皆さん方としては、どういふことをお考えになつていますか。

八木 自信はないんですが、人件費が上がつて人手が少ないということですが、農村では皆が都会にあこがれて困るといいます。ですから、農村で都会に出たい人は人手が足りないところを助けたら、どちらでもいいのではないのでしょうか。

山田 非常に端的な御意見ですが、これについてどうお考えになりますか。

関根 出る人はほとんど、最近では長男までも出てます。農家は主婦とか年寄りになつています。

鈴森 消費者の組織について、知識がなかったのです、実際に活動している方のお話を聞きたいのですが。

藤井 私農村ですから条件がちがうかもしれませんが、生活改善グループと農協婦人部で、消費について勉強しています。消費者としては出まわつたものについていけない場合もあるし、選択についても困るのです。それを農協でしてくれるのです。まとめて農協単位に買つと安心して買えますし、運賃も安いです。綿の場合なんか

かさが大きいので、一貨車二万円も経費がかかるのです。普通は質の悪いもので運賃なんかも見込まれた値段で買つてゐるのです。そういうことがあります。しかも一番安い時期、八月など下がつてゐる時期に、一年の消費量の計画を立て買い入れます。

加藤 物がすぐだめになつたとか、問題がしばしばありますが、主婦連の苦情相談所へ苦情を持ち込むのです。近くなら、すぐ主婦連の方がかかけ合いに行きますし、大きなメーカーのものも、主婦連にメーカーのほうに当たつてもらい、その返事を市の婦人会の連絡協議会にもらい、皆さんに納得のいくような説明があります。

また四十三の地域の婦人学級で勉強会を持つていて、それを通じて、消費の勉強や消費者活動を考へていくというようなやり方です。

佐藤 新聞などには、生産者のほうの広告をしばしば出しています。消費者の声を取り上げてもらつて、生産者の反省を促すようにしてもらいたいと思います。

山田 どういうところで取り上げるのでしょうか。

佐藤 それは婦人ホームセクションかなんかに取り上げていただいで、世論を起こしたいのです。

八木 市場では惣菜から何でも割に安いんですが、今度セルフサーパーの店ができて、人件費がいらぬので、マクスウェルのコーヒーが百八十円のが百五十九円と安いのです。そうすると市場の

方でまた研究して、それではこちらはこうだと両方ですいぶん安くしてくれまう。

山田 そういつたようなことがありますね。

鈴森 地域婦人会で希望や苦情が出ます。その窓口を作つて、消費者の声を聞こうと主婦連がいつていますが、

小介川（全国地域婦人団体連絡協議会） 消費者協会というのがあつて、そこへ出しても取り上げてくれます。主婦連と同じように窓口を開いてゐます。これはまだ始めたばかりですが。

春野（主婦連） 消費者の苦情受け付けの窓口を開く傾向が、最近地方で活発になつてきたようです。主婦連合会では数年前から、それをもとにして業界に訴えたり、アツビルしています。昨年の末には経済企画庁が非常に乗り出してきてゐるのです。それでは従来の苦情受け付けを広くして、一定のカードに全国で記入して、それを東京でまとめ、業界にアツビルするものとか、行政官庁にアツビルするものとかわかるわけです。第一段階は三月に締め切り、カードを取りまとめ経済企画庁に出したわけです。あわせて一昨年でしたか、東京のいろいろの婦人団体が大きい寄り、今度は通産省が乗り出してきて、消費者協会を作ろうじやないかというわけができた。ここにも、買物相談の窓口があります。いろいろな形の窓口が相当活発に進みつつあるのが現状です。ですから、地元の皆さん方は、つながるところへつながつていただければいいのです。そして中央でつかんだ情報は皆さん方に流すという仕組が、次第にできていることを御承知願いたいと思います。

山田 窓口がいろいろできるのはけっこうですが、あまり多くてお互いに混乱するということはありませんか。

春野（主婦連） いままでのところありません、というのは、主婦

連合会が先に開始しておりまして、その運動目標や活動の範囲も比較的広いものですから、生活合理化運動ということになつております。消費者協会のほうでは、角度を變えて買物相談、不平、不満の面です。時には、この問題はこつちに、これは主婦連にアツピールしてもらふとかなさつていますから、出先で混乱して困るということはありません。地元で確決のつくようなことは、地元の婦人団体が地元の業者にかけあつたりして解決に手をつけていらつしやるし、中央の問題だというふうなものはこちらへ持つてきています。

私どもは、また生活省の設置という五年來の構想を持つていまして、参議院へ要望として出しました。これに対して、政府も今までになく本腰になつて、研究したいという返事はもらつています。参考までに、オランダ、スエーデンにはそういうものがあつて、大臣は婦人です。

山田 消費者省にしろ生活省にしろ、できたときに何を期待し、何を要求なさるのか、どうお考えですか。

佐藤 まず物価の安定をお願いして、生活の安定をはかつてほしいのです。低い生活をしている人の生活を引き上げるように努力をしていただきたいと思います。

山田 どうでしょう、今までの日本で、行政上非常に足りなかつたという点で、こうしてほしいといつたようなことありませんか。宣伝攻勢、誇大広告などをなんとかできないものだろうかとか、具体的な要求は出ませんかでしょう。

藤井 学校を通じて小さいときから消費の知識を植えつけるということを考えます。

関根 商品の宣伝ですが、あんなに宣伝費を使わずに、消費者の率

制で宣伝費分だけ安くしてくれたらと思います。

山田 広告が誇大に過ぎるということでもよく出る問題なんです。ところがこれはわからないんですよ。彼らにいわすと、やめても下がる分は非常に小さいのだというのです。確かに、考えてみますと、今広告費が年間千二百億か千億合で、日本全体の生産の取引からいいますと小さいことはいえます。広告をやめたからコストが大巾に下がるかというと、そうでない面もあります。向こうもデーターを出してきて、このくらいしか下がらないからだめだといわれるのです。実際はどうかわかりませんがね。誇大広告ということはわかつて、錯覚を起こすということが問題ですね。品質表示という問題もありますが、表示をしてもらつてもよくわからないというのが実際ですね。消費者教育を徹底させるということが必要ですね。

蒲田 新しいものを買うときに、広告よりも、それを実際に使つた主婦の方の声を聞きたい。そういうことを知らせる仕事を消費者省に期待します。

佐藤 おんなじことです。たとえば今新しいスタイルの冷蔵庫が出ていますが、これはこういうふうだから今少し商品进行研究しているから、その間待つように、そして結論が出てから買うようにというふうな指導をしてもらいたいです。

肥後 業者のほうにも傷がつかないような程度に、使つた人の経験をまとめる機関がほしいと思います。それも辺地にまで浸透するように。

加藤 身体に害があるかないかということ調べる機関がほしい。中性洗剤などの問題がありますしね。

春野（主婦連） 厚生省で食品衛生に関する監督、指導をやる建前

になつています。中性洗剤の事件が大きくなつて不安になつております。それが私ども厚生省にかけつけて、すぐ談判するわけです。いろいろな説があつて私どもも混乱します。それを調整する専門家の研究機関が生まれてはおりますが結論が出ておりません。一たん許可したがる、その後には害があるという論争になつた。

そういう面では厚生省、保健所は非常に怠慢です。年々中毒があります。店の監督や指導をするのは、一人の係員で大体一万軒の受け持ちだといひます。そういうことでは實際に行き届いた監督指導が得るはずがない。そういう手不足が非常に目立つてゐます。生活省を作つてもらいたいというのも、そういう気持なんです。前にカン詰の事件も起こりましたが、カン詰の製造販売、表示等も一カ所に集中できない。官庁同士のなわばり争いもできる。

こつちの官庁は業界に対してこうやろうとすると、一方は厳しくする。私どもにとつて有利であつて、しかも業界も傷つけないようなそういう法律も作られなさいと思います。現在、パーマ、理髪などは、ほとんど上がつていますが、こんなに上がつていかせやいけない。しかし消費者のための機関になるべき主務官庁がないことを切にいいたいのです。そういうものが生まれたら、牛乳の問題なども安くてよいものになる。もちろんそれには生産者と消費者との計画もいりますし、流通の問題もありましようが、今のままでやつておれば安くてよい牛乳は飲めないですね。高いものをうまく宣伝して、マージンの多いほうを消費者に持つてきて、高いものほど榮養があるような錯覚を起こさせる。また一方消費者主権ということをよくわきまえた教育を、幼ないときから文部省と連係してやるとか、そういうものがあつてしかるべきじゃないでしょうか。アメリカなんか職業教育、商品教育

が進んでゐるんです。そういうものを一括して、ぜひ生活省ができるようにしていただきたいと思ひます。

山田 人間の生活は中広く、また自由企業の世の中ですから、あまりにがんじがらめに縛つてしまふのも問題です。生活省や消費省ができ、消費者の利益を代表するのはいいですが、官庁がいろいろなものをつくると、まづい面もあるような気がします。統制ということも起きましようしね。

それから物価の値上げに対する運動についての御意見がありましたら出しておいでください。消費者省でやつてもらふことになりますと、先ほど主婦連からいわれたような個々のケースについても、相当調べなければならぬ問題もありますし、その点消費者として、物価に対する関心を、商品の勉強とか研究と同時にやつていつていただきたいです。この婦人会談のテーマは新しい秩序ということで、消費の新しいタイプをどう考えればいいのかというところに最後の話を集中していきたいと思ひます。積極的な御意見をどうぞ。

浦田 理想論に終わりそうな気がします。私のいる団地では、隣りの家に大きなブランコがあります。それをも仲間に使えないのだらうか、一つ買つて仲間を使うということを考えるわけです。洗濯機なんかも一つの棟に一個でいいと思ひます。共同で買つてうまく使うということも、これから考えていかなければならぬんじゃないかと思ひます。

佐貫 共同購入がほんとうに必要なと思ひます。それには、まず寄り集まつて話す。自分の個性、家の個性とかを見失なわないようにして。

藤井 導入される機械の科学知識が必要でしょう。機械が高度に能

率を上げていくためには、主婦も機械の知識も必要です。

佐藤 今からでも、よい意味での個人主義を身につけて、生活を科学し、経済を勉強して、マスコミに流されないようにしていくことが大切だと思います。

山田 個人主義を身につけるといふことと、今の共同化と、どういうふうに考えていけばいいんでしょうか。

佐藤 よい意味の個人主義と申しますと、やはり自分を大切にすること、そして他人も大切にすることだと思います。そういう意味が徹底すれば、共同化もスムーズに行なわれると思います。

佐買 私の考えもそこへいくんです。自分を確立させて、お互いと一緒に生きて考える。個性といつても、家という考えがまだ日本にはあるので、それも生かしていかなければならないと思います。八木 小さいことですが、良心的な店をどんどん発展させるように買い物をしていつたらと思います。そうしたら自然に、長い間にはよくなると思います。

関根 消費が新しく変わっていくにつれて、私たちの生活もそれに順応して変えていかなければならないと思うのです。社会をいつもみつめ、また一人でできないことはみんなでやつていく消費というものが新しいタイプになったのでは、やつぱりアンパランスになりますから。

山田 それですね。いろいろのアンパランスということをいわれましたが、なるほど消費は革新しているかもしれないが、生活全体の革新はなくて、古い形の中にだんだん新しいものが入ってきている。これは農村の方に多いようですが、お互いに広い目で見てやつていく。それも一つの形だと思います。

肥後 広告やマスコミに取り巻かれて流され、複雑な状態におかれ

ていると、何だかさっぱり考えがまとまらないのです。だから適当な時期に、適当にカットするということでしょう。いつもいろいろな面においてカットすることは大事なことでと思います。アメリカ並みの、捨てる文明に追いつこうということではありませんが、かしこくむだを省くことが必要だし、大切なものはどんな取り入れるということなど、共同で研究する必要があるんじゃないかと思います。

山田 マスコミ攻勢は当然で、それをどうやつていくかということ、もう一つ突き詰めていかなければならないと思うのです。

それぞれの人の経験がここであるいろいろな話されました。その中から新しいものをつかんだかどうか、これからどうするかという問題を持つて帰りますように、卒直なお話を。

浦田 私原稿には、消費者も信念を持つとうということを書きました。が、積極的な消費者のあり方ですね。経済の値上がりのお話なんか聞いてまして、これはやはりどうにもしようがないんじゃないか、どちらかといえば、大体気持は甘いんじゃないかというのが実際のところ。たとえば作付けのことにしても、消費の計画がなくて作付けのほうばかりしてもだめだということになつてきましよう。山田 だめだということはないですけれども、なかなかうまくいかないという面もあるわけですね。

浦田 そうすると、何だか私たちの手の届くところにはなさそうだしという感じがしたんです。

春野(特別オブザーバー主婦連) 大へん悲観した意見が出てきました。聞いていますと、どうも悲観的な話ばかりされているようですが、今まで女の人は家計をあずかつておりました。が、夢我夢中でやつていただけで、ちつとも考えることをしなかつたんじゃないかと思う

のです。だからここで話し合ったことを、持ち帰ってすぐ何かするということが起きなくても、生活省のことを聞いたり、意見の交換があつたり、あるいは皆さん方相互に、自分の悩みを、やつぱり相手も悩んでいる、自分たちが迷っていることは、ひともし迷っているという確信ができたとしたら、これはこれで一歩前進じゃないかと、私はそういうふうにみたいです。どこでもおんなじようなことだという印象を持たれたかもしれないが、これは今後の指針的なものであつて、婦人週間のこの会議というのは、打ち合せて決議をしてどうというものでなく、お互いに意見の交換をする、特に消費の問題につきましては、今年こういうようなものを初めてやつたのでして、先生もとても御苦労なさいましたし、経験の浅い者ばかりで、そういうふうな自信の喪失というところを感じるんでしょうが、そういうふうにお思ひにならないで、物価の問題などで一応勉強でも、あるいは意見の交換でもできたということでしょう。

希望を持つてくださいと申し上げたい。私たちは年々歳々消費生活の合理化ということでやつてきております。しかしながら年々歳々氣持を新しくするということが立ちおくれしている。消費生活者自身の自覚した立ち上がり、これが日本ではほんとうにもつともつと強くみられていたのであつて、立ち上がつて縦横になつていくであらうという面もないわけではありません。しかしまだまだ無力をかこつております。一人一人がその態勢をとつていくという氣持になつたら、まず自分の家を見まわし、むだもありましよし、商品の変化ということもありますが、それにどう對抗するか、ここに工夫ということが出てきます。しかし個人の知恵、知識というものは貧しいものですから、地方の消

費関係団体や連合会の情報を大いに交換して、皆に役立つように少しでもプラスしていくようにしてくことですね。消費者同士、婦人同士そういうように活発に積極的にやつていくことでしよう。また、作つている人はそれをあんまり使つておりませんが、消費者は種々雑多なものを消費します。そして、あらゆる商品をテストというか、よく御経験になる。その経験を持ち寄るところから活動は始まるわけです。何も窮屈に肩いからして何々研究というふうにしなくてもいいんです。みんなの経験を持ち寄つてみたりして、それを基盤にして、大勢をまとめていくのです。それを業界、あるいは関連のある監督官庁にアツピールしていく、これをおそれてはならないわけです。当然のことを要求するわけです。さつきからいくつか御希望や御質問がありました誇大広告の取り締りは、不当揭示、不当表示防止法でということ、新しい法律が多分成立したはずです。そうなるとういスキールのお話もひつかかるでしょう、土地住宅の、駅から何分の安い土地、これもひつかかるでしょう。二十円のテヨコレートに一千万円の景品がつく、これも押えられるでしょう。通産省のほうからは家庭商品品質表示法、繊維も含めまして、家庭用に使われます多くの品物、石油ストーブとかいろいろ、そういうものをテストをして正直に表示して売らなければいけない、正しい品質を表示するということが、通産省としては珍しく消費者のためにできたのです。それから広告費が行き過ぎていくことです。私どもの調査では、最近では一千五百億とか、これを相当オーバーしていることは事実のようです。広告の必要性ということは、業界のほうでは重要視しています。私どもも必要だということは認めていいと思います。が、不当に誇大な広告費のために品質が低下する、料金が下がる

べきものが下らないというのでは行き過ぎになる。ごく最近池田総理が調査に乗り出すということを言明されて、商品に対する規格法が現在進行しているようです。主として農林省ですが、にせのカン詰事件以来、カン詰等にテストをして、パスしたものはジェスというマークがつく。ハム、ソーセージにもつき始めるわけです。これも消費者のためにできたのですが、やつとことまできました。ここまでくる陰の期間が実に長かつたのです。だれかがやらないと、おそろくそういうものは表面に出て来なかつたでしょう。とにかくそういうものを、官庁のお歴々も気をつけないけはなくなつた。それを作らざるを得ない時代になりつつあるということは、やはり消費者の大きな世論が業界に反映しつつあるということが見られるわけです。

但し、こういう法律ができたから、もう片つ端からよくなる、公共料金も手ばなしで安心していられるというのではなく、やはり、いつも気をつけ、働きかけていかなければならないでしょう。それから消費者の声が聞かれたのか、四月一日から間接税が下がり、その分だけ値引きして売ると、ここまで大蔵省が業界を指導したのは、おそらく例がないことでしょう。こんなふうに方がやや変わつてきました。全国の婦人のほとんどは巨大なる消費でありますから、しつかりした連絡をもつて、研究や、勉強をしていくならば、必ず何らかの効果をもたらしものぞという希望を持たれてください。

山田 ありがとうございます。消費者の問題が新しい問題として出てきたことはわかつてきましたが、そこで生活に秩序をそだてるということで、最後の結論的な考え方といったようなものを、ここでまとめていきたいと思いますが、今まどうかがつた

だけでは、まだ私にはイメージがないのです。

浦田 秩序ということの意味になりますかどうかわかりませんが、気のついたことは製造元に直接いつてやるということはずつとしてきました。あきらめないでその商社にいつてやることは大事じやないかと思っています。

山田 確かに、そういうことを常に考えていかなければならぬわけですが、この会議を終えて、これからなさろうとすることがありましたら、述べておいていただきたいと思っています。それが今後皆さんの消費者としての運動の指針にもなつてきましよう。今後の考え方といったようなものもありましたらどうぞ。

肥後 グループが大切なもので、組織的な活動がほんとうに力の強いものとなるということを感じました。心を同じくする者だけで、始めて、組織的に強くなるように努力をしようと思うので、科学的な知識も取り入れたいと思います。小さいグループですから、今まで組織活動の仕方をよくわかりませんでした。ここで、そういう窓口があいているということ、教えていただき、消費のアンバランスに対して、自分たちもブレイクの役目をする事ができることがわかり、利用していこうと思います。

細川 組織的活動も大切ですが、同時に自分自身で、豊かな消費に負けない収入をふやしていくという考えも大事だと思います。農業の場合、機構を変えろという点で切り抜かれると思いますので、そういうところを研究して、よく考えていきたいと思っています。

山田 農業のやり方をですね。

八木 私のはうは物価の高いところですが、婦人学級でお話をして、徐々にお互いに啓蒙しあつていきたいと張りきつております。

浦田 もし消費者省ができて、その地域の苦情や声はすぐには反

映しないのじやないでしようか。もつと身近かなものでない。

春野(特別オザバー主婦連)

東京都の消費経済課には誕生しております。

まず、市役所には、ごくわずかですが、そういう問題の窓口を開き始めた市が次第にふえています。その前ぶれとして地元の婦人団体が窓口を開いているという段階です。

佐藤 農業は、日本の国としては大切なものだと思うのですが、それが最近工業に押されがちといいますが、工業の収入より農業のほうが低くて、労働時間も長く辛い立場にある、工業に対してコンプレックスを感じると地方会議でも出ました。それで、たとえばデンマークは工業より農業のほうが高い地位にあるということ聞きましたが、日本の国も農業のレベルアップの方法、農村単位、農協単位ではなく、農業全体がレベルアップする方向が必要だと思うのです。

山田 現在の段階ではおそらく否定できない事実として与えられているから、逆にいえば、今後の農業をどうしなければならぬか、農業基本法がいかどうかという問題もありますよ。ありますけれども、ああいうものをやらざるを得ないところに日本の問題がきているということは確かですね。従つて、今後の経済の発展の中で、農業がどうなっていくかという見通しはしかねますが、今のままの形で固定していくことはできない。何とかその方向に持つていくような努力を、政府も農業の人もお互いにやつていかなければならないとこゝろにきていることは確かですね。私自身の考へていえば、十年たつたらずいぶん変わるんじゃないか。人手の問題からも、農業からもつと人が出てしまふ形で、労働人口は少なくなる。そういう形で新しい農業は、将来は生産性が上がるというこゝろでそれが出てくるんじゃないかという気がしますが、し

ろうと考えますが。その道は非常にむづかしい問題を含んだ形で推移していくんじゃないかと思ひます。こういうふうにお話しできますと、私自身は、いわゆる消費というものを経済一般の面でしか見ない人間で、リードが行き過ぎたりしたかと思ひます。もう一度考えてみますと、第一目には、消費生活の変化が大きな問題になつてきている。それと生活体系、生活環境とのギャップがありはしないだろうか。新しい消費機械が入つてきているが、古いものにつながつていやしないだろうか、新しいものが入り生活が合理化され、機械化された中に問題もある。その点は都市と農村とは違ふ、家族のあり方によつても違ふ。進んだところはかなり進んでいるし、そういう点がはつきりした。そこで、こうした消費生活の変化が、家庭にどういう影響を与えているか、それぞれの立場で違つてゐるが、家事労働の経験とか、余暇を生み出すとか、また、その利用の仕方に問題がある。たとえば、毎日ある程度余暇ができたので、子どものおやつ代と思つて働き出したが、賃金を取るとおもしろいので家庭をかまわなくなつたとか、また社会的な活動をするだけの余裕が逆になつたという問題も出ていきました。農家の場合ですと、男性が現金収入を得るために外へ出て行くので、婦人の労働が非常に過重になつていゝことが出てきました。また今日は、要するに消費生活の大きな流れ、ブームの流れに対して、賢明な消費者として、どういふふうに対抗していかなければならないか、また消費生活のアンバランス、ゆがみはどういうところにあるかという問題が出たわけです。その面についてはいろいろありましたが、必ずしもはつきりした結論は出ていなかったような気がします。確かに収入と支出のアンバランスはあります。先ほどからもいろいろ出ましたよう

に、何かふわふわとした形のままのようです。今後を考えてみますとこれほどの変化はないと思います。やはり今一時に、集中的に新しい消費物資が持ち込まれている初期です。しかしまた、これからは極端な変化をもたらすような新しい商品が生み出されるということは、産業界を見ても、技術的の方向からいつても、そうはないと思われます。新しい商品も大体出尽してきているんじゃないか。そうすると、ここで漸次整理していく段階に、日本は入つていくんじゃないかと思うのです。

その場合に何を先にするかということは、要するに人々の個人的な選択の問題です。たとえばテレビを買わないで自動車を買う人もいる。それは選択の問題であつて、要するに現在の段階は、まだ経済の発展がそこまでいつていない。それだけにまだ婦人の生活の低さも残っている。マスコミの攻勢に対してある程度抑制といえますか、そうしたものをしなければならぬ段階も出てくる。アンバランスというものも、収入と消費のアンバランス、消費形態それ自身のアンバランスという点については、私まだちよつとわからないような気がしております。また先ほどから問題になりましたように、こうした消費ブームの一方に、大きく成長した大資本によるところの消費者に対する攻勢が出てきております。消費者自身の気持がそれに対して変わつてきております。あの程度それは当然でしょう。物を求める気分ですから、従来のように「貯蓄第一」は席を譲つてくるのは当然のことですが、新しい生活の態度を作つていかなければならない。そこで、昨日も話に出てましたが、隣が買うから自分も買う、あるいは自分の地位、身分上、これがなければ恥かしいというような、地位のシンボルといった感じで物を買う。大きな宣伝、広告がそれを流していく。

第四部会

(職業問題)

会議員

北海道	水野麻耶子	(無職)
青森	佐藤光子	(農業)
福井	武田久子	(農業)
長野	清水美代子	(保母)
滋賀	田中きり	(農業)
京都	田中文字	(無職)
大阪	鈴木福子	(会社員)
兵庫	柴田周子	(医師)
鳥取	谷口美恵子	(保健婦)
山口	前田信子	(保母)
高知	島内幸	(無職)
福岡	白土しづ	(無職)
佐賀	古賀千鶴子	(無職)
熊本	小堀蘭香	(無職)
大分	矢野房子	(教員)

リーダー
特別會議員

渡辺華子	(評論家)
深谷大子	(千葉・看護婦・第三回會議員)
野口敬子	(大阪・図書館司書・第八回會議員)
豊島浅子	(全日本労働組合会議青年婦人対策委員会)
野口政子	(日本労働組合総評議会婦人対策部)
八木かず子	(銀行勤務)

特別オブ
ザーバー

第一日目 十一日 一三・三〇・一七・〇〇

渡辺 ここにおいで之皆さんはそれぞれ問題をお持ちですから、その問題を中心にこの会議を進めてまいりたいと思います。

水野 私が実際に共稼してみても、この共稼ぎの功罪について考えてみたいと思います。

先ず明かるとい面からいいますと、

1. 経済的余裕が生まれるから物質的欲求不満から解放される。
2. 視野をひろめ、精神内容を豊かにする。従つて夫との話題も豊富になる。

3. 子どもの自主性が養われる。

4. 妻も社会的な生産活動に従事することによつて、新しい妻の労働の形が生まれてくる。

これに反して暗い面も多いわけで、

1. 子どもを悪の温床へおとし込むような遠因が潜んでいないか。
2. 一時的と思われませんが、子どもの学力が低下します。
3. 親の愛情を物質的に補なおうとするから、子どもは物に対して我儘になり、物を粗末に扱うようになりはしないか。

4. 親子の接触する時間が少いが、人間形成途上にある子どもに愛情欠如の欲求不満がどうひびいてくるか。

5. 物質的には潤いながら、本来の母性愛から、終始子どもに対して申しわけない気持があつて、いつも心が満たされない。

以上のような点が、考えられるのです。

佐藤 私は、開拓部落の主婦です。

私たち開拓酪農者が生活を築き上げて行くためには障害だらけなのです。

第一に非常に忙しい、この片寄った忙しさというものをみなさんわかつていただけるでしょうか。雪が消えてから降るまでは、目の廻るような忙しさです。私どもの生活は、生産に直結しますので、それをおろそかにしますと自分たちの生活は成り立ちません。といいますのは、乳牛を六頭飼っています、百日の間に草を与えると同時に冬の間の飼料刈り、餌を蓄えておかねければならない。そのために雪の降るまでは、人間らしい生活とはいえないような生活に追われます。しかし一たん雪が降ってしまうと、一度に静かな環境に閉じ込められるというように、非常に激しい変り方をするのです。そのように変化のある生活のバランスをどうとつたらいいか、考えてしまうのです。衣服の面では、冬の間一年中の衣服の計画をたて纏めて新調したり繕い物をやります。こういうやり方がいいかわるいかということばかりませんが、そうするより仕方ないのです。

食事は、特に夏の間に栄養をとらなければならぬのですが、都会のようにいろんな物資も手に入りません。牛乳だけはふんだんですから、牛乳料理に重点をおいていますが、住の問題では、家畜と一緒に生活しているので、どうしても夏の間はヘエとカに悩まされます。隣り近所で協力してといっても、広い畑の中にボツンと一軒ですから、どうしても自分のうちだけで徹底的にやらなければなりませんし、堆肥を周りに積んであつて、消毒にお金がかかりすぎる。しかし、これは考えなければならぬ問題だと思えます。それから生き物の世話に手を取られてしまい、家族の団らんということがなかなかできない。開拓者の宿命じやないかと思えます。十年経ちましたが家族づれで出かけたことは一度もありません。子供の教育にも悪いかしらと思うのですが。

武田 農業という職業では子どもの教育について大へん苦労いたします。行き当りばつたりな育て方で、みんな野良におきつ放して働くのです。六年生と三年生の子どもですが、時々草とりなどしながら話をするところがあるのですが、そんな時あ本当に親子らしいなあと思うところがあるのですが。心の交流をどうしたらいいのか悩んでいます。

柴田 私は医者ですが、農村に往診にいくと、子どもが一人で寝かされている。傍には私の手を洗う水が置いてあるだけなのです。病氣の子どもでさえもそういう状態です。まして大きな子は、野育ちは当然なんですね。農村が苦境にたつていて、百姓を母親がやつております。父親は農繁期でも土方などに稼ぎに出ている。せめて家で子どもを見ながらできるような内職があつたらよいと考えるのです。

水野 婦人は家庭に戻れというのは逆行するようですが、内職があれば技術を身につけて資格をとるなり、やはり家庭にあつてほしいのです。職場にも働く場合は用意されておりますが、そちらよりも自分のうちの主婦の座のほうが大切だと思つたら帰つたほうがいいんじゃないかと思うのです。

古賀 主婦が家庭で内職すると、子どもの問題も家事の問題も解決するように考えられたんですが、その家内労働がごく低賃金なんです。どうしたら条件のいい内職に変えて行けるかというところ、やはり何か特殊技能を身につけるだけでなく、組織を持つて、賃金について、話し合えば、ある程度は解決できるんじゃないかと私なりに考えました。

水野 低賃金の問題ですが、どの程度なんでしょうか。大体一日にどのくらいですか。

古賀 私自身はやつておりませんが、おすしを巻くみずを編む仕事で朝十時から夜の十時までで、経験が浅い人では百円なんです。

こんなに安い、虚けられた条件では問題だと思つて、解決の方法はないかと思つてゐるのです。

水野 十時から十時までといつても、その間に家事、育児が入るんでしよう。家内労働の場合問題になるのはその点だと思ふのです。

私の地方は豆類の産地で、こしあんの袋貼りという仕事があつて私もやつていますが一枚十八銭です。家事も育児もほつぽり出して、体は疲れるのです。そこで日課表を作つてやつています。内職をどうしたら家事との關係を保つてうまくやつて行けるかということを考えますと、

1 家族全員で日課表を作つて協力を頼む。

2 教養を高めるためにマスコミニュケーション（主にラジオ・テレビ）を活用する。

3 孤独感から解放されるために、婦人グループ（NHK婦人学級等）に入つて、視野を広め自信をつける。

これは精神衛生上重要なことです。

4 ラジオ、テレビその他で得た知識は一家団らんの際話題にして、親子夫婦のふれ合いを深める。

5 内職は家庭内の立派な職業であることを自覚し、隣人同士理解協力しあう。

6 収入の行方をはつきりさせて、収入の全部を生計に費やさないうようつとめる。

自分自身の人間的うるおいのためにも使う。

何年間に得た知識、経験から、こういふことがいえるのです。

渡辺 内職をするという背景に一体どのくらいの家事労働の負担が

主婦にかかつてくるかで、内職の種類ややり方が違つてくると思ひます。その問題をもう少しほかの方にもうかがいたいです。

古賀 私たちの内職は家計補助的なものです。職業を持ちたいというよりも、内職しなければ、夫の給料だけでは食へて行けない。そういう内職は賃金が安くても、その日のおかず代としてはこれでも仕方がない、不満ながらもその賃金に甘んじているということだと思ふのです。

そういう考えではいつまでたつても問題は解決しないと考えるのです。

島内 私の部落は戸数が密集していて人口も多く、耕地はとも少ないので、その少い農地も活用の限度に来てゐるので、主婦たちはみな低賃金に甘んじて内職をしたり、冬は働きに出たりして、どうしても家事や育児がおろそかになっています。

そこで、農家の庭先を利用して女にでもできる工業を導入できないかと考えたのですが、下請け的な機械工業は手内職と同じように低賃金ですから、もう少し高等な機械工業が農家の庭先に導入できないかと思つてゐるのです。

矢野 私どもの地域は貧しい農家が多く内職などでは間に合はず、若い夫婦は兼業農家が多く、夫婦で出稼ぎに行く人も多いのです。そこまで行かないまでも、妻が農業をして、主人のほうは耕地面積も少ないので漁業などに出稼ぎに行くので、残つた女で消防団ができてゐるという状態です。

渡辺 家庭の主婦としての仕事と、家庭を支えるための仕事と、どちらが副か主かという問題が出てきましたが、そういう問題が一つになつて、非常に激しい変化、すべて主婦にかかつて来ているという状態になつてゐるのじやないかという傾向だと思ふ

のです。農村と都会の境いにいらつしやる方は、家計の補助的な内職という解釈、また農家の方は補助的というよりも、自分たちがそれを背負わなければならない仕事。家事とか、生産そのものとか、消防や農協の仕事、PTAの役目、農業貯蓄組合の責任、共同社会の責任、それらを全部主婦のはうで負わなくてはならないという点で、非常に飛躍したところにあるのじやないかと思うのです。内職について、家計補助的なもの、それから家庭の仕事それらを全部含めて考えて行つたらどうか、そういう意見も出ましたので、育児のことをもう少しずつ込んで考えてみましょう。

清水 育児の問題にしほつていきますと、家庭生活と職業との両立を考える時に浮かび上がってくるのは、子どもの保育とか教育とすることがあります。保育園が自分たちの地域にあると、そこに任せて一応解決されたように考えがちですが、それでいいのだろうかという疑問がわきます。それで、もう一度、育児という問題を考えていただけたらと思うのです。

水野 それは、母親の愛情が伝わらないから保育所に置いておくのは好ましくないということでしょうか。保育所に預けていますと母親に接触する時間が三時間くらいで、とても淋しいんです。私の場合は内職があるからです。

渡辺 どうしても子どもを保育所に預けて働かなくてはならない立場の、例えば未亡人なんかも多いわけですね。母親の愛情ということもありますが、もう少し問題を広く持つていいのではないのでしょうか。たとえば身体障害のお子さんで、医学的、技術的に預けられないということもありますし、母親の愛情に代るものはないという立場も大事に考えて、その上でこの問題を考えて行きた

いと思うのです。

前田 さきほどの意見は母親の感傷だと思えます。子どもは子ども同士で、保育所で結構楽しくやつています。

田中(文子) 私も、子どもと母親が長い時間一緒にいるからその子どもは仕合せだとは考えられせんわ。

前田 保母さんは専門職の資格を持つていながら待遇はよくない、保母さん同士が処遇について組織的に働きかけたいのじやないかといわれましたが、保母さんの組織というのは私立、公立で待遇もちがひ、経営者の考えもちがひ非常にやつこしくて、組織づくりが困難なのです。

渡辺 お差し支えがなかったらあなたの待遇をきかせてくださいませんか。

前田 全般的とはいえませんが、私は二十五で就職して、初任給が四千五百円で、三年間勤めいまして七千円です。

渡辺 資格をとるにはどのくらいかかったのですか。

前田 三年かかりました。有資格者が初任給四千九百円です。もつとも保育園によつて金々違います。そして八千円以上になると、

保母は永く勤めるほどいづらくなるのです。というのは、園へは保母の給料としては、私立の場合こないわけですから、措置費の中で分けるので、措置費は定額しか来ませんから、それに喰ひ込むようになり、だんだん出しづらく、いづらくなるのです。そういうことで、園同士でも保母同士でも、私立と公立との間には、同じ仕事なのに給料に非常な差があるということで反目があります。

国家試験を受けて専門職としての資格をとつたんですから、国家公務員としての保障が必要ですよ。

古賀 最低賃金制の問題が出て来るのじやないでしょうか。この問

望は是非訴えたいのです。

渡辺 最低賃金制の問題が出てきまして、あとでもっと深くやりた
いと思いますが、最低賃金というものは、一般職に決めるべき最
低賃金ということを考えていたのだかと思うのです。例えば、
家事に最も近くて専門の技術を持たない仕事のとこに、最低賃
金は引くものです。保母の教育訓練は法律で決まっておりますし
て、高校を出られて三年間の教育訓練です。そこでは児童心理学
とかいろいろ勉強する。それなのにそれだけの値うちが出ないとい
うのは、日本では専門職と一般職という考え方について、もつ
とはつきりした意識を私たちが持たないといけないのです。みん
なの、女全体の問題にして行きたいと思うのです。専門職が専門
職として値うちが出ないということも併せて、デイスカッション
のテーマとして考えていくと思います。そこで、私の記憶
に違いがなければ、未亡人については、臨時雇いで正式の雇い
にはならない泉もあるという所感文も拝見しましたがその点はどう
ですか。

前田 私の場合、私立においてはとうてい子どもを育てることは
できないと思ひまして、市の職員の採用試験を受け公立へ移つた
のです。一年間は臨時の職員で正式の職員ではなく、日給三百円
です。

渡辺 保母さんの月給がなかなか上がらないのはなぜかということ
は、簡単にいいますと、子どもを預ける方の支払い能力というこ
とが影響してくるということもあります。そういう点から、保母
はたしかに専門職ですが、それ以前の問題として、子どもを預け
なければ働けない、働かなければ生きて行けない人、女の人がい

るわけですね。現在のように、生産が、輸出でもその三分の一は
女の労働力に頼つてゐる。農家の労働力を数えたならばもっと多
くになると思います。その日本における婦人の労働に対する評価と
いうこと、そのところを考えながらお話し合いを進めて行きた
いと思うのです。

水野 現在のように近代化され機械化されて行く世の中では、家庭
というものが非常に大切になつてくると思うのです。主婦業も立
派な職業だと思ふのです。ですから、できれば主婦は家庭にあつ
て家庭の愛情を第一に考え、機械化に捲き込まれないというよう
なことをいいたかつたのです。

渡辺 おつしやることよくわかるのですよ。一面、子どもの保育と
いうことを、それほど大事に考えられるということは、保母に、
それだけのスタンダードを要求なさるということにもなると思う
のです。水野さんのいわれたことは、保母の資格と質という問題
で非常に大きなことだと思ふのです。

水野 共稼ぎの家庭がふえてくると、問題児や非行少年が多くなる
と聞いたので、少年センターで調べてみたのですが、やはりその
傾向が出てゐるということです。そういう点から、共稼ぎをもう少し
し考えてみなければならぬのじゃないでしょうか。母の役割に
ついての問題がそこに潜んでゐるのじゃないかと思ひますが。

白土 私は筑豊の炭坑地帯におりまして、助産婦をしています。

私のいる地方では女性の職場が狭くて、特定の人を除いては、
一般家庭の主婦は働こうと思へば失対の人夫より途がないという
現状で非常に不況な土地、主婦が働かなければたべて行けないわ
けですが、主婦の仕事はありません。内職すらもない。そして中

小企業の山は非常に不況ですが、そのわりに大手の炭坑は、スト継続中ですが、割り合いゆうゆうとしています。大きな会社の、組合のある家族は比較的恵まれ、文化的な電化生活で、余暇が生まれているわけです。そういう余暇が有効に使われてほしく、指導も必要と思います。

それから、余暇を働きたい主婦も、高年令層では働けないという問題がある。パートタイムでも、何か適応した仕事を与えてもらいたいと思うのです。しかし地元にはないのです。能力のあるものは社会の表面に出て、年令などこだわらずに、働ける者は働くということ、それが家庭にマイナスであるかマイナスでないかということは見解の相違もありますが、私の経験では母親の考え方一つで変わってくると思うのです。中流家庭で非行少年が出るといわれたのは取り越してはいないかと思いますが、とにかく高年令層の職業について、研究してもらいたいものです。

鈴木 共稼ぎの問題で、主婦が家庭に帰るということについて、大阪会議では「共稼ぎがこれからの常識である」という考え方から出発して、職業では、母親とか家庭婦人という顔は表面に出せないわけで仕事と家庭婦人、母親と社会人というケジメを自覚してはつきりつけて行くことが大切で仕事につきやすいと思います。

清水 私、この三月まで保母をしていましたが、それ以前は教員でした。

教員の社会は伝統があるといいますが、婦人がずっと前から参加していた職業なので、待遇上の男女差というものが全然ない。賃金もいいというわけで、保母とくらべて教員のほうが自分にはむいていると思えましたし、もう一度教員に復職したいと考え、一月に試験を受け、この三月から就職しました。

ところが、今年学校へ入る子どもがおります。子どもには、今度お母さんも勤めると話してきかせて、納得行つたようでしたので一応安心して準備をし、これから先の家庭の中のことを相談して決めたのです。ところがその夜ねてから子どもが、眠れないというのです。よくきいてみると、「お母さん、学校上がりは一人で行くの」というんです。私の予定では、お隣りの方に子どもが帰つて来てからの時間をお願いするということで子どもも了解していたのですが、やはり何か割り切れないものがあつたとみえて、明日という日の晩になつてそれが出てきたわけです。すでに復職の手続きはすませてありましたが、家庭を粗末にしたような態度で教育というものに携わるといふことに對して考えさせられ、家庭にとどまるべきではないかと考えなおして、復職をとりやめました。

この問題を地区の婦人仲間に持つて行きましたところが、母親が常に子供のそばにいないければという考えに問題があると云われ胸を打たれました。

鈴木 私は、職場では子どもの話しは出しません。勤めは子どもがいるからといって甘えた考えではやつて行けないのです。未亡人で小さい子どもを抱えて働いている場合も、結局は母親の立場と職業人の立場という問題になつてくると思うのですが、自分自身が努力しなければならぬことです。普通の家庭の主婦に比べたら三倍の努力をしなければ、子どもは精神的に荒れます。そういう面を四六時中考えて行かなくてはいいけない。つとめから帰つてからあくる朝手を放すまでは、ふれあいを深くしておりますから今のところはいいんですが、思春期にもなつていると安心してられないと思っております。

今では、五年生になりましたから勤務の帰りに、担任の先生のお宅や学校に寄つて、子どもの状態をよくきき、自分の知らない時間の子どもの状態を知ろうと心がけています。

谷口 私は保健婦で、農村を受け持っています。家庭訪問をして感じることは、農家の主婦は、出産して一週間休めたらいいくらいで日の当らない部屋に、産まれたばかりの赤ちゃんを一人で寝かせておいて野良に出ている。こういう乳児から預つて見てもらえる施設があつたらなと思うのです。そういう小さいうちから団体生活させても、母親の誠意が通つていたらそんなに問題はないんじゃないでしょうか。

田中(文子) 子どもを産むということは、昔は私的なことでしたが、今は国、社会、そういう広い意味からの問題になるのじゃないかと思うのです。

親は、産んだ子どもを健全に、社会の役に立つ人に育てるという義務があるのに、産んでから一週間も経たないのに放つておかれる農村の状態は、やはり考えなくちゃいけないと思うのです。やはり、できたから産みましたというような悪い言葉でごめんなさい——そういうことじゃなくて、計画的にするということをや、婦人が真剣に、もちろん男子も含めて、考えなくちゃならないと思うのです。八月妊娠五月出産が理想的な形だといわれますが、農家の場合でも、赤ちゃんができる時には作付構成、経営の在り方から変えて行くくらいの気魄が母親にあつていいと思います。

もう一つ、私の問題にしたいのは、家の中の共稼ぎです。家庭内での仕事はたくさんありますが、金を儲けるために本当の人間生活が犠牲になつていいるということがありはしないか。二年ほ

ど前に、近くの工場の賃金のストが長びいて、漸く解決したと思つたら、労働基準法の適用をうけない家内労働にまわして主婦の安い労働力を使うように動いて来たんです。

それは、機屋さんがふえて一、二台の機を持つてやるのです。

お金は儲かるけれども、八時間どころか十六時間も働くのですから儲からなくてどうしますか。儲かるけれどもしかし、家の中は寒々とした風が吹いている状態で、本当の家庭生活がないのです。

渡辺 今のお話を聞きながら思つたんですが、日本の人たちの考え方、精神力という言葉でいうことがいいかどうかわかりませんが、民主的なものが身についていないというか、「私たち対社会」というふうにも見える点があるのじゃないか、社会が変わるから私たちも変るといふようなクセがあるのじゃないかと思うのです。そういう考え方は主体がこちらにあることになりますね。そうでなくて、私たちがそのまま社会なので、社会という言葉を「私たち」と置き換えても不都合のないところには、主体がこっちにあるわけですね。

今のお話はそういうことだと思ふのです。

自分の力に即応した生活を支える方法というものを、自分たちが見つけて行くというのじゃないに、業者の都合で動いているということは、自分自身のやつていることと自分が社会だという認識が欠けているということじゃないかと思うのです。今は社会があなたを求めているというようになことを申しますが、あなたを求めているなら、あなた自身が、社会を変えて行くことが民主主義だという認識、これは自分のほうに主体をおき、自分で変わることが社会を変えることでしよう。これが民主主義だということだと

と思います。

古賀 私たち職業を持つについてはとても犠牲が大きいのです。肉体的にも母性という使命があり、それを全うしながら職業につくにはとても困難があるということはわかっています。そういう犠牲を省みずに、職業につかなければならない事態がどこから起きて来たか、そのいちばん根本を考えてみたいのです。

夫の給料にも関心をもつて、ペースアップについても、婦人が給料を上げることに動いて行くように努力しなければならぬと思うのです。

田中（きり） 私ども農家の主婦も農業を自分の職業として考えたいと念願しているわけです。

現在、人手不足で、農業も私たち主婦が主体になるという状態です。若い男も女もおりません。これが本来の農業の姿ではないと思うので、やはり中堅の男が主になつて働き、主婦はサラリーマンの主婦と同じように育児を主体とした地位にいられるようになることを念願しております。

渡辺 小堀さんは今度の最年少者で、大学にお勤めで、まだ独身でいらつしやるから、ある意味では客観的な御意見が伺えると思うのですが。

小堀 さきほど、主婦というのも一つの職業だといわれましたが、主婦業といいますが、そういうものの内容をどう考えていらつしやるのでしょうか。

子どものことだけに問題点を出示しましたが、私としては、先ず自分の相手のことを考えます。主人の問題を。

私自身、将来共稼ぎをするとすれば、鈴木さんのような方向に進むだろうと思います。ただし、やりがいがあるから仕事をする

ということとして、家計は夫のサラリーで十分という賃金でなくちやいけないと思うのです。そこに問題を持つて行かなくちやならないと思うのです。

後輩の人たちは職場に進出したいと考えているのです。そのためには、もつと保母さんを養成するとか、非常に技術の高い能力を持つ教育者を養成するとか、そちらの解決に向かつて行かなければならないと思うのです。

渡辺 小堀さんは、これから結婚される方で、御主人の給料が主になつて奥さんの月給がなくてもやれるようにしたいというお話ですが、御主人のない方で、その仕事がいわゆる家計補助的程度だつたらこまりますね。やはり仕事として正当の格付けがないといけないわけでしょう。

小堀 その場合でも、やはり主婦だから安い賃金でいいというのではなくて、働く婦人であれば、男性と同賃金でなくてはいけないのです。その仕事の内職という形で、補助的なものだから、低い賃金でもいいというのでなくて、その仕事に興味を持ち、やりがいがあるからする。賃金も正当なるものを貰うというように持つて行くべきじゃないか、これは理想論かもしれませんが……。

渡辺 ここで、特別オブザーバーの方に御意見を。

野口（特別オブザーバー総評婦人対策部） 出身は国鉄です。

お話を伺つていて、先ず、なぜ婦人が職業にかなければならないか、なぜ働かなければならないか、そして働いている現実の状況というようなことがお話しされていたようですが、現在総評関係では、全国的に見て二九・九％が既婚者です。その既婚者の中には、共稼ぎ、未亡人などがありますが、職業について賃金労働にたずさわっている日本婦人の三分の一が既婚者であるという現

実があるわけです。働いている理由は職業訓練を受けているというようなことから年令層が高くなつて来たというようなせいもあります。やはり、何といつても高い生活水準を要求しているということが挙げられます。

もう一つは社会性の欲求です。つまり家庭にうづまつていられないという気持です。

それから、女性の内面的な欲求を生かしたところの仕事につきたい、女性独特の専門職につきたいということが、結婚しても職を離れないという理由の一つに挙げられています。それから経済的な独立をしたい。

こういうところが私たちの統計の中で、婦人が結婚しても働いている理由として挙げられています。

それに対してどうしたらいいかということですが、社会の基本的単位としては何といつても家庭、その家庭を構成している妻である婦人の職業と家庭生活、それから夫である男性の職業と家庭生活、これが共に計画性を持つて生活様式を考えて行かなければならないし、もちろん子どもを含めての生活様式を計画的に考えていかなければ、共稼ぎは成り立たないのじゃないかと思ひます。

これは賃金労働者、農業労働者のちがひなく、全部にいえることとです。総評でもやはりそういう対策については、現在いろいろ問題があり、今後も出てくると思ひます。しかし、たとえば保育所の問題なども、さきほど第二義的にしか取りあげられていないと指摘されたが、なるほど母性保護もしなければならぬ、長期勤続も大切と考えた場合、保育所問題への取り組み方は遅かつたし、具体的にやられていなかったということは反省しております。それで、一昨年あたりから大々的に取り上げて、昨年は総決

起大会、総会等で、厚生省への予算要求や保母さんの賃金を上げる必要があるということをも具体的に取上げて、行動しております。

また、婦人月間にも、保育所設置の問題については全国的に取り上げております。また、私たちの最低賃金制は、どうしても確立しなければならぬ。そのためには大巾賃上げが必要だということとで、そのための斗争をやりつつある状況ですが、最低賃金を確保するためには、結束して行く必要があつて取り組んでおります。その取り組み方として、総評とか全労とか、組織された労働者だけでこれをやつたんでは、斗いになりません。全部の人たちにこういう斗いを理解していただきたい。そのために総評主婦の会をはじめとして、地域の母親の協力を得ていこうとしてゐるのでして、みなさん方にもこの運動を進めて行く上で御協力をいただきたいのです。

豊島（特別オザバー 全労育婦対策委員会） 全労はどちらかといひます

と、女子労働者が少ないのです。多いのは繊維だけが多いのですが。私たちの中にも、母体保護の面と、女性の地位を高めるために勤続年数を高めようという二つの声が出てゐるので、これをどう解決するかということが一つの課題です。十年前は既婚者がいなかったのに、現在は一割から二割、どこの企業でも既婚者がございます。それは、自分たちの生活を高めようという意欲もありますが、また主人の給料だけでは生活が維持できないということが大きな原因だと思ひます。

私たちは好むと好まざるとにかかわらず、結婚後も働くという方向にむいてゐるのじゃないかと思ひます。そういうことを頭において行かなければならぬと思ひます。そういう場合、働き

ながらどうして家庭生活をやすらぎのあるものにして行くかという問題が、今後取り組まなければならないことです。

それには、給料を高めると同時に労働時間の短縮と保育所の問題です。やはり保育所に預けたほうが子どものためにいいのではないかと感じました。保育所をもつと設置しなければならぬいし、保母さんの内容を高めるために待遇の問題についても私たちも考えています。ことに繊維工場の密集地域に、公営の保育所を作つていただきましたが、私たちの勤務は二交替制ですので、それに即して保母さんをお願いいただく必要があるのです。

渡辺 総評、全労の方から、労働組合の立場からお話しへ御質問がありましたらどうぞ。

鈴木 全労の方が、六時間労働といわれましたが、どういうふうに具体的な運動をされているのですか。

豊島 (特別オプザバー全労) 今は総評など四者共斗で、どこの企業でも賃金斗争と併行して、週四十時間労働といふことをあつてゐるわけです。理由は私が申したのが大きな理由ですが、これからの賃金労働者にとつては、賃金斗争に劣らないくらい時間短縮の問題は播がせにできない問題なのです。深夜業十時半までのところを三十分の短縮をかわちつた経験があるわけです。こういったことはほかの、組合にもいろいろあると思いますが、

野口 (特別オプザバー総評) 機械化に伴う問題というのがありますが、何と

いっても現代の社会では職場にいろいろな機械が入つてきていますね。機械が入り合理化が進むわけです。そこで人間が少なくてすむという失業の問題もこの合理化の問題の一環だと思ひます。しかしそういうものと斗うには、働く時間を短かくして、働く人を少なくせず、にそこに留めておくという配慮をしない限り、失業者は与えらるゝ

いう考えに立つて、合理化の斗いと共に時間短縮を進めて行くのです。これに対しては、ジュネーブにILO 国際機構というのがありますから、そこに時間短縮の要求を出しておりますし、現在、それぞれの組合別に時間短縮の斗いが進められております。国鉄でも、調停委員会からILO に対して労働時間三十分の短縮が出されておりますが、まだ具体的には解決を見ておりません。しかし一応調停として出されてゐます。

私たちは、合理化との斗いは、あくまでも時間短縮と結びつけなければ斗いにならないという方針でやつております。

渡辺 いまILO という言葉が出ましたが、これは私が御説明する必要のないと思いますが、国際的な労働についての専門機関で、ここで労働問題について、国際的な基準を作るわけです。ここで条約を作りますが、その時にこのILO の一つの特徴は、労働問題のエキスパートの方二人と労働組合の代表者、使用者の代表一人という三者構成で、世界中のメンバー国が集まつて基準を作るのです。こうしてできた条約を批准した国は国内法をそのように変えて行くといふことによつて、世界の国々が一つ一つ、普遍的なものになつて行く一つのきっかけを作るといふ、そういうところですね。

古賀 総評の方から、問題を解決する場合に、自分たちだけの活動ではなくて婦人会とかそういういろいろな方面と提携していかなければならぬといわれました。ですが組織外にある者との提携は、どうやつて行こうとなさつておいでですか。

野口 (特別オプザバー総評) 組織のない方たちに直接呼びかけるということは今のところできませんが、その役目もやつてゐるのが総評主婦の会です。

失礼ですがあなたはどちらですか。

古賀 日通です。

野口(特別オプザーバー総評) で、主婦会というのは、その組合の運動を理解し協力するということを中心ですが、その主婦地域の婦人に呼びかけて、労働組合と地域のほかの婦人との間のパイプの役割をして行くというのが今の段階です。まだそれ以上には発展をしていませんが、組合からじかに一般の人々に呼びかけると非常に堅苦しくむずかしくなりますが、婦人から婦人へ主婦会を通じて理解していただくというやり易いのです。

古賀 それからもう一つ、日通も総評に加盟しておりますが、主婦会のあり方が組合一本槍で、強引にそのほうに方向づけようとなさるのです。例えばストなんかの場合にも主婦もハチマキをしめて出て行きます。私はそれだけが、主人の賃金を高くするやり方とは思わないんです。もつとほかに、学習活動などをやつてもいいんじゃないかと思うのですが。

野口(特別オプザーバー総評) それは、それぞれの単産の主婦会ですから、国鉄の立場から日通の主婦会に対していろいろ申し上げにくいんです。日通の主婦会なんですね。組合員のところはすべて主婦会に入る、こういう規程なんです。

国鉄はそうでなくて、国鉄の組合員でなくても、主婦会の運動を理解し、協力しようと思われの方は入ってもいいんです。国鉄は主婦会というものを結成してから十年になりますが、十年たつて一三〇しか結成されていない。あまりいい話じゃありませんが。しかし、日通のほうは数は大きいけれども、内容的には国鉄のほうが充実した活動をしている。それは、主婦会の仕事がどういう役割を持つものであるかということをよく理解して入つていただ

いているので、組織化には遅れていても内容的には、地域の活動にまで発展をさせて一般の婦人と組合の間を結びつける役目をやっているといえまじょうか。組合が斗争だから主婦会もハチマキをやる。まあ、ある所ではそういうこともやるでしょう。しかしそれはどこまでも自主的で、そういうことはしたくない、あるいは、ほかの活動に向けるなど、そのようにやっているのが国鉄の主婦会の日通と多少違うところでしょう。ハチマキのいいとか悪いとかは、ここでは別ですが。

渡辺 組合の、内部的な事情の違いもお考えの違いもあるでしょうから、組合の外に在るものの立場からいえば、組合の運動の中に共闘したいもの、それから主婦が自分たちの自主的な立場で自主的にやりたいものと、いろいろあるわけですね。しかし、その他の婦人の組織でも、そういういろいろな立場の中の公約数を見つけ合つていくということが大事だと思うのです。一つの行事でも、その地方に自主性を持たせることが大事なことだと思ふのです。協議会のない地方が沢山ございますね。そんな場合、例えば老令に関係のある社会保障団体などが集つて協議会を作つていらつしやればいいのになと思うのですけれども、そういう点をもつとやつて頂きますと、お互いの立場に根づきながら女としての問題が話し合えていいと思うことがございます。

白土 先ほど、組織を全然持たない主婦をどうするかということに對して、総評からは、御協力をなさつていらっしゃるというお話でした。総評としては、そのための努力があつても、大組織のことですらそれがスムーズに行きにくいということでした。組織労働者の家族で構成している主婦会と、一般の地域の婦人会は、はつきり

色分けしたようなものになっています。地域婦人会と手をつなぐということは何とかやりたいと考えて、炭鉱の主婦会に、私たちが勉強させてほしいと呼びかけましたが、なじんでくださいません。これは無理なことか諦めておりますが、大きなものにして行きたいですね。

渡辺 労働組合の線でいきたい、また婦人学級のようなもので行きたいとお考えの方もありますし、全然ほかのことを考えている方もいらつしやるので、地方で協議体を作ることはずかしいことなのでしょう。地方に行つて感じますが、どうも東京に集中して、浮き上がつてきている。そうじゃなくて、地方の具体的な問題で、迷つた種類の、例えば保健婦さん、看護婦さんの団体も、女の問題を取り上げるということについて、本当の意味の協議体ができたほうが、もつといいのじやないかと感ずることがあります。そうでないと、私たちは全体的に、まだ自分たちだけの立場に固執しがちですからそのために数の多いほうに持つて行かれるということがあるし、それから、総評の立場からいつても、先ほどのお話のように、数だけでは判断しない、ついてこられる方だけについていらつしやいということで、自主性のある主婦の集まりにするということが出ましたが、これはそういうことの現われだということですね。

水野 帯広では、保育所へ子どもをあずけたいと希望しているもの三千六百名の中、七〇名までが共稼ぎです。ところが実際に保育所に入れるのは僅か二千三百名くらいです。他の大半は止むなく家政婦を頼みます。しかし家政婦は高いので経済的な面から困っている人はたくさんあります。やはりぜひ保育所の増加と充実を図つていただきたい。それも赤ちゃんから小学校二三年程度ま

でのためのものを作つてほしいのです。

谷口 私共共稼ぎですが、私たちは戦後の教育を受け、独立心というか、自分を確立するためには家庭生活でも、女でも経済的な裏付けがないと夫と同じ立場で話し合いができないという考え方もあるのです。経済のために共稼ぎするという場合もあるでしょう、自分の確立ということで職場に出る人は多いと、やはり乳児から扱う保育所を是非ほしいのです。

柴田 往診に出て、子どもがひきつけているのに、そばにいてやる人が誰もいない私が行つて、あわてて家に帰つて来て、またすぐ畑へ出て行くということに度々出あいます。そういう母親の気持ちを少しでも案にし子どもも無事に育つような、乳幼児用の施設を心からのぞみます。

私どものところには保育所はありますが、学校へ行つてゐる子は、帰つて来ても家の人は野良に出ていて、夕方までは一人ぼっちです。それで自由に遊ぶことについての心配から補導会というものを作つて、その責任者が母親が帰つて来るまでみてやるのです。その補導員を、時々役場に集めて、教育主事が教育しております。

渡辺 先ほどどうしても女の場合でも経済の裏付けが、家庭生活上大事だということが出ましたね。そのへんもう少し話し合つていただきましょうか。

白土 女にも経済的な裏付けが大事だということは事実です。しかし家庭の主婦の仕事は、立派な仕事で、家庭の運営という面では夫も妻も平等な立場だと思ひます。ところが経済的な問題になりますと、夫が扶養して行くという考えがあつて、女の立場は弱くなるもので、しかし権利は平等なんですから、小さくなる必要は

なく生活の一端を担いたいというのが私の考えなんです。全体的にいえることじゃないかもしれませんが、自分で生活力を持つて少しでも家計にプラスする、決して権利をふり廻したくないのでなく、経済力を持つてほしいことだと思います。ただ、働くには働けるような施設がほしいと思うのです。例えば授産施設とか、中年、高年令層にもパートタイムの仕事でもあつて女性に経済的能力を得るということで、家庭でも主人と平等の立場にまで上がりたいと思うわけです。

矢野 私はい古風風習の中で育つてきましたが、これからは、人間である以上は、家庭に貢献するということも社会に貢献することになるのですが、男女にかかわらず能力のあるものを本命としたいと思うのです。

田中(さき) 先ほど妻の座を経済的な面でも確保していくということが技術の面について出ましたが最近では農村の主婦の座も向上して来ました。一つには個人が農業方面の知識を深め、特に、若人婦人が新しい知識を持ち、機械化される農業の中で、その機械を自分たちで運転したりして、そういう技術の面も向上してきたからでしょう。いわゆる嫁と姑の問題も現役の主婦のほうに認められて行くような傾向にあるんじゃないかと思うのです。

職業を持つてのことについても、経済の面と、それから農業についてのいまの話と同じ意味で、自分の職業の深い知識と技術を持つてことが大事じゃないかと思うのです。

田中(さき) 京都の会議で妻の座をより高まるには、経済的な裏付けのあるなしじゃなくて、生活にこまらなない婦人が職業を持つてということが、ほんとうに職業につきたい人を邪魔しているというようなどが出されました。しかし、職業につきたい願ひは、生活に

こまらない人にだつてあるし、とにかく頭を使わなくちゃバカになるし、バカになりたくない、だから自分の職業を持つて、そういう人もあつたていいじゃないかということでした。

渡辺 人間というものを、男も女も含めて考えてみた場合に、生産する人、賃金を得る人の立場だけを重視するということと、そうでなくて、人間として先ず生きていくほうが先で、生きることについて障害があるなら社会の力で守るべきかということがあると思うのです。

今まで、女、それも主に主婦の立場で働くか働かないかということ議論してきたわけですが、主婦というものを、必ず生産に従事していなければ、働いていないことになるということじゃない、家事というものの価値を認められないものかどうかというようなことが考えられるわけです。勤労者に労災保険とか、失業老令保険というものを社会の力で保障するのが当然ならば、主婦の場合にも家事労働というものも社会全体で守つていくというのが当然だと思ふのです。そこで先ほどから生活力を持つている婦人、能力を持つている婦人は、これを伸ばすのは当然だということとが、その人個人の問題として出たのですが、これは経済的な能力があるとか、それによつて社会性を伸ばすということももちろん大切ですが、また別の、婦人の能力の生かし方として失業者とか労働による病災の人、老令者、子どもの生活について、これを支えるということもあるわけです。

自分自身が社会保障の生産人口となつて社会のそういう問題を支えていくというためには、婦人が生産的であるということは必要だと思います。

進歩国では、そういう意味では生産人口が多いことがいいことなんです。先ほどから保育の問題が出ましたが、施設を拡充させていくに

は、やはり、誰かが生産することによつて生まれた力をふやして行く、ということだと思ふのです。

もう一つ大事だと思ふのは、保育所が信頼されないということです。根本は保母の人格の問題にかかわつてくると思ふのです。人格というのはしかし、一日にして育つものじゃないので、先ほどから何度も繰り返して話されたように、高い社会性によつて、高い人格、内容も養なわれていく、そういう意味からも非常に大事なことと思ふのです。

その点で、フィンランドの例を申してみましよう。フィンランドは、ヨーロッパでは婦人参政権を得たのが一番早く、一九〇六年かで、婦人の地位が、私の知る範囲では世界で一番高い国です。男女同権、男女平等ということが一番に進んでいる国だと思ふます。しかし、男女平等ということをも男女同一ということに間違えないでください。日本では、男女同一労働同一賃金とか、同一という言葉をよく使いますが、同一と平等とは違う。平等というのは始めから違ふものを、同じレベルで扱うようにすることです。男は子どもを産まないのだし、女は子どもを産むという体の違いが始めからあるのですから、それを補足することによつて平等の立場におくということですよ。そういう意味でフィンランドは非常に進んでいる国だと思ふますが、あの国では婦人で職業を持つてゐる人が非常に多いのです。農業生産に携わる人も入れば四五％になります。一方、女子の大学生が四一％、首府ヘルシンキの大学では五四％で、最高学府でも女のほうが多い、こういう形です。

人口は四百三十万ですから、よく、小さい国だからうまくいくのだということをいふ人もありますが、人口が少なければ、税金

も少なく、つまり社会保障を支える人も少なく、税金負担は高いわけです。働いている人の二〇％位が結婚している主婦ですが、いわゆる専門職を持つてゐる点では、フィンランドが一番率が高くて、科学者の四五％、薬剤師の九〇％、歯医者者の八三％、医者の二八・三％という数字を婦人が占めております。面白いのは、薬剤師とか歯医者とは女の職業と決まつてゐるのです。

また、商業では三分の二、銀行員も女の職業で、八四％が女ということになつております。そこで、先ほど問題になつてゐます家庭の主婦の立場を見ますと、専門職に女が進出してゐるために、家庭生活が乱されないように、労働問題の短縮についても一生けんめいに努力してゐます。みんなが働いてゐるからといって、インスタント食品ばかりじゃつまらない。そんなことのないように労働時間の短縮の点で図つて行こう、外に出て頭を使うばかりじゃなくて、家庭に入つてもお互いに創造力を働かせて、楽しい家庭にするという立場で男女お互いにいふという願ひを持つて暮らしてゐるのです。

そういう国ですから、やはり保育所の問題にも熱心で、男も女も一緒になつて、職場のなるたけ近くに保育所を作つてもらふとか、主婦が働く時間と幼稚園の退け時間を合わせて、子どもが一人で放り出されないようにするとかが非常に考えられ、発達してくるのだと思ふのです。しかし、よその国はどうなつてゐる、ということをよくいわれますが、どこでも始めからそうなつてゐる国はなく、フィンランドにしても、そこまでくるについての努力は大変なものだつたのです。労働組合と地域の婦人団体、いろいろのものが協議体などを作つて、保守的な点もあるけれども、たとえば子どもの問題などに普通性を見出して、一緒にやるという

ようなことをしておりますね。

白土 日本の社会機構の中で、社会福祉委員や民生委員などは、むしろ女性のほうがいい面もあると思うのですが、地方の実態は、そういうものが名誉職みたいに考えられるのか、いわゆる名士とか有力者がなっているのです。せつかくの社会保障政策が十分に行なわれていないことになるわけです。

できれば婦人で、というような観念を育てることができたらいいと思うのです。

福岡方面では、それがやり易いのです。

どこの国でもすでに看護婦、女医、産婆という職業が、古い、長い専門職としての歴史を持つているのですから。

深谷（特別会議員） 保育所の問題が非常にいわれていましたが、私の病院でも、保育所がほしいという事があつたのですが、未婚者や、子どもがいてもうちの人がみている人は無関心で、実現できない。組合でも、長い間啓発して、市と一緒にやって、病院だけじゃなく市に働く人も対象にした保育所を作るようになりました。やはり市町村など一緒になつてやらなければ、現状を開拓するのはむずかしいという感じを持ちました。

前田 保育所への不信の原因はいろいろ出ましたが、そのほかに保育所制度の中の、保育時間が八時から四時までと決まっていることや、病気の子どもを扱ってくれないことが問題で、保育所の中にも医師を置くことが必要です。送り迎えも車でしてくれるようにしたら、もつと保育所が活用され、信頼されるのではないかと思うのです。

清水 保育に定められた人数は、乳児は九人に一人で三才児ですと三十人に一人です。五才児くらいは三十人に一人でも子ども同士

での遊びができるのでまあまあやれるのですが、三才児の場合など問題があると思うのです。それで、母親の立場から、保育所の不信問題が出てきますと、私たち保母としても、私たちにばかりいわないで、根本を考えてもらいたいという気持がします。

柴田 保育所には医師がいることになつているのでしよう。

前田 ええ。でも有名無実ですね。

谷口 先ほど乳児の場合は九人に一人といわれましたが、九人に一人やれるのですか。

清水 諏訪市の場合は、現在は九人に一人ですが、昨年までは十人に一人でした。これでは預りかねる点が出て来て、そのことをいしましたので、九人に一人にやつとなつたので、その場合に、責任をもつて預るわけですが、二才児までの乳児を責任をもつて預かるのはたいへんです。保母が身体の具合が少々悪くしても休めませんし、休めばほかの人に負担がかかるので、実際問題として不可能なんです。ギリギリのところまで働いているのですから。

谷口 絶対数が足りないということですね。そうすると、さつきお話しに出たような、社会福祉関係のケースワーカーとして進出していくことも、女性にはいいと思いますが、保母とか看護婦とか、現在絶対数が足りないところへ、これからの若い人にどんどん出ていただきたいですね。そのためにもそういう職業での地位の確立が必要ですね。

深谷（特別会議員） 看護婦の場合、甲種看護婦と準看護婦と二つの種類があつて、実際は準看護婦のほうがずっと多くて、甲種の数倍います。私は甲種看護婦一本にすべきだと思うのですが、医師会などでこういう制度を残したらしいのです。

また、ほかの学校は四倍から五倍の希望者があるのに、私の学

院では僅か数名を上廻るだけですこれではいよいよ足りなくなるというので、子どものある人のために保育所の問題も病院側でも考え出したのです。しかし、子どもを持つて働く人にとつて、働き易い空気ではありませんね。

小堀 賃金はどうか。

深谷 (特別会議員) 国立病院の看護婦で九千円台です。精神科や結核科の人は多少高くなりますが、十年勤務の病棟主任でも二万円というところですよ。

白土 看護婦、保健婦は同じような専門職で、女性に限られたこういう職業はぜひもつと伸ばしてもらいたいと思うのです。

渡辺 イギリスなんかの場合、一万人に四十八人くらいの割合いで看護人口があるといわれております。ところが、十七万人に一人くらいで一万八千人一人もいないというアフリカなんかと、看護婦が足りないといっている点では、イギリスとかデンマークとかスエーデンなどの先進国でも同じなんです。スエーデンは、総人口のほうは二億くらいしかふえておりませんが、看護人口は五〇億ふえております。デンマークは、一九六〇年から二年間の間に、総人口二〇億増に対して看護人口は一三〇億もふえております。それでなお足りないというわけです。

なぜそれらの国々で、看護人口が非常にふえているのにたりなくなるかというと、文明が進んでくると、先ほど医者という形で出されましたが、託児所にも、必ず看護婦さんがほしいというところがあるのです。それから身体障害者の対策が進んでいますと、ここにも看護婦さんがほしい。それから労働者の病災の対策。交通による事故とか、あるいは職業病なんということも出て来ますね。そういうところにも看護婦さんがほしく、足りなくなるわけ

です。また、あとで出て来ますが、老令化の問題に関する場合にもあります。老令になつてからの病気を防ぐには、いわゆる成人病の予防をしなくてはならない。そこにも看護婦さんが要るようになってきます。そういうようなことで、いま文明国では看護婦さんが足りない、火のついたような騒ぎをしているわけです。

保健婦、看護婦というような職業についている方が、社会保障の第一線に立っているのだという意識を持つて働いているわけですね。それを確保しなければ社会保障はできないのですから。

白土 たしかにそうでなくちゃならないと思うのですが、実情はそうではありませんからね。

渡辺 それを考えて行きたいと思うのですよ。国立病院の看護婦希望者が、なぜ少ないかというと、看護婦さんが、社会的に、ふさわしい格付けもされていないし、専門職でありながら専門職としての給料が支払われないというような事情があつてなり手がない。一方には、ダンピングがやられていて、正規の看護婦の代わりに見習いを使う。これは、家事労働ともからんできます。ひどい場合には、試験に通ると正規の看護婦相応に扱わなくてはならないから、通らないほうがいいというようなことをいふ医者もある、ということでもまたそこに返ってくる。それをどこかで断ち切つて、正當に認めさせることにしない限りは、いつまで経つても女の労働の正しい価値評価は出てこないのじゃないか。その点、看護婦は、現実には、足りないということがあり、一方看護婦になり手がないということ、どうやつて解決して行つたらよいでしょう。

古賀 労働に対する正しい価値評価というのは、賃金の決め方にならなと思うのですが、どんな決め方が正しい価値評価になるのかはつきりわかつていないのです。内職の賃金が安い安いとこぼして

います、という賃金が正しいのかその辺をうかがいたいのです。

渡辺 先ほど、保健婦、保母、看護婦なども含む、主婦の家事、農村の場合は、家事と生産のための職業、職業と主婦の立場とは区別できない、こういうことが一連の問題になつてきたと思ひますが、現在の激しい、技術や生産の変化、あるいは農村の工業化といつたような氣の遠くなるような目覚ましい変化の中で、いろいろな変化、問題が起つて、そのしわ寄せの方向のつき当たりが家事労働なんです。

家事労働というのは、労働基準法には、家庭のお手伝いさんがぬかされている、そのところと一緒になるのです。

それから共稼ぎの方が子どもを預ける場合に個人的に解決する。保育所に預けるより安く、近所の方に内職程度のお礼で預けている。預かるほうからいへば、家庭にただいるよりも千五百円でも二千元でも入るほうがいいということかもしれません。しかしそういうことが、知らず知らずのうちに、自分の賃金を低め、さらに低い賃金に泣いている人にしわを寄せているという点まで行つている、ということをお心配するのです。

そこで私は秩序ということを考へ、民主主義というのは、私たちの生活を、自分たちのほうに主体をおいて、それがなり立つていくように経済的に裏付けて行く社会をつくるということが理想なわけですが、自分のほうに主体があるということ、それから自分の自由を持つということ。民主主義の本質として、自由を持つているということ、自分の立場だけからこれを強調するということでは、これは、民主主義の秩序のない、封建的な弱肉強食と違ひないのじやないかということをお怖れします。民主主義がう

まく行つてゐるほかの国の場合をみますと、民主主義というのは一つの人類普遍のもの、ユニバーサルなものを見上げていくという体制、それによつて保障するということがなければ民主主義は無秩序になつてしまふでしょう。この人類普遍の原理ということとを日本人は、本當に考える人は少ないのじやないかと思ひますね。それは、すべての人に、そして男と女の立場のどつちにも適用するもの、また、政党も、社会主義の政党はもちろん社会主義の立場で、保守主義の政党は保守の立場でやつて行くのですが、その上でなおかつ両方に共通のものでなければ、人類普遍とはいへません。

そういうた原理を求めて行く、という一つの方向へ向う秩序が、民主主義の一つの裏付けになつて行くのです。よその国では、人類不遑の原理というものをどういうふうにし けていくかと調べてみますと、そこには宗教というものがあるのです。宗教という、個人の救ひとか、迷信だとかいう人もあるだらうし、神を信ずる人も、仏を信ずるというお考えの人もある。しかしよその国では、宗教というものは、人間の社会の中で、政党とかあるいは労働の対立の中から普遍的なものを求めようとすれば必ずぶつかつてきます。そこで、人間の外に目標を一つおいてしまふわけです。理想的なものがあつて得るといふ想定のもとに、人類普遍のものを見上げ、それを求めて行くために、理想を持つために宗教を持つ。宗教を、人類普遍的なものを採つて行く一つの道具に使うというやうな立場をとつて行くわけです。それをもとにして話し合ひとか、中立の可能性というものを打ち出す立場をとつています。宗教を持ちますと、心の中にこのための絶対の真理があり得るということをお小さい時から教育されて、それを求めるこ

とにおいてお互いに共通点がある、そういう形になるわけです。そういうことが、民主主義というものが自由と、自分を主体にするという非常に個人主義的なものを持ちながら、一つの秩序を保つて行くというものの、一つの方向付けじやないかというふうに私は見ているのです。

「新しい秩序」ということを一つの行き方として、日本ではそれを見つけて行かなければならないのじやないかと思うのです。人類普遍の原理が書かれている憲法の条文についてはいつしうけんめい研究するが、そのもとにあつて憲法を守つてくれる原理、絶対的な真理とかいうことについては、日本は研究が欠けているのじやないかと思うのです。

絶対的なものはあるということを中心に刻み込む、そういう教育をして、それが一つの推進力になつて、民主主義が、中立性とか最大公約数が求められて行くことになりますと、絶対的なものは人間の社会の上に總体的なものとしてあつて、自分が客観的に見て判断することによつて、社会性を持つということが始まるのだと思うのです。

私たちは、よその国にも納得してもらえような原理を求めて行かなければならない。

野口（特別会議員） 私は図書館の司書をしておりますが、司書というのも資格をとつてなるわけです。大学四年出て、司書の講習を受け、文部省から認可をもらつて資格をとるのですが、大阪府では司書が専門職に二年ほど前になり、行政職一般職の無試験採用、初任給が一号職低いのです。講習を受けますから認められてもいいのですが、行政職の中に入つていたわけですから、それで組合でも大きく問題にしたり、人事委員会でもこの仕事を認めてくれ

るようになって、七等級二号俸一万五千二百円という、保母さんや保健婦さんに比べれば、いいほうといえまじようが、私たちはこれでも高いと思つていません。いま、百二十人ほど職員がいいますが、よそに引き抜かれないように必死なんです。というのはこの仕事でも非常に人が足りなくて、ほかの図書館から引き抜かなければならないのです。最近、会社がどんどん事務を、合理的に整理するために、フアイリングシステムをとり出したので、司書の仕事が浮かび上がつて来たからです。私たちの図書館からも引き抜かれたという例がありますし、ほかからもたくさん引き抜きに來ます。また、引き抜きにも行くというようなことがあるわけです。

そこで、生活の話になりますが、こまるのは託児所の問題です。仕事を持つ女が子どもを持つためには、どうしても託児所がなくてはならないと思ひ、私の住む団地の方たちに働きかけ、託児所を作ろうということをやつて細々とやつてゐるわけです。

渡辺 司書の資格をとるにはどういふ勉強をするのか教えて下さいな。

野口（特別会議員） 東京には図書館職員養成所があつて、高校卒は二年大学卒は一年養成所で勉強すれば、文部省から認可がなくても資格がとれます。そのほかは四年制の大学を出て、図書館コースのある大学でしたら、その中で十五単位とるのですが、それ以外では、慶応大学とか関西大学とかで図書館コースを夏期講習でやつてゐるので、そこで十五単位、別にやつて資格をとるといふことになるのです。

渡辺 わずかしいですね。誰にでもなれるというわけには行かないようですけれども、そういう資格を持つ方は日本では、どのく

らしいらつしやるのですか。

野口（特別會議員）

数字はよく覚えておりませんが、私のところでは、百三十人のうち六十人は正規の司書の資格をとつています。渡辺 仕事を持つていない主婦の方でも、そういうふうな、新しい女の職種に注目しなければならぬわけですね。

八木（特別オブザーバー銀行員）

私、去年入社して、やつと法律でいう成人になつたばかりで、お話するのはおこがましいのですけれども、銀行員という仕事は、女性だからというようなことは余りなく、仕事も大体男子と対等にやらされますし、給料も大体対等に扱われています。

田中（文子）

男子と対等ということですが、男子と同じくらいの役職につけるのですか。

八木（特別オブザーバー銀行員）

それは女性で、男子以上の役職という人はいません。やはりそういう点では……。

小堀 結婚しても勤められますか。

八木（特別オブザーバー銀行員）

結婚しても勤めるくらいのはうが、熟練するからいつていうような面もありますね。

水野 勤続年数はどうなつていますか。停年制という問題で、女性

は短いというようなことを聞くのですが。

八木（特別オブザーバー銀行員）

停年制のことは、私よくわからないんですけども、大分年のいつている方もいらつしやいますし、それほど差はないと思います。

矢野 たとえば大学卒の男子には特別に時間を設けて将来の幹部を

教育養成するということがありますが、女子にもそういう機会がありますか。

八木（特別オブザーバー銀行員）

入社してすぐ講習があります。男女

とも同じように受けます。それから、入つて二、三年経ちますと、いわゆる幹部養成とでもいうようなことがあつて各係りから何名か出るのです。その時には、よくわかりませんが、私たちのところは女性が少ないからでしょう。かあまり出ません。

矢野 出ないというのは進んで行かないということですか。

八木（特別オブザーバー銀行員） 行きたくないというのじゃなくて、選ばれるわけですから。

矢野 女子が希望するしないにかかわらず、はじめから男子ということ想定しているわけですね。今後、もし女子が希望すれば、そういう中に入れられるという見通しや空気はありますか。

八木（特別オブザーバー銀行員） まだ、私、新人なのでよくわかりません。

鈴木 そういうことは不可能でしょうね。

銀行など金融、保険関係が一番男女の格差が少ないらしいのですが、それでも外国に比べると、先になると差の拡がりが大きいいということを見ました。

渡辺 新陳代謝が激しいというようなこともありますね。

労働組合に女の方が役員になつていますか。

八木（特別オブザーバー銀行員） 中央の役員には入つていませんが、組

合に青年婦人部というのがありますので女の人が入つています。

（第一日閉会）

第四部会

(職業問題)

第二日目 十二月 一〇、〇〇と一七、〇〇

渡辺 きのう 私たちが雇用の問題として討議したことに関連して、農村のこと、二、三男のこと、それから最近では、男は工業にとられて行く、これは開拓地でも同じことがいえると思うのですが、そういう人たちが、工業のほうに変わる時に一体どういう賃格で、どういう賃金のどういうところに入っているかというような問題、それも頭におきながら話し合いを進めて行きたいと思っています。

それから、昨日多くの方たちから、ことに農村、それから農村と工業都市との中間にあるところに住む方たちから出た、主人だけの収入では足りなくて、家計の補助にどうしても女が働かなければならないという問題を出されましたが、それほど男の人の賃金が低いのかどうか、それと社会保障との関係。社会保障ができたために生活水準が一体上がるであらうか上がらないか。それから社会保障の制度だけができて、自分たちがへき地に住んでいるために、利用できるのかできないか実施面では不都合だとか、そういうことも考えていただと思います。

一方、職業病と社会保障との関連について、等について、しめくくりの意味での発言をどうぞ。

佐藤 都会地から遠く離れていて兼業も共稼ぎもできずに酪農を営んでいる私たちは、専業酪農家になるよりし方ない運命にあります。考えようによれば、農業近代化の線に沿っていて畜産関係は成長産業です。しかし開拓地が小さいのです。近代化の線にそってやって行くためには、多頭飼育が可能な広い土地が必要なのです。多頭飼育に、先ず乳牛、そして諸施設をそろえなければならぬ。現在、牛六頭を飼育していますが、しかし土地の問題になると、私たちは戦後の開拓入植で、三軒入るところ、六軒入るところ、多頭飼育には青森県の統計では六町歩か八町歩の土地が

必要なのに半分の三町歩しかない。それに傾斜地もありトラクターを入れることもできないのです。それでは多頭飼育の望みはないかといえは、近所に離農した人の土地が十町歩くらいあつて、売つてもよいといつています。けれども私たち目下建設段階で、現金はそのほうに注ぎ込まなければならぬので、五十万、六十万の畑を買う余裕はないのです。それをどこから借りたらいいか。農業近代化資金の中には、土地を買う金を融資することはできないようになつてゐるのです。県の開拓課に何度も行つて、ぜひそういう土地を、国で買い上げて私たちに貸し付けてくださいと再三お願いしてゐるのですが、農地法では、個人のものである以上、仮りに政府で買い上げるからということはできないということ、開拓課でやれることは限度にきてゐるというお話です。それではたとえ高いことをいわれても自分で買うより仕方ないでしょう。マゴマゴしてゐると他に買い占められて、隣の畑を私たちが手に入れられなくなるといふ現状なのです。

話に聞きますと、西ドイツでは離農者の対策に政府が本腰を入れて、その土地を長期年賦で、残つてゐる人に分けるのだそうですが、日本でも早くそういう、しつかりした制度を作つてほしいと思うのです。私たちのまわりでも、もう、離農したいという人もありますが、何しろへき地でして、思い切つて知らない土地へ行つて、どんなことになるかと不安で、できずにゐるわけです。それがうまく行けば、残ろうとする人にもいいのです。こういう問題を、一家の主婦として、一体どこへ訴えたらよいのでしょうか。どうしたらよいのでしょうか。

古賀 今の問題は、婦人だけ主婦だけで解決できる問題ではないと

思います。やはり政治的措置を要求することよりほかないと思います。すくなくとも営農資金、酪農資金の貸付を要求するか、共同化のための措置、傾斜地農業への特殊な援助とかね。田中(きり) 私のところも農村ですが、山村へき地でないところの問題にもつながると思います。

今まで、堅実に農業をしていた人たちが、工場や土方となつて出てゆくため男の人の離村がふえてきました。設基法ができて、その線に沿うべくみんな努力はしてゐるのですが、今のところそれを推進してゆくリーダーがいないためではないかと思うのです。武田 私のところの場合でも、いまのお話の通りです。嶋内 私のところもへき地でして、同じように、つくづく指導者を求めています。

渡辺 ここで少し纏めをしてみますと、私見ですが、設基法もできまして、とにかく農業の近代化が農業の生産性を拡大することであり、農家のみなさんの生活水準が、それによつて上がらなければならぬということが根本だと思ふのです。その技術的な問題については、個別的な事情を知らないで、失礼かもしれませんが、机上のプランになりがちなのでしょう。今のお話のように、御自分が開拓村に入られて、バイオニアとしてやつてみて、こうやつてみたらうまくいく、これではだめだということと具体的な問題が出てきたところまで、中央のプラン、考えが十分及ばなかつた点もたくさんあると思ふのです。開拓する者の仕事とは、ひとり農業には限らず、都会生活の中で私たちがしていることもみんな同じです。新しい事業をやらうとすると、こうでもないああでもない、とにかくやり始めてみてタイミングが合わないとい

う問題はいくらかあると思うのです。

そこで、そういった開拓者に重要なことは、そういう尊い経験を無駄になさらないように、また指導者を求めるといわれましたが、そういうことをみんな、もちろん県のほうには現地で働きかけなくてはなりませんが、現地で解決がむずかしくてもあきらめてしまわないで、然るべき筋にも訴えるということなど、そういうような方法を私たちが考えたいということも、会議の一つの成果かとも思います。

さきほど農村の男の人たちが農業を離れていく、そういう男の方たちが農村を離れて、工場に移る場合、どういうところに、どういう資格で入って行くでしょうか。

田中（きり） 建設業もありますが、主に私どものほうは、いま東海道新幹線をつくっているために、その工事に出る人もありますし、また近くの河の改修人夫とか工場にも出て行かれております。渡辺 工場に出る方は、特別の技術を要求されるのではないようですが、農業をしていた時よりも、経済的に有利なのではないでしょうか。

田中（きり） そうです。専業としてどうしても立つて行けない状態ですから、何とか経済的に豊かな生活をしたいという目的で出て行きます。そのほうが賃金が高いですし、農閑期はもちろん農繁期も女にまかせて、一日でも多く出て収入をはかるといふ状態です。

渡辺 生活水準が上がるということは、現金収入がふえることだという考え方ですね。農業をやめてほかの仕事をするということ自体が生活水準を上げることになるのだということだと大きな問題です。現金が足りないからそう得にはならないが、土建でもい

しようか。

柴田 私は準農村に住んでいて、農家でない第三者の目で見ておるのですが。伊勢湾台風で荒らされて、農家の経済状態が悪くなつたために、男の人たちが職を求めて出ることになり、それが台風の跡始末の土方作業です。一日八百円ほどの賃金です。それで引き合うかとききましたところ、農繁期に人を雇うのに、一日の日当が男で六百円、差し引き二百円余る。しかし外へ出て働くには、土地を離れるし、小づかいがいるのです。だから生活水準が上がるといふのではなくて、ようやく生活がまかなえるという程度のもやうです。

武田 私の地方でも裏作で酪農などもやりたいということで、土地改良で乾田にしましたが、実際やつてみますと、補助金もありますが多額の金が地元の負担になるのです。今年は最終年次で、でき上りますがせつかく乾田になった田に手をつけないで、大阪方面などに季節労働で、十一月から四月一ぱい留守に出ます。そして女の人に仕事が残されます。生活は楽になるどころか無茶苦茶に忙しいというわけです。

渡辺 生活水準は上らない？

武田 それは、私たちのように、土地にくつついているものよりは、見たところはよくなります。

島内 農業から離れても生活水準も上りませんし、そういう仕事をすることが、ちつとも工業化になつていないと思うのです。

渡辺 そうすると、そこにしわ寄せが来ているということ、これは女の人の問題と同じように考えなくてはならないというわけですね。

島内 私どもの土地では、そういう金銭的条件のいい仕事さえもな

い状態で、本當に行き詰まつております。土地に工業を導入したいと思つても、僻地でむづかしいという感じます。

古賀 私は農家じゃありませんが、お話をきいていますと、いまだに口減らし的に働きに出ているということもあるのですね。それで臨時雇いのような仕事をしておられる。その仕事がなくなつたらどうするか。もう一つ気になるのは、安い賃金で臨時の働きをするということは、使用者側に利用されて、本職の人の賃金の足を引つ張つてゐるという結果も生ずるのじやないかということです。そういう仕事は、私はしてはいけないと思うのですが、それじやどうすればいいかといわれると解決策は見出されないのです。

渡辺 自分だけではトラクターを買えないから、共同化の方向に向うべきものが、そのための資金も十分でない、ほかの産業に、工業化の受け入れ対策もないために、その間を、少しでもその日に賃金を得ようとして、さまよつてゐるという情勢が出て来てしまいました。みなさんのお話をうかがつていてそういう印象を受けたいことですね。

田中（文子） 私農家ではありませんが、近くの農家の状態を見ておりますと、現金収入の場をということで工場誘致をしています。私の町では、じゆうたん工場が二つと、扇子を作る工場ができて、現金収入の場が得られたのです。それまで男の人は、冬は酒造りの出稼ぎが多く、婦人だけの消防組が私のほうにもできてゐるくらいです。そういう現金収入の場を作るといふことと同時に、大事なことは、農村を捨てて外へ出るのじやなくて、本腰を入れて農業と取り組もうという、そのことを婦人学級でも取り組んでみたいのです。生産に繋がる学習が農家の主婦にとつて非常な魅

力です。やつてみてよかつたと思うのは、種子を採るということです。ふつうの野菜を作る以上に、狭い土地からたくさん収入を上げることができるとし、婦人の手に合う。共同でやるという気風も出て来て、よかつたと思つております。農村が、近代化に伴なつて変貌していく時で、婦人の学習活動は、本業に徹した勉強をやらなくちやならない時に來てゐるんじゃないかと思ひます。日雇い人夫に出て、その場の収入があるから、とにかく子どものランドセルが買えたり、流行のジャンパーが買える、というたぬに出るのじやなくて、やはり本業の農作物からの収益が上がるよな経営を本當に考えなければならん時に來てゐると思ひます。そうするとやはり家計簿、収入と支出とのシヤンとした記録をとらないとできないことだし、そういうことがお留守になつてゐるんじゃないかしらんと私は思ふのです。

渡辺 いまのお話、とても大事なことです。

政府の考へてゐること、あるいは中央でプランをたててゐる人たちは、そういうような、地域で、ある程度共同化などの方法を見出して成功してゐる、というようなところを大いにアテにして、そういう経験を他にもひろめて行こうと考へてゐるのでしょうか。思ふのです。

それと、一方、先ほどから指摘されたように、出稼ぎをしななければやつて行けない、ひどい地域になりますと、主人だけじやなくて主婦も家をまる空きにして、子どもだけを残して出稼ぎに出なくてはならないところもあるということです。これは地域差が非常にあるからです。この点、中央で計画する時に一色に塗りつぶして、何でもかでもこうだということで、経験に基づかず引張つて行くということに無理があるような気がします。個人のそ

ういう経験を無駄にしないように、考えてもらわなくてはならぬことですね。

柴田 私どもは今年の正月、現在の暮しむきはどうなっているか、

というアンケートを四百五十戸ほどを対象にとりました。どうにかやつて行けるというのが、その中でたつた六軒です。残りはいまのままではどうしてもやつていけない。土方作業に出ている人は、自分たちには明日の千円より今日の百円が先なんだ、婦人学級にも出ればいいことはわかっているが、きょうのおかず代を出してもらえるか、という深刻な状態になつていゝのです。男の人は外に出て、女だけで農繁期を働き、農閑期は内職や土方に出る。農作業もその間にやらなければならないので、私たちは人手不足を補うための共同化をすすめたこともあります。精神的な交流がよくないと、うまく行きません。よほどしつかりしたリーダーがいても、それでもこわれてしまうことがあるのです。やりかけではこわれ、やりかけてはこわれのような状態です。

渡辺 共同化ということも共同でプランをたてる、よその国の例をとつて研究するという場合に、先進国の場合でしたら、共同化というのには、開拓者がいろいろ困つてあつてもないころでもないという結果、共同化をやつて、中には理論だけ先走るといふような例があつて、その中から、この線を共同化にしたらいんじやないかという線が出て来たわけです。共同化のタイプが一つであるか、あるいは一つ一つの地域に応じた違つたもののそれぞれの公約的なものかという場合、その後者だと思ふのです。つまり積み積つてよその国は、一つの制度になつて来た。しかし、私たちの場合、今日の変化が激しいのでよその国のこいう共同化はこいう形であるから、こうでなければならぬという押しつけ

が覆いかぶさつてくるという点が、私たち後から急いで追いついて行かなければならない国の一つの共通の悩みのように思ふのです。

私は、共同化というのは、地域に応じた、違つた形でいいのじやないかと思ひます。田中さんの地域でやつて、その結果扇子の工場が近くにできたとか、種子を探るとか、いろいろやつてみて、できるといふような経験、それはそれとして尊いもので伸ばして行かなくてはなりません。ただ、それをほかのところに同じ形でということには少し無理な点があると思ふのです。

小堀 私の住む地方では、最近では現金収入を得るために米とか麦を切り替えて、果樹栽培とか、花、野菜などを一軒の農家がいろいろ研究してやる。そうすると、あそこはもうかつたから、うちでもやろうというのがたくさんで来るのです。そうなると、市場で、最初は一個十円で売っていたものが、だんだん安くなければ売れなくなつてしまふ。その例として、カラーという花がありますが、最初は二十円だつたのが、みんなが作るようになると一円くらいになつて、せつかくビニールハウスなど設備して作つたのにできた商品は安くて、元も子もとれなくなつてしまふ。そういふふうに、新しく考え出したが新しい問題にぶつかるといふ例があるのです。

その場合に、共同化について出荷の場合の共同化、市場に売出す場合の値段をどう決めるかという問題が出て来ているんじゃないかと思ふんです。

白土 福岡ですが、築豊の農業問題についていえば、築豊は地下探炭による鉱害と関連があるのでしよう。共同化も盛んに呼ばれて農協では大きな運動にしようとしています。それが進まない原

因が一つあります。それは鉾害補償金を出すのですが、一反歩六俵の米ができるのなら六俵分の鉾害の補償として金を出しています。これはありがたいことですが、その金が出るために加えて近代化、共同化をはばんでいる、そういうことも併せ考えると、農業の近代化、共同化に關係して、地域によつていろいろと違つた問題があるといえますね。

島内 私、社会教育の呼びかけに十分応じられない原因である貧困を先ず切り開くために、農家の庭先に工業を導入したいと所感文に書きましたが、貧困を切り開くためにどうしたらいいかというのを考えるキツカケは、社会教育がいちばん大切であると思えるようになっていきます。

私共の地域では、農業の共同化など話しかけても、そんなことは不可能なことだというだけで、農業の曲り角とは何かわかつていない人が多いのです。

それで、社会教育を強く進めて行く運動をしてみたいと思いますのと先ほども出ましたように非常にうまくつたからそれをまねしようという農業のやり方は、農林省あたりで国全体のことを考えて、需要と供給の關係を示して、ある程度指導するということができるかどうかと思います。

佐藤 共同化と社会教育の関連ですが、それについて私どものところこんなことがあります。私も開拓者は感情問題というか、どんぐりの背くらべみたいなもので、共同化はなかなか困難でした。そこへ今から三年ほど前にパーカーソンというイギリス製の大形トラクターが入り、そのため作業の能率が非常に上がり、人手不足も解消され、主婦も肉休労働からも開放されて、たいへん喜んでいきます。牧草を刈るにも、一町歩を三十分たらずで刈つて

しまい、刈つた草を集めるにもトレラーに積むにこしたことはないという結果、否応なしに、共同化でなければ自分のうちだけではやつて行けないということになつて、感情問題も何も吹つとんでしまい、今ではみんな仲良くやつています。

渡辺 みなさんの発言で共通していえることは、指導者を求めているということですね。新しい形で入つて来た技術については、指導者の意見交換はやつていても、それが末端にまで流れ、育つて行かないという現状じゃないかと思ひます。では誰が最後に指導者となるか。それは、機械を導入したら共同化がひとりでに進んだというような経験をした方が将来指導者としてやつて行つていただく方だと思ひます。よその国を見ても、結局実地にいろいろやつてみたことから生まれて行つたものだと思うのです。

指導者というのは、民主主義における個人対団体、個人が同じような考えの人同士で集まつて行くというのと同じように、開拓村とか炭鉱地帯で農業に集中できないところとか、その地域に即した方法を自分の力で考え出す、これは自分たちに主体性をおいたやり方ですね。それに対して国がプランをたててということでは民主的なものとはいえない。これは個人対団体の場合とも同じでしょう。自分たちだけの生活を考えるとたしかに苦しい、しかし朝永先生のお話にもありましたが、いつの時代でも、自分たちが経験したことを後に残して行くといういつしうけんめいの努力、バイオニアの気持はいつでも誰でも持つていなければならぬという気がしてきます。

また農家の社会保障としていけばんに求められているのが失対事業であつていいのか。その点について話しあいたいと思ひます。小堀 その解決策として、農村に工場を誘致したというようなお話

がありましたが、その場合やはり中小企業なんでしょうか。それも中小企業の小の部類に属するような……。

田中（文子） 町に働きかけ工場ができて、私たちの声が通つたことは通つたのですが、経営は、はじめ町がやりました。しかし今は私営になつてゐるようです。

小堀 私のところでも、その対策として竹細工の工場がありますが、つぶれたり立ち直つたりを、くりかえして信用おけませんしそこに雇われる人たちはすごい低賃金で、これで完全な保障にはならないと思います。

白土 失対事業というのは、疲弊した農村の救済にはならないと思うのです。やはり地方の自治体、市町村が土地に適応した工場の誘致、仕事の誘致をして、そういう人たちが吸収してくれるようにということとをわれわれは願います。失対は全国的な問題で仕事のない人は失対で救うということとを全日自労では掲げておりますが、農村の問題も含めてそれは不可能です。早く積極的な対策をたてていただくように、私たちのほうから働きかけたいと思うのです。

田中（文子） 婦人団体も声を大きくすれば町だつてじつとしていられないから、やはり自分の地方の自治体に、要請すべきことは、筋を通して要請したらいと思ふんです。私たちの町は民主的な町で、割り合いそういう声がよく通ります。

失野 私たち零細農家の多いところで、今度大分―鶴崎臨海工業地帯というものに県が取り組むことになりました。製鉄や石油関係などが進出して、工業地へ転換したわけですが、今度の地方婦人会議では、そういう工業地帯でなくて、残された農村では、農業の近代化が、その貧困を来たしているという訴えもあるのです。

共同化と問題が逆になります。が、耕運機を農協から個々に月賦で買いますが、一年の間に煩度数からいつても何日も使いません。それを個々に買つておいてほとんど遊ばせているという状態です。もう一つ、農家の主婦の訴えでしたが、薪はくさるほど積んであるのに、みんな電気炊飯器を買う。近代化のそういう矛盾というか、近代化が進むことによつて誘致工場のほうに転換できない農村では、近代化に伴いだんだん貧困という問題も生じているのです。

渡辺 農村に、最近になつて国民保険とか健康保険とか、また町によつては老令年金なども出しているところもあるかと思ひます。その金額は非常に少ないのですが、自分たちの生活を将来向上させて行く何らかのきざしになるとお考えでしょうか。

古賀 農村の貧困を工場誘致によつて救うという考え方が出て来たと思うのです。確かに一時的には救われるかも知れませんが、暫くすると低賃金ということと悩んでくるのじやないかと思ひます。それでやはり社会の近代化に伴うその問題は残つて行くと思ひます。だから私は社会保障の問題を考える時に、先ず最低賃金制を要求したいのです。そのことは、農村ばかりの問題じやないんです。農村ばかりが貧困の打開策として、その必要をあげるまでもなくて、低賃金に悩み最低生活をしている労働者全部が結束して、最低賃金制の実現に努力して行けば効果があると思ひます。

渡辺 先ほど柴田さんのお話で、所によつては自分のところの男手が他の仕事に行つて働き、農業をやる人がいないので人を雇つてゐるということでした。それがだんだんに進んできて、もつと高度になつてくると、英国とかヨーロッパのほかの国のように、使

用者の立場になつて農業労働者を使つて農業をやるといふ形が出て来ます。そして農業労働者同士、賃金は、いまのお話のように基準を作つてしまふとゆう形ができてくるわけです。どんな形に日本が進んで行きますかね。

「老令化の問題」、前にもお話が出たように、この問題を單に年をとつた人、老人の問題というふうにだけ考えないようにしようと思ひます。人口動態の中で、日本人全体を考えながら、若い方たちも關係のある問題として発言していただきたいと思うのです。ただ、その、關係ということについて、どうせ年をとるから考えようという立場でいうのではなくて、若い方たちでも、いわゆる二十代の退職問題ということもありますから、職業ということ全体で考えて行きたいと思ひます。

それから、昨日も仕事の問題が少し出しましたが、老令者に仕事を与えるということが、若い人との仕事の取りつこになる。こういうこともいま問題になつてゐるようです。そんなことも合わせ問題を考えて行きたいと思ひます。

矢野 老令化の問題は、婦人だけの問題ではなく、国全体の問題だと思ふのです。先ず婦人の問題だけにしほつてみると、婦人は専門職についていた人でも五十才くらいから、強制退職的にやむなくやめるケースがずい分あります。ピンピンしてゐながら職に就けないのです。そういう人間が十年なり二十年なりをブラブラしてゐるといつたような状態になります。人間の能力からしても、社会的にもつたないのです。そこで再就職したいと思つても狭き門です。まして技能を持たない年とつた婦人を受け入れる門はないと思ひます。それについて私はこんな見方を持つてゐます。

一つは、家庭が、男の子には将来の職業人としての目を持つて

教育をし、そこから、将来管理的地位につく道も開けてきます。ところが女の子には、女は家にいて家を守る、社会に出て働くべきものは男ということがいままでの家庭教育の常識なんです。それから学校教育では、女子学生亡国論をある大学の先生がとなえていて、女はすぐ家庭に入るのだから大学教育なんかもつてのほか、国立の場合は税金の何十分の何十を云々、これが社会の考え方なんです。また婦人自身も、職業に就いて真に社会に貢献する、そのことで自分も育つという自覚が足りない。單に経済的理由にのみよる人が多いのじやないかということを感じてゐます。

渡辺 老令の問題と日本の教育ということは、當然つながつてくる問題なのでして、私たちみんなに深い関心のあるところで、その点はもう少しつつ込んでお話し合ひしたいと思ひますが、いま老令化自体のところに入つておりますので、あとでそこへもどつてお話ししましょう。

白土 中年以降のいわゆる若隠居の年令の主婦で、家庭では子どもの教育も終わり、家庭から解放されたかに見えますが適當な職業がない。そこに嫁とのあつれき、また社会的なあつれきが起こつてくるのです。

そこで、考えますに、そういう女性のための門戸を開いて新しい職種を開拓していただきたい。婦人が働くということは経済的な問題もありましようが、そればかりじやないと思ひます。能力のある人、できる人はどしどし社会的な面で役に立てる人間になりたいという意味で、私も意欲的な気持から職業を求めているわけです。職業を求めるといつても、それが家庭を顧みられないような職業であつては、これまた困るので、今後研究を進められて、家庭の主婦でも気楽にできるような、パートタイムのような分野の

職業を地域でも広く開拓していただきたいと思うのです。

田中（きり） 地方の会議の時にはこの問題が出ました。まず、共稼ぎの問題から、子どもができるまで真剣に働きたい、そうして、園才か五才になつて自分で自分のことが一応できるようになつて手が放せるようになったら元の職に復帰したい、そういう希望を持つてゐる、という若い方の話でした。そういう社会を作つていきたいという要求が出ておりました。

柴田 医者立場から申しますと、三十五ころから老化現象が起つてきます。年をとつた人の特有性は、せつかちになるのと、物忘れを非常にする、体が動きにくくなる、達者になるのは口だけというような状態になります。経済状態が良ければ老後の心配はないという話もされたように思いますが、「経済」だけに老後の仕合せがあるのではない、というのは、精神医学的に、年をとりますと精神的に孤独感が表われて来るそうでは……。

渡辺 まだそれが表われていらつしやらないのは、きつと専門職を持つていらつしやるからなのね。（笑聲）

柴田 経済的には十分で満足といえる人たちに自殺者が多いという傾向が出ておるそうで、老化現象と、こういつた点も組み合わせて考えなくてはと思います。要するに何か手に合う職業を持したいとあげたいと私は思います。

谷口 先輩の方々のお話を聞いていて痛切に感じましたことは、年をとつたら一体何をしたらいいだろうと考えて思いますのは、助産婦なら助産するだけじやなしに育児の面の指導者として地区で働くということもできるのじやないか。人間は働いてさえおつたら精神年齢も若いし若さを保てるそうで、そういうようなことも考えられます。私も年をとつたら子どもたちの施設などに働いてもい

いなというふうに思いました。

古賀 年をとつても仕事を持てる状態にある人、また生活に経済的余裕があつて趣味などに没頭できる環境にある方はいいのですが、そうでない人たちはやはり経済的な基盤がほしいのです。それはやはり社会保障が確立しないとできないと思うんです。現状の、一人一月に三千円くらいという老令年金では、生活ができませんものね。

前田 もつと少ないでしょう。満期になつて千円ですよ。

古賀 とにかく非常に少なく最低生活の維持もできないのです。私さつきから最低賃金制のことばかりいつていますが、結局そこに結びついて来ると思うんです。社会保障制度でどれだけやらなければならぬということがつかめないからです。そこに結びつけて考えたいと思うのです。

柴田 老令年金のことで日常肌を感じていることがあります。農山村では医者にかかることが非常にせいたくに考えられていて、老人が医者に診てもらふということは、家の若い者に対しては非常に遠慮がある。それが老令年金が貰えるようになってからは、役場からお金をもらふと同時に医者のところへきて「先生どうぞ診て下さい、この千円は自分のものだからお薬をください。これは嫁にも気兼ねのないお金だ」と非常に喜んでおられる。それを見るにつけても、何かその人たちに小づかいを稼げるような、手に適う仕事をどうしても見つけてあげたい。

渡辺 そこで内職の問題にもつながつて来ますね。そのことも頭におきながらどうぞ。

谷口 国民皆保険ということがいわれて、国民健康保険にみな入つてゐるのですが、あれは全額じやなくて半額が個人負担になるわ

けてしよう。長い病気になる、と三年間で切られてしまうのですね。それで農村では、私が病氣だから治療しなさいと指導しても、治療するお金がない。薬代の月千円を出すことができない。それで思いますのは、国民健康保険というのも全額保証になって、それと同時に三年間というような期限を切らずに、治るまでというふうになつたらいいと思います。

渡辺 その問題は、国によつて健康保険制度がちがう、国営医療制度をとつているところの違いにも関係してくると思います。これは、いろんな国でいろんなやり方があるですね。

武田 私ども農家では、病氣になつても働ける間はどうにか働いて医者にも行かず、しやにむに生活しているのです。それで家族の一人が病氣になつたら斗いに敗れたような状態なんです。

佐藤 私たち開拓農家では、年をとつたらどうなるか、考えますとほんとうにたいへんだと思います。昨年夫婦で考えて仔牛を一頭売つた金で桐の木を五〇〇本植えました。何年もの間、好きな本も読まず、旅行もやらずに働いたんだから、年をとつて若いものに家を委したら、自分たちの木を売つて好きな所に行つたり、若い時にやれなかつたことをやつてみたら淋しいことはないのじゃないか、そんなふうに考えています。

渡辺 佐藤さんの場合、個人的な解決として桐の木を植えられたのですね。それは例えば生命保険に入るといふようなことと同じような方向に解決の方法を考えていらつしやる。いまのところ老令年金などの現状から、桐の木のほうをみると、どうしてもそつちのほうが現実性があるような感じがするといふ、そこがちよつと問題ですね。桐の木といふのは、ふつうの人は植えられないわけですから、老令年金のほうも考えて、両方考えて行くといふこと

がこれから大事になつて来ると思ふのです。

田中（文子） 農家で一人病氣になると斗いに敗れたような状態だとおつしやつたのですが、その斗いが大きな戦争にならないうちに、病氣が割り合い軽いうちに医者にかかるという習慣をつけることが大事じゃないかと私たちはいつも話し合つて来ました。前は私たちがそうでしたが。

武田 斗いに敗れたという大げさに聞こえますが、最近私たちも料理講習など健康面についても氣をつけるようになりました。何しろ現実には男が出てしまつているので休むといふことはできません。

柴田 その問題ですが、田舎で医者を迎えるといふことは、やはり近所に氣兼ねがあるんです。それで、もしなうことなら一日二日がまんして、そのまま治つてしまえばただですむわけですから、私たちの立場からいへば、もち論早いうちに手当をすればいいことは当り前ですし、医療費もずつと安くてすむのですが、一日二日をがまんしたために手遅れになつたという例は非常に多い現状です。私どものほうでは、その半額の窓口支払いのお金がなかなか払つて貰えないといふような状態です。

谷口 病氣になつたと思つたらすぐ医者にかかる、たしかにそれで、私たちが毎日そう指導しているんですが、農村の労働力の不足で農家の人は、休んだら仕事にならない、また人夫に出ている人もお金が入らないと困るから、寝なきやならないようにならんとお医者さんのところには行かないわけなんです。

白土 農家の主婦はサラリーマンの家庭と違つて、家事労働だけじゃなく家業の半分を背負つてゐる、この過重労働から、一般の婦人の力で農家の主婦を護つて上げたいという希望があるのです。

渡辺 病氣にかかってもすぐ医者にかかれないう問題が農家にある、この中には老令病者のこともありますね。慢性的に老令疾患にかかっている方々を慢性病だからといって放つておいていいものだろうか、そういう点も含めて。

矢野 商店や中小企業を営んでいる方は、農業でも同じですが、それが一つの職業として成り立っているわけなんですね。お店をやっているうちでは、老年になつても奥に引込んではいられないわけですね。

私のいいたいのは病氣の方は社会保障で救つていただきたい。

そしてそれ以外の働けるものは、社会保障というようなものでその人々に応じた仕事を支えて、もしそれでも最低生活が自分の力ではできないという場合には、その部分を保障するというようなことができたならばなんと年をとつた婦人たちもしあわせになり、みんながしあわせになれるのじやないかと常に考えているのです。鈴木 社会保障の問題が出ておまして、健康保険の話は具体的にいろいろ伺つておるのですが、厚生年金保険を直接事務上扱つておりますが、もう少し外国の場合は有効に扱われているのじやないかと思うので、先生のお話をすこし伺いたいと思います。

渡辺 この問題は、どこかでまゝとお話してもいいかもしれませんが、日本の場合は、厚生年金と国民年金が別になつてゐる。また、別に共済制度というのがありますね。これは官庁勤務の方のためのもの。こういうふうに日本では、できるところから発展して行つたわけです。国民年金も一種の共済制度なんですね。厚生年金の場合は、使用者側と労働者側とが金を出し合つてそこに年金制を作り上げた、それが国全体の保障になるように国が一部を入れて考えられたのが国民年金。そういう発展過程において、で

きるところからして行つたということ、厚生年金制度は産業労働者とか、勤めている人たちのためにある。それでとり残した分を国民年金で拾うということ、そこに格差ができたというわけです。

どこの国も発展段階にはこういうことがあります。スイス、イタリアとても同じですが、何かの政治的な機会とか大きな戦争の後なんか、結局社会保障制度全体の再評価をしたり、たて直しをするという時に一本化の方向に持つて行つて格差のないようなものにして来たということなのです。

鈴木 最近、調整年金というものができましたね。

渡辺 厚生年金のような形で掛金を掛けて行くことなら割合に簡単に行くところもありますが、国民年金のほうは掛金を掛ける側の能力という問題もあります。

国によつて社会保障制度の発達は違つてゐるわけで、イタリアの場合は、社会保障制度として身体障害者のための障害年金が四十年も前からやられております。また農業労働者の労病災に対する保障をやつておりますが、いろいろの時代にいろいろのところ一つ一つ始まつてしまふと、あとから一本化することがむずかしくなつてくる。例えば労災のエキスパートとか、それぞれ独自の部門のエキスパートによつて研究されて発達して来ますと、ますます個性が出て来て、官庁の機構の中に入つて抑えられることをいやがる。一本化が非常にむずかしくなつて来るという傾向があります。イタリアのように、格差の多い社会保障の、一本化ということに、歴代の内閣が十五年も二十年も力をつくして、せめて英国程度の福祉国家、あの程度の本一化まで行きたいと努力しているところがあるのです。イギリスの場合でも、あそこ

まで行つたのは第二次大戦のような大きなキツカケがあつて、思ひ切つてやつたのでうまく行つてゐるということで、日本は日本の立場で、よその国の制度は参考にするが、一番いいキツカケをとらえて、日本に一番適したプランをたてて、だんだん格差をなくし、給付の額を上げて行くということを日本自体が考えて行かなくちやならないと思うんです。

水野 北海道は御存じのとおり農業が主ですが、老令化現象というのは農業労働人口にも現われて来まして、二、三男は都市の工業地に出ていきます。東北六県あたりが、若い労働力を要求しているのですが、どうしてこういう若い人たちが都市に走るのかというところをも考えてみたいと思います。

渡辺 どうぞそのまま、その問題をお続けくださつて結構です。

水野 それで私、新卒の人たちがどの程度地元にとどまつてゐるか、高卒の人がどのくらい本州に流れて行くかということを調べてみたのです。そうしたらここで最低賃金制にぶつかつて来ました。帯広の場合は、中小企業といひましても零細企業が多いため、いろいろな保障とか、最低賃金制などないのですから、若い人は都市に、大きな工場に流れて行く、そういうような状態でした。

渡辺 ここでまた最低賃金や、労働の格づけという問題が出てきましたので、前の問題と一緒にとり上げるようにしましょう。それから、ここに教育ということがひつかかつてくるということ、中卒、高卒の問題も出ましたので、そこにも結びつけてお話し合いをすることにしましょう。

小堀 私たちが職に就こうという場合に、最近非常に皆さん苦返つてきまして、いつまでも職場で働いておられるのですが、若い人

が新しく職場に入ろうとするとそのためにシャットアウトされてしまふ。年とつた人も働いていれば気分的にも若いし、ボケちゃいけないから仕事をしてもらいたいという気持はある。しかし一方社会全体から見ると問題になるのじやないかと思うのです。

渡辺 これはまともになると思ひますけれども、教育のところでもり上げるとして、いまのボケちゃーということでは何かいわなくちや

(笑聲)

矢野 若い人の気持はよくわかるのです。長年勤めました学校をやめましたのも、新陳代謝という意味で、後進に道を譲つたわけなのです。仕事の性質によつては年令が高いほうが適しているものもあり、職場にもそれが要求されるわけなんです。また逆に若い人でなければならぬということもあります。そこで、年をとつたものが若い人の二倍も三倍も働くかというところでもなく、しかし年功序列的な俸給制度で俸給は高い。それだけの力があるならば女であつても、いわゆる管理的な職に上つて行くという途が開けましたならば、それで解決つくのじやないかと思うのです。男子の場合はその点やや解決がついてゐるのですが、婦人はいつまでも下積み、年をとつても下積みというところにある。この問題があるのじやないかというふうに思うのです。

小堀 友達の話を開きますと、若いものでさえ就職しようとしてもなかなか職がないのですから、先輩が早く結婚してやめちやえばいいというようなことで、お互いの足を引つ張るようなことをいい出してゐるということもききます。

清水 中年層から問題を出したいと思ひます。

若い方も職業につきたい、現在の職業はやめたくない、子どもを育て上げた年代の人でも職業につきたい、そこでそのしわ寄せは

どこへ行くか。中年層に当たる私たち年代、子どもを育てて行かなければならない私たちの年代にそのしわ寄せがくるわけです。子どもを育てて行かなければならないことは、職業という問題からいいますとマイナスになるということがあるわけなんです。その問題について、みなさんのお考えをききたいと思うのです。

渡辺 中年の子どもを持つた方として、子どもを育てるということから出してくださったのも、結局同じ問題につながると思うのですが、老令者と若い人の仕事のとりつこという問題も、同一価値労働同一賃金の問題と考えていいんじゃないか。同一価値労働同一賃金は、日本では労働基準法の中では男女同一価値労働同一賃金の問題として出ています。

最初の失対問題。農村が、非常な工業化によつて激しい変化を受けたような時に、主婦にもしわ寄せが来ますが、少しでも収入をあげようとして、結局男の人たちが失対事業にとびついているという、男としても同じ問題があるというふうに考えていいのじゃないかと思ひます。男女同一価値労働同一賃金の問題を考える時に、男も女も含めた問題で、男の仕事もダンピングされないようにという原則を守ると考えていいのじゃないかと思ひます。そこで男女同一価値労働同一賃金を認め、その原則に近づいて行くということの前に、同一価値労働同一賃金という原則についても考えなくちゃならないと思うのです。同一ということが日本では仕事にたとえるなら、誰がしても同じ価値の労働であつたならば同じ賃金が支払われる、賃金上差別をつけないといふ考えを持つ。ところがよその国では同一価値労働ということに

ついて、平等の価値を認めるということ。たとえば農業の中でしている仕事と産業の中でしている仕事で平等のものがあれば、これについては同じ価値を認めて同じ評価をするという原則で、横の拡がりを持つ可能性が潜在しているわけなんです。日本で同一賃金同一労働ということがいわれている。これはちよつと問題があるのじゃないか。ただ一つの企業の中、自分の農業だけの問題だと考えると、ちよつとよその国の考えていることと違つて来るのじゃないか。同じ中味の、平等の価値を持つ、同じ価値の労働をできる人がやれば誰がやつてもやつた労働によつて評価される。同じ価値の労働をしたなら誰がやつても同じに支払う、そのために労働の価値評価、職務分析というようないことが行なわれているが……。

他の国では同一価値労働同一賃金はできているが、はじめからそうなつていないのじゃなくて、必要に迫られてできてきたことです。私たちが今やつていけるように、一つの仕事を取りつこととするような時代があつて、そういうような体制になつたということです。今までは日本では年功序列的なものと表現されていますが、一べんそのすじに乗つてしまえば課長、部長、重役とどんどん行ける、そういうことですが、日本はだんだんに変わりつつあるということとは昨日からも出ていますが、工業化などによつて急激に若い人たちが多く必要とするようになった、導入されるといふまでの古い人の労働ではそれが操作できないというようなことがある。その場合、誰かを早いところ訓練して、その新しい仕事のエキスパートにしなければならなくなり、やはり若い労働者を教育するということのほうが経済のうえからいつても得たということにな

つて、ますます若い人たちがふえてくる。今までは若い人たちは年功的には下積みになつていて、年をとらなければ高いところへ上がつていけないという状態でしたが、産業の新しい手としては、技術革新の中核的なところで重い責任を持ち、先頭に立つというような形になつてきました。ですからその人たちが、年をとつて余り役に立たなくなつた人よりも高い賃金を要求するという事になつてくる。使用者のほうでもそれを認めざるを得ない。そういう形から、日本では同一価値労働同一賃金ということが、若い人たちの要求という形で出てきている。ところがその人たちだつて年をとつて行きます。そういう時になつて初めて、自分たちも老令になり、いつまでも革新技術のトップに立つているものじゃないということに気がつくわけで、技術は日進月歩していますから、そういうことも出てくるかもしれません。

西欧では、職務給体制になつて同一価値労働同一賃金を認められていますが、自分が職階を上がるためには努力して新しい技術を身につけるとか、もう一つ高い職種にしようとするには非常な勉強をして、自分が高まるように能力を身につけなければならないということになつています。そこで教育とか職業訓練というようなものが大事になつてくるわけです。年をとつてから中年になつてから、子どもを育ててからもう一度教育を受け直して、自分にはまるような職について生活を異づける賃金を求めるようにするというような問題も出てくると思います。

そこで考えなくてはならないことは、それでは、義務教育以上の学校に入つたとか、またはよその国で勉強する機会があつたとかして、職階を上がる要素を持つ人はいいが、そういうチャンスを持つてない人も沢山にあつて、それではやはり不公平です。そ

れも近くに職業訓練とか教育を受ける機関がないということもありますね。また、身体が悪くて、身体障害だつたりして、職階を上がるような能力を身につけることのできない人もあるわけです。そういうふうな国民全体のことを考えなくてはなりませんね。社会保障というものはもとより、職階を上がることのできなかつたような人たちも、老令になつてから仕事をやらなくてもたべて行けるように、あるいは身体障害があつてはじめて、職階の問題どころではなく、職にすらつけない人でも、普通の人間と同じように生きて行けるようにということで始まつたことで、そういう発展過程をたどつて来たものですが、ほかの国が同一価値労働同一賃金という方向に動いている時に、われわれもそういう原則をいつも考へて行かなければならない立場にあるということです。それから老令の点については自分が職業につく、また専門職を持つていらつしやる方は、それを活かしたいと思つてもなかなかできない、これを自分だけの問題として考えることと、それから日本の国全体、社会全体の問題として、もう少し広い立場で見る見方とあるのじやないかと思うのです。広い見方で見るというのは、老令者を特殊人口視しないということです。そういう方向へ持つていかないと社会保障がつぶれるということなんです。社会保障が制度化して、老令年金とか退職年金とか、その資金の基礎は自分たちで支えていかなければならないものであるのですから、働ける人、働きたい人は、自分が老令者であるというだけで社会保障のやつかいにならないということを考えることが大切ですね。英国に例をとりますと、自分を特殊人口にしないで社会保障に協力するというのが婦人会あたりの大事な仕事になつています。社会保障の給付の最も必要なところに重点をおいて、

重点的に給付する。一方、そういう特殊人口を少なくするという形で、らせん形状に、上に上に上がつて行くのでなければ、社会保障はつぶれてしまいます。こういうことを婦人会などが考えてやっています。

重点的にやるといふのは、老令者で病氣を持っている人とか、身体障害者で身寄りがない場合などで、扶養の義務の血族のつながりが全然なくて、もともと非常に生活が困っていたというような人。また子どもを預けて生産をあげようという人のためにも保育所についてうんと強調するというような行き方です。そして自分は特殊人口にならなくてもすむという可能性のある人は、なるだけ特殊人口にならないようにして行くというようなことを、併せて考えなければならぬのではないかと思います。自分が若くありたい、自分が職業を得たいということと同時に、そういう大きい氣持を持つて行かなければならないと思います。

ここで老令のことをお出しになつた方どうぞ……。

矢野 特殊人口にならないようにということは、よくわかりますが、現在の日本では婦人の人口が非常に多い、そのためにこのままではいけばそういうことになりそうなんです。

渡辺 ちよつと待つてくださいね。私のいい方が足りなかつたのでしようか。これは婦人だけを強調しなかつたということ。男の人についても私はお話ししたと思うのですよ。男の人たちでもやはり問題は同じことで、男も、自分になるだけ特殊人口にならないように考えなければいけない。老令者についても、身体障害者についても同じことがいえますね。

田中（文子） 老令者の問題で、老令者の問題で、経済的な条件が良ければ一応解決するような、そういう受け取り方をしている私

が間違っているのかもしれませんが、それと一しよに大事なものが精神的なものだと思ふんですよ。

渡辺 その点については私も全く同感です。

田中（文子） スエーデンなどは社会保障がずい分進んでいるのに老人の自殺が多いというのも、そういうところからくるのじやないかと思うのです。

渡辺 その話は、やり出すと面白いのですが、長くなりますので。

ただ、日本の社会保障論というのが一つの問題であり、集中しがちないい例だと思ふのです。

（休憩）

渡辺 学校教育と職業の問題について、ここでは学校教育という言葉を使っておりますが、学校で私たちが受けた教育、現在学校で行なわれている教育が、職業の中でどういう役に立っているかという、広くおとりいただいていいと思うのです。また、産業の中で行なわれている教育、老令の問題の中で出ました成人として受けるべき教育、みんな含めて考えていいと思います。

それから、中学卒業、高校卒業、大学卒業、あるいは高校を出てから専門職につかれるために看護婦とか保健婦、助産婦の学校とか、いろいろのものがありますが、それも含めてとり上げて頂きたいと思います。

矢野 婦人の職業という角度からみます時に、はたして家庭教育のあり方、また学校教育のあり方がこれでいいのだろうかと疑問に思うのです。戦後、男女共学の途が開け、東大にも女子学生がどんどん入学して行ける状態になりました。ところが大部分の大学校出の女子学生についてみると、果して社会に直接貢献するような職業についているかどうか、それもまた疑問ですし、また、結婚の一つの資格として、花嫁修行的に大学へ行く。男ですとそれを一生の職業と結びつけていくのに比べて考えてしまいます。勤務年数も男子に比べてぐっと低いということなどにもそこに根があるのじゃないかと思うのです。それで学校教育というものをもう一度考え直してみたいと思うのです。

同時に、家庭における母親の考え方も考え直してみたいと思います。

小堀 私は戦後の教育を受けて来て、小、中、高校、大学まで、男

女平等に扱われて来たのですが、いざ卒業して社会に出た時、敢然とした男女の差別待遇にぶつかつたのです。就職しようとしても求人がなかつたり、たまに中小企業から来ても、面接の時に、大学出は二十才になつてゐるからすぐ結婚してやめちゃうのじやないかという質問を受けるのです。教育の面だけでは本当に男女平等に教育されて来たにもかかわらず、社会の中にはまだ差別的な考えが残つてゐることを痛切に感じます。

私は先ずおとなの教育から始めていただきたいと考えます。

佐藤 女子の教育については父親の理解を必要だと（笑声）思うのです。女性の教育に対する男性の理解の必要が母親よりもむしろ強いと思うのです。私は女学校時代英語が三度の飯より好きでして、何とか英語の勉強をしたいと思いましたが父親がどうしても上へやつてくれません。それで黙つて女子大の英文科を受け合格しましたが、それでもやつてもらえませんでした、その抑えつけられたものが、何かやりたいという気持で開拓にとび込んでしまいました。

矢野 私どもの育つ時代は、職業婦人というものを非常に低く見たのです。当時はきれいな子は玉の輿にのれるとか、女のしあわせはよき家庭を持つこと、働きのある夫を持つことだという考え方が非常に強く、美人じやないから職業婦人にでもしようか、それなら一生食いばぐれない教員にしたらよからうかというような考え方が父親にもあつたと思いますし、母親にもあつたのです。いわば蔑視の中で職業婦人として立つて来たので、このような会議に出て今昔の感を深くしているのです。

谷口 先ほど父親の理解がないと学校教育が十分できないという話

があつたのですが、経済的な問題があるのじゃないでしょうか。

経済を握っているのは父親である、そこから出て来る問題だと思ふので、これからはそういう点からも女の行き方には、経済的な裏付けのあるような進み方が必要だと感じます。

佐藤 経済力の裏付けももちろん大切ですが、むしろ理解のなさ、女に学問をさせれば却つて不幸になるという考え方が障害になつていたのじゃないかと思うのです。

古賀 先ほど学校教育が職業に生かされない悩みがあるということがあつたのですが、大学などで職業について実地に生かされる教育をしているか問題になると思うのです。いまの大学の教育実態を知りませんので、その点どうでしょうか。

小堀 科学技術の振興から、工学部とか理工系偏重になつていて、その学部ですと、ほとんど一〇〇%の就職率です。それが文学部になりますと七〇%くらい、特に女性の就職率は悪いのです。

そこで、学校教育というのは、社会に出てすぐのためにやるような人を養成するといふことが必要なのか、大きい目で見て将来非常に大切になつてくる哲学とか社会学とか文学、そういう広い意味での教養を身につけることが大切なのか、そこが問題だと思ふのです。

渡辺 みなさんのまわりの大学生の態度をどういうふうにみられるか、技術系の学生は大学の二年生か三年生ころから口がかかつているといふことですが、一般大学に行つてゐる人をどうお思いになるか、あるいは社会の役に立つてゐるかどうかといふことを、どうぞ。

天野 私の近くに二つの大学があつて、一つは経済学を、もう一つは教員養成を主目的とした大学です。二つの大学の志望者を見ますと、男女共学のものが開けた時に、経済のほうは大部分が男子、三十四人女子が入つて

いました。

一方、教員養成のほうの学芸学部では小学校志望は大部分女子で中学校教員養成のほうは男子が多かつたのです。

その就職状況をみると経済卒の人の求人男子で、女子は大学を出ても、しかたないという状況で、やむを得ず家庭で英語を教えたりしている。それで女子の入学志望者が少なくなりました。たとえ優秀な女子でも経済を出たつて雇い手がないという状態です。

一方、教員養成の大学のほうは、小学校の先生は女の人でもまあ就職はいいんです。ところが中学校では、女子専門の女子体育であるとか、家庭科とか、それから音楽、そういう方面では女子がまあ一〇〇%就職ができるのですが、英語とか国語、理科、数学になりますと、そういう教科を望んでも就職はできない。それで結局女子体育とか家庭科などに限られて、就職しているという実情です。

渡辺 特別会議員の野口さんは、何か御意見がありますか。

野口(特別会議員) 図書館に勤めておりますので、大学生ともつき合つていますが、いまの大学生の勉強のしかたを見ていますと就職してもすぐ間に合わないような勉強をしている人が割合に多いのじゃないかと思うのです。レポートが百枚で出たから、それに間に合うような本を採りに来たというように、そういうやり方をしてゐたのでは就職してから役に立たないのではないかと思ひます。就職試験で点を取る役に立つかもしれない勉強を。

古賀 いま勉強のし方が問題だといふことですが、そういう勉強をしてきた大学生を社会がどのように受けとめているかを問題にしたいと思ふのです。一般的にいわれますように、ただ卒業証書を

持つているからそれでよいお給料を出すという社会通念を打破したいですね。

渡辺 ここでもう一度、同一価値労働同一賃金ということを思い出していただきたいのです。同一価値労働同一賃金つまり職務給体制への移行、職務給、年功序列主義というか学歴主義といえますか。大学を出られたら必ずしも優秀でなくても一つのルートを次々に上がって行くということは、大学生の濫造にその原因があるのではないかと思うのです。この点について、国によつては大学生を濫造しないようにしていて、大学教育というものは高価なものだ、多額のお金のかかる教育だということを非常に強く打ち出しているのです。ですから国家が優秀な人にお金を出すことは、それだけにその人が社会をよくして行く責任を持つのだとヨーロッパでは強調されるのです。それから大学生をたくさん作るということは、ある場合には質の低下をきたすということもいえますね。大学を出れば有利な条件で雇われる、学歴さえ持つていれば上への昇れるということになると、高い内容の学問を会得したら一つ一つ職階を自分の力で上がって行くということが実際には行なわれにくくなりますね。

白土 いまの社会は指摘されたように大学を出さえすれば有望な将来が約束されるということなので、無理をしても大学を出したいという考え方が強いのです。子どもの能力の如何にかかわらず、父兄にそういう強い希望があります。就職の条件だけでなく、社会的な人材を養成するという広い気持で、大学へ入れるのはいいのです。

渡辺 大学の数が多く多くの人が大学に行けるのは幸福かもしれませんが、高い学問をしてこれを社会の幸福のために使うというこ

とになると、それは職場にいらなくてはいけないかということに一つ問題があると思います。

それからいまお話し、親として高い学問をさせてやりたいということが、学生をふやす方向に向かっていることにもなると思うのです。

ただ私が問題にしたいのは、応募文の中にかかれていた。高校にやりたいが遠くてやれないという点、農村の方はどうお考えでしょうか。

佐藤 子供の教育には関心を持つていても、学校が遠くて出してやりにくいのです。親としては経済的な基盤をそろえることが先決問題だと思つております。

子どもはまだ小学生なのですが、子どもが上の学校に行くまでの間に親としての責任上、教育の道だけは開いてやりたい、そのためには経済的な基盤だけは何としても作つてやりたいという考へてです。

水野 中学教育の中に職業訓練のようなものをおり込んでくださつたら、卒業して就職する人に多少でも役に立つのじやないかと思うのです。

白土 私のほうの学校では中学校の三年生になると就職指導という科目があつて、ある程度の職業指導をしています。中学教育の後半になると職業の問題が非常に主要にとり上げられております。田中(きり) 中学校の職業教育問題が出ましたが、それに関連して、私の地域にある、農村に留まる子どもの教育の問題を考へて

みますと、次三男は一応それぞれ自分の好きな方向に進んで然るべきだと思うのです。しかし、いく人かはやはり農村がある以上また国の経済が農業に立つていっているという場合、やはり農村を守つ

て行く子どもを養成して行きたいと思うのです。義務教育の中学校で農家に留まる子どもを養成することが望ましいのです。

もう一つ、私たちの地方は農村とはいえ市の一部で、しかし、とても辺ぴなところですよ。そして市の政策も私たちのところへは正場も誘致しないという方針になっています。広くて米作にふさわしいのでそういうことになっているのです。そうすると、どうしても農業で立つて行かなければなりません。そこで青年学級は農業中心の教育をしなければならぬのに、今年の四月からなくなりました。というのは該当する人、青年層がいなくなつて廃校するよりほかなかつたのです。教育委員に、こんなことでいいんですか、やはり誰か溜まる人があるべきじゃないのだろうか、そのために農業を主体とした教育はどうなくちゃいけないんだろいかというのを申しましたら、いま時の世の中にそういうことをいうのははやらないんだといわれましたが、政府のほうでもそういう点を何とか解決しなくちゃならないのじやないかと思うのです。

渡辺 農業の共同化、共同経営とか農村の生活水準の向上とか生産性の向上ということがいわれていますが、そのためには技術的に向上しなければならぬ。そのために農業をする人を対象とした学級があるのでしょうか、いま出ましたように農業のための学級に入気が集まらない。また、地方に高校を作つていろいろな学部を置くと、農村に作つても農業の学部には生徒がこないで、普通のほうに入つてしまふとか産業技術のほうに行つてしまふという問題があちこちに出ているようですね。

それは先ほどから出ております、農業に働くことが、生活の裏付けとして、金銭的に裏付けられないということと一緒に考えら

れないといけないのじやないでしょうか。

佐藤 青森県では酪農振興のための学校ができ、非常に優秀な学校で、女の人にもトラクターの練習をさせるし、乳牛の飼ひ方などを教育しています。

渡辺 応募者はたくさんありますか。

佐藤 はい。

渡辺 その場所にピッタリはまるものがあつて、そこを出た人が技術が持てて、仕事の中で格付けができるようになると、農村でもいい学校ができるということでしょうかね。

佐藤 そういう学校が作られたおかげで、農家はいやだといわないで、若い娘さんでも農業にとり組む人がふえています。これはたいへんうれしいことで、ほかの県でも、そういうふうによつてもらうと、農家に留ろうという人もふえてくるのじやないでしょうか。

渡辺 そういう学校を出た方が、そこでつけた技術を生かして開拓でもやろうという場合に、先ほど佐藤さんがいわれたようないろいろな問題にぶつかなければならないわけですね。その点、学校を出て畜産の高い技術を持たれたら、開拓に役立つとお考えになりますか。

谷口 その点で、私の地方には県立高校が三つあるのです。私の村から六人行つたんですが、農業専門の高校には行かないのです。

農家の長男でも農業をせずに都市のほうに出ることを考えているのです。田植えのし方とか耕うん機の使い方とか、そういう勉強をしたがらない。現在の農村の経済を見たら留まろうという気がなくなるといふのじやないかと思うのです。

田中(きり) 第一、経済的な裏付けがないのと、農基法に示され

ている大農をしようとしても土地もないのです。政府の政策をもつと力を入れて進めたら、その線にのり易く、たくさん若い人を農村に留めることができるのだらうと思います。

佐藤 酪農の場合、乳価が非常に安い。しかし頭数さえそろえば、私たちの開拓村でも成功している人はあつて、ひと月に二十万くらい収入がある。そうなるとう都会に出てヘイコラ人に使われる立場よりはいい、一つの企業として、牛が従業員で自分が工場主という立場でしょう。都会に出るばかりがしあわせじゃないということを理解してくれる人も多いわけです。精神面からも、努力さえすればやれるということで、私どもの努力をわかつてくれています。

渡辺 苦労は多いが大きな夢がある。同時に非常に大きな危険はあるがうまく行つた場合は非常に有望だといわれるのですね。

そういう意味ではほかの仕事では望めないことかもしれません。そうだけに苦労が多いわけで、ノルカノルカ、ノれた場合のことをやはり考えなければならぬということですね。

白土 農業の地域差が大きな問題で、私どもの地方では農業を希望する人が非常に少ない。県立の農業高校は伝統ある学校なんです。最近男子の生徒が非常に少ないそうです。女子は農家に嫁に行かなければならないから、基本教育として農業高校へやろうというわけです。親の考え方として、いまのような状態は子どもものさらに農業学校に男の子を、長男といえども進ませたくない。これはとりも直さず農業の実体が高等教育を受けさせてやるほど、実は報われるものじゃないということでしょう。農業の実体をよく調べて、もう少し高く評価されるように、報われるところが多いものになるように、これからなつて行つてほしいと思うのです。

前田 私の近所の農家で、たくさん子どもがいて、その中に一人特別に優秀な子どもがいます。その子が大学に入つたので、その一人のために山も田圃も低当に入れていきます。ほかの人たちがそれだけの犠牲を払つて、一人が大学を出た場合に、その一人は親や兄弟に報いる義務があるのかどうか。ほかの子どもは中学でやめてしまい、一人の子の学歴に期待をかけすぎている。そういう考え方が地方には多いと思うのです。

そしてそういう考え方が新しい生活秩序を乱していると思うのです。一人一人の子どもを大事にしていけないと思うのです。しかしそういう考え方向に合わせるような学歴偏重の社会のあり方がもつと考えられなければならないのじゃないでしょうか。仕事は社会にどれくらい役に立っているか、どれくらい値打があるかということは、決して学歴によつて決まるものじゃないでしょう。高い学費をかけたから値打ちがあるということじゃないと思うのです。何もかも売り払つてまでその子に期待をかけるというやり方ではいつまで経つても、社会秩序を育てて行くという本すじからずれていくのではないのでしょうか。

渡辺 同感ですね。一人の子どものために家畑を抵当に入れて注ぎ込む、あるいは国家がもつと複数形で、多いといつても一部の人の国民の血税を注ぎ込む、その子どもが大学を出てどれだけ社会のために役に立つか、一軒の家でも、一国家でも同じ問題です。

前田 兄弟も親もぎせいにしないですむように、社会保障で英才教育をもつとしてほしいと思います。

渡辺 社会保障といつても税金でやるわけですからね。お金をかけてもらつて大学を出た人が、私たちの生活にどれだけ貢献するかということ、国単位で見た場合といまのお話の場合とは同じ問題

だと思ひますね。

矢野 農業に自分自身がプライドを持つてすることが大事なので、それは、経営上危険があるとはいひますけれどね。いまの親の考へ方は、頭のいい子があつたら自分の家が農業であつても農業高校には入れず、そうでもない子どもは農業高校に入れる。学校でも非常に優秀な子どもが農業高校に入るといふと、先生が「君は優秀だから、それでなく、あちらへ行け」といふ。こういう考へ方がいまの日本の大部分だと思ひます。

そういうところに、農村の子どもが農業をきらう気持も生まれると思ふのです。お前は取り柄がないから百姓しなさい、兄さんは頭がいいから勉強をしなさいという考へが……。

ですから農業にプライド、あるいは楽しみを持つてということがはじめから少ない。それで農業高校を出た大部分の生徒が、やはり腰弁サラリーマンにあこがれていふことになるのでしよう。

渡辺 大学出としての価値の労働のできる人と、大学を出ないで、たとえばずっと農業だけをしていたが、農大出の人と同じように仕事ができる人があれば同一価値労働として認め、その賃金が考えられなくてはならない。学校といふものの考へ方が、学校で学問を受けたら、その学校がどの学校であらうとも、その人が社会にそれだけの貢献をしていないという評価がある場合もあり得るわけですが、日本には、大学出といふことと、また、A 大学よりB 大学が少し低い、B よりC が低いといふ格付けの問題があつて、これは一致するのじやないかと思ひますね。

田中(文子) 子を教育することは親の投資であるといふような考へ方が、口には出さないが親の心に根をすえている。それをなく

さなければということと女の子にはこれくらいいいという、男の子と、教育について差別しているのが、父親もですが母親にもそれがあつて、そのことも考へたいと思ひます。

渡辺 子どもに高い教育を受けさせたい、親としても国としてもそうですが、それが子ども自身の幸福という立場で考えられるならいいが私有物みたいに、先のために投資をしておくという御指摘がありました。これは大切な点で、投資するといふことが問題ですね。私有「物」といふ言葉で表わされるように、物として考へる危険はさけなくてはなりません。

田中(文子) いまほど農村に指導者が要求されている時はないと思ひます。ほんとうのリーダーになる人をどうして産み出すかといふことが私たちに真剣に考えなければならぬことだと思ひます。それは大学を出たからなれるものじやないでし……。

小堀 農村の問題を聞いていてよくわからなかつたのですが、農業という産業が大切であるにもかかわらずガタガタになつて来ている。これは政府も認めているようにですのに手が打たれていないと同様のようです。農村人口が、賃金労働者化して行く人と農業に留まつて行く人と、両極分解みたになつて来ているようです。そこで農業に留まる人は、本格的に、腰をすえて建て直しをしていかなければならないと思ふのですが、実状は頭の悪い子を跡取りとして農業につかせる。優秀な子どもを、長男、次男にかかわらず農業につかせなくてはならないと思ふのです。もう一つの問題は、農村が機械化されて来たといつていますが、地域差があつて、たとえば、都市近郊の農村では市場が近いので、現金収入が上がるような作物に切り替へて行くことができる。ま

た土地が広くない場合はトラクターもあまり便利でない。作物を市場に送るうえの問題もありましよう。科学の進歩といいますが、農業は曲り角に來た來たといわれていましたが、その面からもつとつと込んで考えてみたらどうでしょう。

古賀 それだけ日本の農業に力を入れて、今後日本の農業がどこまで進歩して行くか。資源も少ないのに、国や私たちが力を注ぎ込んでも、はたして日本の経済のためにプラスになるかどうかとも考えてしまします。

渡辺 いまのお話は、農基法を作る時に、政府、与党、野党の間でいろいろ問題になつた点だと思ふのですが、どつちにしる農村がある程度自然淘汰にまかせる、そして農業人口を國として決めて行く。そうしてもう少し多角経営や、生産の上がるような経営に切り換えて行くことは國として考えなければならぬことですね。小堀 働き手であるべき男の人が賃金労働者化して行くというのは仕方がない、歿された主婦や老人が、その労働を背負わなければならぬ、そこに問題があるのじゃないでしょうか。農業に本格的に取り組むのなら経営能力を身につけた、しつかりした人たちがやるべきだと思います。

島内 農業は、いつの時代でも下積みの産業だと思います。このことをみんなで考え、自分たちも考えたいと思います。

渡辺 教育の問題からそこに發展して來たわけですが、農業に基本的な計画がなかつたこと、また、私たち自身が暗中模索で、自然淘汰にまかして來たということ、つまりいい指導者がいない。いい指導者はどうすれば得られるかということで、そこで教育のことになつてくるのではないか。教育時間のかかる、むずかしい問題ですが、最後にそこを強調しておきたいと思うのです。

小学校から、中学校、女の人の場合高校に行く人が四一五くらいで、大部分が中卒で働いているわけですね。それから更に大学があり、看護婦の学校、助産婦の学校、あるいは農業の学校というような専門の学校があるわけですね。ここでは普通教育の代わりにはつきり専門教育をする。それから先ほど、社会に出てからの教育ということがありますが、国によつては、学校教育というところにそう重きを置かない。その代わりに、職業に就いてから十分にそのための教育を受けることができる。定時制があります。が、夜学に重きをおいたり、使用者と労働者との契約の中で中学出の人は必ず職業訓練を受ける学校に入れないといけないということを規定して、早く生産人口に入れて、社会保障にプラスになるような状態にしてから教育をやる。外国では文盲は、極端な國で四〇％、ふつうでも二〇％くらいありますが、職業訓練の立場から見れば日本よりずっと進んでいます。東欧の場合にも、成人教育は企業界にまかせて、文盲のまま職業教育に入れてしまふという、極端な例もあるくらいです。

ですから英国の場合は、不経済だから高等学校を持たないで、中等学校を出たら職業に就くことを雇用政策の中心としていて、七五％が義務教育の中学校を出たら職に就きます。日本では、中学校出だけでは教育が低く、学歴中心主義で差別されるから可哀そうだということになります。が、差別のない雇用体制を作つてしまえば可哀そうじゃなくなるわけです。そのところを考えて見る必要があると思うのです。中学校を出てすぐに職に就いても、最低賃金を引いておいて、ある程度の賃金を保証し、労働時間も週何時間というようにして時間的余裕を持たせる。そして契約の時に雇用者と労働者の間に約束をとりかわして、これだけの

教育を受けさせるということであれば、ひとつも可哀そうでなくなる。夜学に通うとか、産業教育の学校に行くとかして資格試験を受けて合格する、あるいは、これだけの価値の労働を全うすることができれば、中学出でも高校出でも同じ賃金を払うということができれば、中学出でも大学出以上の能力を持つていれば上がつて行けます。その場合、大学出がその職種に留まつているのが恥しくていやだということなら、職業を変えればいいわけです。そういう国では労働組合が企業内ごとという形で結成されているので、企業の外にできていますから一人一人の労働者の賃金を守つてくれます。労働組合が「この人はこの価値の労働にふさわしい賃金」ということを交渉してくれますから。そういう国と比べながら日本の問題を見るともう少しはつきりしましょう。それが必ずしもいいかどうかというとは別問題ですか。これはよその国の話ですが、日本もだんだんよその国との関係を持つようになつて来ているので、そういう方向に押しやられて行くということも考えてみる必要がありますね。

それから先ほどの畜産の問題などを考えてみますと、話は出ませんでしたが、自由化ということも頭におかなければなりませんね。賃金の問題と同じように、殊に佐藤さんのような場合、自由化の問題を考えてみますと、乳製品の価格に影響してくるということでは経済だけの問題じゃないですがやはりいろんなことを深く考えてみる必要があるのじゃないか、少し横道にそれますが、そう思います。

佐藤 乳価を上げろといひますのは、基本乳価はほんの安い値段なんです。それで基本乳価を上げてくれないかということなのですが、多分、国内で乳をしぼっている人たちの分を高くすれば

国民が買わなくなつてもうからないから、将来、外国から安い乳製品を入れるための下準備に基本乳価を上げないのじゃないかと勘ぐる向きもあります。米の場合は、米は駄目だ駄目だといつていますが、価格は安定している一方に、乳はいいからやれやれといつておきながら価格を低くおさえているわけです。せめて米なみに安定させてもらいたいですね。安心して酪農ができ、政府の酪農をやれといひかけ声も無駄にならないのです。

水野 集団就職のことで気がついたのですが、中卒がまとまつて大企業に就職した場合大企業のほうで職業訓練をしてくれますね。ところがそういう企業に吸収されないものは中学校で職業訓練をしてもらわないと社会に出た時に困るのです。

小堀 もし中学校の先生をさせられたら、私は職業訓練というよりも、今のお話のように集団就職によつて産業の中で職業訓練をしてくれるということなら、中学校までは義務教育なんですからふつうの学校教育でいいと思うんです。道徳教育がなくなつていきますから、道徳教育の取り扱い方が混乱してできないというのなら、やはり憲法や労働基準法を中学生にやつたほうが、技術的な教育をするよりもいいんじゃないかと思うのです。

矢野 私も同じような意見ですが、学校までは普通教育をなるべくして、ただ子どもたちは能力に応じて職業を選ぶ、農業であろうがどのような職業であろうが社会に貢献する道は一つであるという基本的な考え方を中学校教育で学ばせるということ。農業をしたから人間がどうだということではなくて、社会の成り立ちからみて社会に貢献すること、それは、それぞれの能力に応じて人間の持っている力を出すことであるという教育をするべきだと思うのです。

中学校での職業訓練には限界もあると思いますし、教育基本法にも規定してあると思いますので……。

柴田 たえば看護婦さんを雇う場合でも、看護婦としての基本教育を受けていて、現在勤めている病院で優秀な人であつても、病院にはそれぞれの行き方があつて、新しく入つた病院では、また一から習つて行かなければならんということもあります。やはり職場に入つて、そこになつた教育を受けるのがいいと思います。

渡辺 その場合、もちろん国としての看護婦に対する査定がありますから、そこまでは勉強しなければなりません、その資格審査が実情に即したものにすればいいという考え方がありますね。

白土 要は、その子どもに適した職業を親が選んでやる、子どもは自由に職業を選ぶでしょうが、農家の長男だから農業をしなればならないとは決まつていないので、職業を選ぶについては親の配慮が必要だと思ふのです。同じ子どもでありながら差別をするということは、教育の均等という原則が犯されるわけで、子どもとしては人権を侵されるわけですから、子どもの能力に適合した職業を選ぶ方がいいと思ふのです。

渡辺 日本ほど若い年代の人について産業教育関係のことをやつているところはないのです。学校教育法の第二章の「小学校」の十八条に、教えなければならぬ科目というのが日本では非常に細かく決められていて、その中に『日本生活に必要な衣・食・住・産業等について基礎的な理解と技能を養ふこと』とあります。産業についての基礎的な技能を養ふということは技術教育ですから、小学校からこういうことをやるというふうに法律に規定している

けです、そのところも頭に入れておかれると面白いと思うのです。

柴田 先ほど道徳教育の問題がきましたが、私ら年寄つた者から見ると、社会の秩序を育てて行くのには、道徳というものもある程度必要ではないかと思ひます。

ほかの地方にはおそろくないことだらうと思ひますが。人を雇つて田植後の草取りをしますが、手押し車で田の草をとつて行く、車の通つたあとは水が濁り、通らないところは濁らない。そこで早く草にやつてしまおうと、上がつてみて濁つていないところには石を投げて水を濁しておくというようなことをたまたま聞くのです。そういうことがあつてはやはり社会の秩序は乱れて行くので、農業をするものにも社会秩序を保つために道徳教育が必要だと思ふのです。

古賀 小学校から産業について技能を養わなくてはならないということを経営で規程することに、批判的なんです。そういうことがあるから、労働者に労働を強制するという態度が出てくるのだらうと思ふのです。

白土 見解の相違ですが、不能者でない限り生活と職業とは切れない問題ですから、これを基本的に、法律上、小学生に規定しているというところはいいのじやないか認めていいと思ひます。

中学校でも進学の生徒と就職の生徒とを区別して、進学しない生徒には就職の条件として最小限度の、中学卒業としての基礎教育として職業訓練を行なつております。職業が人間生活と切つて切れない問題である以上、当然であると思ふのです。

谷口 ただ中学校で進学する人の教育と就職する人の教育と二つに分けていふというところに疑問を持つてです。また頭が悪くても

というか、能力がなくても、自分は高等学校の普通科に行きたいという目的を持つてゐる生徒に対して、先生が「あんたは普通科受けると落ちるかわからん。農業学校に行つたらいいのじやないか」ということはコンプレックスを植えつけてしまふ。そここのころに中学校の教育の問題があるのじやないでしょうか。

渡辺 男と女の差別が学校教育の中ではほとんどないのに、職業に就いたり社会に出ると出てくるのは、父親教育の問題とかいろいろありますし、あるいは雇用について一貫した指導精神が足りないということがあつて、教育の秩序を保つためにどう具体的にやつて行つたらいいかということを中心教育についてふれてきました。

父親の教育ということはたしかに大事なことです。先日、身体障害の問題の会合があつて母親はこうしなくてはいけないということをも男の先生方も保健婦さんもいわれるのですが、父親ということでは会議の間中一度も出てこなかつたのです。それでその時、父親だつて親ですから、身体障害なんていう問題を論ずる時に父親が全然抜かれることでは困るのです。昼間は代わりがなくて出られない母親とか、教育熱心だが自分が働かなければならない立場にある母親の存在を忘れがちなすね。夜PTAをやるなら出られるということもあり、また両親が一緒に出られることもある。大変なのは先生ですが、先生が夜まで残つてPTAをやつてくださるということになると、親たちは先生の労働時間ということも考へるようになりますね。私の近くでは父親PTAをやつてゐる日曜日に、母親とは別に父親が出てこなければならぬということとなつてゐる。父親に教育が足りないからということで、それは父親対母親という考へ方です。私がいいたいのは、そういう父親対母親というふうに分かれたものでなくて、父母一緒に昼間

働いてゐる母親も出席できるようなPTAということです。どんな地域でも夜PTAをやる、ということには危険性があるでしようが、解決の方法としては、いろんな方法があろうかと思ひます。

矢野 ちよつと気にかかるのですが、先ほど教育基本法のことでも話が出ましたが、産業と職業とをどつちやに考へるとちよつと間違ふと思ひます。

さつき疑問を持たれたのは産業と職業を一緒にしてそういうふうにお考へになつたのだらうと思ひます。

職業というと、旋盤工とか、具体的狭いものになりますし、産業とは農業とか工業とかいうようなことを指しています。産業教育は、例えば将来職業人なるための職業観の確立とか心構えの精神的な面であり、中学校になりますと進学の場合にも、高校には実業コースと普通課程とありますが、実業コースに入るものは、適性テストとかペーパーテストなどで、どの方面の産業にむいてゐるかということもやり、広い意味でのそういう教育です。これははつきり分けて考へなくてはと思ひます。

小堀 PTAに、家庭の主婦も職業婦人も出られるような機会を見つけないければならぬのですが、先ほど子どもを教育するために自分は職業を退いたというお話があつた時に御主人はどうかという考へをお聞きしたかつたんですが、子どもに対する教育のし方はどうであるか、職業を持つ主婦に対する協力の度合がどの程度か、二人で育てて行こうとする熱意とか、人生計画を共にやつて行こうとしてゐるかどうかとか、そういうことを家庭教育と職業の問題とおき換えてみて話し合ひたいのですが。

谷口 私、共稼ぎをしています。三反ぐらいの農業を母がやつてお

ります。主人と私は外に出ているのですが、帰ってから夕食の支を私がやっていますと、主人も自分も早く時間がほしいので自然に手伝ってくれるようになります。(笑声)

柴田 私のところは両方とも医者で、主人は、もう点をつけるなら申し分のない亭主です。(拍手、笑声) 一〇〇〇協力的で、何かにつけて助けてくれます。子どもの教育についても、外で拾って来た問題を夕食の時に、子供も共に話し、子供からの批判も受けてそうして進めております。

渡辺 もう手放しで(笑声)。もう少し小堀さんの御提案についてみんなでやろうじやないですか。(拍手)

一つは、同じ職業についているということがお互いの理解を助けるということもありましょうし、そういう点をもう少しつつ込んで伺いましょうか。

柴田 家庭生活の面では、私が往診で帰りが遅くなると、主人が家におりますとお風呂も沸かしておいてくれたり、また電気炊飯器のスイッチも入れたり、お膳立てもしてくれまます。子供の教育は共同責任であるというような考えももっています。

古賀 職業を持つている主婦については御主人は割り合いに理解をなさっているようですが、私みたいに主婦だけ、家庭管理だけをやっている場合は、まだ亭主関白が多いと思うんです。ですが、私の場合幸いにして、理解があるというのかどうか知りませんが(笑声)、私、職場結婚をしました。女性が職場の花的存在に扱われるのがどうしてもいやだったんです。それでお茶くみとかお客さんの招待なんか一切しなかったのです。そのためにずい分圧力が加わったんですが、主人はそれを認めてくれたわけです。

(笑声)

渡辺 そこに共通のものを見出されたわけですね。

古賀 それで恋愛して結婚をしたのですが、今でも、たとえば子どもを育てるについても、おムツを取り替えてということも頼んでおりますし、御飯の片付けもほとんど手伝わってもらいます。そうして早く用事をすませて二人で勉強しようという空気になつております。

渡辺 御主人がそういうふうになられるにはどういう経過があつたのか、そういう方というのは、今の日本の一般のレベルとしてはちよつと違うわけですね。どういう教育を受けていらしたから、あなたのような婦人の望むような社会性を身につけられたのか、どうお思いになりますか。

古賀 戦前の教育は受けておりますが、経済的には比較的恵まれな環境に育ちました。母子世帯で育ち、小さい時から、母親が仕事を持っておりましてから、必然的に家事にも協力してきたわけです。そういうところから、女性に対する理解は深まつて行つたんだらうと思つておりますが。

清水 男性は、自分の妻や家庭には理解を持つけれども、ほかの家庭に対しての理解ということはどうかしら。

古賀 自分では私の家庭は正常だと信じているのですが、社会の日は必ずしも正常だとは見てくれません。たとえば、私を、主婦としては立派な主婦でないという評価をされる場合があるのですが、それに左右されずに我が道を行くで進めて行きます。そうすると私が勉強していることを認めてくださる方がどこからともなく出てきます。そういう方とまた手をつないで、そういう空気のないところに話しかけて行こうと思つております。

白土 主婦全体の立場からみますと、私たちは、職場といつても変

わつたケースで、二人とも労働運動をしておりました。同じ主義思想ということで理解があるのです。これはオノロケではございません。(笑声)

それで、私自身も対外的な仕事をしていますので、家庭的には絶えず家を空けたりしますが、私は人にとやかくいわれたくないという気持が強いのです。学校に行くようになってからは、子どもに「おかあちゃんはどうして何でも自分でやるの」ときかれるくらいに一人で何もかもやつてきました。それで今まで波風も立ちませんが、主人は、理解してくれておりますけれども協力はしていません、というよりされたくない。今の若い方から見ますと古い考え方も知れませんが、自分が、働きたいという意欲が強く、他人の倍くらい働いて、家のことは全部しております。

谷口 私は、そういう考えは持っていないのです。

渡辺 教育の問題からそれとお考えになるかもしれませんが、広いものの考え方という点で非常に面白い問題だと思いますのでこのまま続けさせていただきます。

谷口 私は、私の仕事を捨てがたいということを強く考えております。そしてそれをするためには家庭と仕事を両立させて行かなければならない。それでどうしても時々お互いに話し合いをすることまでしてわかつたらそういうふうにするということ、納得の行くまで何回でもやります。

渡辺 少し方向を変えて、白土さんのことも頭に入れて、農家の主婦の場合、やはり共稼ぎですから。家庭生活そのものが即職業になるわけですから、そういう生活の中での御主人のお話をどうぞ。

武田 私たちは、無学な者同士まづしい百姓をやっているのです。ふつうの仲人結婚ですが、私の村では、まあ人に羨しがられる家

庭です。(拍手、笑声) 主人は不幸な中に育ち、私はわりに恵まれた育ちでして、いきなりその家庭の主婦という立場に追い込まれて、相当苦しいこともありました。でも、主人はよく理解してくれて、はたの家庭ではして貰えないような協力をしてしてくれております。

佐藤 父親がさつきお話ししたように頑固で、母が非常に苦労しましたので、母の立場を可哀そうだと思つと同時に、自分の配偶者は心の優しい人をと子どもの時からそればかり思つていました。

(笑声) それで、何かの本や、偉い人の書いたものを読みまして動物を飼っている人は気持が優しくて悪い人はいないということを知つて、本当にそうだろうかと思つて、青森まで行つてよく見てみますと(爆笑)、牛を飼うにはやはり平らな気持の人でなければ駄目だそうで、牛を一生懸命飼っているんだから悪い人間じゃないやなさそう、それで結婚してみますとやはり期待はずれではありませんでした(爆笑)。私、無器用で子どもの離乳の時なんか離乳食は主人がやつてくれました。だから子どもは主人が三分の二くらい育ててくれましたようなものです(笑声)。

ですが、開拓という激しい、切り開いて行かなければならない職業に女が入つて行く場合、優しいだんなさまばかり要求しているわけにはいきません。農地問題で、県庁に行く必要があつても私が行くということもあります。

一般論としても、果たして家庭で主人として優しくて理解があるだけではと疑問なんです。(笑声)

田中(文子) 私も共働きの期間があつて、今は家庭に入つておりますが、夫が最大限に自分の持つてゐる力を出し切る一番いいコ

ンデイションに家庭をおくのが私のつとめだという考え方に変わって来ております。私は主人と尊敬しあい愛しあつておりますので、（笑声）自分の好きなことをさしてもらつています。社会的活動で家の外でせんならんようなことにも関係していますので、その点大分不満もあつたと思いますが、よく出してきておりまして。そういうふうな十年も経ちましたが、この会議に出るために家をあげるといふ時は、精神の安定が一番ほしい時に出て行かれるのは困るなといわれまして、これまで何の役にも立つていなかったように思ひますが、（笑声）なつていたのだなと思ひました。でもよく出してくれまして、ありがたく思つております。一週間も留守にしていって、その間どうにか一人でやつていたのでしようが、共働きの時の心構えが、今はさつきお話に出たように、同権だからオムツもやつてもらふ、なんぼやつてもらつてもいいと若い人は思つておられるかも知れませんが、私は今では本当に、家庭は悪いの場にしてあげたいという気持ちがあります。亭主閑白という言葉は悪いけれども、そういう安らぎのムードのある家庭というものにしたいという気持ちがあります……。

渡辺 佐藤さん一人で見にいらしたのですか、遠い青森まで（笑声）佐藤 いえ、私、学校に行けなかつたので、本当に女は昔から圧迫されて、どうしていたかと思つて、少し女性史を勉強しました。その結果、私みたいなのは何か建設的な仕事をやつてみたらと思ひ、開拓でもやつてみようと思ひました。ちやうど友だちが開拓地の学校の先生でして、一べん見にいらつしやいというので行つたのです。わざわざ亭主を見に行つたわけではありません（笑声）。古賀 男性の安定感とか休息が、何にもせずにおうちで寝ているだ

けでも休息になるかもしれませんが

田中（文子） 私もそんなことは思つておりませんです。

古賀 私の場合は食事の用意とか洗濯とか、そういう労働を高く評価していません。家庭管理というものは高く評価しますが、家事的なことを早く片づけて、後で私と話し合う、そういうことが主人にとつて安定剤であり労働力の再生産になつていると、私たちの生活はそうなつているので、そういうことで御理解願ひたいと思ひます。

谷口 田中さんの御意見ももつともだと思ひますが、それは主婦が家にいる場合にいえることじやないかと思うのです。私たちのような場合は、たしかに昔の封建時代の家というものはなくなつて家庭中心、夫婦中心になつて来ていますが、家の中の仕事もある程度負担し合わないと、私自身があくる日の勤務に疲労をもつて出るようなことが出てくるから、自然に負担するようになってきます。

渡辺 年代的にも田中さんと古賀さん、谷口さんは違ひますし、子どもさんが小さい時と、大きくなつて自分で何でもできるというのでも違ひますね。谷口さんのように現在職業を持つていらつしやる方と、それを通りすぎてしまつた方、それぞれ、安らぎというのが違うかもしれませんし、また家庭というものはそれぞれ個人差があるので、そこにまたよさがあります。古賀さんのような行き方も、白土さんのような、あるいは谷口さんのような行き方、また田中さん、佐藤さん、行き方というものはそれぞれ尊いもので、それぞれの個人差があるわけですね。その個人差のある家庭を大事に保つて行けるような社会をつくるということですね。

私の場合は、主人は半分日本人で半分フインランド人です。そ

ういう結婚をしたということは、私自身ずっと社会で働きたいということをや非常に思っておりましたから、そういう結婚をすることによつて社会的活動ができるだろう、そういう社会的活動がしたかつたわけです。それは、結婚したために憲兵隊に引つ張られたり、戦争中でしたから、いろんなことがありましたが、自分の主義を貫徹するためには大事にするべきものがあつて、そのために憲兵隊に呼ばれるというような極端なこともありました。私にもちよつとオノロケをいわせて下さいな（笑声）。ですから家庭生活は共稼ぎですが、割合に、位にしておきましようね（笑声）、よく行つてゐるほうじやないかと思ひます。

ですから一つ一つ違ふ家庭を大事に保つて行くということが大切じやないかと思うのです。

いかがですか、小堀さん、少しは参考になりましたでしょうか、いいお相手をおみつけないのに（笑声）。

小堀 大いに参考になりました（笑声）。

渡辺 それではここで、オブザーバーの方たちの御意見を伺ひましよう。

豊島（特別オブザーバー全労） 私は繊維産業の労働組合の出身です。繊維産業というのは男子は、高校、大学卒で、出世コース、職制コースを前提として入つて来ます。一方女子は現場労働者で、七〇〜八〇％は中卒なんです。中学卒の人たちが社会的な人間に高まつて行くために、中等教育までは一般教育、人間を高めるための教育を学校ではしていただいたほうがいいと考えます。職業教育というのは、私たちが好むと好まざるとにかかわらず、企業がその利潤を高めるために教育するわけなんです。だから職業教育なんかは学校が考えなくても産業自体が考えるべきです。学校では男女が

お互いに人間として認め合うというための、人間形成のための教育をするべきでないかと思ひます。

もう一つ、中学を卒業して産業に入つた若い人たちの教育は、一体誰がするかという問題を考えなければならぬと思うのです。現在では、企業に任されているものとか、国や市町村で、いわゆる成人学校としてやつているものもあるのですが、企業に任せては企業に利益になるような、企業に奉仕するような内容のものになるけんが強いのです。そうでなくて、どこに放り出しても立派に独り立ちして行くだけの力を持つてゐるような社会教育を真剣に考えるべきではないかと思ひます。

八木（特別オブザーバー 銀行員）

学校教育のことですが、中学卒、高

校卒、大学卒ということが学歴となつて就職に関係するということとがいろいろ問題になつておりますが、本来はやはり、大学は就職のための学校であつてはならないと思うのです。大学出てからすぐ役に立つというようなことも必要かもしれませんが、私は教育というものはすぐ直接に現われなくても、大きな意味で後になつて役に立つ、大きくみんなのために役に立つような人間にするようにするのが教育ではないかと思ひます。

それから、共稼ぎのことが出ていますが、私の職場は同年令の人があと三人ほどいますが、結婚しても働きたいと考えている人はいないんです。やはりみんな家庭に入るといふ考え方です。私自身も、自分のためになることなら外に出てやりたいけれども、働くということには何かひつかかるものがあるんです。

野口（特別オブザーバー 総評）

今の職場の現状の中で雇用体制というのは、賃金についても地位についても、学歴中心主義が実態ではないかと思ひます。それで世の親たちは、子どもをしあわせに

するためには、せいで負つても高度の教育をしようということに、いろいろな無理が出るのじやないかと思ひます。学校へ行くだけが教育、という考え方は改めて行かなければならぬのじやないか、そして本人に、それぞれ独自の環境に向く技能を見出し、伸ばして行くという教育があれば、必ずしも学校へやるばかりが能じやないでしょう。社会通念からいう高度の教育というものに對する考え方を變えて行かなければ、うまく行かないんじやないでしょうか。先日、ある小学校の生徒の作文を読みました、將來何になりたいかという問いに對して、小学校三年生のパン屋の子どもは、どういふうにパンをおいしく焼くか考へてパン屋になりたいのです。みんなそれぞれ自分のうちの職業によつてしあわせになる方向を見つけて行くんだという考え方に今の子は變つて來てゐるということも、捨てがたいものがあろうと思ひます。昔とちがつて今の子どもは世の中のために貢獻をしたいといふうに變つて來てゐる。世相の流れといひますか、そういうところを私たちは十分身にしてみても考えなくちやならないと思ひます。本當の子供のしあわせは、無理にでも高い教育を受けさせるところにあるのかどうかということも考えなきやならないし、主人教育の問題では、奥さんたるものは、主人一人くらいは自己と協力のできるようなありかたを作らなければ、リーダーとしての資格にもかけるんじやないかと思うのです。仲間作りでも、先ず自分の隣りの人を自分の協力者にしようという行き方で仲間を作り、問題の解決に當つておる現状です。

森谷（特別會議員） 私は看護婦です。看護婦は現在非常に不足でこのままでは十分な良い看護ができなくなるというおそれを感じてゐます。そういう点で、お願いのようなことをちよつとお話し

することになります。

これは広い意味での教育ということになると思ひますが、現在のように産業が急速に発達してきますと、新卒者が景氣のいい産業のほうに吸ひ取られて行く。もちろん看護婦という仕事は社会の人から認められていない、仕事自身が魅力がないということでは私たち現職者の責任ともいえますが、やはりみなさんの理解がなかつたらどうしても向上して行かないように思ひます。たとえば病院の中に、病人の母親についてきてゐる子どもがいつばいて、そこら辺を走り回つてゐる。そして、母親が診断を受けてゐる間、私たちとしては、患者でないその子どもたちのめんどうをみるために手をとられてしまふことが非常に多いのです。そこで病院に子どもの一時期預かり所を作つてくれと頼んでゐるのですが、それも求人難でむすかしいのです。一般の方がそのことを強く望まれば、もう少し早く実現できるのじやないかと思ひます。他力本願みたいですが、そういうことを感じたりします。

それから、職業の内容を高めるということと組合が活動をしますが、どうも看護婦の母親たちの組合運動に對する考え方が問題のようです。高校教育の中では相當に、労働組合や、その活動に對しての理解を身につけて來るのですが、三年間の看護教育と、家庭の両親の考え方の影響でか、就職すると組合に對して理解はしてゐるが、自分で実行に移そうとしない。組合に入つて、病院の医療内容を高めるためには、働く者の内容を高めるといふことが大事な問題なのです。から組合運動に對する理解を持つていたいただきたいのです。

それから老令化現象は職業の問題にも關係があります。私満十年ですが、今までのような年功序列型のうゑに安住してはおれな

いと思つています。先ほど教師の方が後進に道を譲つて、自分は閑職になるというような意味のことをいわれましたが、たくさんの方が職業についている場合、閑職の人が多くなるということが出てこないか。新しい秩序というのを考える場合に、年功序列の上に安住してはいけないということ、殊に看護婦の場合はレベル全体を上げて行くということを先ず考えないといけないと思つてゐるのです。

私は旧制の看護婦ですから、三年間の教育を受けていないわけですが、大分前から上司から婦長試験を受けるようにいわれてゐるのです。しかしよく考えてみると、旧制の看護婦だから試験を受けて婦長になるということも考えられますが、三年間の専門教育を受けてくる人たちの道を閉ざすことになりはしないか。学生相手の仕事ですから婦長試験を受けてはということなんですが、そういう変化して行く職場の中で、自分なりに対応して行こうと思つて、試験は受けない主義なんです。

野口（特別会議員） 私、図書館で主任をしています。私の下には大学を出た男の人が二人います。六つも年上の女で大学を出てバリバリの男の上に立つということとは非常にむずかしいことなんです。発令されれば、自分にはそれだけ十分な能力がないとわかつていても、それなりに仕事をしに行かなければいけませんし、それに後に続く女の人のことを考えると無駄じやないと思つて引き受けています。常に役に続く人のことも考えて、自分一人は婦長にならないというのじやなくて、ほかにもそういう立場の人があれば、深谷さんが婦長になられたということ、かえつて後進の、旧制の人たちに道を開くことになるのではないでしようか。

それから指導者を求めたいということが度々出ました。人に頼

りたい、指導者がほしいという考え方は、一つ間違ふとわけのわからない、思いもしなかつたようなところに引つ張られるという危険があるのじやないかと感じます。指導者というよりも、自分たちの仲間で話し合つて、そして一つのことを解決して行くというふうにならなくてはいけないのではないでしようか。私十三年余り勤めている間いつもそのようにやつてきました。指導者がなくても仲間があれば解決できるし道が開けるのじやないかと思つています。指導者がほしいという気持はわかるのですが、ほしくても口にも出さないでがんばつて来た者のことも考えてみていただいて開拓地の佐藤さんのような、地区で、それぞれの指導者にみなさんがなつていただきたいと感じます。

渡辺 先進国の人たちの場合は、指導者はなくてやつたのですね。

自分たちで何でも新しいことをやつてみて、それをだんだんに法制化して制度を作つてきた。社会保障制度ができた国、農業について補助制度ができた国を見ますと、その最初に必ず佐藤さんのような方とか、古賀さんのような方、白土さん、谷口さん、田中さんのような方、それぞれみられます。つまり自分たちでやつてみてできた、自分に主体のある民主主義なんですね。野口さんは司書という、女の仕事として新しい開拓的な面に働いておられますから、その点では先進国の指導者たちと同じような苦しみを御自身でやつておられるので、よそからバツと入つて来たような変な指導者はほしくないとわれ、実際の経験に即してその中から解決の方向を見出して行きたいという気持を強く持つておられます。先進国はバイオニアたちが失敗を重ねてその中から覚えて行く、その覚えて行つたことの中から最大公約数を見出して制度を作つた、そういう点で野口さんのいわれたことは面白いことだと思ひ

ます。

柴田 たしかにある程度教育を受けた方の間では話し合いによつても解決がつきましようが、その日の生活に追われているようなものたち、教育を求めようとしなない場合は、共同作業に持つて行くためには指導者がなかつたらできないのです。

野口(特別会議員) 私は地域でも作問作りの仕事をやつております。特にインテリでもなく、家は鉄筋アパートでも、いつてみれば百軒長屋のおかみさんで、そういう気持で近所とおつき合ひをしていますし、うちの住宅には市場の漬物屋の奥さんからお医者さままで、いろんな人がいますが、だれも指導者意識を持たないし、おかみさんという共通点だけで話し合ひもできます。その話し合ひの中から問題を解決しようというようにしています。指導者意識を持つほうが、地域の活動に何かバツと花が咲きますが、経験からみますと、その人がいなくなると花がしぼんでしまう。うまく行つていゝるようでも一人の人がいなくなればもう駄目なんです。指導者というものはとび抜けた人じやなくて、手をつないで一歩一歩引つ張つて行くような水先案内人みたいな人が必要だとは思ひます。

古賀 教育のない人もある人も、集約すれば自分の生存権を主張しつづけることになると思うのです。それを主張して行くことが社会保障制度を拡充することにもなり、住みよい社会が実現するのじやないかと信じております。

渡辺 可哀そうなのは、あ者とか身体障害者で、障害年金とか、あ者の教育にお金を出してほしいとかいう訴えは持つていても、それを訴える方法がないということもあります。そういうこともオビニオンリーダーの忘れてはならない役目じやないかと思うのです。自分たち自身の声を社会に訴えることも大切ですが、そう

いう人たちを含めての社会だということを忘れてはならないと思うのです。

ではここで、まとめの前に二つほど傍聴の方から出ておりますので、一つは、大分の矢野さんへの質問です。

『今年から実施されている中学校の技術家庭科について、以前は男女全部同じではありましたが、男女共通必須の部分もあり、男子にも家庭生活に関するもの、女子も生産に関するものの学習がなされましたが、今度の改訂は始めから男女別の内容が出され、男子は生産技術、女子は家庭技術という行き方のよりに思うので、御意見を伺いたい』というものです。

矢野 御質問の要点は、改正指導要領の改正前は男女平等という新しい憲法の精神にのつとつて男子も家庭になう教育をされていゝたものが、改訂によつて男子は生産方面に、女子は家庭へ帰れというような、そういう傾向もあるのじやないかというふうにとれたのですが、私も、現在中学校の現場ではありませんが、一種の疑ひは持つております。

しかし私は、指導に当たる教師が、指導要領にはそのようにありますが、その根本は民主主義、基本的人権を大切にすること、たてまえに立つて教育してほしいと思うのです。

渡辺 つけ加えていゝえば、今の中等学校の職科課程、指導者の問題にまた返つてきますが、全職科を一人で教えられるということは無理で、例えば家事専門の先生が裁縫のほかに大工の仕事や電気とか、算数のような理科学の基礎的なことまで受け持つのは、非常に無理だというようなことを認めていられます。今度、指導要領が変更になると、受け持ちの先生が持たれるようになる。ところが文部省のかたが変わるとまた変わつてくるというわけで、英語

の先生が職科を持つようになる。今のような行き方で行く限りはそういうことになるわけですね。そこに無理があるのじやないかと思ひます。

私は、中等教育の大基本方針をしつかりつかむまでは、あまりいじくらないほうがいいと思うのです。八年間に五度も指導要綱が変わるのでは、教師も学校もまごつくでしょう。変化して行く社会に早く適応させたいという気持は誰にでもあります。少し体制を整えるということを考えてやらないと無理があるように思つております。

次の質問は

『小どもの教育からある程度解放され、経済的な面からと自分の向上のためにも、中年後の婦人の職業の分野や職種を広げてほしいという話がありましたが、中年後の意欲的な婦人にはまだまだ門がせまいので、これに対する方向づけ、考え方をうかがいたい』というものです。

古賀 中年婦人が条件のよい仕事につくには新しい技術を覚える必要があると私もそう思ひます。それには職業指導所などの機関がたくさんありますが、家庭に入りこんでしまつている主婦の利用しやすいような機関が非常に少ないと思ひます。行政的措置を要求しなければいけない。主婦でも、いつでも、誰にでも活用できるようなものを……。

渡辺 全く同感ですね。現在通信教育が非常に盛んになつてきていますが、主婦で通信教育を受けている人が非常にふえているという事も伺つています。技術を覚えるには実地訓練が併行して必要になるので、通信教育が解決であるとは思つておりませんが……。

水野 今のお話は頭脳労働の場合に重点がおかれているようですが

北海道の場合は肉体労働、とても労働力が不足していて、9年層はずい分農業労働者として働いています。結局労働力の不足で男子の分をカバーしてその分野で働いているのです。

渡辺 その場合の条件をついでにおつしやつて下さいませうか。

水野 男の場合は、常用労働者の形になりますが、女の場合は季節労働者として使われるわけです。失業保険などもそれが女の場合は六ヶ月以上雇つてくれないので、もらえないのです。

渡辺 季節労働というのは、ホップをつむとか、その季節だけに必要な労働ということなのでしょううか。

水野 それもありますし、建設に従事もあります。北海道開発で建設のほうはさかんで、そこでの炊事とか雑役に中年層婦人が出回つてとして出て行くのです。そのほか農業、林業、漁業といったような第一次産業にも従事しています。

渡辺 学校教育と雇用の関係ですが、学校教育法、教育基本法、それから憲法の条文は、人類普通の原理に基づいて作られたものです。人類普通というからには、誰と誰との間にも、男と女の間にも、総評と全労の間にも、政党の違いの中にも普遍制を持つ、対立するものがあつたらそれは原理じやなくてほかの問題だ、それが民主主義の原則、社会機構ないしは教育の根本にある原則だ、ということになつてゐるのですが、よその国と比較してみた場合に、私たちがそういう憲法を確立しておりながら実際の生活にそれを生かす方法がたてられていないということが、いろいろな意味で部分的な、群盲象をなでる、というようになつてゐるのじやないかと思ひます。ですから、よその例をとつて、教育から雇用へもつて行く関係がいい例だと思ひます。

英国の教育法は一九四四年、第二次大戦後にできたもので、例

の、ゆりかごから墓場まで」というもので過去にあつたものを整理して国民全般に広まるように作つたものです。あの時に教育と云ふことと、職業、雇用といつてもいいですが、これと社会保障との三つの政策を一本化してしまい、それによつてわり出した教育法を作つたのです。ですから日本の教育法と英国の場合を比べようとすると、間違いが起こつてくると思います。英国の場合は雇用との関連、社会保障との関連において作られたものであつて、教育だけ切り離して考えるところに一つの問題が出てくるのじやないでしょうか。

そこで英国の教育法を見ますと面白いのですが、先ほど日本の小学校の教育法にみたような、どういう学科を教えなくてはいいかという規程はないのです。必須科目としてあるのは宗教だけです。その宗教の取り上げ方が、仏教、キリスト教、ユダヤ教、カソリック、プロテスタントというようなしばり方をしない。信教の自由を認めていて、公立の学校でも宗教は必須となつていません。それでは、宗教を持つということはどういうことを意味するかといえますと、教育の基は、人類に普遍的な善や、正義、正しさとか、真理を求めて行く方法だというふうに、小学校の始めから教えてしまうわけです。人間社会では政党の対立があつたり、男と女の間の差別があつたり、その中で普遍性のあるものを求めて行くということはできませんから、人間が到達できるかできないかもしれませんが、神とか絶対の真理とかいうところに目標をおいてしまう。そして教育というものはそれに向かつて、みんなが人類普遍的なものを求めて行く努力の過程だというふうにするわけです。民主主義というものが個人の権利とか自由を認めながらも一つの秩序を保つには、神の絶対の真理を求めて行く体制が

必要だということ、一つの秩序ができて行く、こういうふうを考えるわけです。それで、宗教で神というものを認めるとしたら、たとえば神だけが全能で完全だという見方をしますと、人間の姿はすべて相対だというふうに考えられる。そこからどういふ考えが教育の中に出てくるかといいますと、学校で教えるものは絶対なものはない、人間の知識は相対的なもので、相対的なものを習うのだ、つまり、学校というところはきまつたものを習うところだというふうに考えないのです。学び方を学ぶところだ、先生であつても絶対なものはいない、絶対なのは神なんだというふうに教え込んでしまうわけです。ですから学校で教育を受けて卒業した場合、それだけの学問をその人が受けたという絶対的な保証にはならない。学校で勉強していろんなことを身につけたかもしれないが、それはものの学び方を学んだだけであつて、その人が将来ほかの場所におかれた場合、家庭の主婦、職場、労働組合、開拓村、いろんなところにおかれた場合、自分の習つただけのことを役立たせることができるような、その場所から人類普遍的なものを見上げて行くことができるような、それを第一に考えるわけです。一番大事なことはそのことで、そのことさえつかんでしまえばほかのことはむしろ充足的に、あとから続いて出てくることだというふうに考えるわけで、そういうところに例えば人間の平等観とか、教育を職場で受けようと家庭で受けようと就職して受けようと、学校の中で受けようと、学び方を学ぶというところであれば差別がないという体制ができるのです。

それでは具体的に、小学校や中学校でどういふ教育の方法でやるかという、一番簡単なものは、ハウス制度、日本の場合は小学校ですと一年生は一年生だけ、二年生は二年生だけで授業をする

のが普通の方法ですが、英国では学校全体の学年をたて割りにして四つなり五つなりの共同体社会を作る。一つの共同体の中に一年生から六年生までいて、おとなの社会のひな型を学校の中に作る。英国では五才から教育が始まりますから五才の子どももいれは十一才の子どももいる。この中で長に当たるキャプテン・ハウスの一番上の人、委員長とか副委員長とかを選挙で決めさせる。

その場合五才や六才はまだ無理なので選挙権がない。七才以上からやる。そういうふうにして子どもにも、子ども同士の問題は自分の社会の問題として考えなくちゃいけないが、十分にわからない子どもには選挙権を持たせないということをやめるわけです。そういう形を作つてその中で社会教育をやる。ハウス同士でも話し合いもし、競争をするときでも、例えばAハウスの中に算数の非常によくできる人がいて百点をとる、そうするとA組は一点を加えらるというやり方。またBハウスの中に英語のよくできる人がいればB組は一点とる。こういうふうにして得点を競争をする。しかし、それは勉強のできる人に限らない。勉強は大変に不得意だがスポーツならよくできる、椅子を運ぶことをよくやつて、その子どもがいるために整頓がよくできるというようであれば、それに対して一点を加える。勉強と学力奉仕ということを区別しないで、どちらも一点というような数え方をするわけです。また身体障害のある子どもが、やりたい気持はあつても十分できない場合その子どもが人の三倍くらいの苦勞をしてほかの人が一日でやることを三日かかつてもやり上げたとなると、大変よくできたといふのでその組の得点になるというふうにです。

そんなふうにして社会全体の中で、それぞれ違つた立場を持つた人、違つた能力とか違つた環境とか違つた才能を持つ人たちが、

みんなこのAならAというハウス社会のために一生懸命やればプラスになることができる、得点としてはA組として共通なんだ、そういう教育をやるわけです。それが基になり職場で雇用の格付けをした場合に、同一価値労働同一賃金の原則を認めた職務給がうまくやつて行ける。全部が全部必ずしもうまく行つてはいるわけではありませんし中には失敗もあり、いろんな苦勞もありますが、とにかくそういう方法をやつてゐる。これが日本と比べられる一つの点だと思ひます。

それから、中学でのコースをわけるといふ職科の課程にしても、どういふ教育を中学校に施すかということによつて、先に行つての効果が違つてくると思うのです。女の子だから裁縫、洗濯、家事、男の子には産業の旋盤だとか電気とかに重きをおくというわけ方の方式については、ヨーロッパの学校もそうですが、中学校を三つに区分けをする。一つは実業学校で十五才で義務教育を終えて社会に出る人を主眼にしている。もう一つは大学に行くとか、あるいは大企業の中で高い学問を要求される人を主眼にする。他の一つは技術者教育、技術者の卵を養成する、という区分です。高等学校はお金がかかるから不経済だといふので持たない。それで中等学校から高等学校へ行くための受験勉強もないし、高等学校は先生も建物も大変ですから無い、大学に入る、あるいは高い職階の試験を受けたい人だけは一年とか二年とか残るわけです。そして試験を受ける。ある人は早く受けて一年ですむ、ある人は二年も三年もかかる。またある人は残らないで十五才の義務教育を終えると職業に就く。ただし先ほどもいいましたように、上の学校へ行く人は、国の経済と見合せてできる範囲だけをやるというところで、大学生の数は非常に少ないのです。七五〇の人が中

学校を出てすぐ職業につく。七五〇という大部分の国民が中学校卒だけで、日本のような学歴中心主義ではありませんからちつとも可哀そうじゃない。この人たちは職業についてからいろいろ教育を受ける機会がある。使用者との協定などによつてそういうことができる。

国家としても、雇用政策の中心を中学に置くという形をとっているわけです。なぜかという中卒で職業に就く人が七五〇と大部分であれば、自然と中卒に中心を置いて、職業についてからの保護が十分に行なわれるようにするからです。で、具体的には中卒を中心にして最低賃金制をひくということになつてきますし、職業についてから横道にそれたり不良になつたりしないような教育を十分にして、職階を上げて行くことができるように、大学を出た人と同じような教育を受けられるという指導をするわけです。そういうようにすると専門職は専門職として確立され、格付けされてくるという形になつてきます。

この制度にももちろん問題点はあるわけで、殊に中等学校を三つに分けるということは大きな問題を持つているわけです。大学コースには誰でも行きたいという気持を持つし、そのコースに子どもを入れたいという要望もはげしく起りますし、階級的な者からの伝統で、大学に行くという考えを持つ人もあるわけで、問題はどの国でもそう単純だとは思いません。けれども、とにかくそういうふうにして一つの人類普遍的なものをいつでも認めるという形で、民主主義は集団保障ということでもつて、自分たちが自発的に始めたことを守りながら行くということが一つの秩序になつていきます。それが日本に移し得るかどうかということは問題ですが、よその国はそういう伝統を通過つて来たのです。

新しい秩序ということを経済の秩序として考えてみれば、やはり、日本の教育体制から職業体制というものを通して一本に定めることのできる、民主主義の一つのすじを持たなくてはならないと痛切に感じます。それをどういう方法によつて求めるか、憲法は、人類普遍の原理とうたつているのですから、それをどういう形で求めて行つたらいいか。宗教という方法もありますが、ただ宗教を持つている人は、宗教を持つが故の狭さということが往々にしてあるので、イギリスなどの場合でも、宗教を持つということとが大きな障害になることもあるのです。宗教を持つということとが人類普遍のものを求めて行くということなのに、逆に宗教にこり固まつて、ほかの人の宗教の立場を理解しないということもあるわけです。結局始めは欧州の社会では、バイオニアとなつてきた人たちが、多くの場合宗教をひつかかりとして人類普遍的な人間が到達できないかもしれないが、絶対的な善とか正義というようなものをそこにおくことによつて、ここまで引つ張つて来たということがいえるのではないかと考えます。

よその国の話ばかりで、私自身としてははなはだ満足ではないのですが、これを私たちの行き方の参考として、私たちの途を見出して行くことですね。そうでないと、なかなか社会性ができないので、男が女の立場を、労働者が使用者の立場を中学卒の人が大学卒の立場を、あるいは農村が都市のことを考えるといつても、何かそこところの一つの基準になるとつかかりがあつて、お互いに共通するものがないと空論に終わつてしまふのではないでしょう。形だけは民主的な憲法を持つても、弱肉強食的な、自分の立場だけから考え出した空論で、空まわりする危険性があるのではないかというふうに見えるのです。

(閉会)

移動会議報告

四月十三日

司会 今日午前中は日本の国内を、午後は世界各地の国を巡っていらして、まことにジェット機時代にふさわしい移動会議だったと思います。午前中の報告からうかがうことにいたします。

それでは午前中、第一班の千葉県の田村文子さん、ご報告願います。

田村 日立製作所亀井戸工場にまいりましたが、そこへん全部がリアンという音がしているのです。大工場に来たんだということがぼつときました。先ず技術課長さんから工場の歴史の説明があり、お茶をいただいてから工場見学ということになりました。第一に入りましたところは小型のモーターを作っているところで、流れ作業でゆつくり動いているけれども、それで生産が相当あがつているというお話でした。頭の上をクレーンというのが通つていて、あれがなんだかこわいような感じがしたのですが、オートメですから持ち上げるのも取るのもそれでやるようです。次に入りましたのは小型のモーターの十倍の力をもつモーターをつくる場所でした。そこはオートメではなかつたのです。そのクレーンがものすごくこわい、ああいう工場に働いている男の方たち慣れているでしょうが、ちよつと間違えば大変なことでしよう。どんなに神経つかつているかしらと考えながらそこを出ました。三番目の場所は電話機を作つておりました。そこもオートメーションではありません。たくさん、型やなにか説明していただきました。オートメーションなどはわたくしは百姓ですから全然わからない、オートメーションはこんなものかなということで見て来たわけですよ。一つ感じましたのはその機械にびつくりするより、そこで働いている男の方がどれだけ神経つかうかということがよくわかつて、家で喧嘩すればけがするといいますが、ほんとうだと思いま

した。同時に百姓はとても楽な仕事だと思いました。家庭生活というものを考えて、主人が帰つてきた時にやつぱりサービスしてもまだ足りないといつくづく考えました。

司会 大変いいところをお感じになつたと思います。続いて二班、石神井に行かれました小枝ひで子さんをお願いします。

小枝 わたくしは石神井の清掃工場にまいりました。まず感じましたのは全国会議に出席いたしました三日目を迎えましたので、みなさん赤裸々に少女時代にかえつたように、バスの中ものすごく賑やかで、お国自慢やらリバイバルが飛び出してたのしうございしました。一時間半ばかりで清掃工場に着きましたが、驚いたことにはさすが東洋一だけあつて、地上四階、地下一階のすてきな工場です。清掃工場といえばきかないと思われましたが、全然そういうきたなさを感じない。かえつて清潔さを感じたのです。またそういう工場へ近所から苦情が出るという心配も考えられませんが、かえつてあくたを焼いたその熱を利用してお湯をわかして近所の家に百軒くらい配つて喜ばれているということでした。わたくしは清掃工場に対する考え方を改めて、仙台に帰つてからも、仙台は典型都市を宣言しているので、市長さんにこういう機械設備を整えて、温泉つき住宅ができるという清掃工場をつくつてもらいたいと陳情しようと思ひました。東京の半分のあくたを抜く毎日火が消えることがない、煙も黒くなく薄茶色のが軽く出ているというのです。石神井の清掃工場があまり評判がいいので次々に石神井のような清掃工場が区に一つづつできるようになりつつあるようです。

司会 清潔と廃物の処理というようなことは裏、表の問題でございしますが、いまでのご報告は非常に楽しい夢を画かれ、うかがつてお

りまして楽しんでございました。それでは厚生省保険局の年金業務室にいらした鹿児島島の泊みすえさんをお願いします。

泊 厚生省の保険局に所属するある年金業務室というところにまゐりました。厚生年金保険という制度が昭和十七年に制定せられて、二十年たつた今日では、各都道府県にあるそういう事務室の一人一人のカードを、ここに集めまして、それを処理しているところです。その厚生年金保険とはわたくしたち働く労働者それから遺族の生活の安定、福祉の向上ということを考えている制度ですけれども、その被保険者のいろいろな資格とか何年間くらい勤められていくら保険金を支給すればいいかというような記録を正確に早く整理しなければならぬので、ここでは電子計算機というのを使っています。まず見せていただいたのは各都道府県から送られたカードが部屋いっぱい並べられてびつくりしました。一人一人のカードのある名前を数字に変え、番号がついています。漢字もかなも全部数字によつて処理されているということでした。そのカードを処理する。たとえば泊なら泊という字は何千何百何十何号という数字に変えられているわけです。そこではオートメでなく女の方の手でやつていました。

それから次に穿孔室というところにいきましたが、そこで、キーパンチャーと呼ぶ女の方たちが数字のかわりに穴があけられるその穴をあける仕事をしていました。これは電子計算に中間の仕事で、ゼロから九までの数字のキーを叩きますとその通りに穴があく、それを一秒間に三つ叩く、一時間には一万、一日には百万のキーを叩いている方がありましたが、非常に巧妙に手先が動いて女子の職場としては適正の職場だと考えたのであります。

全然音も出ません。二人が同じテープを打たれるそうで、青色の

を打つ人と紫色を打つ人があつて、紫を打つ人が前のま違ひを検査されるわけです。

次に電子計算機のある部屋ですが、だいたい男の方が多く、大きな部屋にボックスみたいに機械がすわつていて、それが電子計算機でした。普通の紙のテープがここでは磁気テープというものの上にのせてその命令を機械にするのだということでした。命令を聞きますと一つの機械で一万個を記憶する、それで一卷き七十五メートルという磁気テープに二十万人分のものがカードに記録されるということをうかがいました。

それからこの機械の値段はアメリカの会社から借りているので、借賃は年二億円と聞かされてみんなびつくりしました。しかし、人の手でやれば六十二万人で処理した業務を、いまはたいへん少ない人数で処理されているといいます。また前には男子の方が三分の二くらいいたのが、いまは女子が三分の二になり、女子の職場として新しい手先の巧妙さを必要とする、そういうよい職場だと思われのです。しかし非常に目が疲れるということです。指先の巧妙さが問題で、入る方はいが高校卒ですが、一人前になるには三ヵ月かかるということです。九時から五時まで、一時間に二十分間の休みが与えられています。腕に動悸反対とか休養室をもつとつくれというようなことを書かれたのを巻いて働いていましたが、そういう意味でも、現代の職場をみたという感じでした。

司会 職場では事務の仕方が変つて、機械化してきました。そういう事情を見てこられたわけですが、そこにはキーパンチャー独自の婦人労働の問題もあります。これもおいおい勉強していただきたいと思ひます。

では四班、新宿の二葉保育園の班で、石川の森田正子さんにお

願ひします。

森田 わたくしは保育園の見学でしたが、施設を見るというよりも、それを経営してこられた徳永ゆきさんという方の生涯のお話を聞かせていただいたわけです。先生の生涯のお仕事、まづたくわたくしたちは一つの生き方の手本を見てきた気持ちで、先生のお話まづたく感激して帰つて来ました。先生は都市の最底辺に困つてゐる、まづ乳幼児とか浮浪とかまた子供を抱えてどうにも生活に困つてゐるお母さん方とか、それから苦学してゐる夜間の学生とかそういう社会の下積みでやつと生活してゐる人たちへ、自分の生涯を捧げたいという気持を十九才の時から七十五才の今日まで五十年余りの年月を一生懸命それに捧げていらつしやるのです。すてにお年ですからお話がすらすらおできにならないでとつとつとなさるのをやつと聞き取つたのです。学校時代にそういう保育園のことに感激されて入られてから、保育園はもとより夜間診療所とか母の家とか五銭食堂とか夜学の生徒の給食とか母たちへの授産の問題、日曜学校、身の上相談その他の問題を次々と取り上げてこられた方でした。お話をうかがつてから保育を受けてゐる乳児のお部屋や子どもたちが遊戯をしているところなどを拝見しました。全国会議に出席しまして、勉強しましたと同時に、最後に精神的な強いものを心に受けて、この今度の会議が一層有意義なものになつたことを感激して帰つてきました。

続いて午後の大使館訪問のご報告をうかがいたいと思ひますが、みなさん方それぞれの国の通になられたようですが、一班、アルゼンチン班のご報告から沢村さんをお願いいたします。

沢村 アルゼンチンは南米の最南端に南北に長くのびた国で、面積にしますと日本の八倍あるにもかかわらず、人口が二千七十五万

人で、日本の四分の一で、面積のまた四分の一を草原帯が占めて
いるという農牧国で、文化の程度が非常に高くて、唯一の富める
国で、言葉はスペイン語、宗教はローマンカトリック、日本から
の移民は一万七千人くらい、野菜お花お茶の栽培などをしている、
非常に親的な国とうかがいました。大使夫人は非常に美しい方
で、甥も金髪でばさつとしただけ、真赤なスーツを着ておられま
した。九才のお子さんを頭に四人のお子さまのお母さまとはとて
も思えないくらいでした。そのほか大使館員の夫人が四人見えら
れました。農業国でございますから、その点からお聞きしました
が、とても機械化が発達して空から種子をまくという大規模な農
業ですから、女の人が日本のようにいちいち畑に出て働くことは
ない。家事労働に専念するということでした。それからお子さん
の教育についてはカトリックを主体にして教育なさっている、善
良な人間、人を尊敬する人間、そのへんを基本にして教育なさつ
ているということでした。それから老後の問題とか余暇
の問題につきましては、老後は非常に保障されており、むしろ子
どものほうの経済力が弱いので、親のすねをかじるために両親と同
居するというようなお話でした。それから余暇は日本とやはり同
じように、電化されてもなかなか家事労働から婦人は離れること
はないので、その問題はやはり日本の婦人とあまり変りがなく、
自分のために楽しむことはできにくいといわれていましたが、余暇
を楽しむ時は家族全部で楽しむというところはうまいことでした。

家計は日本では給料袋のまま渡されるのがいいとされています
が、むこうではあまりそういうことはないそうで、百円亭主の間
題を出しましたら、そこまで女の人の権利はのびていないと笑わ
れました。女の方が非常に家庭的であるということ強調され、

料理などインスタント食品はあまり使わない、洋服などは既製品
を買わずに仕立屋に出すということでした。このへんはよくわか
らないのですが、モードにしても料理にしてもフランスをはじめ
ヨーロッパ諸国のほうの影響が大きいということです。日本のも
のは活け花とか家具、映画などで、よく紹介されているそうです。
アルゼンチンタンゴもかけてくださつて楽しい一時でした。

若松 私どもの班はカナダ大使館を訪問しました。カナダは非常に
資源の豊かな福祉国家、文化国家で、門に入つてからもそういう
雰囲気やわらかくただよつておりました。最初に事務官の方が、
いろいろな部屋をご案内くださいました。それからソニヤルワー
カーの活動と医学者福祉国家の現状の映画を見せてくださいまし
た。その映画では子供に夢と希望を与えているということ、それ
から老人を大切にしているということ、それから妊産婦を大切に
するのだなということを感じました。それからモントリオールの
市民の豊かな生活の面を見せていただきました、大使夫人はカナ
ダにも明暗二つの表情があり福祉国家といえども貧しい人も、豊
かな人もある。しかし、この婦人週間に掲げている「生活に秩序
を持つ」ということはやはりカナダでも共通した問題であるとい
われました。大使夫人は非常に柔和で、体格も良く、みなさん一
人一人にやわらかい握手をしてくださいました。わたくし外国の
ああいふ偉い方と握手するのははじめてで、非常に感激しました
お部屋もひとつひとつ説明してくださいまして、台所とか偉い方がお
出でになる時の食堂やら寝室やら広間やら女性に關係のあるところ
を御親切にお見せくださいました。それから四つの班に分かれ
てお茶を飲みながらお話ししましたが、子どもの教育は小さい時か
ら、赤ちゃんは別の部屋に寝かせ、ベビーサークルに入れ、母親

は仕事をするという事で、日本では背中におんぶしておられますが「赤ちゃんの様子がわかつていいですね」といわれ、わたくしたちは赤ちゃんをおんぶすること自体が野蛮だという気味をもつておりますが、むしろの方は別の見方をしているのも、興味があることでした。婦人と政治についてですが、カナダでは大臣が一人、それから国会議員が七人、市長さんが一人、非常に婦人の進出が大きいそうです。結婚後働らいている人は一七%ぐらいで、カナダでは女中さんがたのめないということのようです。最後に日本の婦人週間の行事については、カナダでは全国からこういうふう集つてお話しする行事はないそうで、そういう点は非常にうらやましいといつておられました。婦人週間の成果について非常に期待しているそうです。

淀谷 ガーナの大使館員の方たちがわたくしたちに親切な気持ちでお話してくださつたのはもちろんですが、まづたく輝やくような美しさでしかも柔和なお迎えをいただきました。心に残りましたことは、婦人がこの国では非常に重要視されているということです。それから世界中で三分の一のココアの産地であるために、その他の資源も非常に豊かで、後進国的なものを感じないような発展ぶりを感じました。もうひとつは家庭において主婦が優位な地位を占めている、政治的にも社会的にもガーナの中心はガーナの婦人が占めるくらいによく働いているそうです。ところが政治的な面においても少しも後にひかない、それをみんなが認めて合っている、日本が必ずしも先進国とはいえないという感じがしました。子どもの教育に力を入れていることもわたくしたちとあまり変らない感じでした。それから最後に選挙などのことにつきましてガーナの婦人の動きから自分の氣に入つた内閣をつくり出すこともなんでもない

ということでした。日本として顔色ないと思ひました。わたくしどもも学ぶべきものをそこであつたような氣がします。

佐藤(婦人) わたくし方は多國にまいりました。タイ国は、だいたい農業國で、大變氣候がよく、冬が日本の春秋くらいだそうで夏も湿度が低くとても暮しいいそうです。主食は日本と同じで米です。タイ米というあまりおいしくない米がありました。あれは一番悪い米で、いまタイ國の米はもつとおいしいそうです。しかし日本の米が一番おいしいといわれました。子どもさんのことを聞いてみましたが、タイ國は物価は安いし生活はしやすいといわれましたが、教育の点になるとやはり日本のほうがいいようにいわれていました。それから婦人の社会活動はあまり発達していないそうです。階級の差はともとはげしいそうで、百姓は日本の女の方と同じで労働しています。親日感が強く、日本の映画がたぐさん行つていて、三船敏郎なんかとても當つているそうです。果物はヤシ、がちようど日本の柿の木のようにどこでもあつて、それとバナナが多いとのこと。大使夫人はブリンセスでもとても高い地位の方ですが、ものやわらかな、お孫さんが二人もいるおばあさんですが、名ホステスぶりに頭が下がる思ひでした。部屋をかざつたり料理を作られるのが趣味だといわれました。実は、今日はタイ國は旧曆のお正月で、特別にわたくしたちにごちそうしてくださいました、それが木蘭の花が咲いたようにきれにかざつてあります。お菓子なども上手にかざつてありました。

佐藤(女子) 私どもはギリ大使館を訪問しました。わたくしたちの訪問いたしましたのは公使のその次の方のお邸で、夫人が大變なごやかに迎えてくださつてまず映画を見せてくださいました。最初はエリザベス女王のご生活を撮したもので、伝統と風情を重んず

るイギリスの国がらがよくあらわれて、その中でわたくしたちが日本の皇室に対すると同じように尊敬と誇りとしかも親しみにあふれた関係をうかがい知ることができました。次には、ちやうど日本でいう女子高校生の生活、そこでは生徒自身が自主的に責任をもつてやり、あとから先生が検査するという珍らしい学習態度で、女子学生が家庭の主婦としての実力を身につけるに大変いい学習態度だと感心しながら見せていただきました。その次の映画はニュータウン、新しい街づくりで、日本でいう団地生活の理想化されたようならやましい生活です。主婦に關係の深い台所のことについては、便利な機械が多いが、それが流行に左右されたものでなくて実際に使つてみて便利なものならば流行おくれになるうとなるまいとその道具の性能を尊重して使つていふこととです。たとえばいまから二十年前のものであるが非常に便利で丈夫でいまのどんなものよりこわれないし、これから何年も使えるだらうというメードさんの話もありました。このへんの生活の中にも新らしさの中にも古さを尊重する重厚な国民性をうかがい知りました。育児の面でも日本では盲愛などと批判されてますが、イギリスでは小さい時から独立した一個の人格として取り扱つており、その中には厳格な中にも合理的な深い愛情が感ぜられるように、イギリス本土であれば、いろいろ連邦政府の盟主としての誇りですが、精神も小さい時からこのような教育で育てられると感じました。お茶をいただいてから、イギリスの教育、婦人問題についてその道の権威者からお話がありました、気がつきましたのは、イギリスの女性が現在こそ技術を身につけて社会生活も立派にしてられるけれども、一世紀前にはやつぱり女の人が職業をもち社会に進出するためには非常ないばらの道であつたと

いうことを、ほんとうに興味深く聞きました。實際にバイオニヤの精神をもつてやるには先進国のイギリスさえもこのような迫害を受けたのですから、わたくしたち日本の女性も決して負けないで一生懸命がんばればなんでもできるのではないかと思つてきました。それからイギリスの婦人は大変美しく、にこやかですが、その中にはウィットと、日本の人には見られない迫力を感じました。

御田 私にはユーゴスラビアの大使夫人の手のぬくもりを、一刻も早く鹿児島のお母さんたちに伝えたい。大使夫人はたいへん庶民的な方で、わたくしたちが用意していきました挨拶とか順番を飛び越えて、人間の暖かさが伝わってくるようなふんいきでした。日本に対する考え、とくに日本の婦人活動に対することについては深い理解をもつておられたようでした。日本の婦人が勤勉だということなどはあまりよく知られていないので、日本といえば富士山、芸者ガール、そういった観光客の日本の印象を、ユーゴスラビアあたりに宣伝しているから、ほんとうの日本の姿をわからせるためにはほんとうのことを書いた本の交換とか、婦人団体の交換が必要ではないかと、もういふこともいふこともいふことができました。ユーゴスラビアでは二千の婦人団体があつて婦人の幸せのためによく働いていて、政治的にも婦人はとても強い力をもつていて、婦人の要求は通りやすいということでした。とくに社会保障制度が徹底しているということです。大使夫人は近日帰国されるのです、帰つてからも日本とのつながりのために草月流のお花を習つていらつしやるそうです。ユーゴの婦人の生活の楽しみは映画を見ること、郊外に散歩に出ること、日本の活け花はこれからの

のユーゴの婦人の楽しみのひとつとして広く受け入れられるのではないかといつておられました。それからひとつはめていたことは、みどりのおばさんという制度です。ユーゴ大使館を訪問してできました句を御披露して報告を終わります。ユーゴ大使館邸という前書きのある句です。

ここもまた友愛のきつな春の雨。

司会 これから外務省の田島先生にも一言御感想や御意見をうかがいたしまして、この会議を閉じたいと思います。

田島(外務省) 本日は有結の国民外交の一端を担つてくださつていいお集まりをしていただいたというご報告をいただいて、大変うれしく思つております。いずれ大使の奥さま方にはうぼうでお合いますから、みなさん大変喜んでそれぞれ郷里にそういうお話をもつて帰られたという話をお話したそうと思つております。

それからみなさん、大変感銘を受けて帰つていらした、そうして自分たちがいやに地位が低かつたり、いやになんだか：：ということをお考えになつたらしいですが、いわゆる一般の教育程度とかなんとかは充分に自慢していい日本の状況でございますから、やたらにああいふ立派なところに行つて圧倒された気持ちにならないで誇りをもつて自分の国のこれからの建設にますますお力をお尽しになりますようお願いいたします。

高橋(婦人懇話会) 今日はいくくの雨で、その上つめ込まれてご迷惑だつたと思いますけれども、うかがつておりますと午前中の視察からいろいろ感銘を受けられ、午後はそれぞれのお国の人になつたようなお話がございます、とくにわたくしはじめての試みでございますが、このように喜んでいただいたことは主催者としてとても喜んでおります。このことにつきましては昨日もいろいろ田島

さんからお講義がございましたが、田島さんにはエチケットのこととはもちろん、大使館への御執旋、大使夫人へのこのプログラムのご説明ということで大変お世話になつたということを申し添えてこのプログラムが成功だつたことに申し添えまして、もう一度田島さんに感謝する次第でございます。なお田島さんは外務省の中で数少い婦人外交官としてご活躍を期待されている方でございます。今日の会ではわたくしもある班に、みなさんと御一諸いたしました、帰りのバスの中でも感激しておられました、いままでのプログラムの中でこれが一番よかつた、部会の講議などみな忘れてしまつたということでございます、これではちよつと困るのでございまして、実は会議はまだ明日まで続いているのでございます。明日の午前N日Kの最後の総会がございます、あと半日間のこの会議をどうぞいまままでと同じようなご熱意をもつてお続けくださいます、有結の美をかざつていただきたいと思います。

終

四月十四日

一〇、三〇、一一、三〇

○挨拶 日本放送協会教育局長 浅沼 博

今日はいよいよ最後の総会でございます。一家の主婦の方が五日も六日も御家庭を留守にされるということは、なみたいていのことではないと存じます。そのことをききほど婦人少年局長にお話しましたら、「お留守の御主人から、子どもたちも元気、がんばれ、という電報を受取った奥さんもおられますよ」とのことと、まことに御同慶のいたりでございます。

三日間にわたる御討議を経て、新しい生活秩序の問題について、この会議で話し会われたことを実際の生活の中にとけ込ませていただきたいと存じます（拍手）

○経過報告 労働省婦人少年局婦人課長 高橋展子
全国婦人会議は今年も六十名の御婦人の方々をお招きいたしました。開かれております。この方々は、全国からの応募者二千四百十名の婦人の中から、中央に設けられました選考委員会によつて選ばれた方々でございます。

この方々の横顔を、ちよつと申し上げますと、お年の点では一番お若い方が二十二才、一番御年長の方は六十四才で、半数の三十名の方が職業をもつていらつしやいます。その職業の中で約十名が農業で、そのほかにはお店を經營していらつしやる方、学校の先生、事務員あるいはお医者さん色とりどりでございます。

今年第十回の会議で、それを記念する意味で、特に第一回から第九回までの会議の出席者の中から毎回議ごと一名ずつ、九名の方を特別会議員として加わつていただいております。そのほか婦人団体や労働組合などからもオブザーバーとして参加していただいております。

次に日程は、会議は十一日から始まり、午前は開会式でございます。

した。音楽とともに開会の幕が上がりましてから、主催者側の挨拶、リーダー、会議員の方々の紹介がございましたが、そのあとに、ただ今申し上げました九名の特別会議員の方々の御感想を順々にうかがいながら、全国婦人会議の九年の足あとを振り返えてみるという、特別のプログラムも開会式の中に入れたわけでございます。

次いで、選考委員長の教育大学学長朝永振一郎先生の「科学の進歩と人間」という記念講演がございまして、今日の変化の激しい社会ということについての思いを、私も新たにさせていただいたのでございます。

その十一日の午後から部会討議が始まり、よく十二日は朝から夕方まで部会討議が続いて行なわれました。部会は四つに分かれまして、それぞれリーダーの先生の御助言のもとに、活発な討論が行なわれ、生活に新しい秩序を育ててゆくための婦人の役割ということが、熱心に話し合われたのでございます。

三日目の昨日は、一日移動会議にあてられました。午前中は施設の見学で四つの班に分かれ、保育園、大きな機械工場、塵介処理場、さらに電子計算機を使っております大きな事務所と、それぞれ見学いたしました。また午後は、初めての試みで外国の大使館の訪問というところを行いました。アルゼンチン、カナダ、ガーナ、タイ、イギリス、ユーゴスラビア、とこの六つの国の大使館を訪問いたしました。大使夫人をはじめ頭員の夫人方の暖いおもてなしを受けながら、それぞれの国の様子、特に婦人の生活についてのお話をうかがったり、御懇談いたしました。夜はこの移動会議の報告会が行なわれました。このように、大変ぎつしりつまつた日程で昨日まで会議が進められてきたわけでございますが、この会議場での公式のお話し合いにも増して、会議員の方が合宿されております共済会館の、

それぞれのお話の中でも、非公式会議のようなものも大変に盛んのようにございました。

このような昨日までのお話し合いを通じ、生活の新しい秩序を育てるための婦人の責任ということにつきまして、それぞれお考えを深められたことと拝見するのでございますが、そのことにつきましては、これからの報告などで皆さまにお聞きいただけることと思っております。

司会（NHK 藤井アナウンサー） 初めに、それぞれの部会でどんなことが話し合われましたかつかうかがつてみましょう。各部会の方にお話していただいて、そのあとリーダーの方に補足していただきたいと思っております。それでは、都市生活の問題について話し合われました第一部会の荒井道子さん。

第一部会（荒井） まず親子、夫婦の関係から入りました。そして現実の社会情勢の中で婦人はどのように暮らしているかという問題が出ましたが、結論として完備された老人ホームをより多く作って欲しいということでした。次は家庭における余暇利用というテーマで、現在のように電化されて余暇の出た家庭内で、それがどのように使われているかというところ、遊ぶことを楽しむこと、そういうものでなく、その時間を内職するとか、パートタイムで働くとか収入を生み出す方向に行っているようです。サラリーマン階級の内職は底辺の人たちを圧迫するのではないかと、たとえば内職人口がふえようと製品の歩合が減るといふようなことで、この人たちの生活をおびやかすのではないかという意見も出ました。同時に家事がマイナスになり、教養の時間もなくなるということでは、人間的に僅かな収入にかえがたい損失ではないかという批判もありました。そこで社会的に視野を開くことで、社会の中で自分

を生かすような余暇の使い方をという声が多く出ました。増えてくる共稼ぎ夫婦や商店の主婦のように子どもの面倒のみられない人たちのために、子どもが成人して手のかからなくなつた母親や定年後の先生、保母さん、保健婦さんなどベテランの方があづかつてくださったり、また婦人会などの組織の力で保育所を作つてくださることができれば、母親たちの環境も整理され、生活も新しく変わってくるということが、現在当面している問題として、一番大きく取扱われました。

子どもの社会的、家庭的しつけ等の欠けていることにも話が及び、それについては市民意識を持つた生活を強く教育の中に織り込んで欲しいという要望です。また、マスコミへの主体性、新しい公衆秩序などについても話し会いました。

磯村(リーダー) 都会の生活というものを上品とかあるいは文化的というような華やかな面でだけとらえず、むしろ、都会の生活には実に厳しいものがあるということを討議されたことに特徴があつたと思います。

その厳しさの一つの現われとして、一面では、たとえば老人への所遇といったような問題も、今後はどういうふうな、あるいは親子が別に住まうとか、老人ホームというふうなことになるのですが、それだけでは解決できない、やはり人間関係の中の愛情があるのではないかというようなことが、お互いの反省にもない、また職業についている妻の、夫への反省というようなことも話されて、これまた一つの特徴であつたと思います。

都会の生活では、今御報告のように非常に余暇が多くなつたようにも思われるのですが、その余暇が多くなつたという変化が、婦人の生活に、あるいは団体に、あるいは職業の中に新しい秩序

というもの非常に厳しく作りつつある、というようなお話がありました。それに加え、マスコミがいろいろな形で生活に直接当つてくるので、この問題の解決は愛情や近親の人間関係だけでは解決できない、最後には日本の秩序であるところの憲法の問題にまでいくものではないかというような討議でした。

司会 次に第二部会、農村生活の問題の部会ではどんなことが話し会われたでしょうか。多田美美子さん。

第二部会(多田) この部会では、専業農家が五人、兼業農家が七人、農村生活指導関係の仕事をしている方が三人でした。時間の関係上中心となつたと思われることを簡単にお話します。

私どもの生活にテレビや電気洗濯機、耕耘機などが取り入れられてきて、消費と所得のつりあいとれなくなり、現金収入を求めて働きに出る傾向が非常に強くなつてきたということ。それによつて主婦に農業生活のしわ寄せが大きくなつてきた。それが主婦農家という形になつて現われてきているという状態ですが、このように婦人が農業の主体となつて労働上の地位は高まつても家庭内での発言権も生かされているだろうかという点も話し合われました。農家にお嫁さんがこないということも根本的にはそれと結びついているということがわかつたのです。

この近代化によつて婦人がますます労働過重になること。そのこと、家事労働や次の世代を育てていくうえの問題。それは結局私たちが安心して子どもを置いて働ける乳幼児の保育所の要望となつて出てきました。また精神生活と教養面にもそのしわ寄せがきていて、婦人のこの労働の重荷を、どのようにしたらいいかというところで話し合いが進められました。その結果、家庭内で夫も妻も両親も子どもも、それぞれの立場を尊重し合つて

話し合うことによつて、解決の道を見出すように、婦人は深い叡智と勇氣と誠実をもつて信頼をもたれるように努力することが必要だということになりました。さらに一人一人の力は弱いから、組織の力によつても生活の筋道を自主的に育てなければならぬ、ということが、話し合われたのです。この部会の大きな問題としてとりあげられた保育所の問題も、婦人の修養の問題と協同化の問題も、婦人の自主性と誠実とこの組織の力に寄らなければならぬという事になりました。そうして力弱いとされていた婦人がその組織の力を通じてこそ、變動の激しい社会を乗り切つて明るい農村を築くことができるのだということを自覚したのです。

松原(リーダー) 私がつけ加えることはないのですが、本當に農村の部会ではたくさんの方が語られ、たくさんの方が憤たわつてゐることがわかりました。私が実に感激したのは、どの問題についても、北海道から、鹿児島の方にいたるすべての方が、すべての問題に発言され、どの問題も真剣に考えていられることでした。

その話し合いの中心が今報告されたように、社会の激しい変化のしお寄せが婦人に来てゐるのではないか。その場合労働運動過重の問題を嘆くだけでなく、このような労働の比重が高まつてきたということもきつかけにして、それを婦人の家庭内の地位の向上、家庭の運営の中の婦人の発言力、あるいは村生活やもつと広い社会生活の中で婦人がしつかりした歩みを進めるきつかけにならなければいけないのではないかというようなことが語られたのです。その糸口としては、まず家計簿をつけるとか、自分にまかされた仕事の責任を持つて、その責任というものは、自分がどれだけ働いて、どれだけの現金収入とか所得が得られたかという労働の成果まで確かめるといふことを通じて、新しい家庭が作られてゆ

くのではないかということも語られました。それが今まで何度も語られてきた嫁、しゅうとめの問題、親子の問題、夫と妻の問題を真に民主的な前むきの姿勢で新しい人間関係を作つてゆく糸口だと、そういうふうに語られていました。

もちろんここで語られたことの中には、保育所の問題のように婦人たちだけでは解決できず、政治的に解決しなければならぬ問題もあるわけですが、しかしその前に、まず婦人自身が信頼されるということが第一ではないかというふうに語り合つたのが焦点だつたと思ひます。

司会 それでは消費問題の第三部会について佐藤婦でさん。

第三部会(佐藤) この部会では四つの柱を立ててみました。第一に今までの消費生活の実態を再検討してみること。二番目に消費ブームの中で消費生活がいかにゆがめられてゐるかということ。それから、よい消費生活をするためには、いろいろな物価の見通しを勉強すること。もう一つは、よい消費生活とはどういうことかという、その四つです。

消費生活の実態については、現在の消費生活は表面的にはいろいろ変わつたようですが、内面的には、たとえば冠婚葬祭などのように、あまり変わつてゐない面が多いということです。若い主婦が実権をにぎつてゐる家庭ではそれはあまり問題にならないかもしれませんが、若いものと年とつたものがある場合では、古い方はちよつと違う思想をもつてゐますし、若いものは近代的な消費思想をもつてゐます。その二つの調整をどうするかということの問題でした。それから家計を助けるために働く主婦の子女の教育の問題とか、またその反対にレジャーをもつてゐる主婦が、それをいかに利用するかなど、まず生活の再検討で第一日は終わり

ました。第二日は消費ブームによつて、いかに消費生活がゆがめられているかという事を考えてみました。

戦中、戦後にわたつて押さえられていた消費生活が、マスコミによつて一時に爆発したというような状態なのではないか。電気製品を手当り次第に買うようなこともその一つの例と見られました。三番目の今後の物価の見通しについては、これからの消費生活を整えていくためには、物価の動き、物価の見通しを勉強しなければならぬということ、これはリーダーのお話をもつぱらうかがうことになつたのですが、最近サービス料とか、公共料金、食料品が上がつています。サービス料金については、サービス業に働く人の賃金が今まであまりに低かつたということがあります。公共料金については、設備投資などのために上がつていゝる、食料品などは、生産者価格は安いが流通機構の問題が介在していて上がる。今後もう少し物価は上がる傾向にあるだろうが、消費者はそれを十分監視して不当の値上がりを押さえる努力がされるべきではないかというお話でした。それでは、よい消費生活をするためにはどうすればいいかということを話し合つてみました。

それは先ず消費者自身が経済知識を身につけて、よい経済生活をするということ。もう一つは、大きな組織をもつて悪い商品などについては世論を起こし、行政面にまでもつて行くということ。将来は生活省ともいうものを設置してもらつて、消費者を守つてほしいというようなこと。ここではほんのすじばかりですが、そういうようなことを話し合いました。

山田(リーダー) 第三部会は消費ということがテーマであつたのですが、生活の中で消費生活だけを切り取つて問題にすることはなかなかむず

かしいのです。農村では、消費の膨張と言うとすぐ現金収入の膨張が生産にはね返えるということで、全生活として問題にならない話を消費だけ切り取つて問題にしたために発展すべき点も発展しなかつたと思います。

その点話し合いには心残りの方があつたと思いますが、問題の中心を消費にしほりましたのでそういうことになりました。

最後に、生活に新しい秩序ということですから、これからの消費生活はどうあるべきかということをも十分にもつてゆきたかつたのですが、なかなか結論が出ませんでした。抽象的な合理的な生活態度、自主性を持つということと終つたのですが、消費というものはある程度現在の段階では選択の問題です。選択の問題ということになる、それぞれの生活態度、主観に左右されますので、何か具体的消費の新しい方を見出すことは問題でしょう。その意味では抽象的な結論で終つたのは仕方がなかつたと思ひます。

司会 最後に職業問題の第四部会で谷口美恵子さん。

第四部会(谷口)

まず家庭生活と職業の問題。広い意味での職業について話し合いました。婦人がなぜ職業をもつようになったか

その原因をみますと、第一に経済的な問題。これは生活に困る立場の人、たとえば母子家庭や身体障害者の家庭、また社会的視野を拡げるため、男女平等、婦人の独立のため、自分のもつてゐる能力を生かしてゆきたい、家事労働から開放された時間を内職でもしたいという、この五点でした。そこで、婦人が仕事をもちた場合の障害について、育児の問題が生まれました。保健婦として農村の家庭訪問をしてみますと、一番陽当りの悪いナンドに子どもを寝かせたまま、母親は野良仕事に出ているという現状から、乳

見期から安心して預けられる専門家による施設が望まれました。現在では、その要求に合うような施設は、のぞまれず、そのために保育所不信論さへ出ました。運営の内容の面で、保母の二交替制、常勤の医師の設置、安全な送り迎え、また保母を専門職として高く認めて欲しいという話になりました。

ここで低賃金の問題が出まして、婦人が職業は持つが低賃金に甘んじて、自分で自分の足を引つづけているように思われる点も話されました。また教育程度により賃金が定められ、そこにある学歴中心主義の問題があるが、学歴にとられず、平等の労働には平等の賃金が支払われるべきではないかということも出ました。

続いて職業教育について話し合われました。これからは保母、看護婦、保健婦など専門の技術を身につけて社会の役に立つ仕事をするように考えないと他の部会と重複するのですが、こういうところに目標をおいて進んでゆくように、自分を客観的に見て社会性を養ない、主体性を求めていこうと、大体このようなことを話し合いました。

渡辺(リーダー) 女は家庭が職業か、ということなわかれておりますが、この部会には職業を持つ方と持たない方と判分ずつてでしたが、特に農業の場合などは、もう家庭が職業かではなくて、家事をやりながら生産の担い手になっている、経営も主婦がやつているという状態でして、経済成長とか技術革新の激しい変化がそのような形で家庭に入ってきていることを私たちは痛感しました。こういう場合に、家事労働に近い職種を婦人が見直すという、つまり保母に限らず、ホームヘルパーとか、家庭福祉員とかいうものについて、そういう労働を格付し、労働時間とか、週給制の問題、時間制の問題などをしつかりと見つめていく、そうしてそれを一つ

の専門職とすることによつて、初めてほかの婦人たちの一般職、あるいはもつと高い専門職が安定していくのではないかとというふうに見られました。また農村の場合の工業化の問題ですが、女にとつては家事労働と職業とが一語になつたような変わり方をしていくが、男のほうはどうだろうと比較をしてみました。そこで工業が接近している農村とそうでないところとは、ずいぶん差があることに気がつきました。男が農業を離れて外に出た場合には失対事業とか他家の農業の手伝いに行くという形が見られるのですが、その所得はやはり高いのです。

そこに男女共通の問題があることを感じました。もう一つの点を端折つて申してみますと、女は家庭が職業かという時に、ただ家計補助をしななければならないとか、年を取りたくないから働くとか、あるいは社会生活をしたいからという自分自身を中心にした問題のほかに、国全体としての老令化現象が起こつていることを考え合わせてみて、女が外に出て生産事業につき得るということとは、日本の社会保障を育ててゆく上で特殊人口を少なくするちいうことにもなります。特殊人口すなわち老令で働けない人、病人、失業者、生計の貧しい人、身体障害者などが多ければ、それだけ社会保障の負担は多くなるわけです。

それで農村の託児所などは手薄になつてきます。ですから自分自身が特殊人口にならない態勢のためにも、仕事を持つとか、社会生活をもつことが大事だと反省されました。

司会 この会議には過去九回の会議に出席された方が特別会議員として各部会に参加されましたので、そのお一人で第八回の会議に出席された野口敬子さん。

野口(特別会議員) 今回の会議で強く感じましたことは、私は業

内部会に出席しましたが、それに加えて、今の部会の報告を聞きましても、やはり共通の問題が出てきていると思いました。というのは、第一部会にも出ましたように、やはり保育の問題で非常に困っているということです。私たち働いておりますと、子どもを預けるのに非常に困ります。今までは家庭保育といって、余暇を有意義に使いたいという主婦の方たちにお願ひしていましたが、さつき第四部会の報告にもありましたように、家庭保育のゆきづまりが出てきております。で、家庭の婦人と私たちと、同じように悩んでいる保育の問題で、何か手をつなげないかということです。というのは、家庭保育でなくて、新しい保育所を作るという一つの運動を起こすためには、働いている私たちだけがやつても、これはむづかしい問題にもなりましたし、また家庭の主婦たちだけがやられても私たち自身の活動を通じて感じることは、もう一つむづかしい問題があると思います。これからの討議の中でどうしたらいいかということを話し合つていただけると一つの方向なり、自信をもつて地方に帰えれると感じましたが。

司会 野口さん大阪府で図書館の司書として、専門職として働いておられる方です。

次に部会を傍聴された若い方はどう考えられているか、農村部会の特別オブザーバーとして傍聴された富永のぼるさんにうかがつてみましょう。

富永(特別オブザーバー) 私は農村の青年として特別オブザーバーとして参加しましたが、婦人の方々が農村問題で心から考えられていることをしみじみ聞かされ、頭の下がる思いでした。その中で特に最近機械化やその他いろいろの設備等について、農村が農業の収入だけではやつて行けない、そのために若い青年が回わ

りの工場などに出て、農業外の収入を得ようということになる。そこで残された主婦たちが残された農業をやつてゆかなければ、どうにもしようがないという本当に身にせまる問題、私たち農業青年としても解決しなければならぬ問題を、私たち以上に今の主婦の方々が考えられ、またそういうことのために学ぶ組織をもっていることをしみじみ聞いて感心しました。そういう考え方自体に私たち若い者と多少の差はありますが、ともかく農村問題については、非常に大きな問題が横たわっている。それを一つ一つ解決してゆくのに、婦人だけでは解決できない問題があると思います。そういう意味で農業をする青年として、なんらかの形で、村に帰つてからいろいろな方面で協力し解決していけたら非常に幸いと思つております。

司会 富永さんは埼玉県の浦和の近くで農業をしておられる非常に熱心な青年です。

さて、変動する社会の中で私たちの生活はどう変わつてきたか私たちはその中でどうあつたらいいかということについて、都市農村、消費問題、職業問題とそれぞれの場で身近かな問題を出していただいて考えてきたわけであります。

それでは続いて、全体討議に入ります。四つの部会が一諸に討議するのは今日の総会が初めてですから、非常に問題があると思いますが、報告していただいた中から共通の場があつたように思います。私たちは、このテーマに沿つて新しい生活の秩序を育てるということと短い時間の中で、何か方向を見つけていきたいと思ひます。簡単に、しかも積極的に建設的な御発言をどうぞ。会議員 婦人の余暇利用的仕事の賃金化ということに関してですが勤労者として仕事をするためには、いろいろな困難なことをすると

いうこともあり、一方、収入を求めて出ていくので、PTAや婦人会の委員になり手がないという現象も出ております。

それで、その二つの現象を考え合わせて、今までは社会的奉仕というように考えられていたものを賃金化していくというのが近代的なやり方ではないかと思ひます。

会議員 保育所のことは非常に大きな問題です。

現在、主婦に限らず、どうしても働かなければならない立場の婦人が増えてきたと思ひますが、その場合に、家事労働を社会化する方向に向かつていくためには、どうしても保育所の設置は必要で、保育所作り促進研究会を近々持つことになつています。この際にもう少し保育所問題を掘り下げて、全体討議の議題にしたいと思ひます。

会議員 一番強く感じましたことは、いろいろな立場の婦人が現金収入を得るために働かねばならなくなつたという傾向が目立つてきたと思ひます。何が原因で主婦が収入を得るために働かなければならなくなつたかを、もう一歩具体的に掘り下げてみたいと思ひます。私はサラリーマン家庭の主婦ですが、もつとも大きな原因は主人の給料が安いということです。農村の主婦にも同じ現象があるので、ここで取り上げていただきたい。

司会 共通していることは、現金収入増加の必要と婦人が働くことに伴う保育所の問題、そして婦人会などの仕事に奉仕する婦人が少ない、そういう役割はどう考えたらいいかという三つのことがあると思ひます。この点で御意見を。

会議員 最近非常に文化が発達してきまして、農村、都市を問わず、電気製品に埋もれ一見高級な生活のようになりましたが、反面く

しくなつてきたことは、最近、一ペンにふくれ上がった生活文化のもたらした大きな傷口だと思ひます。収支のバランスが不均衡になつて、たとえば二万円の給料生活者が三万円の生活をするという今日の現象を是正しなければ、この問題は解決しないと考えます。

特別会議員 特別報告をうかがいましたが、それぞれ解決のためには組織が必要だということが全体を通じてわかつてきたと思ひます。新しくグループを作るのは大事ですが、既成の組織の中に新しい息吹を吹き込んで、秩序を持たせていくという考え方もあると思ひます。

婦人会は婦人の問題を、PTAは子どもの問題を確決すべき団体であつたはずなのが、そういう方向が見失なわれています。それは私どもが本當の願いを求めないからだと思ひます。

一般参加者 私は主婦ですが、私の身近に最近起こつてゐるのがごみの問題です。今までごみ箱に捨てていたごみを、全然外に捨てないでお勝手にバケツを置いて一日に一回きまつた時間に来る、自動車に捨てろということになりました。考えてみますと見にくいごみ箱を追放することにもなりますし、ウジやハエが湧くことがなく衛生の面も合理的に見えますが、主婦としては大変時間的にきつうくつな思ひをしなければなりません。共稼ぎのこととか、こどもの教育のこととか、組織活動とか、たとえば子どもの学校に参観に行こうと思う時に留守になります、留守の問題についてどうなるか、病気の時にどうなるか、場所と時間を制約を受けることになるのです。オリンピックなんかが催されるので見苦しいという簡単なそばんではじき出されたことがあつたら大変こまります。

司会　ごみの問題は当然いろいろな問題につながっているように思いますが、さきほどから出ております現金収入、保育所、いろいろ共通の場として討議してゆくという大きな問題がありますので、この際、前に問題をもどしたいと思います。

一般参加者　私百姓で発表が下手ですが、秩序を育てる上に経済の問題が大きく出ておりましたが、大きな目で見た場合、農村は生産、都市は消費という面で考えられると思います。経済を安定させる上に都市も私たちも、もつとお互いのことを知り合つて、その上で生産者価格を考えていかなければならないと思うのです。その点で特に、婦人の立場から農村と都市が、もつともつと接近できたらと思ひ、それに努力してゆかなければならないと思います。

司会　主婦の現金収入のための行動につながっている問題が多かつたと思います。そのために保育所の問題やごみの問題、ガスや電気の集金の問題等が出てくるわけですが、リーダーの方々の中で、部会ではいかがでしたか。

渡辺　その問題が非常に多く話し合われました。都会地でも主婦同士融通し合つて、レジャーを持つている人が、働かなければならない人たちの子どもを預かるという方向も出ておりましたし、そこに官庁が手をさしのべて一助になつてそういうような人の労働を守るという制度もあると思います。

しかし、ここで考えなければならぬと思う点は、それを労働として考える時に、たとえば自分が一人前の収入を生むために外に出て働く、一方子どもを預ける、それが一月に二千円なり千五百円で、レジャーにやるのだからいいという人もありますが、そのこと自体が保母さんの仕事を格づける点でさしさわりをもたらす

そのために保母さんの格づけが上がらないということは非常に困ることです。私の部会ではこの話は浮き上がらないで、よく検討ができたと思います。あるいは、この部会に女医さん、保健婦さん、保母さん、看護婦さん、そして普通の主婦で、ある程度余暇のある方と、全然ない方、また労働組合の方、総評、全労もいらして、一諸になつて考えたのが良かったので、日本の、解決の一つのパターンがそこに出たのではないかと、示唆を私自身が受けました。

そのことは各地域、地域で代表されるような組織を作つて解決されるのがいいかと思ひます。なぜ地域、地域がいいかというと、地域差があまりにも大きいということを部会で発見したのです。その点からもう一つひるがえつて考えますと、先進の福祉国家といわれる国をみますと、労働行政、社会保障行政、それを進めるための社会行政は、必ず三本を一つにして計画がされているという点で、官庁のやり方がそうだとすることは、国民が必要を感じて、そうもつていつたということです。これがただ一つの私の強く感じた点ですが、一つの方向への示唆のようなものを見出したような気がしました。

磯村　私共の部会でも保育所の問題が非常に大事だということは荒井さんがおつしやつたとおりですが、私は保育所の問題はもう一つ先の目標があるのではないか、日本の家族制度の中で子どもを育てることが非常に大きいのは否定するわけではありませんが、その家庭制度の中で、親子の愛情が、いつごろからおおやけのものになるかということが問題ではないかと思ひます。義務教育というところで出発するのか、あるいはこれだけの変動する社会の中で、そういうた教育、養育といったようなものか。な

るべく同じ条件で出発することが早いほうが、社会が民主化する上においていいのではないかと思います。

そういう点からもう一回、保育所について考えていただくと、今のようないろいろの問題も、保育さんの待遇の問題も設備の問題も考えなおせるのではないかと考えます。目標を得るためには、そういう義務制という、国が作るということになりますが、そういう視野から保育所というものをもう少し高く考えていきたいと考えております。

渡辺 いろいろの代表の方で協議会を作る時に、必ず男の人を一諸に入れて考えることが大切だと思います。

松原 農村の場合、たしかに最近地方自治体でそういう施設が拡充されてきていますが、それよりも最近の主婦労働の激しさが、先に進んできていくということです。国立の保育所の場合に大体三才くらい以上の子どもでないと預かつてくれない、おしつこを自分で始末できるようにしないと、預かつてくれない。農村が一番あすけたいお乳を離れて保育所に預けられるくらいまでの子どもは公立の保育所に預つてもらえない。会議員の中には保育施設をやつてられる方もあり、その方の場合には公式のことをいつてられないのです。ねえさんのほうを預かるなら、なぜいもうとを預つてくれないかというので、そういう乳呑み子も預からなければならぬ。初めはお宅で預つていたのが、ガラスが割られ、障子のさんがこわされ被害甚大です。ところが、そういうことを保障してくれるところが、あるいは保障する市、町、村、国家の予算がないのです。そういうことを考えますと公立の施設をもつより前に地元の、あるいは婦人の力で解決してゆく道がありはしなかと話し合われたのです。

司会 婦人たちが地域で考えていかなければならないのではないかと。それにも男性の協力が必要だと、いろいろの問題があつたのですが、生活に新しい秩序を育てるという大きい目標のためには、どうしたらいいでしょう。

一般参加者 主婦も現金を欲しがっている傾向にありますし、一方では保育所をつくるような力も欲しいのです。一見手をつなぎそうに見えますが、立場が違っている場合には、手をつなげない。根本的な問題が考えられないと、安易にできると思うことは間違いだと思ひます。

一般参加者 私は純農村のものです。日本は非常に貧乏な国で、しかも農村はことに余裕がないのですが、自分のことだけ考えていたら世の中はよくなるものではないと考えます。私たちのような年配になりますと、子どもを育てるとか、うちの経営をやるとかいう問題については一つの段落にきます。若い人に任せられる時代がくると思うのです。そういう時になつて、まだ自分のことだけ考えていたのでは婦人自身の地位も社会全般も決して向上しないと思うのです。それを政治の問題とか社会への責任とかにのみ投げてしまつては、とうてい浮かび上がるものではないと思うのです。保育所の問題や婦人会の役員という組織の問題でも、精一杯のぎりぎりの生活の中でも工夫や奉仕の精神も持ちたい。私たちが希望をもつて建設してゆこうという時に、その生活の中で時間とか金というものについて、いくら何でも奉仕しようという精神に立つて、自分の生活を秩序立てていくならば、そこに何か解決せられるものがあると思ひます。

会議員 今の奉仕の精神には感激しますが、現代はそう生やさしくないといふこともいえるのです。主婦の立場でいうならば、奉仕

の精神と時間と労力を費いやしたことに對する当然の報酬というものとして一つを備えたものを考えたいと思うのです。半分奉仕の精神をもち、収入もあるという方法が考えられていいのではないのでしょうか。

特別會議員 私は洋裁をしています、田植え時や農繁期はちよつとひまです。そういう時に子どもがあるために田んぼに出られない人のために、預かつています。私は母子所帯なので、奉仕という事で割り切らないでお米を一升か二升か報酬にいただいています。百円か二百円ミシンの仕事は遅れますが、物質的報酬よりも、その人たちは助かるのです。一人か二人ですが、できる範囲の奉仕で、保育という面でも工夫がありますね。

一般參加者 いろいろの立場の方がお出になつていますが、主婦であることの根本問題は同じだと思ひます。家事の問題について、それは報酬の得られないもののように考えられているのではないかと申すのです。家事が、どの程度の価値のあるものかというところが再認識されるならば、家事に對しての責任感も、収入との関連も考えられてくると思ひます。さきほどから問題になつてくる保育所の問題にしても、家事自体が經濟に關連があるという点で考えられていいと思ひます。ただ別の職業、農業をしたり、洋裁をしたりするという解決のしかたで、報酬を得るという考えが、私たちの生活の中に残つてゐるという感じを深くしました。

一般參加者 生活の新しい秩序を育てるための考え方として、今までのように「奉仕」という言葉はたいへんいい言葉ですが、奉仕あるいは自己きせいで、どちらかが我慢するというようなそういう考え方だけでは割り切れないものが出てくると思ひます。私は農村にいますが、農村の婦人は特にどちらかが我慢するというこ

とで今までのいろいろなことを解決してきたように思ひます。松原生先は、秩序というのは、一つのまとまりであり、まとまりを作るのは個人であつて、自分のことを確立すると同時に他人のことを確立することであるという言葉を使つておつしやいましたが、自分も生きて他人も生かすという人間的關係、社会的關係ということで、さきほどから出てゐる事がらも、そういう關係に立つてはじめてすこやかな關係が生まれてくると思ひます。

司會 最後にリーダーの方々に簡単にお願いします。磯村 団体の働きの中で、事務的なものに対しては報酬があるのがいい、さらに進んで家事労働も經濟的に分類すべきであるという御意見があつて、これではうちのものから電話一つ取り次いでもらつた時には、どのくらい払わなければならないかという印象をもちましたが、ただ今の御発言、合理的に、家族的、個人的な立場を西立しろということに安心しました。その上に一つ、帰られましたら、外に向つてお話をなさる前に家族の方と話し合ひ、それから外に話していただきたい。特に男性を相手に話をしていただきたいと思ひます。

松原 家庭の婦人たちは、特に農村の婦人の場合には實際に仕事をしています。仕事の責任をもつというのは、合理的に形成される限りで、責任をもつということだと思ひます。それだけでは解決できない問題がたくさんある。たしかにある意味では今の社会の中ではだれかの奉仕、ぎせいにやらなければ解決できない状態になつてゐることもあると思ひますが、その前に組織の力による解決の方法が身近かにならないというところでも、組織による解決の方法がやつぱりあるのではないかと思ひます。その場合に今の婦人の組織を全面的に否定してしまうのではなくて、その組織を母体に、

それぞれのお考えに従つて、あるいはそれぞれの立場や理解に応じて、大きな組織の中に少しずつ育成して、組織の横の結びつきを通じて全体をまとめてゆくという、婦人の組織の考え方をもう一度改めてみたらどうかと考えるのですが。

山田 さきほどの御質問で、電化して生活がよくなつたが、それに消費が追いつけない。二万円の収入で三万円の生活をしている。

そういうブームに押し流されているのが問題ではないかというのですが、問題はそういう電化生活というものが、一般の社会的平均よりゆき過ぎてやつているかどうかということじゃないかと思ひます。たしかに電化というブームに押し流されているように思ひますが、そうではなくて、やはり洗濯機があれば便利だし、テレビがあればおもしろい、それは日本の進歩ですからそれを否定することはないと思ひます。その時に一般の日本人の消費所得水準を超えるとすれば別ですが、大体平均でやつていゝる。それに収入が追いつかないというなら収入それ自身が問題になる。二万円の生活に落とさなければというのでは、いつまで経つても生活は上らない。筑豊は石炭産業のおあいり情勢で賃金がなかなか使えないということがありますが、考えてみますと、石炭産業で高い賃金が払えないかというと、そういうことではないと思ひます。もちろん現在の石炭産業をそのままにしては別ですが、政策的な力が加われればできないことはない。日本は貧乏であるが、だんだん貧乏でなくなつてきている。国の一般の会計も一兆円から今は二兆数千億円になつてゐる。だんだんお金が増えている。その使ひよういかんではできることがいくつもある。その点で下に落とすのではない。上に上げるといふことで問題を解決したいと思ひます。これは経済評論家でなくて一般常識としてお答えしてお

きたいと思ひます。

渡辺 奉仕という言葉に捕われていられるのかもしれませんが、これはボランティアなせいで、強制されてやるのではなくて、自主的な社会活動ということにおきかえればいいと思ひます。特に私は自主的な社会活動の例として、脳性麻痺の方を助けておられる方を知つておりますが、賃金をもらつたらやるというのは、だれが構うでしょうか。社会保障ができた歴史を見ますと労災にしても、失業対策にしても、保育所も託児所も、金をもらわなくても必要なものは始めるといふ人が、パイオニアとして大勢の人に必要になつてきた時に、だんだんと社会保障という制度におきかえられてきたのです。そこに組織的なつながりを勉強する必要がありません。日本の民主主義といふのは個人の権利の確立とか、自主性を重んずる、自分の権利を主張するといふ点については自覚されてきました。が、民主主義の根本の、人類の全体とが生活とか、人類に共通に求められる人権の方向に向ふことによつて、家庭とか個人の自由に主体をおいて民主主義が一つの方向を保たせ、人類の普通の権利と日本の憲法ではいつていますが、それを求める根底のない民主主義といふものは、弱肉強食の封建性と違ひがないといふことを、新しい秩序を求める一つの方向づけとして提案したいと思ひます。

司会 大変短い時間で、十分御発言できなかったというおうらみも多々あると思ひますが、これで全体会議を終わらせていただきます。

閉会のことば

谷 野 せ っ

全国婦人会議の皆さま方には、四日間にわたりまして、大変熱心にお話しくださいまして、まことにありがとうございます。今年の婦人週間のテーマであります、この激しい社会において、生活に新しい秩序を育てるためにということにつきまして、お話し合いをしてくださったのでございますが、この会議の皆さまがさつきおつしやいましたことを心に今後の皆さまの生活におかれまして、今日のこの激しく変つております社会の実相をよくごらんいただきまして、それに流されることなく努力をなさりながら、少しでも人間の社会の成長のために御自分だけではなくて、お隣とも手を携えられて家庭生活の中で、あるいは職場の中で、さらにまた地域社会での日ごろの市民活動を通して、皆さまのお考えをさらに発展させ

ていただくことができますなら幸いでございまして、今後の御生活に心から期待を申し上げる次第でございます。

そのようにして全国の皆さまのお力を通して、婦人の役割りが着々と果され、そのことによつて婦人の地位が、いよいよ高まり、役に立つてゆくことを私は心から願つているのでございます。

この全国婦人会議のために朝永生先をはじめ、諸生先方にはお忙しい中を、お心のこもつた御指導をたまわりまして、ここに深く感謝申し上げます。また特別会議員の方々にはもとより、この会議のためにオブザーバーを御派遣くださいました団体の皆さま方、また今日このようにたくさんお出ましくくださいました皆さま方、さらにまた始めから終わりまで、この会議のためにおつくしくくださいました日本放送協会に心からお礼を申し上げます、閉会の御挨拶とさせていただきます。

1 以上 1

